

愛知学院大学

教養部紀要

第60巻 第3号

論文

- 都築正喜：W. S. Allen の英語音調表記と応用システム論 (Part 1) …………… (1)
- 清水義和：唐十郎と寺山修司——シェイクスピアの迷路——…………… (15)

症例報告

- 辻内智樹・高山伸也・北田豊治：成長期における足部のスポーツ障害
——男子中学生サッカー選手に生じた Freiberg 病の 1 例——…………… (41)

翻訳

- Yoshikazu SHIMIZU：Yuu-ki-za Theatre of Puppet since Edo Era “Miss Tanaka”(2012.9.26-30) PART I
Original John Romeril. Dramatized and directed by Tengai Amano. …………… (47)
- 糸井川修・中村実生：『空の野蛮化』ベルタ・フォン・ズットナー
前書き：ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン…………… (93)

資料

- 川口高風：名古屋の寺院に関する木版資料について(+)…………… (228)
- 川口高風：「能仁新報」よりみた名古屋の仏教(二)
——明治二十四年一月～明治二十四年十二月——…………… (202)

2013

愛知学院大学教養部

W. S. Allen の英語音調表記と応用システム論 (Part 1)

都 築 正 喜

Contents

Part 1

1. Received Prosody と *Living English Speech*
2. 言語拍リズム論と *Living English Speech*
3. Equal Timing の傾向と英語のリズム形成
4. プロミネンスと音調構造
5. *LES* と *Intonation of Colloquial English*
6. W. S. Allen の音調表記用記号・符号
7. W. S. Allen の音調表記例

Part 2

8. *Living English Speech* と SSG での記録
 9. *Living English Speech* と SSG による視覚化
- 結論

1. Received Prosody と *Living English Speech*

W. Stannard Allen の *Living English Speech* (1954・1960、*LES*) は Subhead に *Stress and Intonation Practice for the Foreign Student* とあるように、外国人学習者を対象に執筆され録音もなされている。特に *LES* は syllable structure、stress shift、rhythm occurrence、prominence allocation あるいは intonation system といった総合プロソディの運用 (Command of English Prosody) に、学習上の困難さを感じる教育環境を想定して書かれている。そのために使用頻度の高い verbal context を示して、音調理論と継続的な実践 (oral practice based on theory) を組み合わせて系統

的に学習させている。このことを、W. S. Allen は、This book is designed for use in English classes for foreign students, its purpose being to present the basic principles of stress and intonation and to provide copious practical exercises. と *Living English Speech* の序文 (What This Book is About) でも明言している。また、*Living English Speech* は、Southern British English Accents (SBEA) を対象に執筆されている。

W. S. Allen (p. 39) は、音調を次のように定義している。

By intonation is meant the “melody” of speech, the changing pitch of the voice. It is to a certain extent controlled by stress, for impotent changes of pitch occur only on stressed syllables.

英語を Mother tongue としない学習者が、英語の音調を文型や意味、更には attitude of speakers との関連において効率的に覚えていくためには、実際に音調型の使用状況を統計的に調査し、理論的かつ体系的に学習する過程が必要である。更に、segment よりも supra-segment が意味の伝達により一層重要であり、到達目標のチェックなどでも意味との関わりを付けやすい、と考えれば、リズムおよびイントネーションの習得は避けては通れないものと言える。別な側面から考察すれば、イントネーション習得のために編集された material を、英国人話者がどのように認識するかも吟味の対象として考えておく必要がある。そこで、筆者は、*Living English Speech* において取り扱われている verbal context の音調について、実際に英語学習にどのように応用できるかについて、イギリス英語の複数の informant による発話感覚と聴覚印象の両面から、直観的な trace を吟味した。その結果、LES は自然な発話体として受け入れられる Received Prosody (RP) として、あるいは音声モデルとしての価値が高く、基礎的な聴取と発話の訓練には非常に取り入れ易いとの結論を得た。本稿では、W. S. Allen の LES で採用されているイントネーション構造が、音調ルールに従ってどのように体系化されているか、あるいは各パーツ (Pre-head、Head、Nucleus および Tail) が verbal context の脈絡の中で相互にいかにより有機的に関連づけられているか、について応用音調システム論から考察する。

2. 言語拍リズム論と *Living English Speech*

筆者が W. S. Allen の *Living English Speech* について注目してきたのは、日本語のように syllable-timed rhythm (音節拍リズム) を言語習慣とする学習者が、その counterpart にあると位置づけられる英語の stress-timed rhythm (強勢拍リズム) のように、stress が等しい時間的長さをもって繰り返され、リズムを形成する言語の学習に際して、LES が入門期の音声学習に有益である、と考える点である。

W. S. Allen は *Living English Speech* において、コミュニケーションを前提にした英語音声教育では、個々の segment よりも prosody が発話においても、聴き取りにおいてもかなり重要な要素であることを示唆している。例えば、LES (xiv) では、Broadly speaking, a reasonably correct speech-flow is more important for intelligibility than correct sounds. と述べ、更に、特にプロソディの重要性について次のように強調している。

Stress, rhythm and intonation should really be considered as a whole, for they are very closely connected elements of single aspect of the language that we might call Speech Flow. Speech is essentially movement. However accurately we learn to pronounce the isolated sounds of a language we must still train ourselves to set them in motion in the right manner if we wish to make ourselves easily understood. W. S. Allen, *LES* (1960: xiii)

筆者の先行研究で言及したが、前項に関連して、R. Kingdon は、*The Groundwork of English Intonation*, Longman (1965: xiii) において、*Intonation is the soul of a language while the pronunciation of its sounds is its body*, と例えて、以下に引用するように記述している。

A foreigner who speaks a language with correct stressing and intonation but with incorrect sounds (within reasonable limits) will be better understood by natives than one whose sounds are correct but whose stressing and intonation are poor. ——— Intonation is the soul of a language while the pronunciation of its sounds is its body, and the recording of it in writing and printing gives a very imperfect picture of the body and hardly hints at the existence of a soul.

John Wells (UCL) は、*English Intonation* (2006: 2) で、英語のネイティブ・スピーカーが、外国人学習者の発音の誤りの中で、セグメントとイントネーションについては、それぞれどのように見ているか、以下のように述べている。

The problem is this: native speakers of English know that learners have difficulty with vowels and consonants. When interacting with someone who is not a native speaker of English, they make allowance for segmental errors, but they do not make allowance for errors of intonation. This is probably because they do not realize that intonation can be erroneous.

3. Equal Timing の傾向と英語のリズム形成

英語では stressed syllable と unstressed syllable によってリズム構成がなされるが、強勢音節から次の強勢音節までの時間をほぼ同じ長さに発音する、という心理的あるいは物理的 tendency によってリズムの基本が作られている。例えば、yesterday は3音節語であるが、際立つ強勢音節は一箇所であり、こうした強勢音節が時間的にほぼ等間隔で現れる tendency、即ち「等時性」(equal timing, isochronism) の原則がリズムを支配する。入門期の音声指導では、発話中の強勢音節の存在を確認することが、聴取と発話において必須である。強勢音節が決まれば、弱音節は曖昧に付随する結果、比較的長い単語の連続でも、英語のリズムルールは自然と繰り返されることになる。ところで、発話において強勢音節の位置を移動する現象(強音節と弱音節の入れ替え)は、強勢音節が重なる結果生じる衝突(stress clash)を避けようとするリズムルールに因るものである。これは、発話時の stress allocation の問題であるが、anticipation の作用が stress shift を可能にしている。

全ての言語にリズムとイントネーションがあることは universal である。Hyun Bok Lee (Seoul National University) に拠れば(講演において)、例えば、韓国語は音節拍リズムと強勢拍リズムの中間であるとされる。そして、どちらかと言えば、強勢拍リズムに近い、と H. B. Lee は述べていた。韓国語にも、モーラの認識を持ち込むことは無理であるが、日本語と韓国語を音節形成、強・弱音節構造、強弱・高低音節、リズム・拍などの prosody 面から比較すると、やはり韓国語の方が英語に近い響きを持つと、H. B. Lee は指摘する。筆者の印象では、イギリス英語とアメリカ英語では、それぞれの響きによって吟味が必要ではないかと判断する。

前節で述べたように英語では、stressed syllable が、時間的にほぼ等しい間隔で現れる tendency がある。ここで、tendency という表現を用いたのは、isochronism の傾向がある、という意味であり、絶対的な強勢音節の occurrence があると、述べているものではない。話し手側では、articulatory mechanism としての isochronism を anticipation として予測し、聴き手側は、auditory impression としての isochronism (の傾向)を判断する。話し手は、調音に際し「最小労力、最大効果」を原則とする。この時 Spoken English では、発話効率と聴取の正確さのバランスも重要となる。その理由は、発話の経済(economy of effort)を追求すると意味の理解が不正確になりやすいからである。総括として、英語の isochronism 論は研究の進捗につれて、慣用面からの語句の用法、発音と綴り字、発話と聴取、心理面と物理面などからも広く認識されるようになってきている。英語の韻律特徴を3点挙げるとすれば、①この equal timing、isochronisms (の傾向)という等時性に関わる要素と、また、②強勢と強勢までの間隔を foot とし、それを繰り返す(傾向がある)という speech rhythm rule と、更に、③ Pre-head、Head、

Nucleus および Tail がシステムとしてイントネーション構造を成し、補完機能を有すること、などである。(都築：2000、2005、2012)

4. プロミネンスと音調構造

音調構造を分割する際に、音調核 (Nucleus) は必須である。音調核が成立するためには 5 つの要件が揃わなければならない。第 1 に、重要語の中で発話の最後の位置に現れる新情報であること。第 2 に、強音節に置かれること。第 3 に、最大のピッチ変動と強勢を持つこと。第 4 に、意味上の focus であること。第 5 に、concentration があること、などである。音調核のみが単独に頻繁に現れることもあるが、音調核の後に尾部があればそれに影響を及ぼす。low-tail になるか、rising tail になるかを決定するのは音調核である。頭部があればシステム上の性格を決定する。下降＋上昇音調核には falling-head が先行し、下降音調核には rising-head が先行する原則がある。この時、stepping-head (emphatic high head) や sliding-head (emphatic falling head)、更には、climbing-head (emphatic rising head) などの強調頭部が pitch range に現れることがある。結局、音調核は常に話者の最も伝えたい新情報を担い、話者の態度や感情が音調核に最も顕著に現れる。話し手と聴き手との間では、音調核を中心として、specified idea と general idea、新情報と旧情報、marked と unmarked などが、補完機能の働き等により自動的に決定され発話の脈絡に組み込まれる。ここで言う、last accented word とは、プロミネンスのある音節を含むことになる。従って、音調核とプロミネンスを音調システム上は同じ役割を担うものとして扱うこともできる。即ち、広く認識されているように、プロミネンスが置かれている音節を最大に際立たせるためには、プロミネンスが想定されている箇所、例えば、音調核より前に現れる前頭部や頭部の様態をまず判断し、音調核の種類を予測しながら音声コミュニケーションに移行する。

以下に、プロミネンスについての David Crystal と A. C. Gimson の記述を引用する。

A term used in Auditory Phonetics to refer to the degree to which a sound or syllable stands out from others in its environment. Variations in length, pitch, stress and inherent sonority are all factors which contribute to the relative prominence of a unit.

(David Crystal: 1987, p. 248)

Our sensation of the relative *loudness* of sounds may depend on several factors. A sound or syllable may appear to stand out from its neighbours—be ‘louder’—because a marked pitch

change is associated with it or because it is longer than its neighbours. It is better to use a term such as *prominence* to cover these general listener-impressions of variation in the perceptibility of sounds. (A. C. Gimson, 1981, p. 27)

5. LES と *Intonation of Colloquial English*

本稿で取り上げる W. S. Allen の *Living English Speech* は、おそらく J. D. O'Connor & G. F. Arnold が1976年に著した *Intonation of Colloquial English (ICE)*, Longman (1980, Sixth impression) にも影響を与えたと思われる。但し、J. D. O'Connor & G. F. Arnold は、*ICE* の Preface の中で、R. Kingdon については、... whose system of tone-marks we have in some large measure adopted. と言及しているが、Longmans (London) から出版された W. S. Allen の *LES* には触れていない。J. D. O'Connor & G. F. Arnold が影響を受けたと記述した、R. Kingdon の *The Groundwork of English Intonation*, Longman, 1966 を吟味した結果、*ICE* の7種の基本音調核設定のルールと特徴、および音調群、音調群連続の確立などにおいて影響を見ることができる。G. F. Arnold 先生 (Reader in Phonetics, University College London) は、M. Schubiger の *English Intonation*, Max Niemeyer, 1958 からも影響を受けたと、ロンドン大学音声学部の tutorial で述べていた。但し、*ICE* には、References の記載がないため、Intonation に関する先行研究からの影響は、なぜ References を記載しなかったのかも含め不明である。

確かに、J. D. O'Connor & G. F. Arnold が verbal context の音調イメージを音調符号で表記したことは、言語形成期を過ぎてからの英語の発話や聴き取りの学習では多くの点で効果的である。特に、Intonation と Stress を、例えば、・ ・ ・ — — — ↗ ↘ ↗ ↘ ↗ ↘ のような pitch level 型で表記し、また trace する一方で、同時に speaker's attitude を overlap させている為、英語音声教育の現場には応用し易い利点がある。ロンドン学派の中にあっては、数年前に、John Wells: *English Intonation* (2006) が著わされたが、英語教育音調論の実践テキストとしては、*Intonation of Colloquial English* が今なお突出した感がある。筆者が既に引用したように、A. C. Gimson (1994: 314) に拠れば、J. D. O'Connor & G. F. Arnold の *ICE* は、以下のように評されている。

The intonation of English has been studied in greater detail and for longer than that of any other language. No definitive analysis, classifying the features of RP intonation, has yet appeared (though that presented by O'Connor and Arnold (1973) provides the most comprehensive and useful account from the foreign learner's point of view).

しかし、改めて立場を変えてみれば、W. S. Allen の *Living English Speech* にも同等の価値を

与えてもよいように思われる。筆者は *LES* が 1960 年代に日本語に翻訳されるべきであったとも思っている。D. Jones の名著、*An Outline of English Phonetics* (初版は 1918 年) も翻訳されていなかったの、筆者は大西雅雄博士には日本語への翻訳を進言し、Hyun Bok Lee 博士にも韓国語への翻訳をお尋ねしたことがあったが実現はしなかった。いずれにしても、1950 年から 80 年にかけてのほぼ 30 年間に、H. Sweet、H. E. Palmer、D. Jones、A. C. Gimson、W. S. Allen、J. D. O'Connor & G. F. Arnold、H. B. Lee、J. C. Wells らの研究成果を経て、あるいは先行研究を踏まえ、伝統的ロンドン学派の音声理論を教育現場に応用し活かそうとする現在の実践的英語イントネーション研究の基礎が確立されたと言える。

6. W. S. Allen の音調表記用記号・符号

情報伝達のための message は音調構造上、導入部 (introductory section)、前頭部 (pre-head, minor section)、頭部 (head, major section)、基幹部 (body, main section)、音調核 (nucleus)、尾部 (tail, minor section) や移行部 (transition section) などに分割され、予測行為 (anticipation)、補完機能 (complement) や歩み寄り (compromise) のような様々な役割を担ってイントネーション構造の様態を成し、音声コミュニケーションに必須の要素となっている。こうした音調構造の各パーツを相互に有機的に関連づけ、音調ルールに従って順序立てて合理的に体系化したものが「音調システム論」である (都築：2012)。音調システムを支配するルールを表記し判読することは難解であるが、W. S. Allen は *Living English Speech* に於いていくつかの工夫をしている。それらの主なものを *LES* より引用する。(|| の使用は筆者。)

強勢のある音節・単語 ⇒ ' 音節初頭に表記

E.g. 'take it a'way

導入的開始弱音節 ⇒ italic type で表記

E.g. *We can* `walk there |if there's,time. || (p. 62)

上昇・下降音調の開始音節 ⇒ bold type で表記

E.g. *On the*' top of the ,hill|stood an' old `church. || (p. 61)

下降表記 ⇒ `

上昇表記 ⇒ ˊ

新しい高位置音調（長めの発話） ⇒ ↑

最初の高位置音調 ⇒ ˈ

E.g. *He*^ˈasked us to ^ˈtell him the ↑ right way to ^ˈdo it. || (xi)

prominence の置かれていると判断される主たる音節 ⇒ Capitals

E.g. *But he wrote*^ˈYOUR name in ^ˈMY book. || (xi)

FALL RISE 音調 ∨

E.g. *But I* CAN'T come to ∨ DAY. || (xii)

音調群と音調群との間の休止 |

E.g. *When*^ˈever I ^ˈhave a ^ˈheadache, | I ^ˈtake a ^ˈcup of ^ˈstrong ^ˈtea. || (p. 60)

なお、W. S. Allen が長めの発話において、新しく生じる高位置音調を表記する必要から、↑を採用しているが、その理由として、高位置で発話が始まっても、次第に右下がりに階段状の段下がりをするため、途中で改めて高位置の強勢音節を確認するため、と判断できる。但し、この場合には表記上は、高位置頭部の ˈ と高位置音調表記の ↑ が併記されることとなるため、typographical には煩雑になる。次に挙げる例文 (A) は、音調システムとしての intonation pattern を trace したものである。一方、例文 (B) は、筆者が実際に表現して聴覚的印象差を表記したものである。(英文を LES, p. 163 より引用、音調表記は筆者。)

(A) E.g. “What’s the ^ˈgood of wearing ↑ ^ˈtransparent ^ˈstockings

ˈ ˈ ˈ ˈ ˈ ↑ ˈ ˈ ˈ ˈ

if your ↑ ^ˈlegs are ^ˈblue?” my mother asked.

ˈ ˈ ↑ ˈ ˈ ˈ ˈ ˈ ˈ ˈ ||

(B) E.g. “What’s the ¹ good of wearing [↑] ¹ transparent ¹ stockings

◦ ◯ ◯ ◯ ◯ ↑ ◯ ◯ ◯ ◯

if your [↑] legs are `blue?” my mother asked.

◯ ↑ ◯ ◯ ◯ ◯ ◯ ◯ ◯ ◯

W. S. Allen の *LES* と J. D. O’Connor & G. F. Arnold の *ICE* に共通して言えることの一つは、以下に挙げる音調核、音調群連続が意味・内容や発話者の態度に照合して重要である、としている点である。特に、W. S. Allen は、下降+上昇連続音調核を *LES* において詳細に記述している。

I 類：音調核基本型

- (1) ◯、◯、◯ + ◯ 及び ◯

II 類：◯ 類似音調群 type

- (1) ◯ + ◯ 下降+上昇音調群連続 type
 (2) ◯ + ◯ 下降音調群+休止+上昇音調群連続 type
 (3) (Rising Head) [ʌ] + ◯ + ◯
 上昇頭部+下降音調群+上昇音調群連続 type

但し、W. S. Allen の *LES* とは異なり、J. D. O’Connor & G. F. Arnold, *ICE* の 7 種の基本音調核設定のルールと特徴をまとめると以下のようになる。なお、イントネーション構造において、システムを成す音調核の基本型は、意味・様態と使用頻度の点からみて、下降調、上昇調、下降・上昇調の 3 種に絞られる。

I 類：*ICE* に採用された音調核

- ① 下降音調核として 2 種類 (high fall と low fall)
 ② 上昇音調核として 2 種類 (low rise と high rise)
 ③ 下降+上昇音調核、high ⇒ low ⇒ mid
 ④ 上昇+下降音調核、mid ⇒ high ⇒ low
 ⑤ 平板音調核、中平板音調核 mid

II類：ICE から除外された音調核

- ①下降音調核の中で、high から mid まで下降する音調核
- ②上昇音調核の中で、low から high まで上昇する音調核
- ③下降＋上昇音調核の中で、mid ⇒ low ⇒ mid へと移動する音調核
- ④下降＋上昇音調核の中で、high ⇒ mid ⇒ high へと移動する音調核
- ⑤上昇＋下降音調核の中で、low ⇒ mid ⇒ low へと移動する音調核
- ⑥上昇＋下降音調核の中で、mid ⇒ high ⇒ mid へと移動する音調核
- ⑦平板音調核の中で、高平板音調核 high mid と low mid 音調核

7. W. S. Allen の音調表記例

既に筆者の先行研究において、あるいは本稿の前項において言及したが、通常、音調システムの中でプロミネンスの置かれている音節に生じる nucleus は、最大のピッチ変動を有し、最も強い強勢が置かれ、prominence としての扱いを受け、新情報を担い、意味上の focus である。音調核はその文の中で、いくつかある accented word の中で、「最後の重要な単語」(last important word・last accented word) の「強音節」(stressed syllable) に現れるのが原則である。一般論として、話者の attitude や emotion が音調核に最も顕著に現れる。広く認識されていることではあるが、聴き手が発話のどの部分が新情報の focus・marked で、どの箇所が旧情報の unmarked であるかを瞬時に判断できるのは、言語形成期に習得された、話し手と聴き手との間に了解されている、specified idea と general idea に関する「約束事項」があるからである。この時、話し手と聴き手のコミュニケーションにおいて、anticipation の作用が働いている（都築：2000、2002a）。

ここで、“The Switchback tone group” と “The Long Jump tone group” (J. D. O’Connor & G. F. Arnold, ICE) を具体例として、anticipation について、日本英語音声学会編『英語音声学辞典』（2005: 278）より引用する。

発話の Head が Falling Head で始まれば、「高下降＋低上昇」の核音調が起りうる。ことが anticipation の作用により予測できる。即ち、聴き手は、Falling Head が認識できた瞬間に次に来るであろう核音調を予測する。全体の様態として “The Switchback tone group” をイメージする。更に、発話が Rising Head で始まれば、「高下降」の核音調が現れる事を示唆している。これも Anticipation の作用である。即ち、聴き手は、Rising Head が認識できた瞬間に、次に高下降の核音調が現れることを察知し、音調全体の様態として “The Long Jump tone group” をイメージする。

前節で言及した W. S. Allen 方式の表記方法をイントネーションの構造や様態に照らして具体的に考察を進めるために、以下に *LES* の会話文 *MUM'S THE WORD* (pp. 162–164) を引用する。

MUM'S THE WORD

“*I've* 'come up to 'talk to you,” my mother said, |
 “*while you're getting* ,ready. 'Who's 'going to 'be at the
 'party?”
 “*I* 'don't 'know,” I said.
 “'Will you en,joy it?” my mother asked.
 “*I* 'HOPE ,so,” I said.
 “*You've* 'only got 'fifteen 'MIN,utes,” my mother said.
 “*Yes, I* 'know.”
 “'Can I ,help you?” my mother asked.
 “'No, | 'thanks 'awfully,” I said.
 “'Will ,Betty be there?”
 “'No,” I said.
 “'Why 'not?”
 “*Because the* 'people 'giving the 'party don't ↑ 'know
 her.”
 “'THAT'S ,funny,” my mother said. “*I* 'wonder 'why
 they don't. 'Isn't that 'funny, *their* 'not | ,knowing her?”
 “'Why?”
 “'Well, | *because it* 'IS,” my mother said. “'Why
 don't you intro'duce her to them? *They'd* 'like her. *I've*
 'ALways liked Betty. *I was* 'telling your 'father the ↑
 'other 'day *that I've* ,always liked | ,Betty. 'What are you
 'rubbing 'on?”
 “*Foun'dation* cream,” I said.
 “*I'm glad* 'I don't have to do all ,that,” my mother said.
 “'YOU use 'POWder.”
 “*I don't* 'BOTHER with all that 'OTHER old ,rubbish,”
 my mother said. “*My* 'POWder only blows ,off, | 'anyway.
I 'LIKE that ,dress. *It* 'suits you. It 'doesn't 'make you
 look ↑ 'old and 'haggard | like 'SOME of the things you
 ,wear. 'That 'BRACElet you gave me for 'CHRISTmas
 goes ,well with it 'TOO, | 'doesn't it?”
 “'Yes,” I said.
 “'What on 'earth are you 'doing to your 'hair?” my
 mother asked.
 “'Putting it 'on 'top.”
 “*Oh, I* 'DON'T like 'THAT,” my mother said.
 “'WHY are you doing it like that?”
 “*I* 'like it.”
 “*Your* 'FATHER won't ,like it,” my mother said.
 “'Good 'heavens, | *your stockings are trans* PARENT.”
 “'Yes.”
 “'What's the 'good of 'wearing ↑ 'transparent 'stockings
 if your ↑ 'legs are 'blue?” my mother asked. “'Are you
 'going to 'wear your ,boots | *and* 'take your 'shoes with
 you in a ,bag?”

“`No,” I said.
 “`You’ve only got `FIVE minutes `NOW,” my mother said.
 “`Yes, | I `know.”
 “`I’ll `Sammy be there?” my mother asked.
 “`I `THINK ,so.”
 “`Oh `good,” my mother said. “I `hope you’ll be `nice and po`LITE to ,him. You `will, | `won’t you?”
 “`Yes.”
 “`Yes, `try,” my mother said. “`I’d you `like him to `come to ,tea?”
 “`No.”
 “`Oh, `ALL ,right,” my mother said. “`But I `think you’re `very `silly, | `THAT’S ,all. I remember I `didn’t `really `like your `FATHER very much when I `FIRST ,met him, | but you `WON’T take any notice of `ANything I can ,say. `Can you ,walk in those shoes?”
 “`Yes.”
 “`You’re going to be `late, | `aren’t you?” my mother said.
 “`Yes.”
 “`Oh!” my mother cried. “`You’re `not `wearing your `vest! `HERE’S your ,vest! `Why have you `taken it `off? `WHY aren’t you wearing your vest?”
 “`Because I’m `not `going to,” I said.
 “`I’ll wear a `cardigan then,” my mother said.
 “`You’ll be `SOR,ry,” my mother said, | “`when the `OTHERS are all en`JOYing them,selves | and `YOU’RE huddled over the `FIRE | with your `TEETH ,chattering | and a `RED `NOSE | and `MAUVE `HANDS. Sammy `WON’T find `THAT at,tractive.”
 “`I’m `READY ,now,” I said. “`Good-,bye.”
 “`I’ll `put your `hot-,water bottle in,” my mother said.
 “`En`JOY your,self, `Good,bye.”

「W. S. Allen の英語音調表記と応用システム論」の第II部では、LES の会話文 MUM’S THE WORD (pp. 162-164) の全文を sound spectrogram (SSG) による視覚化を通して考察する。なお、イントネーションを表記するためには専用の符号が必要になるが、筆者の英語音調に関する先行研究の表記方法を継続して、本稿でも、イントネーション符号を2種に分けて使用した。それらは、高低関係を表す符号と文字に直接付ける符号とである。前者を、「高低符号」と呼び、後者を「文字符号」と呼んで区別する。主たる音調表記用符号は、都築が作成した「Tsunami-Arm-1998/2005」を用いた。本稿をはじめ筆者の先行研究の執筆に当たって、Hyun Bok Lee、John Wells、John Ingram、Jill House、Michael Ashby、Ho-Young Lee らの助言を頂いた。ここに感謝申し上げたい。

主要参考文献

- Allen, W. S. (1954, 1960), *Living English Speech*, Longmans.
- Armstrong, L. S. and Ward, I. C. (1931). *A Hand Book of English Intonation*, W. Heffer& Sons, 2nd ed.
- Coleman, H. O. (1957). *Intonation and Emphasis*, translated by Iwasaki T., Kenkyusha.
- Gimson, A. C. (1981). *An Introduction to the Pronunciation of English*, Edward Arnold, 3rd ed.
- Gimson, A. C. (1977). *A Practical Course of English Pronunciation*, Arnold.
- Jones, D. (1960). *An Outline of English Phonetics*, 9th ed., Cambridge Univ.
- O'Connor, J. D. (1980). *Better English Pronunciation*, Cambridge.
- O'Connor, J. D. & Arnold, G. F. (1976, 1980). *Intonation of Colloquial English*, Sixth impression, Longman.
- Tsuzuki, Masaki (1990). *A Statistical Study of Intonation in Southern British English for Non-native Speakers*, Shin-Ikuson 教授定年退官記念論文集 (ソウル大学出版部刊行), Seoul National Univ., Korea.
- 都築正喜 (1997). 日本人英語学習者が困難とする RP 音調群の連続、日本英語音声学会刊行、「英語音声学」創刊号.
- (2000). 英語プロソディの Anticipation について、日本英語音声学会刊行、「英語音声学」第 3 号.
- Tsuzuki, Masaki (2001). *A Statistical Study of Colloquial English Intonation For Japanese*, 日本英語音声学会刊行、「英語音声学」第 4 号.
- 都築正喜 (2002a). 英語イントネーション構造とアンティシペーションの作用、日本英語音声学会刊行、「英語音声学」第 5 号.
- (2002b). 「Speech Analyzer で考察したイントネーションの Anticipation」、『栞矢好弘教授退職記念論文集』(甲南大学)、日本英語音声学会叢書「英語音声学シリーズ」第一巻、西原哲雄・南條健助共編.
- (2005). 「引用符に連続する Rising Tail の分析研究」、八木克正博士(関西学院大学教授)還暦祝い論文集『英語語法文法研究の新展開』、田中実・神崎高明共編、栄宝社.
- (2012). 「英語音調システムの Tail と Pre-head の Compromise」、『21世紀英語研究の諸相』(八木克正教授退職記念論文集)、神崎高明：井上亜衣編集、開拓社.
- Wells, J. C. and Colson, G. (1771). *Practical Phonetics*, Pitman.
- Wells, J. C. (2007). *English Intonation: An Introduction*, Reprinted, Cambridge University Press.
- Wells, J. C. (2008). *Longman Pronunciation Dictionary*, Third edition, Longman.
- 日本英語音声学会編：編集主幹、市崎一章 (2004). 『英語音声学活用辞典』、日本英語音声学会出版部.
- 日本英語音声学会編：編集主幹、市崎一章 (2005). 日本英語音声学会創立10周年記念『英語音声学辞典』、成美堂.

唐十郎と寺山修司

——シェイクスピアの迷路——

清水 義和

01. まえおき

唐十郎氏は「日本のシェイクスピア」と、かなり昔から、西堂行人氏や他の演劇人から指摘されてきた。¹⁾そこで、以前から、唐氏が「日本のシェイクスピア」なのかどうかと、筆者は考えてきたがその真意を突きとめてみたかった。ところで、唐氏が状況劇場を旗揚げした時から、嵐山光三郎氏や扇田昭彦氏が評する唐氏の劇評が際立っていた。やがて、紅テント、唐組へ時代が移るに従って、次第に「唐氏は日本のシェイクスピア」という評判は、テレビ、新聞の報道から演劇関係者の間で広まっていった。かつて、2005年6月4日、唐組『鉛の兵隊』公演で、唐氏は、筆者に「ある友人がねえ、いうにはね、僕は日本のシェイクスピアなんだそうだよ」と語って下さった事がある。²⁾その言葉が、今もなお筆者の耳に残っている。その時、唐氏は、筆者ではなくて、その場には居ない、誰かに向かって語らっている調子であったのが印象的であった。

実は、唐氏は、これまでに、シェイクスピアとの架空対談を表わしている。³⁾そのシェイクスピアとの架空対談で、唐氏は実に『十二夜』から『ヴェニスの商人』『オセロ』『ロミオとジュリエット』『マクベス』『リア王』にわたってシェイクスピアを縦横に言及している。また、唐氏は、『Shakespeare Fantasy シェイクスピア幻想〈道化たちの夢物語〉』の中で、シェイクスピアの「夢」について変幻自在に書き下ろしている。⁴⁾

さて、唐氏の演劇が、新劇のリアリズム演劇ではないことは一目瞭然である。翻ってみると、新劇の大本であったモスクワ芸術座では、スタニスラフスキーがスタニスラフスキー・システムを構築し、その『俳優修業』を、小山内薫をはじめ多くの日本の演劇人が学んできた。

明治以来戦後まで、ヘンリック・イブセンやアントン・チェーホフがリアリズムの先端にあるがごとき風潮で日本の演劇界に紹介され流布した。そして、シェイクスピアもスタニスラフスキー・メソッドで上演されてきた。所謂、19世紀までの作り物で現実とは無縁のように思われたシェイクスピアは近代科学の光のもとで赤裸々な姿を現したかのように思われた。

いっぽう、シェイクスピアを如何に上演するかそのメソッドを学ぶセミナーが1997年名古屋であった。講師はミドルセクス・ユニヴァーシティ大学のレオン・ルビン教授で、名古屋のセミナーで、「現代でも、演劇人が、リアリズムとナチュラルリズムとを混同している」と語った。ルビン教授によると、「リアリズムとナチュラルリズムが違うのは、リアリズムが生のままの姿を扱うのに対して、ナチュラルリズムは、自然科学のひとつである心理学によって心の問題を扱ったり、或いは、文化人類学によって古代文化が現代社会よりも豊饒であることを原住民の慣習から応用できるようになった」と述べた。従って、「シェイクスピアも心理学や文化人類学の視点から見れば、現代人が失った心理や慣習をもう一度蘇らせることも出来る」と語った。更に、「だから、一度失った四百年前のエリザベス調のリズムも科学に基づいたエクササイズによって取り戻せるようになった」と論じ、「勿論、イギリス伝統演劇とモスクワ芸術座はメソッドが異なる。だから、スタニスラフスキー・システムを応用して、19世紀までのシェイクスピアを刷新し進化させた事実を見逃すことはできない。だが、だからこそ、先ず、シェイクスピアをイギリス伝統演劇の創世に立ちかえって具に解読することが必要である」と主張した。そこで、本稿では、唐氏が考えるシェイクスピア観を、唐氏のドラマ・メソッドに則しながら、レオン・ルビン教授がイギリス伝統演劇に則ったシェイクスピア解読法と比較検討し検証していく事が重要ではないかと考えたのである。

さて、唐氏が「日本のシェイクスピア」ということを検証していく場合、新劇とアンダーグラウンド演劇とがちょうど黒潮と親潮がぶつかる過渡的な時の中から生まれた事を見ていく必要がある。かつて、唐氏以前に、日本のシェイクスピアと言われた河竹黙阿弥は、江戸末期と明治維新とが衝突する時代の中から生まれたと言われる。というのは、シェイクスピアも、英国中世と近代との潮流が衝突する中から生まれたと論じられているからである。クリストファー・マーロウが韻律に厳格な劇詩人であったのに対して、シェイクスピアは詩形を解体してブランクバースを使って新しい詩形を産み出していった。シェイクスピアの『間違いの喜劇』は前半が中世の神が劇を支配しているが、後半では、近代の自我が目覚めはじめており、結果的に、劇の前後で食い違いが生じて矛盾をはらんでしまった。しかし、当時の観客は、貴族ばかりでなくブルジョワ階級が台頭してきた時期でもあり、シェイクスピアは貴族とブルジョワ階級のニーズに応じた劇作品を書いたのである。こうした現象は、マーロウの劇にはなかった。因みに、ヘンリック・イブセンも初期は韻文劇を書いていたが、やがて、近代劇を見

る観客のニーズに合わせて、労働者の使う言葉で書いた散文劇へと転換したのである。

ところで、唐氏は、明治大学で、演劇を理論的に学んだのであるが、卒業後、師事した土方巽や澁澤龍彦らの暗黒舞踏やフランスやアメリカで生まれたアヴァンギャルド演劇のアンダーグラウンドの影響を直接受ける事になった。日本でニューヨークのアンダーグラウンド芸術の受け皿となったのは草月会館ホールで、唐氏は『ジョン・シルバー新宿恋しや夜鳴編』（第9回おわび興行1967年5月22日から25日）を公演した。草月会館では、ジョン・ケージが「チャンス・オペレーション」を披露し、武満徹、一柳慧氏、オノヨーコ氏、寺山修司らの前衛芸術家が集まり、新劇とは全く異なる斬新な芸術が登場したのである。そのようなアメリカ前衛芸術の渦中にいた唐氏がジョン・ケージのアートから直接影響を受けた事は想像に難くはない。従って、唐氏のシェイクスピアは、ちょうど、ロバート・ウイルソンの『モノローグ・ハムレット』のように、イギリス伝統演劇やモスクワ芸術座のメソッドと異なる演劇となっていった事は言うまでもない。

さて、寺山修司もランボーと架空対談「詩を捨てて武器商人になったなんて嘘だろ、ランボー？」を行っている。ところが、唐氏がシェイクスピアと架空対談を行ったのと寺山とランボーの架空対談と異なるのは、寺山が詩人を相手に対談したのに対して、唐氏は劇詩人を相手に対談していることだ。ところで、先にあげたルビン教授は、「シェイクスピアは詩人であったので劇の詩の部分を書き、散文の部分はグローブ座の喜劇俳優のロバート・アーミンやシバー・シオフィラス達が即興で演じてドラマが出来あがった」と語った。さて、ルビン教授のコンセプトを俳人で詩人の寺山のドラマに当て嵌めるとぴったりするのである。だが、唐氏のドラマにはどのように解釈してよいのか、実はこれまで筆者は試行錯誤してきた。例えば、英国近代劇のバーナード・ショーは喜劇作家で、ショーの書く韻文劇『あっぱれバッシュビル』や『シェイクス VS シェイヴ』などの詩劇はざごちなく、シェイクスピアの詩劇のように自由自在ではない。だが、コリン・ウイルソンは幾度も日本に訪れて講演を行っているが、その講演の中で、ショーを「マルセル・ブルーストと同じ位偉大なアーティストだ」と述べている。だから、韻文劇が上手いかどうかで、劇作家の資質を判断することは、今日の劇作家の場合必ずしも重要な問題ではないようだ。元々、シェイクスピアは、マーロウの定型詩をいわば脱構築して、新しい詩形を産み出して劇詩を書いた。俳人の馬場駿吉氏によると、「寺山は劇を必ずしも上手く書けたとはいえない。しかし、唐十郎氏は、小説『佐川君からの手紙』で芥川賞をとったくらいなので、文章が巧い劇作家である」と語った事がある。

そこで、ルビン教授が述べた、「シェイクスピアは劇の詩の部分だけを書いた」という考え方をここでもう一度考え直す必要があると思ったのである。ところが、唐氏の劇作品を今一度一読すると驚くことがある。唐氏の初期の作品は既に完成品であって、次第に上手くなって

いったのではない。いっぽう、寺山の劇は、極めて、深い意味の言葉が、画家スーラの点描画のように、微細に要所、要所を占めている。けれども、唐氏の場合、ドラマ全体に極めて質の高い台詞がよどみなく横溢しているのである。これは、語り口が良いというだけではない。また、劇の展開が常に新しい世界を見せてくれるというだけでもない。そればかりか、定型詩ではないが、ちょうど、ショパンの英雄ポロネーズを聞いているときに感じる音の響きのように、劇全体を覆っている躍動するリズム感に気がつかされるのである。

ところで、ショーは、「台詞を書くのではない。言霊を書きとる書記のような役割を果たしている」と述べている。唐氏の台詞も、映画のカット割りのように情景が浮かび、その情景から日常の音楽が聞こえてくる。しかしその情景も日常の音楽も、リアルではなくてファンタジーが織りなす世界である。いっぽう、寺山は俳人としての技能をいかに発揮して、言葉をぎりぎりまで凝縮して宝石の光を輝かせる劇詩人であった。そこで、本稿では、唐氏と寺山のドラマをシェイクスピア劇と比較しながら、二人が、お互いに、意識的に、或いは、無意識的にシェイクスピアから受けた影響の痕跡を辿る。しかしながら、唐氏と寺山をパラレルに論じる事は出来ない。というのは、唐氏の場合は自分の演劇観の中にシェイクスピアを容認する傾向が見られる。だが、寺山は、シェイクスピアを完全には容認していないからである。むしろ、あえて言うならば、寺山はシェイクスピアから意識的というよりも無意識的に影響を受けているようだ。例えば、寺山は「シェイクスピアを面白く読める人は、東京都の電話帳だって同じように面白く読めるわけだ」⁵⁾と言って、シェイクスピアの読者を突然異次元に誘いこんで攪乱させてしまうからである。確かに、この論法は寺山とシェイクスピアが詩人として用いるレトリックと似ている。だから、寺山と唐氏の劇を見ていると、両者のドラマ作りは互いに正反対の方向に向いていると思われるが、実は、矛盾しているように思われるが、意外にも、二人はシェイクスピアの裏と表を表わしているようにも思われるほど相似形を成しているのである。そこで、寺山と唐氏の演劇構造を、二人のドラマの両面から見据える事により、シェイクスピアが仕掛けた陥穽に落ちないようにして二股に分かれているようにみえる迷路を辿っていくことにする。

02. 唐十郎とシェイクスピア

『シェイクスピア幻想〈道化師たちの夢物語〉』は、最初に東逸子氏の挿し絵があって、次いでそのイメージの連想から唐氏が書いた夢物語である。唐氏が、絵にインスピレーションを得て、物語を発想するのは珍しいことではない。マルセル・ブルーストのフェルメール論やウォルター・ペーターのラファエロ前派の絵画論『ルネッサンス』やオスカー・ワイルドの絵画論

がもたらす美の世界は絵画が文字によってもたらされる幻想の世界である。なかでも、唐氏特有の幻想の世界は、シェイクスピアの世界を脱構築して不思議な幻想の世界を顕現させてしまう。

他にも、唐氏の小説『佐川君からの手紙』は最初ドキュメンタリーとして読み始めているうちに、次第に幻想的な絵画の世界へと引き込まれてしまう。唐氏の場合、この『佐川君からの手紙』のような夢物語だけでない。ドラマ作品の場合もしかりである。だが、唐氏の演劇の場合、舞台があり、役者がいて、そこに、音楽や照明で、唐氏の台本が独特の厚みを増して、オリジナルの台本自体の魅力が希薄になってしまう気がする。例えば、キャンバスに下絵を描いて、その輪郭に沿って絵具を塗り重ねていくと、当然、下絵の輪郭は消え失せてしまう。その下絵がスケッチである場合、それは設計図なので、見る人は、むしろ、設計図から出てくる建築の姿を先へ先へとイメージをふくらましてしまう。ところが、唐氏の台本は、殆ど完璧なので、いわば、設計図としての台本と構築された舞台の両方が存在することになってしまう。ところが、唐氏の芝居を見た観客は舞台のイメージだけで唐氏の芝居を理解してしまうのである。しかしながら、観客は唐氏には舞台と台本の二つがあることをあまり意識しない。恐らく、観客は、劇場で見た舞台の印象の方が強いので、ただ文字だけの台本の方が圧倒されてしまい、遂には錯覚に陥ってしまうのではないだろうか。

そこで、今度は、唐氏の小説『佐川君からの手紙』を文字媒体で読むと、読者は、最初から舞台装置はないので、文字だけが引き起こす幻想の世界に惹きこまれ、漸く、唐氏には舞台の芝居の他にもう一つの台本の世界があることに気がつかされることになる。

ところで、30年前に『佐川君からの手紙』を寺山が映画化することになっていた。だが、寺山が1983年に急逝したために映画化は実現されなかった。一般的に言って、小説の映画化は殆ど原作の厚みには及ばない。かつて、プルーストの小説『失われた時を求めて』が幾度か映画化されたが、小説が読者の心に引き起こした幻想の世界を実現することが如何に不可能であるかを知った。つまり、映画館で、観客の多くは、中途半端な作りの映画を見て落胆させられただけであった。つまり、『佐川君からの手紙』の小説の世界も、遙かに映画のイメージの世界を越えているので、映像化は極めて難しい筈である。いっぽう、映像の魔術師であった寺山は『佐川君からの手紙』の映画のシナリオを書く予定であった。というのは、実は寺山は、ガルシア・マルケスの小説『百年の孤独』を映画『さらば箱舟』の映像化に成功した例があるからだ。だから、是非とも『佐川君からの手紙』の完成映画品を観客は観たかったに違いない。

さて、唐氏の絵物語『シェイクスピア幻想』に戻ると、問題の絵物語は東氏の絵が、スケッチになっていて、その素描から、唐氏の幻想の世界が飛び出してくる。いわば、東氏の絵が台

本で、唐氏の文章が映像や舞台のような仕組みになっている。

ところで、唐氏の『シェイクスピア幻想』の内容は、『ロミオとジュリエット』口説き屋ロミオ、『夏の夜の夢』蜂のタイテーニア、フォルスタッフ 頬腹先生、『お気に召すまま』きみはギュニメード、『ハムレット』焼き鳥屋のハムレット、『あらし』プロペラ親爺の二百十日、『リチャード3世』である。ところで、唐氏は、『リチャード3世』の「冗談」について以下のように述べている。

こんなセリフがある。

「馬をくれ、馬を！馬のかわりにわが王国をくれてやる！」

(略) この最後のセリフは、王国、歴史、葛藤、欲望に対する無礼極まりない冗談である。

(91頁)

唐氏が『リチャード3世』を論じる時、悲劇と同時に喜劇について指摘している点に注目したい。先にあげたルビン教授は、「シェイクスピアの芝居が他の作家よりも人気があり、従って誰よりもよく知られているのは、悲劇と喜劇を極めて絶妙に書きわけて人間の感情の機微に触れる事が出来たからだ」と語った。

更に、唐氏のシェイクスピア理解を知るうえで、「『ロミオとジュリエット』口説き屋ロミオ」は、貴重なエッセイである。唐氏がロミオを蜻蛉のように儂い人物として捉えているのは極めて正確である。しかし、ルビン教授によれば、蜻蛉のように儂いロミオの心を一変させ、劇的なヒーローに変えたのは実はジュリエットだと解釈している。ルビン教授は、それを、ロミオの述べる言葉のリズムによって知ることが出来るという。いっぽうロミオに対してジュリエットの言葉のリズムは、強烈な強弱のリズムなので、ジュリエットの言葉のリズムによって、ロミオは口説き屋から大変身して一挙に詩人になるという。しかも、ロミオが詩人になることがこの劇の最も重大なところで、この瞬間に、悲劇が誕生するという。さて、映画『恋におちたシェイクスピア』は脚本をトム・ストップードが書いているが、この映画では、シェイクスピアが初のドラマ『ロミオとジュリエット』を書きあげて、舞台上で上演し、そうしてその処女作の誕生までを描いた作品である。だが、同時に、この映画は詩人シェイクスピアの誕生を表わした作品でもあり、しかも、映画の中でヴァイオラが、劇詩人シェイクスピアが誕生するのに一役買っている。つまり、その意味で、ヴァイオラは、劇中劇の中のジュリエットでもあり、ロミオを悲劇が書ける劇詩人シェイクスピアの誕生の産婆役ともなっている。⁶⁾

ところで、ルビン教授のシェイクスピア解釈は、「エリザベス朝の考え方ではなく近代劇のドラマツルギーだ」とする批判はあった。しかしながら、ルビン教授の解釈を唐氏の「『ロ

ミオとジュリエット』口説き屋ロミオ」に当て嵌めて客観的に見る場合には好都合ではないかと考えたのである。

03. シェイクスピアとの架空対談

唐氏は、シェイクスピアとの架空対談「ほんとにシェイクスピアさんなんですか？」(『超時間対談』で、実に『十二夜』『ヴェニスの商人』『オセロ』『ロミオとジュリエット』『マクベス』『リア王』にわたって縦横に言及している。なかでも、唐氏が、『十二夜』に言及しているところは注目に値する。唐氏は、シェイクスピアとの架空対談で以下のように話す。

シェイクスピア 女は来ないの？

唐 ——男色だと聞いていたもので呼ばなかったんですが。

シェイクスピア バカ、うちは両刀使いよ。

唐 えーっ！

シェイクスピア 『十二夜』観りゃ分んだろ？(156頁)

ところで、トレバー・ナンは、1995年に監督した映画『十二夜』の中で、オーシーノ公爵がセザリーオに男装したヴァイオラに恋をする理由として、オーシーノがホモのような気配で演出している。恐らく論理的に考えると、男装しているヴァイオラの中に女性を見抜くには、オーシーノが幾分ホモの傾向が少しあることを匂わせた方が、むしろ、自然だと考えたかもしれない。そうすることによって、トレバー・ナンは、終幕で、オーシーノが男装のままのヴァイオラに突然求婚するのが不自然に思われないで済むと考えたのであろう。

さて、『十二夜』の第一幕第四場で、オーシーノはセザリーオに変装した男装のヴァイオラに命令するように語りかける。男装のヴァイオラは最初オーシーノの韻文調の台詞に従っている。

VIOLA I thank you. Here comes the count.

ORSINO Who saw Cesario, ho?

VIOLA On your attendance, my lord, here.⁷⁾

ところが、続いて、以下の台詞が変わると、オーシーノの気持ちは変化し、語尾のところで“her”と言っている。その理由は、“her”はオリビアの事を指している筈だが、実は、セザリー

オに変装した男装のヴァイオラの事をも指していて、オーシーノが“her”と言ったのは彼自身の迷いも表わしている。つまり、オーシーノの気持ちはオリビアからヴァイオラに移りつつあり、その気持ちから“her”と言ってしまったのである。

ORSINO Therefore, good youth, address thy gait unto her, (p. 56)

次にオーシーノが言う一行の詩は、二人が共有することによって、一行の詩の中に、二人の考えが入ってきてしまう。

ORSINO Stand you awhile aloof. Cesario, (p. 56)

けれども、オーシーノはヴァイオラに近すぎた事に気がつき、命令口調に戻って次のようにいう。

ORSINO Be not denied access; stand at her doors, (p. 56)

さて、次のところで、オーシーノが語る詩行は、“unclasp’d”を子音の上げ下げによって、鋭い言葉の効果を挙げている。ところが、オーシーノは更に続く次の詩行で“secret soul”と言って囁くように言う。この部分は、オーシーノがヴァイオラに接近しすぎていることを示している。

ORSINO Thou know’st no less but all: I have unclasped
To thee the book even of my secret soul. (p. 56)

続いて、以下の二行は共有韻文で、オーシーノは、ヴァイオラから良い答えを期待している。けれども、ヴァイオラは、“Sure”と言って、オーシーノの言葉を遮断するが、しかしながら同時に二人が強い繋がりがあることを示している。

ORSINO And tell them there thy fixed foot shall grow
Till thou have audience.

VIOLA

Sure, my noble lord, (p. 56)

次に、以下の詩行で、ヴァイオラが語る二行にわたる女性行尾の“sorrow”と“me”は、実際には、ヴァイオラとオーシーノとオリビアの複雑な三角関係を表わしている。

VIOLA If she be so abandoned to her sorrow
As it is spoke, she never will admit me. (p. 56)

さて、更にまた、以下の二行はオーシーノは命令口調で話しかけている。

ORSINO Be clamorous, and leap all civil bounds,
Rather than make unprofited return. (p. 56)

そこで、ヴァイオラは、次のように考えながら語るのである。

VIOLA Say I do speak with her, my lord, what then? (p. 56)

しかるに、オーシーノは、“O” “unfold” “passion” “of” とオー“O”音を繰り返して、どれほど、オーシーノ自身が自分だけを愛しているかを言い表わしてしまうのである。

ORSINO O then unfold the passion of my love, (p. 56)

さて、“O”音は赤ん坊が母親に甘えて「おー、おー」と発するサウンドである。シェイクスピアは、赤ん坊のように何も考えないで自己主張ばかりするキャラクターの名前に“O”を差し挟んでいる。ロミオやオーシーノの名前の綴りには“O”音が含まれている。ところで、赤ん坊のようなオーシーノを導くのはヴァイオラである。だから、オーシーノは、いつまでも赤ん坊にいる事を止めて、次第に、母親のように自立したヴァイオラへと意識が目ざめていく。

ORSINO Surprise her with discourse of my dear faith;
It shall become thee well to act my woos: (pp. 56-57)

上の台詞のうちオーシーノが発話する台詞の中で“Surprise her with discourse of my dear faith:”最後のコロン[:]は一つの詩が完結した事を表わす。オーシーノはこのところで、漸く自己陶醉から覚めて、ヴァイオラを真剣に見つめ直し、彼女のことを真面目になって話すように

シェイクスピアは指示している。

VIOLA I think not so, my lord.

ORSINO

Dear lad, believe it; (p. 57)

また、上の詩行は共有韻文で、オーシーノとヴァイオラが極めて近い関係にあることを表わしている。

ORSINO

For they shall yet belie thy happy years,

That say thou art a man: Diana's lip

Is not more smooth and rubious; thy small pipe (p. 57)

さて、上記の下二行の台詞では、オーシーノが“Diana's lip”とか“thy small pipe”というとき、何かが始まり、前へ前へと進み盛り上がっていく。しかも、ダイアナのような女神には性的な意味が含まれているのである。

ORSINO Is as the maiden's organ, shrill and sound,

And all is semblative a woman's part. (p. 57)

上記の二行の台詞で、オーシーノは“the maiden's organ”とか“a woman's part”というが、実は、オーシーノは、性的な部分について話し始めるのである。

ORSINO I know thy constellation is right apt

For this affair. Some four or five attend him—(p. 57)

上記の二行のうち下の詩行は、女性韻で書かれ、行尾の“him”はリズムが強ではなく落ちる。このリズムの変化は、オーシーノが、変装したヴァイオラが男か女なのか分からないという不確かさを表わしている。

ORSINO All if you will, for I myself am best (p. 57)

さて、上の詩行で、オーシーノは、語頭で“All, if you will”と強く発話している。ところが、引き続いて、オーシーノは、“I myself am best”と言って、同じ行の中で異なる考えを示しているのである。

ORSINO When least in company. Prosper well in this,
And thou shalt live as freely as thy lord
To call his fortunes thine.

VIOLA

I'll do my best (p. 57)

ところが、この場面の結末近くで、オーシーノは“call his fortunes thine”と言って、無意識にヴァイオラにプロポーズしている。ここでは、オーシーノはサブリミナル効果を発揮している。上記のうち下の詩行は、共有韻文で、オーシーノが退出するのを、ヴァイオラが追いかけて発話する箇所である。

VIOLA To woo your lady. [*Aside*] Yet a barful strife!
Whoe'er I woo, myself would be his wife. (p. 57)

さて、この同じ場面の結末で、ヴァイオラは独りきりになる。そして、ヴァイオラは同場の最後の二行の行尾で“Strife”と“wife”と言って“f”音を重ねる。つまり、この二行は対句になっている。ここでは、ヴァイオラの感情が大爆発して、遂に、詩の形で彼女の強い思いを表わしたことになる。しかも、ここは、シェイクスピアが、ヴァイオラの言葉が、詩のリズムに変化する箇所であることを知っていて、役者に指示しているところである。

ところで、ヴァイオラは女性でありながら男性のセザーリオに変装している。恐らく、シェイクスピアは、悲喜劇的な効果を表わしながら、無意識的に、ヴァイオラの両棲具有を表わしたものだと思われる。いっぽう、寺山は、恐らく、マルセル・デュシャンの『大ガラス』や『遺作』に描かれた男女が一体となった姿などの影響から、両棲具有についてしばしば論じている。

04. 『佐川君からの手紙』

唐氏の芥川賞受賞作品にもなった『佐川君からの手紙』は、小説家としての唐氏の才能をい

かんなく発揮した作品である。寺山が最晩年に『佐川君からの手紙』のシナリオ化を計画していたというのであるから、もし実現していたら、唐氏の『佐川君からの手紙』はモノローグである小説と対話劇であるシナリオとの対照がはっきりと表われたはずである。しかも、小説家唐氏とシナリオ作家寺山との対比が浮き彫りになったはずで、誰もが二人の好対照を表した映画を見たかった筈であった。

唐氏は小説や台本を最初から最後まで殆ど直さずに書き上げるとよく耳にする。寺山の場合は、「台本は半分は劇作家が書き、残りの半分は役者が作りだす」という持論があった。九條今日子さんの話では、「寺山は毎回上演のたびごとに台詞が変わる」ということであった。つまり、この両者の違いは、唐氏が小説家で寺山がシナリオ作家である特徴をよく示している。

ところが、唐氏は、いつも、「自分は最初役者から始まって、その役者が芝居を書くようになった」と言う。それで、実は、唐氏が天性の小説家であるということを見落としてしまいがちなのである。

寺山も、詩を書いていたときは、モノローグで書き綴った。だが、寺山が芝居を書くようになってからは「ダイアログ（対話）を書くようになった」と言っている。つまり、この意味では、よく見ると唐氏も寺山も同じことを言っていることになる。だが、寺山の小説には『あゝ荒野』など色々あるが、唐氏の小説『佐川君からの手紙』ほどは知られてはいない。どちらかと言えば、この場合、唐氏に比べ、寺山は、小説家としてはマイナーであると言ってもよいのかもしれない。

さて、『佐川君からの手紙』には、佐川君からの手紙について語るナレーターの「私」がドイツ語のヨハネス・ベッヒャーの詩集の中の「アーベン（ト）」を翻訳した苦労話が綴られている。ナレーターの「私」は、佐川一政氏が自作の『霧の中』の中で「アーベン」と言った言葉を手掛かりにして、ヨハネス・ベッヒャーの詩集を探し当てるのである。

テープレコーダーのまわる音。「アーベン」透き通るきれいな発音のドイツ語が響きました。⁸⁾

次いで、ナレーターの「私」は、佐川一政氏が『霧の中』の中で、ドイツ語綴りの作家の名前である「ヨハネス」と正しく読めないで英語式に「ジョナサン」と発音したのではないかと推論する。

彼女はショルダー・バックから本をとりだしました。……「ジョナサン」という作家の名が書いてありました。(146-147頁)

更に、ナレーターの「私」は、「ジョナサン」という作家の名前を調べて、ヨハネス・ベッヒャーと推測する。このベッヒャー詩集は佐川君が殺害したルネに朗読させたとある。

「私のドイツ語の発音でいいといいんだけど……」(147頁)

しかも、ナレーターの「私」が佐川君に宛てた絵ハガキにベッヒャー詩集の一部分が日本語訳で数箇所引用されている。

…私は、ある惑星の光の下に埋められている⁹⁾

それにしても、ナレーターの「私」は、佐川君はルネに何故難解なベッヒャー詩集を朗読させたのだろうかと物語を続ける。

次いで、ナレーターの「私」は、話のがらりと変わって、イシスとオシリスの神話に言及し始める。つまり、イシリスの弟セトに暗殺されて、イシリスはばらばらにされた自分の身体をナイル川に投げ捨てられたが、そのばらばらの遺体を、イシスが探し拾い集めるという神話へと話が展開していく。

さて、寺山が、『佐川君からの手紙』のシナリオ化を引き受けた理由は、オシリスとイシスの神話に関心があったからではないだろうか。というのは、殊に、寺山は、文化人類学に興味があった。古代人は、彼らが食べる狩りや穀物の収穫物に対する感謝としての儀式を生み出し、それが、信仰心を育み、宗教となったという。そのような考え方に、寺山は深い探求心に駆り立てられたようなのである。だから、寺山の脚色予定だった映画『佐川君からの手紙』は、もしかしたら、モーアの『供儀』の古代時代の儀式から始まったかもしれない。というのは、マルセル・モーアは『供儀』の中で、原始の人々は、神にお供えをして、そのお供えを皆で供すると綴っているからである。

In totemism the totem or the god is related to its devotees : they are of the same flesh and blood;...by eating the totem, assimilated it to themselves, ...¹⁰⁾

更に、モーアは、供儀を「血の交換によって人間の生命と神の生命の交換を行う」と述べている。

Man and the god are not in direct contact. In this way sacrifice is distinguished from most of the facts

grouped under the heading of blood covenant, in which by the exchange of blood a direct fusion of human and divine life is brought about. (p. 11)

ところで、ナレーターの「私」が語る『佐川君からの手紙』は、その後、佐川一政氏が書いた小説『霧の中』に話が変わり、それと同時に、ルネの友人だったというK・オハラが忽然として小説の中に登場し、佐川君とルネの関係を語る。しかし、佐川君はK・オハラを知らないと答える。そこで、ナレーターの「私」は、K・オハラがいったい何者なのかと謎に肉薄しようとする。とうとう、ナレーターの「私」はK・オハラに向かって、「K」のフルネームを尋ねると、「菊」と答える。しかも、「菊」という名は、ナレーターの「私」によると、祖母の名前と同じだと明かすのである。

この結末のところは、佐川事件からはなれてしまい、この逸話は、唐氏一族の系譜を彷彿させてくれる。だが、同時にこの逸話はまた、寺山の母子関係も思い出させてもくれる。というのは、この逸話は寺山が撮った映画『田園に死す』の母親殺しのテーマを連想させてしまうからである。

05. 唐十郎の『特権的肉体論』

唐氏と寺山の渋谷乱闘事件は今もなお語り継がれている逸話である。元々、寺山は、唐の才能を見抜き、唐の台本を自分の台本と一緒に文学座の演出家荒川哲夫に売り込んだりした。けれども、やがて、唐氏が率いる状況劇場が劇界の評判を集め、更に、唐氏が『佐川君からの手紙』で芥川賞を獲得すると、後輩だった唐氏の方が、先輩だった寺山のお株を奪う勢いは当然生れた。殊に、唐氏が、『特権的肉体論』を世に問うた時、唐氏は、寺山の演劇論を批判しなければ、唐氏の独自性がだせないだろうから、勢い、批判的な見解が飛び出したのではないかと思われる。

寺山修司の「劇的想像力の復権」という文章を目にした時、私を赤面させたのは、そこにもやはり同じ類の性急なる標識病がでかい顔をしていたからである。例えば、極めて解釈不能「劇的想像力の日常生活の中への拡散」とはなんであろうか。コトバも使いようだが、このようにテーマに関わってくる如き文章だから困ってしまう。¹¹⁾

唐氏は、『特権的肉体論』で、身体全体をフルに生かした演劇論を展開している。だが、前にも紹介したように、寺山は、芝居は、「半分作者が作って残りの半分は役者が決める」¹²⁾とす

る持論の演劇論があった。しかも、もっとやっかいなのは、唐氏は役者としても有能であるだけでなく、またなお一層のこと、文章も上手いのである。いっぽう、寺山は、演技は殆ど駄目で、小説も唐氏の方が遙かに巧い。ところで、シェイクスピアの場合、自身が詩人であり、役者達が上手い演技を見せたので、ある種、舞台上演では、グローブ座ではバランスのとれた分業体制が出来ていたのではないだろうか。恐らく、寺山の場合も、天井桟敷で、シェイクスピアの劇団と同じ様な分業体制が出来ていたものと推察される。ところが、唐氏の場合は、有能な劇作家で、また、小説も書けるし、しかも俳優としても一流であるという稀有なアーティストでもあった。そこが唐氏と寺山の違いである。

さて、座付き作者で役者も出来たという意味では、モリエール以来、多くの劇作家兼役者が出現している。恐らく、唐氏がモリエールよりも秀でているのは巧い小説が書けるアーティストでもあることだろう。恐らく寺山も、唐氏の溢れんばかりの才能を認めていたものと思われる。いっぽう、寺山は、特異な世界を透視できる不思議な詩人であった。例えば、寺山は、唐氏との対談で不思議なことを言う。

唐 シェイクスピアだってセンスとして読めない人は、見たって読んだって何にもこなれないもの。

寺山 シェイクスピアを面白く読める人は、東京都の電話帳だって同じように面白く読めるわけだ。

唐 スタニスラフスキー・システムというのはそうだよ。

寺山 いやァ、違うね。スタニスラフスキーは電話帳から数字しか見いだせない男だ。(77頁)

もしかしたら、寺山は、「電話帳の番号は、記号にすぎないが、電話をかければ、相手の肉声が聞こえる。ところが、たとえその記号がシェイクスピアの文字のままでいつまでもそこにとどまっている限り、文字は文字でしかない。」と考えていたのではないだろうか。けれども、想像力を働かせない人にとっては、どうして、電話帳がシェイクスピアと同じ様に読めるのか理解できないわけである。速断することはできないが、寺山は、歌人として、絶えず言葉を削いで研磨していたアーティストであった。だが、逆に、唐氏は言葉を泉のように、無限に紡いでいくアーティストであったと思われる。だから、その為に、二人の作風の違いが顕著になったかもしれない。

06. 『ジャガーの眼』と寺山修司

唐氏の『特権的肉体論』からすれば、寺山修司の演劇『さらば映画よ』の光線の間人や『奴婢訓』の機械人間などは、その対極にある芝居となるだろう。実際、唐氏の初期の芝居『腰巻お仙』や『油井小雪』などは、台本も舞台も役者も、計り知れないエネルギーが漲り迸り出ていた。

さて、唐は1983年寺山修司が亡くなったとき、底知れぬ喪失感に襲われたようだ。唐氏が1985年にドラマ化した『ジャガーの眼』は寺山のオマージュであることは確かである。だが、それでいながら、『ジャガーの眼』をよく観ると、観客は、感情移入よりも先に、違和感を覚えたのはなぜだろうか。劇の冒頭から、寺山の愛用のサンダル、義眼、人形、臓器交換、マルセル・デュシャンの「死ぬのは他人」などが出てきて、唐氏が寺山の痕跡を追い求めていることはわかる。

けれども、寺山が「死ぬのは他人」をデュシャンからコラージュしたように、そのように、唐氏も、寺山から間接的にコラージュするのではなく、オリジナルのデュシャンから直接コラージュしたのであれば、『ジャガーの眼』の意図はより一層明確になったのではないだろうか。唐氏は『ジャガーの眼』の中で次のように書いている。

田口 生きるのも 皆他人
死ぬのも 皆他人、
愛するのも 皆他人
覗くのは 僕ばかり¹³⁾

ところで、先ず、唐氏は、寺山を覗き魔として捉えようとする。そして、覗き魔としての寺山が履いていたのがデニムのサンダルである。唐氏は、瀕死の寺山を河北病院へ見舞いに行った時、ベッドの傍らに脱ぎ捨ててあったデニムのサンダルに異様に惹きつけられたと述べている。

田口 それが、あれが寺山修司のサンダルだ！（418頁）

また、寺山は、自作のドラマ『中国の不思議な役人』のように、鏡をしばしば引用する。この鏡はラカンがしばしば使う鏡で虚像を指している。さて、トーマス・ピンチョンの『V.』には、虚像としての鏡がしばしば出てくる。元々虚像の鏡は実体がないのだから、或る日V.は

忽然と姿を消してしまう。ピンチョンの『V.』でも、ガルシア・マルケスの『百年の孤独』でも、ホルヘ・フランシスコ・イシドロ・ルイス・ボルヘスの『不死の人』でも、或いは、寺山の『さらば箱舟』でも登場人物は忽然として姿を消してしまう。唐氏は続けて言う。

田口 鏡だ。ありし日の僕の鏡だ！（434頁）

更に、寺山には人形に対する偏愛があったから、ハンス・ベルメールの影響もあり、『田園に死す』や『中国の不思議な役人』でも人形が生きた人間のようにふるまう。唐氏の劇団には、四谷シモンがいたから、唐氏は独自に人形に対して造詣が深かったものと思われる。

少年 しっかりしてよ、おじさん、人形じゃないか！（458頁）

さて、寺山は『中国の不思議な役人』でしばしば人形をばらばらに解体して描いた。或いは、寺山は『臓器交換序説』の中で臓器について自身の考えを明確に表わした。つまり、寺山は『臓器交換序説』でD.M,トマスの「適合する臓器提供者を求めて」を引用して死者が新たな移植によって他人の肉体に変わり蘇生すると論じるのである。

私は見ていた おのれの 肉体が
歓喜につつまれ 運ばれていくのを¹⁴⁾

唐氏は、このD.M,トマスの「適合する臓器提供者を求めて」の理論を軸に『ジャガーの眼』を応用して展開していく。また、唐氏が、劇の中で、「臓器交換」を博打といているのは、恐らく、ジョン・ケージのチャンス・オペレーションの偶然性が念頭にあったからだと思われる。唐氏は、ケージが草月会館に来て、チャンス・オペレーションで演奏したのを見た筈である。

眼帯をした男 臓器交換はバクチじゃなえのか？（474頁）

或いは、唐氏のジャガーの眼がどこから来たのかというと、恐らく寺山の『奴婢訓』に出てくる「多くの眼球を載せた皿」から来たものと思われる。

サッと棚に下りていたカーテンを引いて眼球の棚々を見せる。（475頁）

恐らく、唐氏のジャガーの眼は寺山自身を暗示していることは間違いない。唐氏は、ジャガーの眼について何度も繰り返しイメージを膨らまして、劇の大詰めでは、眩い光を発するようを見せている。或る意味で、眩い光は、宇宙の始まりを示すビッグバンのようにも思えてくる。だが、膨張する巨大な宇宙が無言であるように、ジャガーの眼は何も語らない。ジャガーの眼は、ある意味でレーモン・ルーセルが『ロクス・ソルス』の中で描いたカントレルが発明した科学装置を見ている様な気がしてくる。

また、『ジャガーの眼』には義眼が出てくるのだが、先にあげたトマス・ピンチョンの『V.』に出てくるV.の眼も義眼でもある。こうしてみると、唐氏は『D.M. トマスの「適合する臓器提供者を求めて」』を引用しているけれども、『ジャガーの眼』は、寺山の作品だけからイメージを構築していくと片手落ちのように思われる。つまり、『ジャガーの眼』を、寺山が影響を受けたトマス・ピンチョン、ホルヘ・ルイス・ボルヘス、ガルシア・マルケス、レーモン・ルーセルの主要なコンセプトをパースペクティブから見ていかないと、唐氏の意図を見落としてしまいかねない。だから、覗き屋の眼を、寺山が冤罪となった覗きの眼で見ていく限り、いわゆる寺山ゾンビの視点から一步も離れる事が出来ないように思われる。因みに、萩原朔美氏は、寺山の覗き魔事件は冤罪だと証言している。

だが、唐氏が構築した『ジャガーの眼』は、劇団池の下が寺山の芝居を忠実に舞台化するとは全く異質なステージであった。元々、唐氏と寺山は似て非なる者同士であった。むしろ、寺山は唐氏の非凡な才能を最初から見抜いていた。だからこそ、寺山は唐氏の『佐川君からの手紙』のシナリオ化を目指していたのだと推察される。残念ながら、寺山の夭折によって幻のシナリオは陽の目を見ることがなかった。だが、逆にみていくと、唐氏の方が『ジャガーの眼』を書いて寺山の幻に終わった映画を舞台化して見せたのである。確かに、唐氏は『ジャガーの眼』の再演をしたほどだから、寺山に対する思いは深かった筈である。しかし、唐氏が寺山に対する思いがいくら深くても、両者は異質な才能の持ち主であった事に変わりはない。だから、寺山の東北の暗さを、『ジャガーの眼』から窺うことはできない。或いは、『ジャガーの眼』は、眼の角膜移植を扱った臓器交換が主要なテーマになって血なまぐさい話なのだが、不思議なことにあまり暗さが深くなく、どちらかといえば、明るい。この違いは風土的なものかもしれない。たとえば、パリの革命のギロチンの血生臭さとスコットランドのマクベスが手を下した暗殺との風土的な相違のようだ。両方とも血なまぐさいドラマであるが、やはり、パリの空の明るさのような『ジャガーの眼』からは、スコットランドの薄暗い空に暗鬱さを求めることができない。それと同じ印象を『ジャガーの眼』の舞台から得たのである。

従って、『佐川君からの手紙』の舞台となったパリの明るさは、寺山の手にかかってシナリオ化されれば、忽ち、寺山脚本の『佐川君からの手紙』は、暗雲がたちこめ、嵐が吹きすさぶ

闇夜のパリになってしまうだろう。例えば、寺山は、かつてクロード・ルルーシュ監督のミュージカル『シェルブールの雨傘』を『わが心のかもめ』に翻案しテレビドラマ化した。寺山のテレビドラマ『わが心のかもめ』は、冒頭の雨のシーンから、次第に、つまり、物語は、南フランスから、日本の青森港に変わった暗鬱な雰囲気になってしまったのは否めない。むしろ、唐氏が寺山の芝居を幾本かプロデュースすれば、『ジャガーの眼』はより一層寺山的になるだろう。だが、それでは、唐氏のオリジナルの『ジャガーの眼』ではなくなってしまう。

07. 寺山修司の唐十郎論

先にも述べたように、寺山は、早くから、唐氏の才能を見抜き、自分の台本と一緒に、唐氏の台本を文学座の演出家だった荒川哲夫に見せた。恐らく、寺山は、自分にない才能を唐氏に見つけていたのであったろう。寺山は唐氏について次のように書いている。

唐十郎の芝居は必ず、「何者かへの期待」で幕があき、その「何者かの登場」によってクライマックスになるのである。¹⁵⁾

唐氏自身が役者として出演する事が、状況劇場の特徴である。それに対して、寺山の天井棧敷は、スタッフ中心の劇団で、俳優はスタッフによって俳優自身が劇の一部分として裁断され、切り切り舞いにさせられてしまうのである。寺山は唐氏と『三田文学』主催の座談会で次のように言っている。

寺山 頭脳も肉体だということを知らなければならない。

唐 その辺をすっ飛ばしちゃう……。

寺山 頭脳が肉体だということは物凄く問題なので、これを無視しちゃ肉体美の完全さは語れない。¹⁶⁾

ところで、寺山は、天井棧敷の芝居稽古で、頭脳も肉体と考えて演出していた筈だから、演出家寺山の指示に応えるのに役者は非常に苦勞した事は思い当たるのである。

08. 寺山修司とシェイクスピア

寺山修司が青森高校時代から『牧羊神』(NO. 2)の『pan宣言(一)』に『マクベス』論を

書いて関心を懐いたことは注目すべきである。寺山は『牧羊神』(NO. 2)の『pan宣言(一)』で次のように書いている。

これも旧聞に属するが、シェークスピアの「マクベス」をとりあげて中村草田男は『Sleep, no, more』というあの緊迫した一語が作品「マクベス」で言わんとするテーマの一なのだと万緑誌上に書いたことがある。

そして彼はその章を『だから詩人はこの一語、すなわち Sleep, no, more に如く一語の探究のために命を賭すべきだ』と言って結んでいた。

僕たちも考えよう。ここに創刊した pan は現代俳句を革新的な文学とするため、そして僕たちの「生存のしるし」を歴史に記し、多くの人々に「幸」の本体を教えるための「笛」である。はじめ、この笛を吹きながら踊るのは、僕たちだけしかないけれど、そして僕たちの前には果てしない荒野と、どれが Sleep, no, more の本体なのかわからない羊歯の群ばかりではあるけれど僕たちはこの「笛」を吹きつづけよう。

僕たちはこの pan の方向を仮に憧憬主義と名づけたい。

春の鶉国に採詩の官あらず 育宏¹⁷⁾

寺山は中村草田男の短歌・俳句に傾倒したがニーチェの超人思想にも共鳴するところがあった。なかでも、顕著な影響の表われとしてシェイクスピアの『マクベス』の愛着に見る事が出来る。寺山は、“sleep no more”¹⁸⁾を原文から引用し独自に解釈して、後年自作の『盲人書簡』で「よく見るために、もっと闇を！」¹⁹⁾と書くことになるがマクベスの心の闇を映す独白の影響がここにも繋がっている。同時に、当然のことながら、更にもっと注目すべき点は、寺山がシェイクスピアの原典を照らし合わせるか、或いは、もしかしたら、実際に原文を読んでいたかもしれない。他にも、寺山が『マクベス』に強い感化を受けていた証拠として、後の作品『花札伝綺』(1967)にも『マクベス』の影響を見る事が出来る。つまり、寺山は『花札伝綺』で『マクベス』の魔女の台詞を「言いは悪いで悪いは良い」(Fair is foul, and foul is fair, p. 103)を引用している。マクベスが“sleep no more”と英国の北国スコットランドで独白する緊迫感、日本の北国青森と共通するところがある。後に寺山は上京してひとみ座で人形劇『マクベス』を観て心を動かされ『狂人教育』を書いた。

いっぽう、先にあげたように、唐十郎氏は『Shakespeare Fantasy シェイクスピア幻想〈道化たちの夢物語〉』で「『ロミオとジュリエット』口説き屋ロミオ」、「『夏の夜の夢』蜂のタイテーニア」、「『フォルスタッフ 頬腹先生』」、「『お気に召すまま』 きみはギユニメード」、「『ハムレット』焼き鳥屋のハムレット」、「『あらし』プロペラ親爺の二百十日」、「『リチャード3世』

を選んで夢物語を書いている。ところが、唐氏の手にかかると、シェイクスピアの悲劇であっても、喜劇的雰囲気が増っている作品が多い。つまり唐氏はシェイクスピアの悲劇も選んでいるのだが、唐氏のドラマからは寺山のように寒冷な東北地方特有の血生臭い殺戮を期待することはできないのではないだろうか。

09. まとめ

レオン・ルビン教授は、「シェイクスピアはこれから先300年以上生き延びるだろう」と語った。いっぽう、バーナード・ショーは、シェイクスピアを一生探求して「シェイクスピアがこれから先三百年も生き延びる事を憎む」²⁰⁾と書いている。これを、唐氏と寺山に当て嵌めて軽々に論じてはならないだろう。というのは、コリン・ウィルソンの批評を思い出すからである。コリン・ウィルソンは『アウトサイダー』、『バーナード・ショー』、『オカルト』を書き、そのなかで、「ショーはアイルランドのファンタジーを失わなかった」と述べている。また、ブルーストは「ケルトでは死んだ物に命が眠っていると信じている」²¹⁾と書いている。ウィルソンは、「ショーとブルーストが生命力（性的なエクスタシー体験）をもった偉大なアーティストである」と語っている。つまり、ウィルソンによると、ショーはただの喜劇作家ではなく、偉大なファンタジーの持主であり、ある意味で、シェイクスピアのファンタジーに比べても、決して劣らない作家であったという。だから、唐氏と寺山の場合も短絡的にシェイクスピアと比較して批評してはならない筈である。

或いは、先に述べたように、寺山は、「シェイクスピアは電話帳と同じだ」と述べた。つまり、シェイクスピアの台詞は文字にすぎないが、電話帳のコード番号は電話回路が通じると、忽ち、受話器の向こうから生の声が聞こえて来て、生命のない電話番号のコードは忽ち生の声に転換すると考えていた。

勿論、唐氏のシェイクスピア論は、唐氏の劇作品の中で血肉化していることも忘れてはならないだろう。もしも、唐氏のドラマがシェイクスピア劇と比較できないと考えるなら、それこそ、我々が「シェイクスピアはこれから先三百年以上生き延びるだろう」という観念に縛られて、唐氏の新機軸を見落とす事になるだろう。寺山はよく言ったものである。「劇作家はドラマを半分書き、後の半分は役者が作る」と。これを唐氏の芝居に当て嵌めると、「台本は劇作家の唐氏が書き、役者の唐氏がその後で舞台を作って完成する」と言えないだろうか。また、これこそが唐氏の新機軸である。

ところで、ここで他の劇作家の例を挙げて、唐氏と比較してみよう。例えば、筆者が、実際、天野天街氏演出の『田園に死す』を観た後、上演台本を英訳していた時に気がついたこと

がある。それは、「舞台は、役者が作るが、台本は作者が作る」という寺山の言葉である。つまり、かつて、天野氏自身は、「台本は設計図である」と語ったことがある。従って、天野氏は、演出家や俳優がその設計図に基づいて、舞台の上で、劇を如何にして構築するかにかかっていると考えているようだ。けれども、天野氏が作成した設計図が必ずしも舞台上で上手く活かされない場合がある。つまり、舞台や稽古では、演出家や俳優が天野氏の設計図の細部を省略してしまう場合がある。だが天野氏の舞台を劇場で観た後で、筆者が、改めて台本を見て英訳していると、演出家が天野氏の設計図を省略してしまった痕跡がありありと見えてきてしまう場合がある。恐らくは、それは天野氏の設計図のディテールを再現することが、演出家や俳優にとって、如何に難しいかを物語っているのかもしれない。

これに対して、唐氏の台本は小説のように細部が丁寧に明快に描かれているので、演出家や俳優が、その指示に従って、創意工夫を読み取り、そのコンセプトを比較的舞台上に引き出しやすいのではないだろうか。

シェイクスピアの劇を上演する時には、シェイクスピアの台詞の中には俳優やスタッフに対する指示が十分備わっていたようだ。というのは、シェイクスピアは、台本の中に細かい指示を俳優に書いたから、どの時代になっても俳優はその指示を解読すればよいのである。ルビン教授は「シェイクスピアの台詞には、言葉だけではなく、舞台上の指示がいっぱい詰め込まれている」と語った。寺山の天井桟敷も、俳優よりもスタッフが充実していたとしばしばいわれる。しかし、寺山の台本からは、舞台上の指示がシェイクスピアほど十分詰め込まれているとは必ずしもいえなかったのではないだろうか。

けれども、シェイクスピアのドラマの場合、言葉以外、残念ながら、四百年前のシェイクスピアの指示のコンセプトはやはりところどころ失われてしまったことであろう。いっぽう、唐氏の台本は分かり易い。だが、それも、同時代人にとっては分かり易いという限定付きであることも思い出す必要がある。

これに対して、寺山や天野氏の台本の指示は、言葉として理解ができて、それを如何にして舞台上で実現するかが難しいという問題がある。その証拠に寺山や天野氏の台本に指示が書かれていても、演出家や俳優によって、実際の舞台では省略されることがあるからだ。言い換えれば、寺山や天野氏のドラマは同時代人にとっても難解だという事であろう。しかし、それが返って、謎を深め、しかも、その謎がいつまでたっても解けないから、いつまでもドラマの斬新さを保っていることになるのかもしれない。

それに対して、シェイクスピアや唐氏の台本は、舞台を熟知したアーティストが書いたドラマなので、ステージの構造や仕組みを知り尽くしたアルチザンには解読しやすく、その結果、観客にも明解で分かり易いのかかもしれない。

しかし、寺山は、一見すると、劇場の仕組みをよく知らない詩人が書いた台本のように見える。だから、寺山の多くのアイデアを舞台でどのように生かしてよいのか演出家には分からない場合があったのかもしれない。しかしながら、だからこそ、寺山は「台本は半分書いて、残りの半分は俳優が造る」と言ったのかもしれない。

いっぽう、先に述べたように、天野氏の場合は、天野氏の詳細なアイデアを、演出家や俳優が十分忠実に表わそうとしない箇所がところどころある。むろん、シェイクスピアの芝居も何度も稽古して、シェイクスピアの意図を、時間をかけて十分解読して舞台に実現しなくてはならない。しかも、その場合が殆どである。そしてまたそのことを演出家や役者は忘れてはならない。つまりは、シェイクスピアのドラマは、舞台を知り尽くしていないと近づきたい芝居なのである。或いは、また、シェイクスピアのドラマにはアンビバレントなところがある。というのは、シェイクスピアの劇が二面性を表わしているからである。例えば、『十二夜』では大抵の場合、神の顕現によってヴァイオラとオーシーノの恋は成就する。いっぽう、トレバー・ナンが演出した『十二夜』はヴァイオラとオーシーノが二人の意志で恋が成就する。シェイクスピアは中世と近代が入り混じっているので、アンビバレントになるのである。

さて、唐氏と寺山の演劇をいわばシェイクスピアの二面性を考慮して考えていくと、やはり二人が似て非なる関係であることが分かる。しかしながら、この二人がアンビバレントでありながら、逆にシェイクスピアが仕掛けた謎を解くためには、このアンビバレントな関係のおかげで、解けない謎のように思われたシェイクスピアの迷路を解読する重要な手掛かりになっている事に気づかされる。つまり、シェイクスピアの劇は悲劇と喜劇が一体となっている。この悲喜劇性によってシェイクスピアは他の劇作家よりも影響力があるとよくいわれる。寺山は暗鬱で重く、唐氏は陽気で軽快である。実は両者の二面性をシェイクスピアの劇は含んでいるのである。

また、よく言えば、唐氏がシェイクスピアの伝統性を表わし、寺山がシェイクスピアの近代的な斬新さを表わしていると言えなくもない。しかし、悪く言えば、唐氏は舞台に詳しく、逆に、寺山は既存の舞台をよく知らないという事になるのかもしれない。だが、シェイクスピアさえも、マーロウに比べると素人に近い劇詩人であったという事を忘れてはならない。つまり、シェイクスピアは新しい形式で詩を書く未定型の詩人であるという斬新さを見落としてはならない。その意味で、まさに、唐氏と寺山はシェイクスピアの二面性を共有しているといえないだろうか。或いは、逆に、うっかりすると、唐氏と寺山の芝居は似て非なるものだという思い込みで囚われてシェイクスピアの迷路の中で陥穽に落ち込んでしまうかもしれない。だが、その時には、シェイクスピアの二面性を思い出して、唐氏と寺山の芝居をもう一度解読すれば、シェイクスピアの仕掛けた迷路から脱出する手掛かりを得る事になるかもしれない。つ

まり、唐氏と寺山が醸し出すアンビバレントな劇は、同時に、シェイクスピアが醸し出すアンビバレントな劇によって繋がっている事に気がつくのである。

注

- 1) 西堂行人「演劇革命の系譜 シェイクスピア／唐十郎／ハイナー・ミュラー」(『唐十郎紅テント・ルネサンス』、河出書房新社、2006) 50-54頁参照。
- 2) 参考：2005年6月4日、唐組の「鉛の兵隊」公演が愛知県豊田市・拳母神社 特設紅テントで行われた。
- 3) 唐十郎「ほんとにシェイクスピアさんなんですか？」(『超時間対談』 集英社、1981) 153-168頁参照。以下同書からの引用は頁数のみ記す。
- 4) 参考：唐十郎『Shakespeare Fantasy シェイクスピア幻想〈道化たちの夢物語〉』(PARCO 出版、1988) 同書からの引用は頁数のみを記す。
- 5) 寺山修司『人生なればこそ』(立風書房、1976) 77頁。
- 6) 清水義和『演劇の現在 シェイクスピアと河竹黙阿弥』(文化書房博文社、2004) 190-192頁参照。
- 7) Shakespeare, William, *Twelfth Night* (Edited by Elizabeth Story Donno, The New Cambridge Shakespeare, Cambridge U.P., 1985), p. 56. All the quotations from *Twelfth Night* are from this edition. The page numbers are in parentheses.
- 8) 佐川一政『霧の中』(話の特集、1983) 146頁。同書からの引用は頁数のみを記す。
- 9) 唐十郎『佐川君からの手紙』(『芥川全集』第13巻文藝春秋、1989) 71頁参照。
- 10) Henri Hubert & Marcel Mauss, *Sacrifice: Its Nature & Function*, Translated by W. D. Halls (Chicago U.P., 1967) pp. 2-3. 以下同書からの引用は頁数のみ記す。
- 11) 唐十郎『腰巻お仙 特権的肉体論』(現代思潮社、1983) 33頁。
- 12) 『寺山修司演劇論集』(国文社、2000) 49頁参照。
- 13) 唐十郎『ジャガーの眼2008』(『唐組熱狂集成 迷宮彷徨篇』ジョルダンブックス、2012) 33頁。以下同書からの引用は頁数のみ記す。
- 14) 寺山修司『臓器交換序説』(日本ブリタニカ株式会社、1982) 23-24頁。cf. Donald Michael Thomas, *Seeking a Suitable Donor* (Ed: Langdon Jones *The New S.F.* 1969)
- 15) 寺山修司『人生なればこそ』(立風書房、1993) 151頁。
- 16) 寺山修司、唐十郎・他「座談会 本質論的前衛演劇論」(『三田文学』、1967.11) 13頁。
- 17) 寺山修司『pan 宣言 (一)』(『牧羊神』NO. 2) 表紙の裏、目次参照。
- 18) William Shakespeare, *Macbeth* (Edited by A.R. Braunmuller, The New Cambridge Shakespeare, Cambridge U.P., 1997), p. 145. All the quotations from *Macbeth* are from this edition. The page numbers are in parentheses.
- 19) 『寺山修司戯曲集 3—幻想劇篇』(劇書房、1993) 205-206頁。
- 20) *The Bodley Head Bernard Shaw Collected Plays with their Prefaces* 2 (Max Reinhardt, 1971), p. 48. "I hate to think that Shakespear has lasted 300 years"
- 21) Proust, Marcel, *A la recherché du temps perdu I* (nrf, 1954), p. 44.

参考文献

- Alternative Japanese Drama Ten Plays*, Edited by Robert T. Rolf & John K. Gillespie (Hawaii U.P., 1992)
- Goodman, David, G., *Japanese Drama and Culture in the 1960s, The Return of the Gods* (An East Gate Book, 1988)
- Sas, Miryam, *Experimental Arts in Postwar Japan Moments of Encounter Engagement, and Imagined Return* (Harvard U.P., 2011)
- Ridgely, Steven, C., *Japanese Counterculture The Antiestablishment Art of Terayama Shuji* (Minnesota U.P., 2010)
- Richie, Donald, *A Lateral View Essays on Culture and Style in Contemporary Japan* (Stone Bridge Press, 1992)
- 『唐十郎全作品集』1巻～6巻（冬樹社、1979）
- 唐十郎『熱狂集成』（ジョルダンブックス、2012）
- 唐十郎『ジャガーの眼』（沖積舎、1986）
- 唐十郎『ジョン・シルバー』（天声社、1969）
- 唐十郎『煉夢術』（角川文庫、1976）
- 唐十郎『腰巻お仙 特権的肉体論』（現代思潮社、1983）
- 唐十郎『ベンガルの虎』（書き下ろし新潮劇場、1973）
- 唐十郎『ガラスの使徒』（アートン、2005）
- 唐十郎『蠱惑の傾斜』（河出書房新社、1991）
- 唐十郎『鉛の兵隊』（en-Taxi 9号別冊付録、扶桑社、2005）
- 唐十郎『わが青春浮浪伝』（作家の自伝20、日本図書センター、1994）
- 唐十郎『乞食稼業 唐十郎対談集』（冬樹社、1979）
- 唐十郎「唐十郎の俳優修業」『演出家の仕事』（れんが書房新社、2006）
- 唐十郎、室井尚『教室を路地に 横浜国大 VS 紅テント2739日』（岩波書店、2005）
- 『唐十郎がいる唐組がある二十一世紀』堀切直人編（青弓社、2004）
- 樋口良澄『唐十郎論』（未知谷、2011）
- 唐十郎「日本ドラキュラの宿題帳」（「血まみれの骰子」『ドラキュラ』創刊号、1973）
- 「特集唐十郎」（『悲劇喜劇』No. 736 早川書房、2012.2）
- 「唐十郎の世界」（『別冊新評』第7巻第3号、新評社、1974）
- 平岡正明『アングラ機関説』（マガジン・ファイヴ、2007）
- 『寺山修司対談集 密室から市街へ』（フィルムアート社、1976）
- 『血と薔薇』No. 1-4（天声出版、1968-1969）
- 『季刊同時代演劇』第1号～第4号（演劇センター68/71出版委員会、1970～1971）
- 『季刊同時代演劇』復刊第1号～第2号（演劇センター68/71出版委員会、1973）
- 扇田昭彦『唐十郎の劇世界』（右文書院、2007）
- 扇田昭彦『開かれた劇場』（昌文社、1976）
- 『劇談 現代演劇の潮流』扇田昭彦編（小学館、2001）
- 『劇的ルネッサンス 現代演劇は語る』扇田昭彦編（Libro、1983）
- 唐十郎、江本純子「アングラ」（『せりふの時代』Vol. 29、2003）
- 唐十郎、山口昌男「魔について」（『現代思想』Vol. 9-44、青土社、1984.10）
- 唐十郎、寺山修司・他「座談会 本質の前衛演劇論」（『三田文学』、1967.11）

- 「アングラ'68」(『キネマ旬報』キネマ旬報社、1968.6)
- 『映画芸術』(映画芸術社、1968.2)
- 『映画芸術』(映画芸術社、1968.7)
- 『映画芸術』(映画芸術社、1968.9)
- 『映画芸術』(映画芸術社、1968.12)
- 『映画芸術』(映画芸術社、1969.2)
- 『映画芸術』(映画芸術社、1969.6)
- 『映画芸術』(映画芸術社、1970.2)
- 『映画芸術』(映画芸術社、1970.3)
- 『映画芸術』(映画芸術社、1970.4)
- 『映画芸術』(映画芸術社、1970.5)
- 『映画評論』(映画出版社、1972.4)
- 『映画評論』(映画出版社、1972.6)
- 『映画評論』(映画出版社、1972.12)
- 『映画評論』(映画出版社、1974.11)
- 『映画評論』(映画出版社、1974.12)
- 『美術手帖』(美術出版社、1970.5)
- 『美術手帖』(美術出版社、1971.11)
- 『海』(中央公論社、1970.11)
- 『海』(中央公論社、1972.7)
- 『海』(中央公論社、1975.3)
- 『海』(中央公論社、1976.9)
- 『海』(中央公論社、1982.12)

成長期における足部のスポーツ障害

——男子中学生サッカー選手に生じた Freiberg 病の 1 例——

辻内 智樹・高山 伸也・北田 豊治

はじめに

成長期において筋・骨は形成途中であるため、過度な刺激を繰り返し受けることにより大きく損傷する。そもそも、スポーツ傷害は一度の大きな外力で損傷を受ける「スポーツ外傷」と繰り返しの運動での使い過ぎによって起こる「スポーツ障害」に分けられる。足部においては足関節靭帯損傷やアキレス腱断裂などが前者と考えられ、疲労骨折やアキレス腱炎などは後者の代表例である。本症例の Freiberg 病は慢性障害の後者に分類される。一般的に思春期の女子に多く、第 2 中足骨骨頭の骨端症と考えられている。治療の主流は保存療法であり、効果が得られない場合は観血的治療が選択される。

今回は特別な外傷・障害歴のない男子中学生サッカー選手に生じた Freiberg 病に対して手術療法ではなく、保存療法を行った。その後、約 9 ヶ月で競技に完全復帰したこの症例に対して文献的考察を加えて報告する。

症 例

14 歳 男性 サッカー選手

1. 主訴

左足背部の圧痛

2. 現病歴

平成22年12月某日、サッカーの練習時に誘因なく左足背部に圧痛が出現した。練習後、患部をアイシングするが痛みに変化はなかった。その後、日常生活を送るには問題ない程度までに痛みは軽減したが、運動時の痛みが残っていたため、近医整形外科を受診した。ここではX線検査で左足第2中足骨頭に異常陰影が認められ、MR精密検査が必要と診断された。そして平成23年1月、市外にある総合病院整形外科を受診（精密検査を含む）し、Freiberg病と診断された。その後はセカンドオピニオンとしてC大学に併設されたスポーツ整形外科も受診した。

3. 身体所見

左足第2MTP関節の圧痛と背屈ROM制限を認めた。しかし、視診上、圧痛点の陥凹変形は認められなかった。

4. 画像所見

左足部単純X線画像（図1）所見では、第2中足骨頭の扁平化である不規則変形を認めた。また、MR画像（図2）所見では、第2中足骨頭の部分壊死を認めた。



図1 左足部単純X線画像



図2 左足部MR画像

5. 治療経過

Freiberg 病の診断後、6 月までは 1 ヶ月に 1 回の診察を受けたが、運動は許可されなかった。しかし、その間、セカンドオピニオンで受診したスポーツ整形外科医からはインソールを作成してのアーチサポートを含めた保存療法（体幹を中心とした患部外トレーニングなど）を開始するように指導を受けた。主なトレーニング内容は FIFA が推奨する「The 11+」（図 3）のパート 2（初級編）の種目を中心に週 2～3 回のペースで行った。7 月半ば、Jogging やリフティングを含めた軽運動を開始した。初診から約 9 ヶ月後の 9 月、公式戦に出場した。

考 察

Freiberg 病は第 2 中足骨頭の不全骨折として Freiberg により報告された。別名を第 2 ケラー病といい、中足骨頭の骨端症として分類されている。特に若年層の女性に好発するものとされている。原因は反復外力、血行障害、足部の機能解剖的制約など様々なものが考えられているが、Wiley らの報告¹⁾によれば、第 2 中足骨はその中でも比較的、血行が乏しく、反復外力の負荷を受けやすい部分であるためとしている。

スポーツでの Freiberg 病の場合、治療は早期の手術療法が効果的であるとも言われている²⁾。保存療法で改善が認められない場合には背側楔状骨切り術、自家軟骨移植術³⁾などの術式を用いて治療が行われる。峯らによれば、軟骨を温存する目的で行われる自家骨移植手術では術後平均 4.8 ヶ月でスポーツに復帰可能であったと報告⁴⁾されている。しかし、本症例では患者本人が成人選手ではなく成長期の選手であることを考慮に入れて手術療法を最優先するのではなく、まずは関節機能の維持を目的とする保存療法から始めることとなった。

本症例において患者本人は週 5～6 回のペースで練習に参加していたことや一般的な中学生サッカー選手よりも運動量の多いタイプの選手であったことが、第 2 中足骨頭にかかるストレスを増大させ、Freiberg 病を発症させたのではないかと考える。また、解剖学的に左足部は右足部よりも開帳足ぎみであるため、横アーチが著しく低下していることもその原因と考える。

治療は原則的に第 2 中足骨頭のストレスを軽減する目的での運動制限（今回の場合は運動中止を含む）とインソール（metatarsal pad）での対応が主となった。それと並行して患部外トレーニングを続けて運動が許可されてからは「The 11+」（図 3）のパート 2（初級編と中級編）の種目を中心に週 2～3 回のペースで行い、徐々にサッカーの技術練習の時間を段階的に増加させて競技へ完全復帰した。

まとめ

- ・ 比較的稀な成長期の男子（中学生）での Freiberg 病を経験した。
- ・ 成長期における第 2 中足骨頭への過度な反復外力が原因の 1 つと考えた。
- ・ 成長期のスポーツ復帰において手術療法を優先するのではなく、関節機能の維持を目的とする保存療法を選択した。

参考文献

- 1) Wiley J, et al: Freiberg's disease. J Bone Joint Surg 63-B: 459, 1981
- 2) Sproul J, et al: Surgical treatment of Freiberg's infraction in athletes. AM J Sports Med 21: 381-384, 1993
- 3) 辻井雅也, 平田 仁: 高齢者に認めた Freiberg 病に対して骨軟骨移植手術を施行した 1 例. 臨整外41(11): 1205-1208, 2006
- 4) 峯 博子, 青柳孝彦, 北川範仁, 可徳三博, 鶴田敏幸: 若年者 Freiberg 病に対する自家骨移植術の治療成績. 日本臨床スポーツ医学会誌18(4): 187, 2010

Yuu-ki-za Theatre of Puppet since Edo Era
“Miss Tanaka” (2012.9.26–30) PART I

Original John Romeril.
Dramatized and directed by Tengai Amano.

Translated by Yoshikazu Shimizu

1 The Prologue, the Shore of Broome, [Beach]

(Provisionally) A ship of white paper crosses the front.

The seashore ,♪ Sound of waves.

Light F F F F I, Kazuhiko darkly appear sitting on a rock (We can completely see only Kazuhiko.)

♪ *⟨Live performance⟩ A melody matching the flowing moon and sound of the sea breaking on the shore is played.*

Without a sound, a paper ship which containing a lantern with a dim blue light crosses the front.

Kazuhiko slowly stands, and walks to the beach; when we can see, Kazuhiko handles it.

(the diagram that Kazuhiko's doll controls Kazuhiko's doll) (※A figure cf. Please see the attached sheet.)

The person handling Kazuhiko is Kazuhiko with identical appearance of Kazuhiko.

Kazuhiko is sitting on a rock looking into the distance. We can see only Kazuhiko and Kazuhiko at the time.

After a while, Kazuhiko stands up handling Kazuhiko, and slowly starts to walk to the beach.

♪ *Sound of the big wave with a splash.*

♪ *The sound of the bubble overlaps with sound of “Puku-Puku” (プクプク).*

Kazuhiko slowly look back toward the upper part of the back. (※ Please see the attached sheet figure A.)

To the right of the stage from the left side of the stage (or to the left side of the stage from the right of the stage) the woman in a kimono slowly swims. (※ Please see figure B of attached sheet.)

♪ *Music F·C. Light ~ as if mermaid swims in the air.*

When the lower part of the body of the woman is separated, it becomes the lower half of the body (mermaid) of the fish.

♪ *(Live performance) The music in accord with movement.*

In a few minutes, the other lower half of the body is separated once again, and become the monstrous fish which more like a shark.

The monstrous fish opens its big mouth, and tries to swallow the lower half of the body of the woman, (to bite it).

The upper half of the woman escapes, but after all is swallowed as if it is drawn in to the monstrous fish. (It performed at the other side of the black lawn).

♪ *S E depending on a state.*

The shark which ate it goes away satisfied (the left side of the stage or the right side of the stage).

The empty air spreads above.

(Provisionally) (Kazuhiko cried when it was swallowed).

The rock which Kazuhiko ①② sat down on some time ago begins to move slowly (only to three people and a rock of the right side of the stage, a light shines.)

When a rock moves such as the shell of the tortoise, a hand, foot, a head come out in the order hand, foot, a head from C rock, and crawls for a while, standing up slowly. (※ Figure C of another attached sheet).

The paper rock (shell) falls off after it stands up.

A figure of Tanaka (life-sized) wearing in loincloth (フンドシ) staring at front emerges darkly.

The moon shining like a pearl slowly appears behind.

Tanaka (life-sized) slowly turns around to look up at the moon. (His dragon tattoo emerges from his back.)

♪ *Sounds such as the sound of the wave, the sound of the bubble, the sound of the Bon festival dance from a distance get louder.*

Light, all the lights, and then, finally, moon light. F O.

2 Visitor of Night [Sandy beach]

Light halfway F·F·I light narrowed down to Mott.

Kazuhiko sitting down on a rock (※ Cf. of another attached sheet).

Darkness ♪Overlap with the sound of the wave, We can hear monologue of the Mott.

♪ *Record*

Mott *Record* ... , Western Australia, the northern part Coast (Broome) I knew, over more than 60 years, this whole area continues to supply 80% of the pearl shell of the world by the tale of father and a grandfather long ago. We knew how dangerous the sea is, too.

We knew there had been a 6 meter tide at Southern Exmouth, and an 11 meter at northern King Sound. However, I never knew how big "the tide" was I experienced during only one week after I came over to the Broome for the first time.

Mott looks at the other side (the rear seat) of the sea with binoculars.

♪ "Sound of the airplane of the 1930s" F·I. Mott takes down binoculars and look up at the sky.

♪ Louder. Mott points at an airplane.

Mott: It is a night postal airplane from Perth, ... making for Wyndham, and then to Darwin ... I heard Qantas is the company with a bright future ... But, you doubt it when you got on it.

Mott tries to speak to Kazuhiko.

Mott: it is a good night and ... calm, too; ...

Kazuhiko:

Mott: Good evening ... I'm ... Charles Mott ... at Carnavon Street, Mott of the Anglo-Oriental Pearlshell Company.

♪ (Live performance) C, O Light C C.

Kazuhiko: Mott?

Mott: That's right. Mott.

Kazuhiko: Are you person of the Motts?

Mott: That is so, and Charles Alconquin Ruebin of the Motts. How do you do? ... Are you?

Kazuhiko: Ka - Zu- Hi-Ko.

Mott: What?

Kazuhiko: Tanaka Kazuhiko.

Mott: Tanaka Kazuhiko?

Kazuhiko: Tanaka Kazuhiko.

Mott: ... Oh! I see ... You are Japanese ...

Kazuhiko: Half, ... my father is Japanese.

Mott: Japan? By the way, we opened our stores in London, New York, Delhi, and Hong Kong but ... in Tokyo we didn't do well.

Mott shrugs, and watches the sea with binoculars again.

Kazuhiko: Are you looking for your fleet?

Mott: ... Oh, yes ... Tonight a ship returns.

Kazuhiko: It's there..

Mott turns binoculars to that place of the sea once again.

Kazuhiko: It's bringing a lot of treasure?

Mott: If it doesn't return, we're in trouble.

Kazuhiko: I hope the treasure ship ... won't sink ...

Mott: We are troubled if it sinks.

Kazuhiko: We suffer a total loss, aren't we? We never have insurance in the pearl industry.

Mott: ... Oh! ... Oh!

♪ *The sound of the wave becomes louder. Mott, ♪ Monologue of <Record> overlaps. Light F·C. (to focus on Mott.)*

♪ *(Live performance) overlaps. ♪ A sound of the war in the distance.*

Mott <Record> I talks about that with this young man whom I just met ..., money ... money ... My head is full of feeling about money ... Germany, Poland, Hungary, ... Czechoslovakia ... Now, my relatives have a great experience now in the other side of the world. We could save them if we have money ... No one can understand how much I and they rely on profits which they can make ... However, nobody can do anything, even if we confess these things to him. "Cast pearls before swine" ... Even if I tell the stories of Hitler and the thousand years Reich, there is no meaning at all.

♪ ... *Light returns to the light cause. (Come back.)*

Kazuhiko: What? "Cast pearls before swine"

Mott: What?

Kazuhiko: About me? ... Swine ...

Mott: ...No ... Oh. Well, ... Why? Did you hear it? Now ...

Kazuhiko: I've heard it.

Mott: It's funny, and I've only muttered it in a heart.

Kazuhiko: What? ...Now ... Is it ... a voice of the heart?

Mott: At least, I didn't intend to speak from a mouth.

Kazuhiko: ... I'm confused If mouth won't move; ...

Mott: ... Ah, well ... Surely

Kazuhiko: Is it ...?

Kazuhiko points at Mott's binoculars.

Mott: What?

Kazuhiko: Made in the Czech Republic?

Mott: No, Made in German.

Kazuhiko: Well, is this better?

Kazuhiko takes out the opera glasses. (※ Please see the attached sheet.)

Mott: What? ... Are there the opera glasses?

Kazuhiko: My mother’s ... My father bought them when they got married.

Mott: He paid a large sum, didn’t he?

Kazuhiko: Thousands of dollars ... One set of cigar case and a folding fan. They are all scattered, full of these great pearls. But ...

Kazuhiko → Mott (Opera glasses)

Mott: ... But? ...

Kazuhiko: I only hid this one. My father pawned the others.

Tanaka: ♪ *Record* Totally bad, isn’t it?

Mott: ... Do you know where they put on opera in this neighborhood?

Kazuhiko: If go to Osaka, you can enjoy the opera, He would say so. He let my mother go there.

Tanaka: Let’s go there all three of us.

Kazuhiko: What did you say?

Mott: What?

Mott waves his neck.

Mott: I’ve got similar things from my mother, too.

Mott takes out a revolver. (a handle decollated by pearls) (※ Please see another attached sheet.)

Mott: She would say, “Charles, take precautions in the tropical zone.”

Mott hands it to Kazuhiko.

Kazuhiko: Can I shoot it?

Mott: It isn’t loaded.

Kazuhiko: The handle is decorated by pearls ...

Mott: A pearl shell is ... wonderful, isn’t it?

Kazuhiko: If you die.

Kazuhiko aims it, and returns it.

Mott: .. Is your mother from Broome?

Kazuhiko: Thursday Island. Father won my mother in card game.

Mott: It is a dramatic.

Kazuhiko: However, he has died.

Mott: What?

Kazuhiko: In King Sound, they're dangerous sea.

Mott: Is it a shark?

Tanaka: ♪ *Record* A married couple. (=Me-O-To)

Kazuhiko: I dived with my father, ...

Mott: After all?

Kazuhiko: Vainly.

Mott: Was he a diver?

Kazuhiko: Ah, my father was a legendary diver around there, and had won Number one diver in Broome three seasons years running.

Mott: Then, you are a diver, too.

Kazuhiko: I could never be a diver.

Light C·O·P "white twinkle" C·I ♪ Sa—— or ♪ (Live performance.)

Tanaka: ♪ *Record* A diver is a great job!

Kazuhiko: It makes me shudder.

Tanaka: ♪ *Record* What blasphemy do you say?

Kazuhiko: Refuse does it.

Tanaka: ♪ *Record* The diver is great.

All return (all restore).

Kazuhiko: I could never be a diver.

Mott: Anyway, your father was great. Won't you inherit your father's job?

Kazuhiko: Of course not. I think that, if you look him, you would never be a diver. A diver at 40 looks 70 years old.

Tanaka: ♪ *Record* I want to die.

Kazuhiko: That's troublesome, ... Recently he would only say he wants to return home, and return home. He says he wants to die after he comes back home.

Tanaka: ♪ *Record* I want to die.

Mott: Home country? Japan?

Kazuhiko: Taiji ... Wakayama.

Mott: Wakayama Taiji ...

Tanaka: ♪ *Record* Taiji! !

Kazuhiko: Though I don’t know why he longs for Taiji that much, ... It seems he only lived there to the age of 5.

♪ *C·I. (Live performance?) Light C·C (F·C.)*

P C·I. (white twinkle)

☆ *A rock moves, and Tanaka (doll) comes out from.*

Tanaka (doll): Since recorded history, the best diver is from Taiji!

Kazuhiko: No, my father!

Tanaka (doll): Some one! Give me money!

Kazuhiko: Please sleep!

Tanaka (doll): Say! Give me money!

Kazuhiko: What do you say?

Tanaka (doll): Give me money without saying anything!

Kazuhiko: Don’t be so stingy.

Tanaka (doll): Say! Give me money for returning to Taiji!!

Kazuhiko: Please sleep!!

All return.

Tanaka (doll): I don’t have enough money to go back to Taiji, I need money ... more ... more, ... more ... Mott ...

Tanaka (doll) recognizes Mott.

Tanaka (doll): Oh!! Mott! ... You’re Mr. Mott!!

Mott: Me?

Tanaka (doll): So! Mott! Give me more money, much more. Give me chocolate money.

Kazuhiko: Say! Please stop, my father!

Tanaka (doll): You forced me to work hard for many years.

Mott & Kazuhiko: You are quite uncontrollable!

Tanaka (doll): Take out some money from your empty purse! Mr! Mott (=more)!

Kazuhiko: Dad!! This person is different.

Tanaka (doll): Different? Not different. This fellow ... is Mister, ... Mister Mott.

Mott: Mister Mott, “Mr. Mott” is my father.

Tanaka (doll): What?

Mott: My father died. I am his son. I took office as president of the Anglo-Oriental, the other day.

Tanaka (doll): ... Is that so? Humph ... I’m ...

Tanaka (doll) seems to lose his interest suddenly, and begins to crawl around there.

Tanaka (doll): I borrowed a lugger ship from Old Mister Mott. Thus the guy could manage the pearl shell business ...

Mott: ... Like father, like son.

Tanaka (doll): Do this poor tortoise and I resemble?

Mott: No. My father and I completely made themselves misunderstood by them.

Tanaka (doll): I'll return to Taiji~ ... Kazuhiko.

Mott: You have become like this.

Tanaka (doll)'s hands and feet have been ruined with blood nitrogen.

Mott: ... Tortoise was sent low?

Undecided ♪ (Live performance, music by the following words.)

The real huge moon, strong light out of the hole of the crater (we do not see the real moon) (light of the crater increases.) (※ Cf. of another attached sheet.)

Undecided We prepare the many moon from one moon as we collect light by picture of copy. (※ Cf. of another attached sheet.)

Kazuhiko: The mossback (ロウキ) It is the symptom called the shell of the mossback of old tortoise.

Tanaka (doll): Your joke was severe ... Kazuhiko.

Kazuhiko: I can't walk straight, and ... miserable. ... Hands and feet and head were beaten, by risking our lives, I can make wonderful necklaces of pearls glittering on ladies' chests dressed up in Paris and New York.

Tanaka (doll): ... Go up ... go up ... go up!!

Mott and Kazuhiko: What?

♪ Light B (stage), it is a series of flows all at once.

Tanaka (doll): Moon ...

Mott: The moon is ...

Kazuhiko: Goes up ...

In song or reading aloud, A is man, B is women.

<1>

A: Like pearl.

B: Million grains of pearls.

A: The big moon.

B: It lights up the galley ship.

A: It goes up to Broome.

B: At night of the lapis lazuli.

A B: The big moon like a pearl rises to Broome.

⟨2⟩

A: On a wave.

B: Like illuminations.

A: It waves.

B: It glitters.

A: It glimmers.

B: It glitters.

A B: Button of light which shakes and whispers on an wave.

♪ *(Live performance?) The music continues.*

Mott: What’s this?

Kazuhiko: “Way of the pearl.”

(Provisionally)

With the sea of the flaming red.

With a wave to kick up.

To the hill where a flower blooms.

With eyes dazzling.

Decorate night of the lapis lazuli.

Mott: Does it have a name?

Kazuhiko: It has the two names.

Mott: Does it have two names?

Kazuhiko ... From this place, we call it “the way of the pearl”, and members who go back to the port call it “gold stairs to the moon.”

☆ *(Calling voice, doesn’t get out, to the other side of night.)*

⟨2⟩

A: On a trip, my feeling cools down.

B: It is extending, and getting loose.

A: The way of the light.

B: Seam of the ribbon.

A: It borders the veil of the night.

A B: Ten billions of pearl buttons.

♪ *A light (suicide attack) becomes intense.*

Mott: ... Unbelievable ...

Tanaka (doll) stands up.

Tanaka (doll): Light!

Terrible light and sound , ♪ sound of huge waves ♪ glittering sound.

The next moment. Light in the darkness.

♪ *(Live performance) Music, sound with feeling of strain like carving.*

3 ‹Night and Call at a Port of the Fleet› [Sandy beach ②]

♪ *The sound of the wave. Temporary. (Does live performance continue?)*

Light dazzles by a reflection of the light of wave. (A reflecting light of the water.)

Kazuhiko & Mott look at “the other side of the sea” in front of stage.

Mott: There are 58 lugger ships, 3 schooners are, the others are ships to supply of the water.

Tanaka (doll): Ha-ha ... They came back.

Mott: They are very low.

Kazuhiko: Owing to weight of the shellfish.

Tanaka (doll): Big catch! Big catch!

Mott: Somehow ... Do ships seem to sink? ... Oops! ... Ships do strange run.

Tanaka (doll): Ships can show that off on purpose.

Mott: Stop!! Ah! Wow!! Sinking!!

Kazuhiko: Don't act rashly.

Mott: Say! Please stop ... Sinking.

Tanaka (doll): Impossible! It doesn't stop; it doesn't.

Mott: It is too violent.

Tanaka (doll): Romance of the sailor!

Kazuhiko: Energetic!

Mott: Who compensates it? If that sinks, the company sinks.

Kazuhiko: Those fellows are acting by agreement with unreasonable action.

Mott: Ooh!

♪ *Sound of a huge wave ♪ (live performance) of a huge wave is also intense. Light. Quick F·C. (only*

back).

In front of the huge moon through a thin silk curtain of the back of the stage the silhouette of two ships comes up from both wings of the stage (※Please look at another attached sheet).

Tanaka (doll): It’s here!!

Light F·O ♪ + (live performance) intensely.

Temporary (Cyclone A description of “Bob of the squint” may be.)

4 <The Night Landing> [Sandy Beach]

Undecided-♪ (Live performance)

☆ (Two musical instruments are divided into Sakamoto and Hanif, and, in counterpoint, lines are emphasized.)

+

Undecided -♪ pile on Sa—

P white twinkle.

Darkness. Chasing a voice. Light. F·I.

♪ *The sound of the wave remain ♪ (live performance, undecided).*

Sakamoto and Hanif face each other and curse each other. (♪ (Record, there is it’s possibility))

Hanif: You! You are you. This bastard [swine]!

Sakamoto: This bastard [swine] is you! This bastard [swine]!

Hanif: This bastard [swine] Do you certainly do it?

Sakamoto: Do you certainly try? You! This bastard [swine]!

Hanif: This bastard [swine] is you, isn’t it!

Sakamoto: You are this bastard [swine] aren’t you!

Hanif: This bastard [swine] is you!

♪ *Pile on. (Record.) (Provisionally.)*

Sakamoto: You are ..., aren’t you! You!

Hanif: You are you.

Sakamoto: Who are you?

◎←*You should begin here.*

Hanif: You, you are.

Sakamoto: You are you.

Hanif: You, you are you.★ This bastard [swine].

Sakamoto: This bastard [swine] is you. This bastard [swine]!!

Hanif: This bastard [swine] is you!! Do you surely try!!

Sakamoto: Do you surely try!! You! This bastard [swine]!

Hanif: This bastard [swine] is you!

Sakamoto: You are, aren't you? This bastard [swine].

Hanif: This bastard [swine] is you!

Sakamoto: You are, aren't you? You.

Hanif: You are you.

Sakamoto: Who are you?

Hanif: You, you are ...

Sakamoto: You are, you.

Light C・C ♪ Sa— C・O.

Undecided-(♪ live performance C・C).

Hanif: You, you are you. This bastard [swine]. (To ★ loop.)

Sakamoto: You are, aren't you? A dwarf! You dared to cross my ship's bow!

Hanif: How dare you blaspheme? Didn't you intentionally blaspheme!!

Sakamoto: Do you long for your elder sister's bust! A dwarf!

Hanif: A dwarf is you, isn't it?

The sailor "Laughter"

Undecided (About 4~6 sailors who applaud hold back).

The more, the better. As Sakamoto is pressing the crotch.

Sakamoto: Goddamn! (ガッテム!)

Hanif: Alopecia!

Sakamoto: Wet the bed!

Hanif: Indecent rascal. (タレカキヤロウ)

Sakamoto: Masturbation swine!

Hanif: A guy comes off pubic hair!

Sakamoto: Rotten balls guy! (クサレキンタマヤロウ!)

Hanife: A guy!! How dare you try?

Sakamoto: How dare you try? You! You bastard [swine]!

♪ (Record) pile up.

Hanif: You bastard [swine] is you, aren't you?

Sakamoto: You! You bastard [swine].

Hanif: You bastard [swine] is you.

Light quick F·C. Sakamoto, Hanif, from here, music only plays ♪ <Record>.

♪ *Lower (+ S—?) + P white.*

(The conversation between Sakamoto & Hanif go on by ♪ <Record>.)

Mott: Da——!! I never understand what they say?

Tanaka: We quarrel. Quarrel.

Mott: I understand your quarrel. However, I can't understand your words.

Kazuhiko: Can't Mott only understand English?

Mott: German, French, Slovak, Hungarian, Polish, Hebrew.

Tanaka (doll): Every language is the same, isn't it?

Mott: I'll study many languages from now.

Kazuhiko: You can't live on Broome, when you don't know the various languages.

Mott: I understood very well. Well, do they, on earth, quarrel over everything for some time?

Tanaka (doll): They quarrel with each other.

Kazuhiko: With each other, they insisted one's own ship has been interfered with by the other's..

Mott: Is that all?

Kazuhiko: That is all.

Mott: ... There will not be the thing only as for it.

♪ *Light, P All comeback. Sakamoto and Hanif open the distance of two people quickly.*

Hanif: There is no help for it! Let's cheer up your hurt pride, won't you?

Take out a dagger. (How to take out, how to hold.)

Hanif: By this one; Mr. Sakamoto.

Mott: Sakamoto? Are you Japanese?

Mott points Sakamoto.

Sakamoto: I am tickled (at the idea), Hanif!

He pulls up a fishing rod of iron sticking. Mott points Hanif.

Mott: Hanif? ... Philippine?

Kazuhiko: He is Malay.

While Sakamoto and Hanif are glaring at each other, they turn slowly. ♪ (Live performance) (♪ Based on a state.)

Sakamoto: You always eat only pork, guys biting pig!

Mott: What do you say?

Kazuhiko: You are a favorite fellow to eat pork (pig bite, pig gourmet).

Mott: (Oh! Pork eater!)

Hanif: You always eat only rice; you're feces fellow eating rice!

Mott: What is a thing of now?

Kazuhiko: You are a shit human being liking rice very much! (A shit bag eating rice.)

Mott: (Oh! Rice muncher.. take a shit man.)

Sakamoto: The guys licking pig's buttocks!

Kazuhiko: Man who licks the buttocks of the pig with slurp-slurp. (Man licking buttocks of pig.)

Mott: (Pig arse Lickker!)

Hanif: The machine which farts from soybeans!!

Kazuhiko: The machine which farts when you overeat soybean.

Sakamoto: The guys eating many meats and shitting.

"I don't understand it well for some reason."

Kazuhiko: As you overeat the meat, you couldn't stop the shit.

Mott: I couldn't understand anything at all.

Sakamoto: Say! Hey! Malay, a small (little figure) pearl, if you are getting little by little (compactly), are you glad?

Hanif: A thief! Japanese!! You are burglar, a pirate!!

Sakamoto: Don't complain!

Hanif: It's all take and no give. Get it as much as you can, you have neglected since.

Sakamoto: Don't make us laugh!

Hanif: The shameless Japanese damages the sea. The tender Malay looks after the sea.

Sakamoto: Malay had better bring up in the mud snails in a ditch.

Hanif: How dare you! You bastard [swine].

Sakamoto: You bastard [swine] is you. How dare you try?

Hanif: You bastard [swine], How dare you try?

Sakamoto: How dare you try? You ... You bastard [swine].

♪ *Ka—n* (=sound of bell in the ringside.)

Light quick F·C P F·I (white).

Pile up♪ <Record>.

Undecided♪ (live performance) unite in the state.

Hanif: You bastard [swine] is you.

Sakamoto: You are you bastard [swine].

(Loop.)

Sakamoto and Hanif, set in tune with words and a live sound, the fighting scene of a bluff included and martial arts of Malaysia and Japan begins again, and continues.

Sailors bait “Fight, fight! Go, go! Now, Let’s go! Do it! Sakamoto! Go! Hanif”

And so on, they applaud. Tanaka covers with the laughter.

Repeat it.

Mott: Ah ... it began again!

Kazuhiko: Broome ... This is.

Mott: This is ... Broome ...

Tanaka (doll): Let’s go! Hanif, Mohamed, Puto, Rodrigues, Da. Costa!

Mott: ... Ah ... Stop! ... Calm down ... Stop! ...

Let it match in tune♪ loudly.

There are a few lights; → P only.

Mott: Stop! Here you are. Business card. Business card.

Kazuhiko: It is not the business card.

Mott notices it, puts a pistol away, and takes the business card out, raises it.

Mott: You two have to stop ... Stop ... Stop!!

Mott enters with a business card, flying business card between Sakamoto and Hanif.

Light P ♪ (Stop rising) come back. Everybody stops. Everybody surrounds Mott.

Mott: Calm down!

Sakamoto, Hanif: What are you doing?

Mott: Here you are! a business card.

Kazuhiko: Business card?

Everybody lines up and looks at it; stirring.

Everybody: It is English, English? It is English, English.

Kazuhiko: No-one can read English. Shall I translate it?

Mott: I ask you so.

Kazuhiko takes the business card and read it aloud.

Kazuhiko: Charles, Alconquin, Rubin, Mott, ... Anglo-Oriental Pearl Company, a business established

1898, Pearl shell buyer.

Mott: Yes. I'm a pearl shell buyer ... grandfather began and father inherited and now ...

Everybody is again stirring.

Everybody: It is English, English? It is English, English.

Kazuhiko: Can I translate it?

Mott: Should you translate it?

Kazuhiko: This fellow is your leader.

Everybody says severally "Oh— ..."

Mott points at himself.

Mott: ... Am I the leader?

Kazuhiko: Yes. You are the leader.

While Mott is pointing at himself.

Mott: The leader. The leader ... Eh ...

Mott begins to speak in a strange accent, gestures or making gestures by hand.

(So-called Japanese white)

Mott: U-wa-ta-shi-wa-a. (=うわた アシイ は ア...) (=I)

Kazuhiko: Oi-do-n-wa. (=おいどんは) (=I)

Mott: Chi-chi-ka-ra. (=from my father)

Kazuhiko: O-to-tsan-ka-ra. (from father; おとつあんから)

Mott: Chi-chi-u-wa, So-fu-ku-wa-a-ra-a. (=father is from grand father; チーチー うわあ, ソーフ くわあ
あ)

Kazuhiko: To-ttsu-an-wa-ji-ji-ka-ra. (=father is from grand father: とつあんは ジジイから)

Mott: Ku-u-i-ii-te-i-ru-u. (=succeeds; くういいいてえいるウ...)

Kazuhiko: Ki-i-te-o-man-nen. (=I understand it; きいておまんねん)

Mott watches Kazuhiko.

Mott: Could you understand my Japanese?

Kazuhiko: Roughly, I could.

Mott: Ku-o-no-ma-chi-o-ru-u-e-ki-i-shi-i-wo. (This town's history; くおのまアチイオるうえきイしいを)

Kazuhiko: ... It is ... in the history of this town.

On the way, Mott stops repeating it. While Mott is walking slowly, plausible. Everybody begins a quarrel on the way.

Temporary + ♪ <Record>

Mott: Su-u-en-kyu-hyaku-nu-anu-a-ne-e-n. (=nineteen hundred seven; すえんきゅうひやくぬあぬあねえん)

They begin a tiff halfway.

Provisionally ♪ ‹Record›

Kazuhiko: 1907.

Mott: Su-u-en-kyu-hyaku-ju-yo-ne-n. (=nineteen hundred fourteen; すえんきゅうひやくじゅうよねん)

Kazuhiko: 1914.

Mott: Su-u-en-kyu-hyaku-ni-ju-ne-n. (=nineteen hundred twenty; すえんきゅうひやくにじゅうねん)

(At the same time)

Kazuhiko: 1920.

Words of Mott and Kazuhiko synchronize a little by little.

(The accent of Mott gradually becomes common.)

Set in it, light P F·C. ♪ (Temporary Sa—) Temporary (live performance)

Mott: Ku-o-re-ra-no-toshi-nii-oku-o-tta-jinsyu-bo-do-ha (Race riot that happened these years; (くおれらの年にイ起くおこった人種暴動は)

(At the same time.)

Kazuhiko: The race riot that happened to these ages.

Everybody begins to rustle.

Mott, Kazuhiko: Hasn't the history taught us anything? The wise human learns from history. A fool repeats it. The race riot easily begins, but it is very difficult to put it down. Neither “strike while the iron is hot”, nor “A journey of a thousand miles begins with a single step.” Eh—.

Kazuhiko: Gather ye rosebuds while ye may.

Mott: That's right!

Mott, as it is noisy.

In this neighborhood ♪ ‹Record› + (Live performance)+ P + various by light

Mott: What's the matter with you? ... What do they say?

Kazuhiko: May I translate it?

Mott: Should you ask to do it?

Sakamoto: *(At the same time Kazuhiko.)* In 1937! Guys of Koepanger start to lynch all the Japanese who were caught.

Hanif: They didn't start!

Sakamoto: They began to!!!

Hanif: (*At the same time Kazuhiko.*) You Japanese guy didn't almost stay, did they? For the cyclone!!

Pattern same as 4-10.

Tanaka (doll): Oh! That was a very big storm!! Mr. Mott!!

Hanif: With tuck up in hip, you cowards, Ja—pan ran away.

Sakamoto: What did you say?

Hanif: “What did you say?” is what?

Sakamoto: “What did you say?” is what is “What did you say?”

Hanif: What's the matter with “What did you say?” This rascal!!

Sakamoto: This rascal is you! “This rascal.”

Hanif: “This rascal” ... Did you fight?

Sakamoto: “Did you fight?” ... You ... “This rascal.”

♪ *Ka—n.*

Hanif: “This rascal” is you, isn't it?

Sakamoto: “You” are “This rascal,” aren't you?

Loop.

Mott: A-A-A-A?... Once more again!

♪ *Record Lower P Light Quick F·C.*

Mott takes out a pistol, and raises it.

Mott: Do you never stop?

Kazuhiko: May you take out such a thing?

Mott: Eh?

Mott notices unconsciously taking out the pistol.

Mott: Ah!

Mott notices sailors making noise.

A sailor: Hey! The gun!

Everybody: (*Each says in a big voice*) Gun!?!?

Light ♪ *P (live performance) return. Everybody stares at Mott and the pistol. We use even the next.*

Mott: Thi ... This is a joke. Ha-ha ... toy, it isn't loaded either. Here you are!

♪ *A barn and big shot. Everybody jumps back.*

Mott: ... This is ... some kind of mistake.

Light F·O P (image undecided)F·I ♪ *Sa— F·I.*

Everybody severally is + ♪ <Record> [Gun!]

Everybody: + ♪ <Record> The gun. The gun! The gun! The gun! The gun! The gun!

♪ *Pile up heart rate.*

When they have just gotten excited.

Kazuhiko: Please listen to me, all of you.

All come back.

Kazuhiko: This person is stupid!

Everybody severally murmurs.

Everybody: Fool? A fool! A fool or A fool? A fool! A fool? + ♪ <Record.>

Kazuhiko: Defocus President of slight foolish.

Everybody ~In the same way, severally murmurs + ♪ <Record.>

Mott: ... What do you say everybody?

Kazuhiko: I'll try to solve the misunderstanding of you ...

Kazuhiko turns round to face everybody.

Kazuhiko: This fool, ...

Murmur of everybody stops.

Kazuhiko As he just came over to this Broome (Beull moon), he doesn't know the local style or method.

It takes time until he understands it, and, therefore, in the present place, I ask you to overlook him. He looks like a good guy at bottom ... Though he is a foolish, ...

Severally murmurs + ♪ <Record.>

Everybody: A fool? A fool! Is he a fool? He is a fool or this fellow is a fool. A fool, fool.

Kazuhiko: Anyway, you may call him General fool. We will get along with him peacefully to the utmost.

Everybody points at Mott severally.

Everybody: General fool General fool General fool + ♪ <Record> murmurs.

Mott: What? What does he say? Fool Gene (ral)? ...

Kazuhiko: General fool. That's nickname, yours, ... it just was selected.

Mott: Nickname? ... I'm glad ... What did you say?

Kazuhiko: General fool.

Everybody points to Mott. (♪ English version's preparation)

↑ ♪ *Temporary* “I want to be with you forever” “the love red rose”

... ~Introduction~.

Everybody: General stupid!

Mott: General stupid ... very well, very good sound ... Thank you.

Kazuhiko: Say! General fool!

Mott: What's that?

Kazuhiko: Even if we think that they are visible, we don't always understand the true meaning immediately.

Mott: Ah ...

Kazuhiko: A while ago, though the sea is very rough, and dangerous, as these guys show a funny running off; when I think what they do.

Mott: ... Ah, ... I thought like that.

Kazuhiko: When I saw Hanif and Sakamoto having a quarrel incidentally, and I may think "a race riot begins.

Mott: Ah ...

Kazuhiko: It is irrelevant.

Mott: Is it irrelevant?

Tanaka (doll): Absurd and big fool General.

Mott: No. It is.

Sakamoto: (*As he interrupts him*) Big fool General would think that I make a scapegoat of this fellow, Hanif Mohamed Putu Rodrigues Da Costa, and manage as if I will put off even the fire of the candle. This big fool General! Ha-ha-ha!

Sakamoto knocks on the back of Tanaka.

Hanif: The big fool General would think that I knock down Sakamoto's heart, and tear it up. Ha-ha-ha. *Hanif beats the back of Tanaka. The group of three put their arms around each other's shoulders.*

Tanaka, Sakamoto, Hanif: Ha-ha-ha- ha-ha-ha.

Kazuhiko: Men connected in a mysterious bond each other. This is Broome.

Hanif: We seem to often learn many things from this.

Suddenly, sailors including Sakamoto and Hanif fire a volley toward the sky.

♪ *Ba-ba-ba-ba-ba-ba—n!!*

Mott: Wow!!

Mott falls on his buttocks in surprise. They all leave, laughing.

Sailor: See you again! A fool general! ~Good bye~

Mott: ... Did they have a thing or that? ... That party ...

Tanaka (doll): That party greatly seems to have been pleased with you ...

Mott stands up, and look at a ship of the back or something.

Mott: They neglected a ship properly in that way, and went somewhere.

Light F·F·F·C ~ begins in~ ♪ A sound of the pleasure, sound of the town in the distance.

Undecided <Paper for folding ←what to do about it.>

Kazuhiko: The light of the town of Broome is inviting.

Tanaka (doll): They have been at sea for four months.

Tanaka enviously looks at that direction where sailors left.

Mott: Neglecting a load ... and pearl shell ... Nobody watches ...

Tanaka (doll): ... Can someone tell ...?

Kazuhiko: The last pearl thief was discovered in the gutter of Dan Beer Creek in the Broome. He had been killed with an ox cut into the skull, ... had been ... with his mouth stuffed with his testicles.

Mott: Don't you go with friends?

Kazuhiko: I'll go, if a circus came.

Lights narrowed down to three person♪ A little sounds of the wave.

Kazuhiko squats down and takes out paper, and begins to fold it up into a figure to attract attention. Mott looks after it.

Mott: ... Paper? ...

Kazuhiko: Though you have a fleet. ... I have this one.

Mott: Is it a ship?

Kazuhiko: Yes, it's the ship for us to float down the river on August 15.

Mott: August 15?

Tanaka (doll): That is, O-Bon, The Bon Festival.

Mott: Bonn? Bonn with Poppelsdorfer Schloss, Münster Cathedral, on the Rhine?

Kazuhiko: It is not Bonn in Germany.

Tanaka (doll): A festival that is held in summer in Japan.

Kazuhiko: ... We meet the spirits of the dead, and see them off again ...

Mott: Festival ...

♪ *<Music> (+ Bon festival dance) + (live performance) Light F·C.*

(Also from this neighborhood in P.)

Undecided +

(“The Japanese magic lantern” using the black lawn.)

(A lantern, absentminded light blue light) (Flower) and so on.

Kazuhiko: Light blue lanterns burn to all the graves of the Japanese graveyard in the evening.

In the back, in faint (dim) light.

Tanaka (=doll): All Japanese communities meet.

Tanaka continues pose such as the Bon festival dance on ♪.

Kazuhiko: Women of the Shiba street wear clean kimonos like geisha, and lead a song and the dance.

They meet the dead souls (keeping time with foot like a totter).

Tanaka (doll): They finally float a paper ship.

Kazuhiko: They pile up rice and a fish, fruit and liquor, the articles for voyages, and decorate it with flower one by one. They attach to a pilot a small lantern, and send it back to the country of the dead.

Tanaka (doll): At midnight on August 15.

Mott: It would be already November (now).

Tanaka (doll): Only this fellow does not mind day and night, year in and year out, is holding a Bon festival ...

Kazuhiko: Some people say that it is good once a year to remember the dead ...

Mott: You are every day.

Kazuhiko: The soul of ancestors can be introduced to the next world well.

While, Tanaka is leaving backward during dancing.

Tanaka (doll): I will go to the next world, for a moment, too.

Kazuhiko: Don't lie to me. Will you gamble again?

Mott: Soul of ancestor is your mother.

All return ♪ sound of wave.

Kazuhiko stands up.

Kazuhiko: This year will also be hot, won't it?

Mott: November also is the end, isn't it? The summer is gradually coming ..., I will also go to the next world (for a while). Thank you, today.

Kazuhiko: ... Ah ...

Mott: Good evening.

To the direction where Tanaka left.

Kazuhiko: ... Good evening ... I hope you will come back to this world ...

♪ (♪ + Cicada of Japan) ~〈Bon festival dance〉 growing loudly. Light quick F·C.

◎ Undecided; "Innumerable lanterns darkly appear in the distance."

By a clue ♪ Totally intensely completely different music (temporary; opening music of the light of the street by Chaplin).

Light (The Japanese magic lantern) C·O.

P C·I. (A crack FILM.)

5 Night Life of Broome〉 [The town A] ... [Town B in the First Depths]

Undecided (town of Broome) (※Cf. figure of attached sheet).

P 〈Collage of many entertainment district.〉

P in the crack film, the set change by a curtain and the panel

Sakamoto and Hanif (doll) hold each other in front of some shop and gather strength [momentum] ♪ seems to come out from a record player:

Sakamoto (doll): My friend!

Hanif (doll): I won't buy! (カワン!)

Sakamoto (doll): I won't buy!

Hanif (doll): My friend!!

Two persons enter the shop.

As if Tanaka (doll), can be tempted by the noisy sound from the shop from the left side of the stage, ... opens the door:

♪ *The noise leaks from the inside.*

Tanaka (doll) enters. The door closes.

Mott comes over in the same way, from the left side of the stage and looks at the shop.

Mott: Somehow.... Though they seem to be pleasant, I'm not interesting in entering, ...

Mott wanders in front of the shop.

Mott: ... Confound it! ... Let's enter the shop!

♪ *Laughter, lovely voice. And Mott opens a door. Light C·O P C·I (?) ♪ Greatly. B Change. During the blackout ♪ 〈Record〉.*

Sakamoto, Hanif: ♪ 〈Record〉 Say! A general stupid!

Tanaka: ♪ 〈Record〉 A fool General, Let's go!~

Sakamoto, Hanif: 〈Record〉 Come in, come in~

Tanaka: ♪ 〈Record〉 ... There are many charming women~

Sakamoto: ♪ 〈Record〉 Drink, and drink.

Hanif: ♪ 〈Record〉 Sing and sing.

Tanaka: ♪ 〈Record〉 Dance and dance~

Immediately, in the shop Light quick F·I.

♪ Noise + tango-tone + ♪ ragtime.

In dense smoke, A view of the doubtful bar.

Sakamoto and Hanif, let loud women serve drinks on the sofa on both sides and.

Unsteadily Tanaka with a bottle in one hand holding Mott's shoulder. (※ Figure) Cf. of another attached sheet.

Light, squeeze it or open it, replying on time.

Tanaka (doll): You feel a good mood here, don't you?

A man ♪ 〈Record〉 You rascal! Do you fight?! ♪ Clash (crackling sound of the bottle) You!

Mott: Eh!— By the way, ...

Mott looks around. Tanaka unconsciously nestles up to Mott.

Tanaka (doll): Say! Hey! Hi! Hello there! Pretty Mott.

Hanif (doll): He can't stand up, that man!

Tanaka (doll): You won't intend pay for travel expenses to Taiji, to the old diver of an old person who worked badly exhaustively, say, will you treat me to liquor or something?

Mott is thinking.

Mott: Umm~~~~~...

Tanaka (doll): I don't care about another thing. Another thing.

Mott: Another thing?

Tanaka (doll): That's the thing of the terribly good feeling.

Mott: What is it?

Tanaka (doll): Will you try it? Opium.

Mott: I haven't have opium.

Tanaka (doll): If you haven't have opium, you have it [much] more.

While they don't notice it, both of them smoke opium.

Tanaka ♪ 〈Record〉: We don't understand such a good thing, if we don't smoke that.

Tanaka (doll): I feel the terrible—the thing of the great feeling.

♪ *bigger and bigger (echo); (loop).*

Tanaka ♪ *Record* Opium make us feel good.

Mott: I haven’t had opium.

Tanaka (doll): If you haven’t had opium, you try to have it now.

Tanaka ♪ *Record*: If you hadn’t smoked it, it would be wrong. If you had, you would feel it such a good thing.

P F·O ♪ loudly.

(♪ *Collage of “I feel the terrible— great feeling” is set.*) (※ *Cf. of another attached sheet.*)

Tanaka (doll): I feel the terrible~ great feeling.

Mott: I feel the terrible~ great feeling, don’t I?

Mott: ♪ *Record* Say! I feel the terrible~ great feeling, don’t I?

Mott: Say! I feel the terrible~ great feeling, don’t I?

Mott: ♪ *Record* Say! I feel the terrible~ thing of the great feeling, don’t I?

Light quick F·I (Lower light) ♪ C·C (Lower) P “Huge roulette which turn around” When a light is illuminated, probably there is casino, backward, life-sized Sakamoto, Hanif, and Tanaka (Probably Tanaka may be a doll) make a bet. (There is a roulette wheel on the other side of the seat).

Mott: Say! ... Yu are frightfully huge, aren’t you?

Hanif: (life-sized): You are very small, aren’t you?

Mott: Tanaka also is very small, isn’t he?

Tanaka (undecided): by the roots,I was with stolen money. (ねこそぎいかれてもうた)

Sakamoto (life-sized): As Tanaka suffers more losses than wins, he shrink-dwindles. (負けが込んでちっちゃーなっとなのや)

Hanif: (life-sized): You are dangerous. (やばいぜおっさん)

Tanaka (undecided): 3, and the next 3! It must be!

Tanaka takes out a roll of bills from his chest, and piles it up.

Sakamoto, Hanif (life-sized): You absolutely win it!

Tanaka (undecided): All right. All right. (よっしゃ、よっしゃ) Let me alone to do that!

Tanaka pats the roll of bills.

Mott: Say! Where is ... here?

Sakamoto (life-sized): Casino, casino.

Mott: Casino?

Hanif (life-sized): Gambling house. Gambling place!

♪ *Live performance* Enter (provisionally).

♪ *C·C* (Noise, casino).

Light C·C P C·I. A place changes suddenly.

Sakamoto (life-sized): Bu-s- de-a-d! (=Basted) (The bankruptcy).

Tanaka (undecided): Do-bon! (=page one, cards).

Hanif (life-sized): Do-bon, again.

Sakamoto (life-sized): Again, old chap.

Tanaka (undecided): 3, and the next must be 3! 3 will come! Hurry! Give me it!

Tanaka takes out a roll of bills from his breast and piles it up.

Sakamoto, Hanif (life-sized): If you insist (on it). (しょうがねエなあ)

Light ♪ *C·C P* ♪ *becomes big and become small (by lines). The light changes by lines, too.*

Mott: Say! ... Lots of money ... Are you all right?

Tanaka (undecided): I don't add the line to money!

Mott: But is it not your money?

Tanaka (undecided): Whether this is true or not, Money moves from pocket to pocket. It is natural that a young diver takes care of the old one.

Mott: I see.

Mott comes back.

Sakamoto, Hanif (life-sized): Do-bon!

Tanaka (undecided): 4 came.

Sakamoto (life-sized): I rely on you.

Tanaka (undecided): Give me money! Hurry!!

Hanif (life-sized): It is not good.

Tanaka (undecided): Give me money! Quick! And take out money!

Light ♪ *C·C P. While Sakamoto and Hanif produce a roll of bills from the breast.*

Sakamoto (life-sized): You mustn't gamble, if you have no money ... Never ...

Hanif (life-sized): Any more ... We aren't a charity fund for old divers. We are ...

Tanaka (doll, life-sized): We'll have a chance, we'll have a chance by all means. We absolutely have ...

Just you wait! Certainly come! Absolutely come! Just you wait! Just you wait!

Just you wait! ... Come ... Come ... Come ...

Halfway of lines, Tanaka of human being just talks. Light squeezed Tanaka. ♪ grows big.

P sets “turn around” and covers with collage of the roulette. ♪ Applause, a shout of joy, the noise Light F·O.

Tanaka: ♪ *Record* Round and round, round and round, round and round, round and round.

Tanaka (undecided): Turn around, and turn around, and turn around, and turn around!

♪ *Tanaka* ♪ *Record* “Turn around round and round, and turn around round and round” covers.

Mott: Ha-ha-ha ... Somewhat ... Turn around round and round ... Ah! An eye turns around. An eye turns around!

The darkness spreads out ♪ continues.

Tanaka (undecided): Turn around, and turn around turn around, and turn around.

P various material which turn around (the same positive is broken like jigsaw puzzle, and begins to turn.)

Tanaka darkly appears in the empty air in the back upwards, and looks at the earth.

Tanaka (undecided): Turn around ... Ha-ha-ha ... Turn around, Turn around ... The earth turns around.

...

Light F·O ♪ Sound of wave and C·F·C.

6 <Work on Beach> [Sandy Beach ④]

Temporary <Sakamoto and Hanif> which cross the back while singing.

In the darkness Voice ♪ Sound of wave.

Mott: You have still stayed ...

Light F·I In the same place as ④

Kazuhiko sitting ... Mott stands in the back~ somewhat unsteady on his feet [legs].

Kazuhiko: ... Ah ...

Mott: ... Your ship? ...

Kazuhiko: You can see in the other side, ...

Mott: I can't see ..., I'm too dizzy ...

Mott sit [squat] down beside Kazuhiko with a thud. (※A figure). Cf. of another attached sheet Black pearl appears of ①.

Tanaka (doll) gradually appear in the lower side of the pearl like a while ago.

(※A figure). Cf. of another attached sheet. A shark is veiled over Tanaka (doll), breathes in a pearl.

The thin air becomes red, becomes the underworld.

Kazuhiko: Are you under the influence of drink?

Mott: Considerably ... It is a memorable first night of Broome for me.

Kazuhiko: Liquor, ... Gambling, and ... Woman?

Mott: Without woman ... Say! Did your father know that you smoke opium?

Kazuhiko: ... Well ...,

Mott: But he didn't smoke for pleasure.

Kazuhiko: ... Probably, because it is hard to stand

... When I was seven, my mother died. My father kneeled on the ground, and asked her for the permission. He smoked ... Mother was strong.... She raised pearl shells with father. But father also didn't even think there were shark in the sea.

In the upper rear, there is a series of movement B.

Mott: If, now, your wish comes true, what do you expect?

Kazuhiko: the mother ... doesn't come home, and run away ... from here.

Mott: Where?

Kazuhiko: Japan.. Then, my father can die happily ...

Mott: After that? ...

Kazuhiko: Now, if I compare anything with anything else, anything is better than the other one.

Mott: ... What (did you say)? ... just at the right moment.

Mott stood unsteadily.

Mott: I'll hire you; ... How do you like that idea?

Kazuhiko: What? Suddenly ...

Mott: I need help ... and realized it today.

Kazuhiko: Should I work at sea?

Mott: No. On the land ... you know that very well ..., I ask you to work as role as agent, such as interpreter.

Kazuhiko: I can be an interpreter.

Mott: That's good ... You would be good. Surely, ... I wish you could come to the office tomorrow morning. ... Processing plant ... Do you understand that?

Kazuhiko: Ah.

Suddenly turning towards the sea.

Mott: I will live. I can't die! (I break Kazuhiko: Waah!) Ha-ha ... Then ...

Kazuhiko: Person without notice.

Kazuhiko is suddenly falls down flat.

Mott: Ha-ha ... You might have stepped banana skin or something.

Kazuhiko: There should be a sandy beach here.

Kazuhiko is lying down.

Mott: Ha-ha ... You have to sober up ...

♪ *Thunder. Light F·C. Tanaka (doll) is slithering in the rear.*

♪ *The sound of rain. Faint radio news report of war in Europe among sound of rain.*

Kazuhiko slowly stands up, and looks up at the sky. Lightening, we see Kazuhiko emerge.

Kazuhiko: ... Somewhat ... Some ...

Light F·O.

⟨Record⟩ *Somehow.*

I am sad.

Somewhat.

I am sad.

♪ *Sound of heavy rain is, and the sound of the radio becomes loud.*

♪ *F·I Sound of the processing plant. Gradually C·F.*

During the blackout B Change.

7 ⟨One Day of Processing Plant⟩ [Factory ①]

♪ *Processing plant (such as a machine sound, the sounds divided by the pearl shell MIX) Light F·I. (In a voice of Kazuhiko).*

Processing plant, Employees (sailors) work cracking open shell fish in the processing plant, backward.

Mott and Kazuhiko appear while talking aloud from the left side of the stage. Mott seems to have hangover.

Kazuhiko: Bags of the pearl shell, are carried by a narrow-gauge rail along Streeter Jetty. There are plenty of shellfish to process. They sorted out by every lugger ship which unloaded it (lines of ① break off).

Mott with three people (provisionally) salutes a craftsman who cleans shellfish by axes.

① Welcome to Broome, Mr. Mott.

Mott: Good morning.

② Welcome to Broome, Mr. Mott.

Mott: Thank you.

③ Welcome to Broome, Mr. (Mott) ...

Mott: All of you, please call me “a stupid admiral.”

① ②③ “a stupid admiral”?

Mott: Even “a greater stupid admiral” is all right.

① ②③ Welcome to Broome a stupid admiral.

Mott: Ha-ha ... I ask for your continued support.

Kazuhiko: Say! Are you listening properly?

Mott: ... Ah ...

Kazuhiko: We wash the shellfish, take off the slippery parts of the shell, classify them another factory, weigh it, pack it, distribute it, and so it's ready for export.

Mott: ... Hmm ...

Kazuhiko: Hasn't father shown you?

Mott: I am a pearl expert, not shells, but pearl, ... that is, the main body of the pearl.

Kazuhiko: Oh ...

Mott: ... I have a headache.

Kazuhiko: You drank lots of alcohol yesterday didn't you? Anything?

Kazuhiko: ... Ah—a ...

Mott: Ah—i-a painful (あーいあたい), ... My head is throbbing. Painful. ... Painful.

And, Sakamoto comes in from the left side of the stage (?).

Sakamoto: Stay there! Stay there! (いたいたた)!!

Kazuhiko: Are you Sakamoto?

Sakamoto approaches to Kazuhiko and makes Kazuhiko come near.

Sakamoto: Hey! Kazuhiko!

Light C·O P (suna-ara; Sand storm; スナアラ) C·I ♪ Sa— C·C.

During quick five beats, Sakamoto (doll), a gesture hand gesture. Sailors in the back stop, work, and pay attention.

Come back.

Sakamoto: Damn! Damn it! (ナンテコッタ!!)

Kazuhiko: Ye-es!! (え、ええ～)

Sakamoto: Were you surprised?

Immediately, Hanif rushes in from the left side of the stage.

Hanif: Stay there! Stay there! (いたいた)!!

Kazuhiko: Hanif!?

Hanif: Hey! Kazuhiko!

*Light C·O P (suna-ara; Sand storm; スナアラ) C·I ♪ Sa—C·C During quick five beats, Hanif, gestures.
Come back.*

Hanif: Damn! Damn it!

Kazuhiko: Unbelievable!

Hanif, Sakamoto: Damn! Damn it!

Kazuhiko: Damn! Damn it!!

Mott: What happen?

Kazuhiko edges up to Mott~

Kazuhiko: Did you stay?! Did you stay there?! Why didn't you stop!

Mott: What do you mean?

Kazuhiko: I don't know “what do you mean?” Anyway, as father lost a lot of great money gamble last night, he borrowed lots of money from this fellow.

Mott: Ah ... somewhat ... such a thing ...

Kazuhiko: He wished that he had done it without borrowing lots of money after that, and dared to gamble with these two people.

Sakamoto says to Hanif.

Kazuhiko: ♪ 〈Record〉 Of all people.

Kazuhiko: He bets “work for nothing for three years” of me.

Mott: What is “work for nothing for three years”? (さんねんただぼたらきって)

Kazuhiko: Disguised slave (ドレイだよ). A slave!

Mott: Was he defeated?

Kazuhiko: If he had won, I wouldn't have shouted so a loud.

Light C·O P (white blinking) ♪ Sa—C·C.

Mott + Kazuhiko: ♪ 〈Record〉 I'll pay temporarily somehow or other. How much? How much did you borrow? How much can I pay?

All come back (♪ Stop Rising. アゲドメ)

Kazuhiko: He says so, this stupid General!

Light C·O P (white blinking) ♪ Sa—C·C.

Hanif: It can't be helped. (しょうもな)

Sakamoto: I don't need the money anymore. (カネ などもういらんて)

Hanif: The game is holy. ♪ 〈Record.〉 Pile on Kazuhiko.

Sakamoto: The bet is the bet.

Sakamoto, Hanif: A defeat is a defeat.

All come back. (♪ Stop Rising アゲドメ)～

To Mott.

Kazuhiko: They say so, ... this two people, ...

Sakamoto pulls one hand of Kazuhiko.

Sakamoto: Quickly ... Say! Quickly, let's come to my place. (早くきま, オレン とこ)

Light F・O (or F・C.)

P 〈white twinkle〉 F・I.

♪ *Sa – F・I.*

♪ *〈Record〉 be piled on F・I.*

〈If perfectly overlap with; the live voice is OFF.〉

Hanif pulls one hand of Kazuhiko.

Hanif: Say! ... Quickly, come to my place. (オレン とこ)

Sakamoto: Come here, quickly.

They draw out each other～

Hanif: Quickly, come here.

Sakamoto: Come (こいって) ... here.

Hanif: Come here, here.

Sakamoto: Here (こっちだろ), come.

Hanif: Come, this place.

♪ *〈Record.〉 We put it up.*

(We should fall something from the top.)

(With illumination machine parts and so on.)

Sakamoto: Here (こっちだろ), come.

Hanif: Coming, this place.

Sakamoto: Here (こっちだろ), come.

Hanif: Coming, this place.

♪ *If live voice OFF ♪ 〈Record.〉 Lower Lowered ♪ pile [heap] up 〈Record.〉*

Kazuhiko: My two old bosses are fighting. Three years plus three years are six years. For six years, I've

slaved on their lugger ship. I’m as good as dead. I’ll kill, Gamble, Alcohol, Opium, scum of [the earth] ... I’ll kill him. Damn ... damn ... damn ... damn!!

Mott takes a pistol out and fires ♪Bang!

All come back Sakamoto and Hanif stop, and pay attention to Mott.

Mott: ... He works with me.

Sakamoto, Hanif: ... But ...

Mott: I hired him ...

Sakamoto, Hanif: ... However.

Sakamoto and Hanif “Saichi Tanaka, Goddamn, kill, die, and Go to hell,” and so on.

Mott: Let me go ... (He won’t let him go) If you may get a bullet, you say “O.K”, there is no help for it. This is a country of white people’s country ... According to white people’s law, this kind of gambling is illegal.

Sakamoto, Hanif: ... However.

Mott: Let go of my hand!!

Sakamoto, Hanif:Damn! (くそっ!)

Sakamoto and Hanife release their hands, and each scatter an evil tongue, and leaves away to top and bottom.

Mott speaks to sailors.

Mott: You must return to work; ... and.

Mott speaks to Kazuhiko.

Mott: Hey! You ... You go to Streeter Jetty, and get a cart working straight away.

Kazuhiko looks still at the other side.

Mott: It is Jetty!

Mott leaves quickly. Light slowly centers upon Kazuhiko. ♪ becomes big (factory sound’s collage) ♪ grows big (factory sound’s collage) ♪Sound of wave and C·F·C.

A light remains without finishing disappearing. We can see where Kazuhiko stands.

B change.

8 <Tortoise Beach> [Sandy Beach ⑤]

(※A figure). Cf. of another attached sheet.

♪ Overlap with the sound of the wave ♪ <Music> (Live performance). One life-sized tortoise slowly crawls

on the stage rear, and only the place looks like floating against the stage. The tortoise changes course somewhere about center, and keeps crawling forward. On the way, Kazuhiko notices it and watches it. Tortoise [Miss Tanaka (life-sized)] slowly stands up at a certain spot (there is not a face), and slowly walk forward. Kazuhiko withdraws to the right side of the stage. By the way, curtains are drawn and something are done (ready for the next scene), nearby backstage or the wings of the stage. A face of Tanaka (=life-sized) appears from a shell. He has eyes red, panting, and frightened.

Tanaka slowly lies on his belly, and gradually lets his body turn 180 degrees.

Light F • O P F • F • I (Shadow of shoji (=screen) the same position.)

Shojis (=screens) form a line in the back.

♪ ‹Record› Voice of Sakamoto and Hanif of “Tanaka-san, Tanaka-san”, (=Miss Tanaka, Miss Tanaka) F • I.

At the other side of the shoji, Two silhouettes which beat a shoji (=screen) float. P.

♪ Sound of beating a shoji.

P F • O.

9 ‹Slight Japanese Puppet Theater› [House of Tanaka]

(※A figure). Cf. of another attached sheet.

♪ ‹Record› In the darkness, a voice of “Tanaka-san, Tanaka-san.”

Greatly ♪ ‹Record› “Tanaka-san” (Sakamoto, Hanif) Then, light quick F • I ♪ C • O (raising stop.)

Tanaka (doll): What!!

In the center of the dark room with the shoji (=screen), a figure of Tanaka (life-sized) who raises the bedding, duskily emerges.

Tanaka (life-sized) slowly looks around.

On both sides of Tanaka’s pillow (life-sized), Sakamoto and Hanif stand, and in the back, Kuroko (=a stagehand dressed in black who assists the actors in various ways during the performance) stand as if they looked down Tanaka.

Sakamoto (=life-sized): Mr. Tanaka ... (calmly, in a deep menacing voice.)

Hanif (life-sized): This is no time for sleeping.

Sakamoto (life-sized): What do you mean?

Hanif (life-sized): Evening ...

Sakamoto (life-sized): You did signed over your son to work as a slave, last night.

Tanaka (life-sized): ... Ah ...

Hanif (life-sized): When I went to my son’s home today.

Sakamoto (life-sized): No. (あかんで)

Hanif (life-sized): The foolish General fires a handgun (Tshaka), and ...

Sakamoto (life-sized): forgiving a debt (Tshara; チャラ やて), isn’t it? ... Oh!

Hanif (life-sized): Oh, Mr. Saichi Tanaka. Say.

Sakamoto (life-sized): Say, what do you think?

Hanif (life-sized): Say! You ... What do you to do?

Sakamoto, Hanif (life-sized): This disposal ...

(※ A figure). Cf. of another attached sheet

Tanaka (doll): Umm ... (う, う…～—…～, う…)

Sakamoto (life-sized): Only by Umm, you can’t be finished, feeble-minded old man.

Hanif (life-sized): You can’t get away with anything (ただじゃすまんぜ), junk old man.

Sakamoto (life-sized): As it is, you insist on his innocence.

Hanif (life-sized): What will you be?

Sakamoto (life-sized): Think of your future.

Sakamoto offers Tanaka’s doll in front of Kuroko and Tanaka (life-sized).

P (White flashing) C·I. Light C·C.

Hanif (life-sized): ... At first, one arm.

Sakamoto pulls off one of the doll’s arm. ♪ “Bu-chi” (ブチッ) ♪ (live performance?) + Somewhat (ナンカ)

C·I. (backwash) (アオリ)

Sakamoto (life-sized): ... Another ...

Hanif picks off the one more arm of the doll ♪ “Bu-chi.” (ブチッ) (backwash) (アオリ)

The as follows same pattern.

Hanif (life-sized): ... The next is ... A foot ... One foot ...

Sakamoto picks off the foot.

Sakamoto (life-sized): ... One more ... another foot, ...

Hanif picks off it.

Hanif (life-sized): ... By and by, you.

Sakamoto (life-sized): Become only the body ...

Hanif (life-sized): But ... the nerve is left.

Sakamoto (life-sized): What’s left is pain and itch.

Hanif (life-sized): Even your head is itchy.

While Sakamoto and Hanif, nudging it by the hands and feet which they tore off.

Sakamoto (life-sized): You can't scratch it.

All come back. (Temporary 1.) (Or ♪ C C) (Light C C.)

Undecided (one more a small, gradually, slowly emotional dialogues and light♪.)

(Whether Tanaka (life-sized) himself handles Tanaka (doll) or the other person handles Tanaka (doll) is undecided.)

Hanif (life-sized): I can't scratch my balls, either.

Sakamoto (life-sized): I can't pick my nose, either.

Hanif (life-sized): I can't wipe my buttocks, either.

Sakamoto (life-sized): I can neither walk nor crawl.

Hanif (life-sized): I say! ...

Sakamoto and Hanif (life-sized): What would you do? Tanaka?

Tanaka (life-sized): Life is cause and effect ...

Sakamoto (life-sized): That's true ... (そうやなあ……)

Tanaka (life-sized): We come from anywhere, and crawl terribly, and how we became; and where we went; and after that ... The end.

Hanif (life-sized): That may be true; (そうかもなあ, しれんなあ,)

All come back (temporary 2.)

Tanaka (life-sized): Merely, cause and effect ... Yours is mere cause and effect.

Hanif (life-sized): Cause and effect are ours, an old man.

Sakamoto (life-sized): Empty the large sum of money.

Hanif (life-sized): Though I won a bet.

Sakamoto (life-sized): I'm said to be forgiving a debt ... Say ...

Hanif (life-sized): Say! ...

Hanif points at the trunk of Tanaka (doll).

Sakamoto (life-sized): If you wouldn't like be as fat as that, ...

Tanaka (life-sized) quickly comes out of bedclothes (=futon), and kneels on the ground.

Tanaka (life-sized): I do something ... I tell that fellow like that ... somehow or other, ... I do something ... somehow or other.

Sakamoto (life-sized): Somehow, we still have things which we can't turn out, ... this is that ...

Tanaka (life-sized): What's that?

Hanif (life-sized): Kazuhiko is one.

Sakamoto (life-sized): But we are two persons.

Sakamoto, Hanif (life-sized): ... We are in trouble ...

Tanaka (life-sized): What? (えっ?)

Hanif (life-sized): Kazuhiko is one.

Sakamoto (life-sized): We are two persons ...

Sakamoto, Hanif (life-sized): By the way, what would you do?

Tanaka (life-sized): What would you do? (どうするて?)

Hanif (life-sized): Kazuhiko is one, but we are two.

Sakamoto (life-sized): We are two, Kazuhiko is alone.

Sakamoto, Hanif (life-sized): That is to say?

Tanaka (life-sized): That is to say?

Sakamoto, Hanif (life-sized): That is to say?

They move as words. ♪ “Chon” (the sound of clappers). The scene is changed. Light C·C.

P·C·I <cracked film> ♪ (Live performance) ♪ <Music> such as the accompaniment of a silent film.

Sakamoto, Hanif (life-sized), use their dolls (Sakamoto, Hanif.)

Kuroko uses the Kazuhiko doll.

Sakamoto (doll): Hanif Mohammed Putu Rodrigues Da Costa call that boy, and says in this way.

Hanif (doll): Kazuhiko, you must work at my company from today.

Kuroko: Yes, Sir. (ハイゴシュジンサマ)

Hanif (doll): At first, you must carry a shellfish; work fast!

Kuroko: Yes, Sir. (ハイゴシュジンサマ)

Hanif (doll): I go to the lugger ship with this fellow.

Sakamoto (doll): But he suddenly meets this fellow by the gateway or by traffic.

Hanif (doll): Sakamoto! Sakamoto cries.

Sakamoto (doll): Don't you wait? I won't let you do so.

Hanif (doll): What will you say?

Sakamoto (doll): From today, this fellow works on the board of my company. Give this fellow to me!

Kuroko: Help! Help! (A—re—e; あ—れ—) ...

Sakamoto (doll): And I will drag Kazuhiko.

Hanif (doll): Cause and effect ... (Aloud in Tanaka's ear.) Your son is one!

Similarly with a loud voice.

Sakamoto (doll): Nevertheless, (せやのに) two person want to employ this fellow!

Hanif (doll): The contract is three years, for three years.

Sakamoto (doll): If you push this fellow for about three years, he'll be in shreds.

Hanif (doll): This fellow is no longer usable ... Well, ..

Sakamoto, Hanif (doll): Well, which one gets Kazuhiko first?!!

Hanif (doll): Sakamoto?

Sakamoto (doll): Hanif?

Hanif (doll): This fellow or me!!

Sakamoto (doll): Me? This fellow?

Sakamoto, Hanif (doll): Me!? ... Now, which one?

Tanaka (life-sized): ... Mmm (う〜〜〜ん……) ...

Sakamoto (doll): Me? This fellow?

Hanif (doll): This fellow or me!!

Sakamoto (doll): Me?

Hanif (doll): Me?

Sakamoto (doll): Me!

Hanif (doll): Me!

Sakamoto (doll) draws out Kazuhiko's arm.

Sakamoto (doll): Well! Come here!

Hanif (doll) draws out Kazuhiko's arm..

Sakamoto, Hanif (doll):

Sakamoto (doll): Come here!

Both of them pull Kazuhiko's arm each other.

Sakamoto (doll): Come here!

Hanif (doll): Come here!

The arm of Kazuhiko grows a little.

Sakamoto (doll): Come here!

Hanif (doll): Here; this way. (こっちだこっち)

The arm of Kazuhiko grows steadily.

Sakamoto (doll): Here; this way. (こっちだこっち)

Hanif (doll): Here; this way!! (こっちだこっち)

Sakamoto and Hanif (doll) also move as the arm of Kazuhiko grows longer and longer.

〈Copper wire is considerably complicated〉 ♪ (Live performance) The tango like carving with this rhythm

Temporary La cumparsita group. The device that the thing which was able to furl opens.

Temporary the second wing, from both sides, thin Kazuhiko comes out (extend).

Sakamoto (doll): Come here!

Hanif (doll): Come here!

Sakamoto (doll): Come, this way.

Loop ♪ 〈Record〉 + where is made ♪ (live performance?) F·C. Light F·C P, F·I.

Hanif (doll): This way! Come!

♪ 〈Record〉 + (From the middle (of the activity) ♪ 〈record〉 only)

Sakamoto (doll): Come! This way!

Lines, by this repetition, Sakamoto and Hanif (doll), in the wing ~ after a few later, go out from the second wing, and continue it.

(※ Figure a). See cf. of an attached sheet. from the second wing, Hanif & Sakamoto (life-sized) directly pull the arm (Someone puts the doll in wing.)

(※ Figure b). See cf. of an attached sheet, at the same time, the thin Kazuhiko (life-size) appears.

Hanif & Sakamoto go out of the third wing; and hit in the center, and do something, and after all, cross an arm and an arm After that, they notice “thin Kazuhiko” in the back, and pull both arms of “thin Kazuhiko”. They extend like b (Figure b), after a while, Sakamoto and Hanif (life-sized) get out from the wing of the first row.

Sakamoto, Hanif (life-sized): Ah~ (あ~) ... incapable of solution!

♪ “Come this way”; C·O (Rising stop; アゲドメ) (※ Figure d.) See the attached sheet. Two persons, take out big scissors from the wing, go to the place where they united some time ago, and cut both arms with one vigorous stroke, together.

Sakamoto, Hanif (life-sized): Oof!!

♪ Whizzing sound ♪ (live performance)+

The arm extended some time ago, comes all the way back spinning the opposite way. ※A figure e. cf. of another attached sheet.

♪ Shupon (シユボン) (the last sound) Scissors come off.

Sakamoto (life-sized): So, what do I do now?

Hanif (life-sized): It is two persons in one.

Sakamoto (life-sized): It is two persons with one.

Sakamoto and Hanif: with their arms folded.

Sakamoto, Hanif (life-sized): Umm. (う~~~~~ん)

♪ *Sa – F·I set on. Light F·O P Become only white flash; P C·O (that is to say, a blackout).*

Meanwhile, someone changes the Kazuhiko doll (we use bedclothes or the wing.)

Sakamoto (life-sized): That's right (せや)!

Light P Comeback ♪ Sa – Rising stop (アゲドメ) Sakamoto and Hanif (life-sized) waiting f ※A figure Cf. of the attached sheet.

Sakamoto (life-sized): Cut him in half.

Tanaka, Hanif (life-sized): In half?

Hanif (life-sized): Divide something in half?

Sakamoto (life-sized): Go halves, go halves.

Two persons well bring the portion of the shoulder of Kazuhiko.

Sakamoto, Hanif (life-sized): OK? Are you ready~? Go! (せーの)

Sakamoto, Hanif (life-sized) pull it together. ♪ They tear up it into pieces of “Biri-biri-biri-biri” ♪ (live performance) intense sound.

Provisional (P a whole same positive, Kazuhiko is split from the center.)

Provisionally (the thin Kazuhiko in the back is split into two from middle, and disappears in both wings.)

However, the same Kazuhiko comes out of the inside.

Hanif (life-sized): Damn it!—Hang it!—Dang it! (えーい) You are persistent.

Two persons each other throw the first sheet of unmasking which is split into two one by one into both wings.

Sakamoto (life-sized): One more time!

They pull it. They tear it into pieces of sounds “Biri-biri-biri-biri” ♪ (live performance) intense sound.

Provisional (P a whole same positive, he is split from the center.)

Sakamoto, Hanif (life-sized): Ha-ha-ha ... Go halves, go halves.

Sakamoto and Hanif (life-sized), in high spirits brandishes Kazuhiko who became half, and hang their shoulders.

To two persons speak to Tanaka (life-sized).

Sakamoto, Hanif (life-sized): How about such a thing?

Tanaka (life-sized) holds his head.

Tanaka (life-sized): ... Ah~~~~~! Oh no! (あ~~~~~っ いやや! そんなんは)

Sakamoto and Hanif throw out a half Kazuhiko about there, and dolls of Sakamoto and Hanif bring hands boards, (the version with necks that go down).

Sakamoto (doll): Then, do you have other good ideas?

Hanif (doll): If you have a good idea, will you tell me?

Sakamoto, Hanif (doll): A little better ending of a dull puppet play!!

Light C·C.

Tanaka (life-sized): Oh! Some idea flashes across my mind! (おっとなんやらひらめいた)

♪ (live performance) Bang! (ジャーン)

Sakamoto, Hanif (doll): What? (えっ?)

Tanaka (life-sized): Then, it suddenly occurs to me!

(※A figure.) Cf. of another attached sheet. You may be based “the time when the flower of the violet blooms” Temporary.

Sakamoto, Hanif (doll): What? (To whom do you speak?)

Tanaka (life-sized): That’s right!

♪ (live performance) Bang!

Tanaka (life-sized): That’s all!!

♪ (live performance) Bang! Bang! (Ja-ja-ja-jan---n (ジャーンジャーンジャジャジャジャーンー)

Tanaka (life-sized), and pulling hands from only the trunk of the Tanaka (doll).

And also his foot grows, and then have Tanaka (doll) (arrangements by handling).

Sakamoto (doll): What’s that? Suddenly! ...

Hanif (doll): Fancy growing hands and feet here!

Tanaka (life-sized): You are totally like Takarazuka Operetta Troupe!

Sakamoto, Hanif (doll): Takarazuka?!!

♪ *Light C·C.*

♪ (Live performance) Action film, and music like the chopping and heartrending, Shoji (=screen) at the back is shut—

On the other side of the shoji, it is the silhouette of a beautiful fencer. While Tanaka (life-sized), is moving a doll of Tanaka.

Tanaka (life-sized): At that time, the situation is serious, ... a lone woman fencer comes in to save our lives!

As follows ♪ (all music) is live performance or record or undecided.

The shoji opens itself like a brick, and Miss Kitso manly walks to the front. She makes up, folding a closed fan like the handle of the sword.

Tanaka (life-sized): This fencer cuts your necks, sends you to the hell.

Miss Kitso, with a sword, cuts Sakamoto and Hanif’s necks (necks go down).

Sakamoto, Hanif (doll): Ooh! Ooh!

Tanaka (life-sized): it serves you right. I'm pleased ... Well (えーと), my son's body miraculously became whole, stick together.

A doll of genuine Kazuhiko comes out of the wing. ♪ (Music) sad and indulgent Melody (Hollywood-like)

Tanaka (life-sized): And two persons gradually fall deeply in love.

Kazuhiko and Miss Kitso stare at each other:

Tanaka (life-sized): Two persons go to China by the high jump.

(※A figure) Cf. See an attached sheet. Toilet seat Luxembourg Lockheed of the United States Armed Forces sale.

Lines of ☆ may transfer it to more nonsense ♪ (Music) change one more time.

Kazuhiko and Miss Kitso take each other's hands. (♪The music is happy, and like a dream) In the back. They run.

Or Light F·O P Crack Film F·I.

♪Crack sound worn-out gradually echo.

Miss Kitso and Kazuhiko leave, and Tanaka (life-size) stands alone. (※A figure) Cf. of another attached sheet.

Running to the front from the back, Miss Kitso sits astride on Tanaka's back (life-sized) who gets down on all fours, and Kazuhiko cuddles close together.

(♪〈Record〉. Probably).

☆ Tanaka (life-sized): Kazuhiko safely arrives in China changes his name to Takanohana, and makes a fortune by the invention of the Japanese style rest room.

The bravely wife deep of the feeling introduces herself as Sharapova now, and organizes a troop, and destroys the nomads of Mongolia. I was invited by two persons go to China by airplane, first-class. *Straight to China (pass).*

From the left side of the stage to the right side of the stage, Tanaka (doll) who sat astride the airplane of the face of Kazuhiko sails across it.

♪Buro-ro-ro-ro-ro-ro-ro-ro-ro- be piled up.

After that, accepting by favor of Soku-Ten-Bu-Kou (則天武后), I spent beating rivals at the many contests of wind (=おなら) in Sichuan (四川; China); And I have lived until the age 130 years old, have spent happy life, this puppet play has been over in this way.

Miss Kitso, Kazuhiko leave, and Tanaka (life-sized) stands alone. Tanaka (life-sized) ♪ and breaks wind with sound of "Ba-fu" (バフツと屁をひる) ♪C·O (echo) P C·O Light F·I (turn down). A face of Sakamoto

and Hanif return with “Supon. (スポン)”

Sakamoto (doll): Did you sleep? ... The old man, ... you sleep standing up ...

Hanif (doll): You grumble standing up ... you talk in your sleep.

Sakamoto (doll): You wet your bed! (寝 ベエ)

Hanif (doll): Somewhat, you are stinking ...

Sakamoto (doll): It resembles your play.

Sakamoto, Hanif (doll): Well ... (さあ……)

Hanif (doll): The dream is over.

Sakamoto (doll): ... What would you do the old man..?

Hanif (doll): Well? (さあ) What would you do?

Sakamoto, Hanif (doll): Say something; the old man ...

Tanaka (life-sized): ... I'm helpless, ... no more, ... I'm helpless.

♪ *Sa – F·I Light F·C P F·I (Sand storm (スナアラ) system).*

Tanaka (life-sized) sinks to his knees, Tanaka (doll) also sinks to its knees, in the same way.

Light. From Sakamoto (doll) to Sakamoto and Hanif (life-sized) F·C (narrowed).

Sakamoto, the Hanif (life-sized) say like narration.

Sakamoto (life-sized): He is cornered.

Hanif (life-sized): Saichi Tanaka.

Sakamoto (life-sized): Because of too much despair.

Hanif (life-sized): At last, his willpower fades away.

P “Shadow same positive” F·C ♪ (Live performance.) Provisionally.

Sakamoto (life-sized): He sinks to his knees in the place.

Hanif (life-sized): He kneels down.

Sakamoto (life-sized): Like a tortoise.

Hanif (life-sized): He crouches down ...

Then, with Sakamoto (life-sized).

Hanif (life-sized): A certain thing happened.

It is a dark silhouette of Miss Kitso, on a shoji at the back.

♪ *Music of the dream such as “flower of the violet”. F·I by Picture code. (エコード) (Music box Version).*

Sakamoto (life-sized): There, ... a woman stood.

Hanif (life-sized): A femme fatale.

Sakamoto, Hanif (life-sized): A femme fatale!

♪ *Greatly, the music some time ago, in a full orchestra from the beginning.*

Set P (G); C·I (♪ Set Za—) At the same time, the shoji opens right and left, and Miss Kitso stands.

Put it together to open, a big fan holding in the chest (P also) spreads — Sakamoto and the Hanif (life-sized) look toward the back.

Someone opens a folding fan, and closes (※A figure. Cf. of another attached sheet.)

Sakamoto, Hanif (life-sized): Who are you?

♪ *C·C lower (live performance?), ♪ Sa — C·O Light C·C P C·C.*

Miss Kitso: ♪ *Record.* You must not get into mischief. (♪ *take an echo.*)

Tanaka, Sakamoto, Hanif (life-sized): What (えっ)?

Miss Kitso: ♪ *Record.* Let him.

Sakamoto, Hanif (life-sized): Who are you (フ・ア・ユ)?

Miss Kitso: ♪ *Record.* Permit him. Say. Would you let him?

Sakamoto (life-sized): Enchantress!

Hanif (life-sized): She is seductive!

Miss Kitso: ♪ *Record.* The oppressed uncle, who seems to die!

Sakamoto, Hanif (life-sized): Uncle?

Miss Kitso: ♪ *Record.* The tortoise (person) is an uncle of me.

Sakamoto, Hanif (life-sized): What's?

Temporary ♪ (Live performance) something effective.

Miss Kitso: ♪ *Record.* I'll make up for my crime. Please, please forgive an uncle!

Uncle is a stupid and foolish man, but dirty not at all.

Sakamoto, Hanif (life-sized): I'll try to be you shudderingly, Buru-buru-buru! (ぶるぶるぶるっ!) I loved you!

Miss Kitso: ♪ *Record.* I'll certainly ask you!

I Sakamoto, Hanif (life-sized): She is a very go~~~~~od (=good) woman (エ~~~~~おなごやで)
...!

Miss Kitso: ♪ *Record.* Would you bring even a gun with the arrow?

Sakamoto, Hanif (life-sized): I'll bring anything, whatever you want (参りやす) !!

Sakamoto and Hanif go as if competing, go in as if jumping into each wing. ♪ Light changes a little.

Tanaka (life-sized) pinches his cheeks.

Tanaka (life-sized): Isn't this a dream?

Miss Kitso: ♪ *Record.* What do you say? You're a terrible person. This isn't a dream, father!

Live voices of Kazuhiko is piled up halfway, and only a live voice of Kazuhiko is finally left.

Tanaka (life-sized): What? You ... Who are you? ... Where is your house? ...

♪ *quick F·C Light quick F·C P C·O.*

Miss Kitso: What are you setting up for? ... Stupid!

Tanaka (life-sized): What?

Kazuhiko takes off his wig (Kazuhiko “What don’t you know yet?” (まだわかんねえの”)

Miss Kitso: Me, It’s me!

Tanaka (life-sized): Ah! You!

Miss Kitso: I came to help you!

Tanaka (life-sized): Kazuhiko!!

Miss Kitso: Oh, you are awful! (ひどいぜ) My father!

Tanaka (life-sized): I’m sorry. So sorry ...

Miss Kitso: Sorry ... I don’t finish it.

Tanaka (life-sized): Put on your wig immediately!

Kazuhiko puts on his wig in a hurry. —

Miss Kitso: What (えっ)?

Tanaka (life-sized): You must dance.

Miss Kitso: What?

Jack Hylton and his Orchestra: H’lo Baby (1930). A bouquet ~ flower; becomes gradually big. (※ A figure. Cf. of another attached sheet).

Tanaka (life-sized): Clap your hand!

Miss Kitso: What’s that?

Tanaka (life-sized): They will come back! Say! In a hurry up man!

♪ *«Music» (live performance) - (faction of the violet).*

Or Light quick F·C. (P temporary white flash or crack FILM) Miss Kitso begins a dance (Tanaka, too.)

There is Miss Kitso: Ah——i——～～ (あ——い)

To a tune ♪ *«music», Sakamoto and Hanif (doll) make a desperate effort to get value interest to buy a favor; to compete; bringing a gift, successively, swinging hands, flattering, and applying for a dance.*

Hanif (doll): Flowers are good here.

Sakamoto (doll): They are surely be much better than that!

Hanif (doll): Place is big.

Sakamoto (doll): The flowers are big here!!

Tanaka (life-sized): I ask you nicely (たのんまっせエ)

Hanif (doll): I'll bring a bigger flower!

Sakamoto (doll): I'll bring a bigger flower!

Two persons watch each other.

Sakamoto, Hanif (doll): Tut! (ケッ!)

Two persons tell Miss Kitso.

Sakamoto, Hanif (doll): Would you wait for me?!(♡)

Sakamoto and Hanif are going out.

Light quick F·C P F·O. Miss Kitso takes off her wig.

Miss Kitso: Phew!

Tanaka (life-sized): I should have pawned my mother's kimono.

Miss Kitso: Aunt A-ki started it from the pawnshop.

Tanaka (life-sized): Hmm ... What will you do, the next time?

Miss Kitso: ... Do you think that I take a measure to several steps of points?

Tanaka (life-sized) covers the head of Tanaka (doll) by a wig.

Tanaka (life-sized doll): Oh, this is ... to be able to manage somehow or other! (Hello baby!) *The setting of background is town B ♪F·O.*

『空の野蛮化』

ベルタ・フォン・ズットナー¹⁾

訳：糸井川 修・中村 実生

前書き

ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン（訳：山根和代）

ベルタ・フォン・ズットナーが『空の野蛮化』（„Die Barbarisierung der Luft“）という予言的評論を執筆した25年後、スペイン北部の、ビルバオから遠くないゲルニカというバスク地方の小さな町で、恐怖と荒廃をもたらすものが空から降り注ぐという光景が現実のものとなった。1937年4月26日の、平和で無防備な町に対してナチス・ドイツが行った野蛮な空爆に激怒したピカソは、『ゲルニカ』という名作、恐らくあらゆる時代を通じた反戦絵画の最高傑作を描いた。今年（訳注：2012年）の始めにゲルニカ平和博物館は、この恥ずべき出来事の75周年記念行事を行った。ゲルニカ空爆から数年後、第2次世界大戦が勃発すると、同様の、しかしより残忍な攻撃がロンドン、コヴェントリー、ベルリン、ドレスデン、東京、広島、長崎の上空から行われた——これらの都市は最も破壊の激しかった都市の数例に過ぎない。日本のこれらの都市で戦後創設された平和博物館は恐ろしい犠牲を伴った戦争を証言しているが、このような戦争をズットナーは予測し、評論を通して避けようとしていたのであった。神風特攻隊の航空機、V-2ロケット、近年のアメリカにおける9.11の自爆攻撃、アフガニスタンとパキスタン国境における無人飛行機による戦争は、見たところ空の野蛮化が終わりそうにないことを示している。

この評論の執筆へとズットナーを駆り立てたのは、トリポリの戦闘において初めて行われた空からの爆撃だったが、評論のテーマは彼女にとって目新しいものではなかった。確かに彼女はすでに何年も前から航空技術の進歩に強い関心を抱き、それが将来国際関係に与える影響を

予測していた。私たちは彼女の希望や怖れを、彼女が毎月書いていたコラムから理解できる。「現代史への注釈」と謙虚な題名が付けられていたそのコラムは、1914年に第1次世界大戦が始まるまで20年間もドイツ語の一流平和誌に寄稿されていた。彼女が最後のコラムを書いたのは、彼女の死（1914年6月）のわずか数週間前だった。洞察力があり、しばしば人を魅了するこれらの論評は、彼女の友人であり協力者であったアルフレート・H・フリートの努力によって、戦争中、中立国のスイスで2巻の分厚い本（それぞれ600頁以上ある）にまとめられ、彼女の死後出版された（『世界大戦を避けるための闘い』、チューリッヒ、1917年²⁾）。彼女がドイツ語で書いた最初の女性政治ジャーナリストとされるのは、主として平和ジャーナリズムの記念碑であるこの著作による。

『武器を捨てよ！』の出版から数十年間、著者はいかに航空技術が空に武器をもたらすかを観察していた。彼女は、「これまで地上や地下で（そして海上や海中で）遂行してきたことを、雲の上や下で」続けることは一見不可能であると書いた。今や戦争という地獄は、天国にまで拡張されたのであろうか？ 相互殺戮という愚行は、今後雲に向かって押し広げられるのであろうか？ 彼女はこのようなイメージを使って、読者に「空の艦隊、空の魚雷や空の地雷」が出現する可能性を気づかせようとした。そしてこのような開発に反対する人々がいないことに、不安を抱いたのである。ここに生まれる新しい分野では数十億もの浪費が見込まれ、地獄の兵器を自在に操るためにまたもや人間の英知がつぎ込まれる。彼女はまた、軍用飛行技術の登場とそれがあらゆる国に引き起こした危機感が、いかに大砲の発達を促したかに注目した。大砲は「祖国だけでなく祖国の空も防備しなければならない」ので空高く垂直に打ち上げられる、今起っていることは戦争における紛れもない革命であり、全く恥ずべきことである、と彼女はコラムの一つに書いている。人類は「空を飛ぶか、あるいは戦争をするか」という厳しい選択を迫られている、「二つのものがぶつかり合えば、どちらかが退かねばならないであろう」と彼女は書いた。何十年も前にアメリカの偉大な作家で市民的不服従の主張者であったヘンリー・デイヴィッド・ソローが、「ありがたいことに、人間は飛ぶことができず、空を大地のように汚すことができない」と書いた時、彼はすでに彼なりの考えを示していた。

私はベルタ・フォン・ズットナーの、短いが予言的で核心をついた評論が、日本語でも入手できることを嬉しく思っている。それはこの評論が出版百周年記念の年に、少なくとも日本において忘れられていないことを意味している。日本は世界中のどこよりも空からの大量殺戮を体験し、その結果、日本人だけでなく海外における多くの被爆者も深刻な影響を受け続けている。1945年8月の美しい夏の日に、空の野蛮化により広島と長崎の人々は奈落の底に突き落とされた。これらの二つの都市から発せられている「ノー・モア・ヒロシマ、ノー・モア・ナガサキ、ノー・モア・核兵器、ノー・モア・戦争」という緊急の要求がまだ実現されていない

『空の野蛮化』

ことは、不可解で許されないことである。日本における平和博物館、そして核兵器廃絶運動は、このようなメッセージが世界中にはっきりと確実に伝わるよう最前線で努力している。このような運動においても、ズットナーの評論は今日なお私たちに語りかけるものがある。(Peter van den Dungen：英国ブラッドフォード大学平和学客員講師、平和のための博物館国際ネットワーク代表)

『空の野蛮化』

15年から20年前、制御可能な気球や飛行機械を制作しようという計画を抱きながらも資金に事欠いていた発明家たちは、平和運動の指導者を頼ったものである。私たちが空を征服するために援助をしてください、そうすれば戦争は過去のものとなります、と彼らは言った。彼らが持ち出した根拠は、おおよそ次の通りである。国境による分断はなくなるでしょう、というのも空には遮断機や税関、それに要塞は造れないのですから。容易に、そして10倍もすばやくなる交通は、もうすでに鉄道や蒸気船によって実現しているよりも、なおいっそう諸国民同士を近づける筈です。そしてこのように近づき合うことで敵対関係は消え失せるでしょう、とりわけこの輝かしい偉業が広く呼び起こす歓喜の声によって、人々は狭量な憎悪と嫉妬の念を乗り越えることになるでしょう。

この論拠には十分な説得力があったので、平和主義者は発明家たちに必要な資金を喜んで提供したいと思った。しかしながら、周知のように平和の金庫は空である。資金的要求に応えられるのは、戦争省だけだ。

しかし理論においていくら明白で、理に適い、数学的に確実で、例えば $2 \times 2 = 4$ という命題のように疑う余地なく受け入れられるものであったとしても——実際においては突如逆転して正反対を向き、2掛ける2の答えが、同じくらい容易く4以外の任意の数字となる。

今や空は征服されて——我々はあらゆる国境の上を飛び越え、空高く放物線を描き——そしてついに戦争はもう一つの新たな武器を得た。

しかもその武器は、今までに用いられたあらゆる武器の中で最も恐ろしいものであることが、明らかとなった。

結局のところ、論理と数学は正しい。2掛ける2は——たとえ回り道しようとも——誤ることなく4となり、そして飛行術は——たとえ戦争に利用されるにしても——戦争を消滅させる。

どのようにして？ これに関しては、のちほど考察することにしよう。さしあたりここで

は、簡潔に歴史を振り返るとしよう。とはいえイカルス³⁾まで遡るのではなく、第1回ハーグ平和会議までとしたい。

1899年、26カ国の代表がハーグに集い、戦争防止について（残念なことに、同時に戦争遂行についても）話し合いが持たれたが、その時パリで営々と建造されていた飛行船は、操縦性の問題を解決するという話だった。立ちのぼる噂によれば、解決はうまくいったという。そして今度は、試みは失敗したと伝えられたが、その後、成功したという新たな知らせが届いた。W. T. ステッド⁴⁾がハーグのある新聞に連日寄せていた会議録で次のように書いていたのを、私は覚えている。「フランス人は気球を操縦しながら、協議が行われている『森の館』⁵⁾の周りを旋回しているが、それは、もはや未来において戦争遂行は不可能であることを一挙に証明するかのようだった。」

会議はこの問題に取り組み、戦争の慣行についての協定に、空からの爆弾投下を禁止する条項を盛り込んだ。この条約の期限は、5年であった。

この制限にそろって署名したのは、戦争は考えるすべての手段を用いるということに無知な素人だけだったが、彼らでさえ次のように考えたであろう。今後5年の間は——とにもかくにも——操縦性の問題は間違いなく依然として解決されないだろう、それならば安心して署名できるわけだ、と。

8年後の1907年、第2回ハーグ会議が開かれたとき、フランスはすでに幾隻かの飛行船を所有し、ドイツではツェッペリン⁶⁾が勝ち誇っていた。条約期限の5年は経過し、この禁止は更新こそされたものの、批准されることはなかった。

それでは果たして、空からの爆撃は許されたのだろうか？

「ありがたいことに、それに対する答えは安心させるものだった（不安を抱く文民が将来の防衛について尋ねたとき軍人が請け合ってくれる言葉ほど、人を落ち着かせ、なだめ、心を鎮めてくれるものはない）——ありがたいことに、飛行船が用いられるのは偵察活動だけである。飛行船の飛ぶ高みから、そして飛び過ぎて行く飛行船から狙い撃ちしたところで、それが命中する可能性はまったくない——気球から地上や海上にある標的を狙うよりは、むしろ6階のバルコニーから路面に置かれたニッケル貨に向けて唾を吐くほうが容易だろう。そうだ、そうなのだ、上空から撃とうなどと考えられるのは素人だけ、操縦が可能になった飛行船とて役に立つのは偵察活動だけである。しかし、その方面では計り知れぬ価値がある。」

計り知れぬ？ 誰にとって？ 私たち、それとも、ほかの人たちに？ いわゆる戦闘手段としての利点や長所は常に相殺し合うものであり、後に残るのは双方にとっての重大な損害だけなのだが、「改良された」手法と道具が賞賛される際、それはいつも忘れられる。

そうこうしている間に、アメリカから知らせが届いた。ライト兄弟が——空気よりも重い

——飛行装置を作り上げた、それははいよいよ本当に天空を征服した、とのことだった。すなわち、飛行機械である。⁷⁾しかしそれは何という現実離れした夢物語だろう。アメリカからのニュースは明らかに戯言だ。あるいは、実際に数回わずかな距離を飛ぶことに成功していたとしても、本当の飛行、戦時や平時における飛行機の実用的な使用までにはなんと遠いことであろう、何かができるようになるのは（それが実現するにせよ）何十年先のことであろう。それまでにはまたしても「長い時間がかかる」だろう。

しかし見るがいい、凄まじい早さで航空飛行術は普及し、——エッフェル塔は周回飛行され、ドーバー海峡は横断された。それは1909年のことであった。⁸⁾

わずか3年が過ぎ、今日、我々の状況はどうなっているのだろうか？ あらゆる国において軍当局は飛行部隊を導入している。あまつさえ中華民国も、ヴィーナー・ノイシュタット⁹⁾で軍用のエトリッヒ単葉飛行機を購入した。この調子で行くならば、10年後、我々を取り巻く状況はどうなるのだろうか？

こうした問いかけに対して、その道の権威たちは答えを拒んでいる。問題は、いつでも現下の課題だけなのだ。隣人が1隻の飛行船を保有している、故に私も1隻建造せねばならない、ほかの隣人は2機の飛行機を発注した、それならば私も2機、できれば3機を保有しなければならない。このような計算式によって、ほかのどのような考慮も、どのような予測も排除されてしまう。

ところで、飛行船や飛行装置を攻撃用兵器として導入すべきか否かということについての議論は、ことごとく事実¹⁰⁾に追い越されてしまった——兵器はすでに導入されてしまっているのだ。イタリア人はトリポリ戦争において最初の「空の魚雷」を使用し、そこから空爆は戦争における既存の経験かつ習慣に数えられるようになった。それゆえこれは国際法の問題なのである。

戦争学や戦争哲学それ自体の立場からすれば、空の征服は画期的大変革である。しばらくの間は、古い方法、古い概念をこのまったく新しい領域に持ち込もうという試みが続けられるだろう。そのような試みとして、今、例えば早くも「制空権」をめぐる戦いについて語られている。すでに「いわゆる制海権」は、土地の一部に対する実際の支配といった領域から、征服しがたい海洋の道筋へと転用された錯乱概念だった。ところで、無限の大気圏において占有し支配できる何が存在するのか、それを言うことのできる者は誰もいなかった。

戦争というシステムの全体——その競技ルール全体、とすることもできよう——は、次のような前提の上に成り立っている。

敵軍双方は互いに国境目指して進軍し、越境を窺うか、あるいは、他方が越境しようとする

のを妨げようとする。陣地を獲得し、確保しようとする、できうるならば首都にまで前進し、そしてそれに成功すれば、講和を突きつける。

この競技を困難にするために、すでに平時において国境には要塞が建設され、地下には坑道が掘られている。それ以外に国内にはさらに多くの砦があり、その一つひとつを順に攻略しなければ敵は前進できないようになっていて、そのほかに両軍がぶつかり合うどの村、どの農場、それに墓地でも、守りが固められる。

海においても同じ競技が支持され、艦隊は岸に向かって押し寄せ、上陸は外を睨んだ要塞と機雷が阻もうとしている。そして今や新しい——空を飛ぶ——戦闘力が加わる。そうになると、越境は兎戯に等しい。要塞によって長く押しとどめられることはない。上空から焼夷弾を落としてそれらを破壊できるだけでなく、——あっさりと無視すればいいのだ。

進軍途中や兵舎にいる部隊の上には、雲から雨あられと死が降りかかる。鉄道の橋は上空から破壊され、騎兵集団は殲滅されるが、——境界がなく、さえぎる物もない空中では、攻め落とせる陣地もなく、それゆえ決着はつきようがない。

今もし諸国家が、これら新しく作られた状況のもと、相も変わらず、とうの昔に取り入れられた兵法で戦いに臨もうとするなら、それはまるでチェスの差し手二人が盤に向かい、次のように宣言したようなものだ。

我々は古い競技ルールを用いよう。ポーンは常に一枰^{ます}ずつ進み、ナイトは以前のごとく跳躍する、クイーンは最強のまま、キング¹⁰はキャスリング¹¹で安全な隅に引っ込ませることができる、しかし、新しいルールを我々は付け加えよう。我々のどちらも、上から何かを盤上にと落とし、すべての駒をひっくり返しても良いのだ。素晴らしい遊戯だ——これにはチェスの王者も感謝するだろう。

駒たちは、ずっと前から感謝している。

将来、空の戦争がどのような形をとるかについては、幾らかの想像力があれば、容易に思い描けるだろう。現代において最も空想力豊かな作家 H. G. ウェルズ¹²も、それを見事に成し遂げている。

最近、とりわけ戦記作家がよく発表する、未来の戦争を描く小説はほとんど信用できない。それらは大抵、並外れた軍備によって、如何にして自分の国が隙を狙う敵に対して輝かしい勝利を収め、世界を支配するに至るかを示す意図のもとに書かれている。それに傾向文学に向けられる不信は別にしても、そもそも現実政治の側では、予言というものはほとんど重要視されていない。それは夢物語や現実離れた空想の領域に含まれるものと考えられ、実務家と専門家は関わらないのである。

この新しい戦争兵器の威力がどれほどであるかを知るには、軍人流に言うなら、将来の戦争の「経験」を待たねばならない。

さて、或る事が起こるかどうかを確実に予言することはできない、というのはもちろん正しい。しかし、もしもその或る事が一定の条件のもとで起こるといふのであれば、それがどのように起こるに違いないかということは、確信を持って言える。休みなく熱し続けられた機械が空中に跳ね飛ぶということは、私には主張できない、——もしかしたら火夫が弁を開くかもしれないからだ。しかし、弁が開かれなければ機械は確実に爆発すると、きっぱり主張できるだろう。予言の正しさは、科学の正しさを測る試金石であるのは確かだ。

こうした見地に立てば、自然の力と論理的思考の原理に基づいて架空の将来像を描く——ジュール・ヴェルヌ¹³⁾やウェルズのような——作家の作品は、真実の可能性を秘めており、場合によっては重大な警告であると見なさなくてはならない。ここでは、こうした考えの下、幾つか小説から引用しよう。

最初は、空の戦争が勃発する前の、人間の行動についての考察である。¹⁴⁾

「——彼らは自分自身の事柄についてはとても精力的に追求したが、あの差し迫る脅威については、どれにも奇妙なほど無頓着であった。

人類にとって本当の危険を憂慮する者はいなかった。彼らは、自分たちの軍隊と艦隊がますます巨大化し、恐ろしい脅威となるのを見ていた。ついに彼らの戦艦の幾隻かは、中等教育に要する全年間経費と同じ額に達した。彼らは砲弾と破壊兵器を溜め込んで、ますます自国の流儀を押し通そうとし、ますます嫉妬に駆られて振舞うようになった。人種同士が互いに近づけば近づくほど敵意は高まったが、彼らは懸念も理解もしないまま、それを傍観した。そして自分たちの真っ只中で、悪意に満ち、貪欲で、良心に欠け、善をなす能力はないが悪事を働く力は備えた新聞が、悪しき意図を持って発行されるのを見ても、彼らは知らぬ振りをしていた。国家は実際のところ、新聞を監視していなかった。火花を待つばかりのこの導火線が火薬庫の扉の前に置かれているのを見ても、彼らが気に留めることは微塵もなかった。その時、過去の世界史のすべては文明崩壊に関する唯一の膨大な報告書であり、現下の危険は誰の目にも見える場所にあった。彼らがこの危険を見ることができなかつたとは、もはや今日では信じがたい。

人間は空の戦争を防げたのではないか？ 意味のない質問だ！ 彼らは防げなかつた、それは彼らがその禍^{わざわい}を止めなかつたから、止める意志を持たなかつたからだ！ もしも人類が別の意志に従っていたら一体何を成し遂げられたかと問うのは、壮大ではあるが無意味な問題である。

今般、西欧化した世界に訪れたのは、ゆっくりした衰退ではない。古代文明は腐敗して崩壊

したが、西欧文明はいわば吹き飛んだのだ。

それは5年という期間の内に、跡形もなく壊滅した。空の戦争の前夜までは、まさしく比類ない進歩の姿を見せていた。世界中に安定が行き渡り、見事に組織化された産業と秩序正しい住民は壮大な景観を作り出して、途方もなく広がる巨大都市が存在していた。大海には船が行き交い、陸地には鉄道と道路の網が張りめぐらされていた。それが突然、思いもかけず飛行機が舞台を一転させ、私たちは終わりの始まりに立っているのである。」

「新しい武器」の使用によって起こる戦闘と大量殺戮、破壊についての記念碑的な描写を、この本を読んで拾い集めねばならない。ここでは作者によって予測された、その後の出来事のみ引用する。

「——それが起こると、世界の金融構造全体が揺らいだ。北大西洋のアメリカ艦隊が壊滅し、バルト海におけるドイツの海軍力を壊滅させる衝突が起こり、世界四大都市の数十億ポンドの資産が焼き払われ、打ち砕かれた。それによって初めて、戦争という高くつく絶望のすべてが明らかになり、まるで人類は雷に打たれたかのようなだった。債権は、売りが殺到して屑となった。かつての恐慌の際にも見られた現象が、より激しい姿となって、ここかしこで起きていた。人々は物価が底を打つ前に、金を掴み、溜め込もうとした。その欲望は、今や劫火のように全世界に広がった。空の上では誰の目にも見える戦闘が繰り広げられ、破壊が進行していた。しかし地上では、人類が盲目的に信じていた金融と商業の制度を支える極めて不安定な構造全体に、はるかに禍に満ち、はるかに致命的なことが起きていた。そして上空で飛行船が戦っている間、地上では目に見えて、世界中の手持ち資金が消えて行った。あらゆるものに対する不信が、流行病のように全世界に蔓延した。わずか数週で、無価値となった紙切れを除いて、金は消えた……天井裏、穴倉、家の壁裏、多くのゴミバケツの中、そして秘密の隠し場所へと。金が消えた……すると商業と産業がその影響を受けて機能を停止した。金融世界全体がよろめき、崩壊した。それはペストが猛威を振ったかのようなだった……まるで生きた人間の血から水分が消えたようだった……あらゆる流通が突如一斉に停止したかのようなだった。

そして科学文明の生きた砦であった債権システムが揺らぎ、金融上の関係で結ばれていた幾百万の人々の上に崩れ落ちる間、またこれらの人間が皆、債権が完全に無効になるという世界の不思議に動揺し、為すすべもなく凝視している間、アジアの飛行船は容赦なく続々と天空に飛び立ち、東方のアメリカ……そして西方のヨーロッパへと飛来した。そして歴史の調べを記した楽譜は、戦闘の長いクレッシェンドで埋め尽くされた。

社会全体の崩壊は、世界大戦の当然の結果だった。人口の多い地域では、大量の人々が職を失い、お金がなく、生計を維持できなかった。——次に第4の段階が訪れた。このカオスと戦っている最中に、飢饉の後を追って、今度は人類にとってのもうひとつの古い敵である疫病

——赤死病がやってきた。

しかし、戦争は止まることを知らない。旗は、今なお翻っている。新しい航空機や新型の飛行船が誕生している。そして、それらが空を飛び交う戦闘の下で、世界の闇はいっそう濃くなっている……それでも世界史は、この戦いを気にも留めないままだった。空の戦争は、さらに続いた。それはただ、いかなる当局にも、指導者たちの中にも、空の戦争に反対し、交渉を行い、それに終止符を打つことのできる者が一人もいなかったからである。そして終に、組織化されていた世界中の政府は、どれも陶磁器を棒で打ち砕いたかのように粉々になり、瓦礫の山となった。

大国や帝国は、人々の口の端に上るだけの、ただの名前と化してしまった。どこを見ても、廃墟、埋葬されることのない死体、ぼろぼろの服をまとい、死人のように無表情な青ざめた生存者ばかりだ。ここには盗賊、そこには自警団、そしてあそこには疲弊した土地の幾らかを支配するゲリラ部隊がいる。奇妙な結び付きや団体が、現れては消えている。絶望から生まれた宗教的な狂信は、空腹にぎらついた眼を燃え上がらせる。これは広範で巨大な解体である。美しい秩序も地上の豊かさも、すべてはじけ散る気泡のように萎んでいった。」

この本は、ある会話で終わっている。あの戦争時代を生き残った、非常に高齢な男が孫に語りかける。

「かつてこの近くで大きな戦いがあったのだよ、テディ、空高くでね。家を50軒集めたよりも大きな、水晶宮¹⁵⁾よりも大きな、比べる物が無いほど大きな物が幾つも空中をあちこち飛び回り、互いに攻撃しあったんだ。そして、死人が降るように空から落ちてきた。恐ろしいことだ。だけど彼らは、あらゆる商売ができなくなるほど人を殺したわけではない。そもそも商売はもうできなくなっていたんだよ、テディ、それにもうどこにもお金がなかった。あったとしても、買うものは何もなかったのだ。」

「だけど、どうやって人々は命を落としたの？」と、少年は尋ねた。

「話してあげよう、テディ。赤死病は、いとも簡単に人間の命を奪うのだよ。埋葬のことなど、もうまったく話題にもならなかった。犬や、猫、鼠、馬までも、そいつは連れて行くんだ。終いには、どの家も、どの庭も、死体でいっぱいになった。ひどい臭いで、ロンドンへ行くことすらできなかった。水道や下水も汚染されていた——赤死病がどこからやって来たのか、誰にも分からない……私が知っているのは、そいつが飢饉の後にやって来たということだけ。そして、飢饉は恐慌の後にやってきた。そして、恐慌は戦争の後にやってきたのだ」

テディは思案してから、尋ねた。「赤死病は、何をしたの？」

「もうお前に聞かせただろう。」

「だけど、いったいどうして恐慌は起きたの？」

「どうしようもなかったのだ。」

「だけど、どうして戦争を始めたの？」

「なにしろ飛行船を持っていたから、そうするよりなかったのだ。」

「だけど、どうして戦争をやめなかったの？」

「身勝手だったからだよ。それによって、誰もが辛い思いをした——なのに誰もが、また他の人に辛い思いをさせた。そして何もかも、高慢さと愛国心でいっばいだった。そうやって彼らはすべてを台無しにしてしまう方を選んだのだ。彼らは、ただ続けた、ひたすらね。そして後になってから、絶望し、怒り狂った。」

「だけど、彼らはやめるべきだったんだね」と少年は言った。

「そもそも、それは始ま^ってはな^らな^かつ^たのだ」とトム老人は言った。「だが、人間は傲慢だった。そして思い上がり、うぬぼれていた。自分が譲^{ゆず}ること——それはなかった。しばらくすると、もう誰も、相手が譲^{ゆず}るべきだとも言わなくなった。もう誰も、それを望まなかった……」

彼は物思いに沈んで、やせた歯茎^なを舐めた。彼の視線は、飛び散った水晶宮のガラスが光を反射させている谷の上をさ迷っていた。幾つもの可能性を無駄に失ってしまったという、もやもやとした、とめどもない感情が、彼に押し寄せてきた。そして彼は、これらすべてについての最後の考えを——ゆっくりと、締めくくるように、あらゆる出来事に対する変えようのない非難の言葉を繰り返した。「思ったことを言えばいい」と彼は言った。「それは絶対に始ま^ってはいけなかった。」彼は、それをごく簡潔に述べた。「誰かが、どこかで、何かを阻止しなければいけなかったのだ。」

そのとおり、それは阻止されるべきだったのだ。しかしながら、何が起きているのだろうか？ 準備が進んでいるのだ。なるほど、我々はまだようやく、ほんの始まりに立っただけなのだが、それなのに、すでにどれほど空の戦争の準備を進めてしまったことか！ 私がこれを書いている今この時点で（1912年5月）、空を武装するための国家基金は、フランスでは300万フラン以上、ドイツでは200万マルク以上を集め、イタリアでは国王が——範を示すべく——自ら10万リラを基金に寄付し、そしてオーストリアでは戦争大臣がつい先頃、目下組織中である空軍協会のトップに自ら就任したと発表し、我が国でもこの「第4の武器」をしかるべく配備するため、これよりは——願わくは成果が得られるよう——国民の貢献が求められることになると呼びかけた。

それゆえいずれにせよ予想されるのは——たとえ空の戦争が起こらなかつたとしても、実際に諸国民の理性によってこの危険が回避できたとしても——いずれにしたところで、新たな

税、新たな物価高騰、狂気じみた軍備競争における新たな記録の樹立が、間近に迫っているということだ。

では、それを阻むために、それに歯止めをかけるために、どんな手が打たれているのだろうか？ 抗議の声が議会や新聞に上がっているのだろうか？ 社会民主党系の新聞を除けば、「リベラル」で穏健な世界中のあらゆる有力紙は、コメント抜きで、一言の異議も唱えることなく、それを伝えている。同じくコメント抜きで、彼らはその主導的立場に至極ふさわしく、募金を呼びかける記事を印刷する。そして眉一つ動かさずに、新しい兵器がトリポリ戦争においてすでに獲得した「成果」について報告している。つまり、空襲された隊列や陣営に引き起こされた混乱や破壊についてである。一体こうした報告を載せた人の中に、このような卑劣な殺戮に道徳的嫌悪感を抱く人間は一人もいないのだろうか？

怒りに駆られ、戒めを語る声は聞こえてこない。空飛ぶ兵器が未来において与える恐ろしい影響を喜ばしげに描き出す迎合的な声には、事欠くことはない。

『ガリア人』の中で、ロベール・ド・ミシェルは「来るべき独仏戦争」を描いている。

「宣戦が布告されていた。ライン川の対岸では、敵の軍勢がふたたびフランスに向け進んでいた。そして宣戦布告からちょうど2日後の192*年6月3日、最初の軍団がヴォージュ山脈¹⁶⁾に到達した。」ド・ミシェルの語るところによれば、偵察飛行機がこの進軍を発見し、それに続き、準備の整ったすべての飛行機に対し、無線電信によって出撃が指示される。

「まどろみの中にある野や畑の上、星明かりの空を、生ける矢は夜どおし一目散に飛び続けた（何たる天空の冒瀆^{ぼうとく}か！ B.ズットナー）。そして空が白みかかる時、50機の飛行機は東部国境に到達した。

そして今、深い沈黙に包まれながら、周到に用意された計画が実行に移された。午後4時、風が止み、大気が理想的に澄んだ時、一人の操縦士ともう一人の将校を乗せた50機の飛行機が飛び立った。これらは、100キログラムの榴弾、爆薬、メリナイト爆弾、そして空雷を装備していた。巨大な円陣を組んだ軍団は、国民のため命をかける覚悟を躊躇なく示す100人の英雄たちが現れると、ささげ銃^{つつ}をした。将校たちは剣を手に敬礼し、連隊旗は各機が離陸するごとに傾けられた。

そして訪れたのは歴史に二つとない事件、前代未聞の出来事であり、それはこの戦争、そしてあらゆる戦争に終焉をもたらした。それというのも、この時から戦争は不可能になったからである。……50機の鳥たちはヴォージュ山脈に到達していた。彼らは最初の前山の遥か上空を飛び過ぎ、それから第1の合図で、2日前からまるで両側を壁に挟まれたかのように峠道で押し合いへし合いする敵軍めがけて降下したのだ。第1の合図と同じく1番機が発した第2の合図によって、降下がとまった。エンジンの響きはふたたび鈍くなった。そして飛来した殺人

装置に今初めて気づき、まるで麻痺したかのように為す術なく見上げる敵軍の頭上で、飛行部隊は四方八方に散開した。同時に50人の将校たちは突如として鉄と火を雨のように降らせたが、この激しく一気に降り注ぎ、^{きょうあい}狭隘な山峡にひしめく連隊すべてを壊滅させる爆弾の雨は、どんな抵抗も無駄に、どんな退却も不可能にした。どうすればこの狭い石の廊下から空を舞う鷲たちを大砲で狙い撃ちできただろう？ 最後に投下された爆弾は、司令部を、そして王子たちと精鋭部隊をなぎ倒した。

彼方の地平線では、フランスへと帰る飛行隊が完璧な隊列を組んで飛んでいた。一方、刻々と影が延びつつある^{あいろ}隘路では、沈みゆく太陽の投げかける最後の光線が、ライン川へと敗走する皇帝軍最後の残党を照らしていた。」

こうしたことは、おそらくは起こらないであろう。しかしそれでもこれは、英知ある幾人もの人々が追い求め、勤勉な準備作業によって少なくともあり得ることとなった出来事を描いた未来図なのである。

しかし、こうした未来図を描き出しているのは物語の幻想だけではない。実際的かつ技術的な方法によっても、飛行場や展示場において、来たるべき空の戦争のメカニズムは好奇心旺盛な観衆に披露されている。ヴィーナー・ノイシュタットの軍用飛行場では、上昇した飛行機から爆弾に見立てられた砂袋が投下され、命中率がテストされている。そして大講堂で催された大航空学展では、規定通りに実行され成功した試射の実物展示として、撃破された武装ゴンドラを見ることができた。

ある絵入り雑誌では、この大講堂はとりわけ次のように描写されている。

「正確無比な名人芸で、経験豊かなオイラー、つまり最初の『真の』ドイツ人飛行士で操縦免許証番号1番を持つ航空術講師ハインリヒ王子¹⁷⁾は、我々に身の毛のよだつ、壮大な未来の空の戦争を見せてくれる。おおよその聴衆の考えとは異なり、飛行機からの爆弾投下が可能と信じる専門家はほとんどいない。未来の空の戦争は空からの戦争ではなく、空における戦争であり、飛行機対飛行船の戦いなのである。動かないようしっかり向きが固定された機関銃を機体に装備し、その照準は機体全体そのものを操縦することによって定められ、それは戦艦からの砲撃の照準を船体そのもの上下によって定めるのと同じである。飛行機の照尺は任意の距離に調節され、敵の戦闘機を照準線が捕えるや、銃弾が一気に連射される、——250発の集束弾道はほんの数秒後には敵の防御を引き裂き、5分間で3000発の砲火を浴びせることが可能だ。

『粗暴な力による手仕事』と呼ばれる戦争ほど現実味を帯びているものはないが、それでもその最新の兵器には感覚を麻痺させるようなロマンチズムが潜んでいる。我々の祖先たち

は、カタラウヌムの野における戦い¹⁸⁾について物語るとき、精霊たちも空中で戦っていたとおぼろげに感じていただけだった。しかし、それは現実となった。もっとも尊いものは命ではない、という意識に満ちあふれた若い将校たちが航空戦では自国が先んじていることを示さんと、群れをなして飛行士という任務に押し寄せているのを、我々は知っている。」

不思議なのは、このようなことを戦慄の叫びを上げず目にし読むためには、どのような黒そこひが人々の心の目を覆い、どのような角膜が彼らの鈍い心を覆っていないといけないのか、ということだ。

すべての人が、このように鈍感に振る舞うわけではない。

先ほど引用した『ガリア人』の中に描き出され、そして同国人に未来の空の戦争における勝利という楽観的確信を吹き込むことになる空想の中に、フランスにおける警告の声もまた存在している。その声は、敵の優位とその計画について得られる限りの情報を得た通信員の持つ調子で、報告をしている。

パリの新聞『エクセルシオール』には次のように書いてある。

「我が国の参謀本部は、休むことなく、そして注意深く我々の仮想敵国のたゆまぬ日進月歩の進歩を見守ってきた。ここに集められる知らせは、日々ますます不安をかき立てている。もし早急に断固かつ徹底的な措置が講じられなければ、状況は間もなく極めて憂慮すべきものとなるだろう。いかに突飛に、いやそれどころか、いかに絵空事のように聞こえようとも、ドイツ参謀本部が目下練り上げている航空機の戦時動員計画の頂点は——我々はこの情報の信憑性に自信がある——パリ空襲である。熱に浮かされたように、ドイツの飛行士はこの計画を実行するための武装に精を出している。ドイツからフランスに発注された航空機の大部分がすでに引き渡されているのは、もはや疑いない。そして3月終わりには、我々の敵は飛行軍隊のために十分な数の飛行機を揃えたであろう。我々に届いた確実な知らせが示しているのは、大胆さという領域も行動力という領域も、我々の独断場ではないということだ。ドイツの飛行機の最初の任務は、ほかでもない、パリ爆撃である。これによって、戦闘が始まるやたちまちのうち両国の国民と軍隊は、その精神と感情において影響を受けることになる。政治的緊張の瞬間、ドイツ軍部が保有するすべての飛行機は、すぐさま国境に、すなわち2ヶ所か、可能なら3ヶ所に集結し、最初の追い風を待つのである。宣戦布告の瞬間には、所定の合図によってこれらすべての飛行士が飛び立ち、^{あつら} 詭え向きの有利な追い風に乗って時速160キロの速さでパリへと向かう航路を取る。このように、彼らがエッフェル塔に到達するには、ほんの数時間も要さない。そしてせいぜい30分の内に、彼らは我々の首都に1万キロの爆薬を降り注いでしまうのである。一機ごとに運ばれるのは、これらの爆薬のうち40キロである。——我々はこの殺戮者の侵入を阻止し、彼らが破壊活動を成し遂げるのを防ぐことはできるのだろうか？ 目下

のところは、否である。例を挙げれば、シャロン¹⁹⁾の兵營で今日、離陸の準備が整っている飛行機はたった2機にすぎない。そしてエタンブ²⁰⁾では数週間前から飛行機は全機修理中なのである。」

この秀逸なラプソディーの結末は一目瞭然だ。速やかに国民を扇動し、国境警備につく（そして同時に——これは差し当たり口外されないが——ベルリンを脅かす）無数の戦闘機を即刻建造するための財源を確保するのである。

もし平和主義的世界観が好戦主義的世界観に対して優位に立っていれば、事態はまったく違った成り行きをたどり、航空術は新たな、より良い時代をもたらすことができたはずだ。しかし、現実とは違う。2年前、パリで次のようなことがあった。

今日では空軍のための募金に協力している『ジュルナル』紙が、当時、首都から首都をつなぐ周回飛行（パリ、ベルリン、ロンドン、ブリュッセル、パリ）の実行に20万フランの懸賞金をかけ、次のような呼びかけを掲げた。

飛行機、それは平和の道具

「人類は歴史の転回点に立っている。人々がその所有をめぐって争う象徴である土地と地表から離れ、人間は無量で不可分の領域という、それまで誰もとどめておくことのできなかった空の高みへと入った。もし何かがやって来て——かつてのノアの方舟の鳩のように——^{もろもろ}諸々の人種と国家の間に数百年も昔からわだかまる^{えんこん}怨恨をぬぐい去るのならば、それはこの高みの領域からやってくるだろう。なぜならこの、あらゆる人々が共有し、分かつことも奪われることもない領域が征服可能となるのは、ただ人類が自分自身に——すなわち自らの狂熱と高慢、偏見、そして憎しみの感情に打ち勝ち、人類共通の幸福という同じ願いのもとで一つになるときだけなのだから。」

同様の平和主義的感激が、さらに続いた。反響は大きかった。世界各地のもっとも著名な飛行士たちが参加を名乗り出た。あるドイツ紙は賞金にさらに10万マルクを上乗せし、この国際飛行の出発は1911年6月4日と決められた。

しかし、それは実現しなかった。すでにすべての準備が整っていたとき、パリの国粋主義的新闻各紙と国家主義的扇動家たち、とりわけカメロ・デュ・ロワ²¹⁾が、このような「非愛国的」考えに激しく異論を唱えた結果、『ジュルナル』は呼びかけを撤回し、催しは中止を余儀なくされた。

そして今日は？——世の風潮は実にすばやく逆転することが可能である。ただ残念なのは、もっとも効果的な成果を上げた声明は、今まで常に好戦的精神に貫かれたものなのである。なぜならそれはもっとも声高で、権力の中枢に支持され、そして常に^{い、いだくだく}唯々諾々とした大衆を昔馴染

染みの感情のルールへと押しやるからである。そこで大衆は——最小の抵抗力に関する法則通りに——実に軽やかに滑って行く。

あるイタリア将校が『ヴィタ・インテルナツィオナーレ』に論説を発表し、飛行術を爆弾投下に利用することに対して抗議をしたが、彼の次の発言は興味深い。もちろん、これはトリポリ戦争勃発以前の事である。この戦争については、広大な空から初めて死の爆弾を投げ落としたという、戦争史上の栄誉（！）が与えられるだろう。伝え聞くところによれば、（意図的ではないことを願うが）赤い半月旗²²⁾の翻る野戦病院もその標的となったと言われている。

「(空を征服し攻撃に利用することへの世間の熱狂について) 少しばかり不協和音を奏でることをお許し頂きたい (とカルメロ・ペラッツィ大佐は書いている)。私を突き動かしているのは、激しく心を揺さぶる思いだ。その思いにとらわれるや、私たちはただひとつの叫び、すなわち文明世界全体に訴える声を上げずにはいられない。もう十分だ！ 人間の尊厳を守るためには、もうやめねばならない！ 私がこのように発言するのは、人間精神の成果のひとつひとつを、その最も気高く純粋なものまでも戦争という野蛮な理念に組み込む、文化という概念に対する不道徳な冒瀆に腹をすえかねたからである。

——軍隊が科学上の新発見を^{ことごと}悉く取り入れてゆく過程には、戦争を高貴なものにし、発展を続ける文明に相ふさわしいものにしてしようという目的、——というよりは幻想があるように思えてならない。それはちょうど、絞首台の代わりに電気椅子を用いれば、死刑の与える恥辱が減らされるように思えるかもしれないのと同じである。

しかし、それは正真正銘の夢物語である。戦争は古いしきたりであり、その本質において、残酷かつ野蛮なものである。戦争は今日においても穴居人の時代と同じであるし、これからも戦争がある限り同様であり続けるだろう。」

さらにこの論説の筆者は、もしも戦士たちが地上を離れて広い空に展開することになれば、戦力の測定が不可能になると分析している。空中の戦士たちは、特に無限に広がる夜の虚空にあっては、いかなる発見、追跡、攻略も及ばない。別の表現をすれば、各国の軍隊が備える実兵力も、相手戦力の測定にこそ意味のある戦争も、その根拠を失うであろう。

「さて、もしこれが飛行術を戦争のために利用した結果ならば」——論説の締めくくりはこうである。——「つまり、空の軍備を推進する人々がまったく望んでいない結果になるならば、どうだろう。——というのも、軍用飛行機が大群となって飛来したとしても、祝福されることになるのだから。あるいは、軍人たちが新兵器に心から寄せている信頼が、その外部で反響を呼べばどうなるだろう。新しい航空産業の投機精神は、このようにして報酬を得ようとしているからだ——とんでもないことだ！ 偉大な成果を前に、この偉業に含まれている高貴

な理念を前に、目下のところ軍当局から出されている支援と激励は、今や新しい省庁から来ることにならなければいけない。その省庁とは、——今後は文明化した諸国民の運命を左右することになる、たった一つの——文化と進歩のための省庁である。」

武装した飛行船の使用に反対する覚書

(イギリスの教会、貴族、政治、学問、芸術の各界を代表する偉人300名による署名。その中には、10名の国教会主教、先ごろ逝去したリスター卿²³⁾、人気作家トマス・ハーディ²⁴⁾、ジョン・ゴールズワージー²⁵⁾、H. G. ウェルズ、コナン・ドイル²⁶⁾等の名前がある)

「私たち署名者は、戦争における武装した飛行機の使用に抗議する。すべての政府に対し、目下の戦争の残虐行為に新たな脅威が加わることから世界を守るべく、あらゆる可能な手立てを講じて国際的合意を形成するよう、私たちは呼びかける。

普遍的な合意なくしては、どの強国もこの災いを阻止することはできず、その災いのために日々英知が傾けられ、予算が費やされてゆけば、そのような合意の可能性は難しくなる。

機会は一度しかない。文明世界は、今や戦争がもたらす恐怖と浪費を認識した。ハーグ会議は、現実で開催されたのである。戦争の手段が進歩していく過程において、初めて諸国家は、その進歩を効果的に阻止するために必要な意識を持ち、必要な仕組みを持つにいたった。

教養を備えたすべての国家は、平和と友好を望み、今や著しく財政を圧迫する軍備負担を避けたいと望んでいる。この明言がつまらぬ偽善でないとすれば、空が支配され、人間が作り上げた機械の中で最も名誉あるこの機械の発明が愚かにも破壊目的に利用されるのを、黙って見過ごすことはできない。軍備負担の深刻な増加をもたらす新たな道がとられるのを、何もせずに認めるわけにはいかないのである。

その恐ろしさゆえに人間に戦争を断念させる空の戦争は、禍という仮面を被った祝福である、このように考える人はおそらく多い。その人たちに言おう。それでも教養世界は、新しい、手当て可能な型の病がもたらす惨害を認めることはない。たとえその惨害によって恐怖に陥った人間たちがますます必死に結びつき合い、あらゆる型の病気の撲滅を目指すよう仕向けられたとしても、である。さらに、こうも言いたい。人間の本性がいかなる形の恐怖にも耐えることはとっくに証明されているが、あなた方はその適応能力を過小評価している。

また、戦争という刺激がなければ飛行技術は満足に発展しない、と言う人もいる。その人たちに考えてもらいたい。人類の歴史を見れば、需要があるところには——たとえ平和な生活という目的のためにすぎなくとも——供給もあるという希望を、私たちは失うことはない。それらを相互破壊のためにではなく、相互援助のために利用すると決断したことによって飛行技術

の進歩が実際に数年間遅れることがあったとしても、それは人類にとって決して損失ではないだろう。

すでに地上と水上で戦っているのだから、同様に空中で戦ってもよいのだ、と考えている人は多い。その人たちに答えたい。今日まで、陸と水で用いる戦争道具の排除が現実にも可能だったことは一瞬もなかった。しかし、空の兵器を排除することが実際に可能となる瞬間はある。その瞬間とは、この道具の利用が試される前の、そして大きな関心がそこに集まる前の——まさに今なのである。政府には、人類の現在だけでなく、未来も委ねられている。運命はこの決定的な瞬間を、政府の手に委ねた。私たちが切に願うのは、彼らがそれを賢明にも行使することである。」

今まで、この呼びかけが聞き入れられることはなく、無視されたままだった。理性の声が、もうそろそろ、そのことに慣れてしまっているのは間違いない。

軍人の間では二つの原則が認められているが、その中身を見れば、軍当局の空軍問題に対する態度が十分理解できる。すなわち、

1. いかなる新しい技術的方法も軍備に応用しなくてはならない。それは破壊力があるほど望ましい。
2. 「他国」が軍事力増強のためになすことはすべて、「我々」もすぐにも模倣し、可能ならばそれを凌駕しなくてはならない。

この二つの原則により、すでに四つの武器において揺らぐことなく遵守されてきた当然のやり方が、「第5の武器」においても十分に公言され、正当化されるのである。方向はすべて決まっていて、道は真っすぐで、目的地は見えている。この二つの原則を馬の目隠し革のように用いて精神の目を覆い、ひたすら真っすぐ進め、と命じる、——もはや右や左の考えは存在しない。付随的影響や結果についての問題は議論されないままである。「それからどうなるのか？」という問いは、返答のないまま放置されるか、やんわりと脇へ追いやられる。

あの二つの目隠し革によって、ことはすこぶる順調に^{はかど}捗るにちがいない。というのも、奇妙なことに大衆も議会も新聞も、皆がそれを身に着けて、いかなる手段も防衛力の強化のために役立てねばならない、隣国がするから我々もそうするのだ、そうに違いない、と思いつむのである。声を聞き入れられることのない、ほんの少数の者だけが、「それからどうなるのか？」という不安を潜ませた問いに苦しむのである。飛行装置がこの4年間と同じ勢いで今後の10年間に増加し、飛行機の大軍が太陽の光を遮るほどになれば、それからどうなるのか？すでにツアーがマニフェスト²⁷⁾を公けにした時代に、もはや賄いきれないと認められていた軍事費が、物価上昇や貧困にもかかわらず、さらに増大することになれば、それからどうなるのか？

さらなる発明がなされ（どこで遠隔操作の船を止めるのか？）、今の無線電報のように、死と破壊がいわば無線によってあらゆる場所にばらまかれることになれば、それから一体どうなるのか？

さあ、どうなるのか説明をせよ！

しかしまた、この気懸りな問いが脳裏から離れないあなた方も、それをもっと大きな声で叫ぶべきである！ 沈黙したり、無気力であったり、諦めていてはならない。あなた方の良心のためらい、心の内にある抗議の声を、「どうせ無駄だから」という臆病な嘆息で抑圧してはならない。無駄なことは、ひとつもない。悪いことが起こるときは、それを行う人だけでなく、それを黙って見過ごす人にも罪がある。

もちろん私たち反戦論者は、釜の炎がこのように激しく立ち上れば、当然「戦争」という釜が丸ごと弾けると考える。このように考えるのは、妥当なことである。とんでもないことに、文化全体が一緒に吹き飛んでしまうかもしれないのだ。あるいは、避けうるはずの、恐ろしい破局が突如として始まるかもしれないのだ。それに真実と知っていることを口にせず、悪や危険と認識していることに、いついかなるときも全力で立ち向かわないのは、不名誉なことである。

それに、その方法はとても単純であり——簡単なのだ。イギリスの覚書にあるように、列強は取り決めを行い、第1回ハーグ会議のときのように、飛行船や飛行機からの爆撃を禁止する国際法を定めねばならない。私たちは井戸に毒を入れることを禁止したのではなかったか、ダムダム弾や諸々のことを禁止したのではなかったか、今度はまずすべてを——たとえば伝染病の病原菌を敵国に撒くことまでも——許されることとしなければならないのだろうか？

私は、この取り急ぎ公けにする冊子の中で述べたすべてを（それは私と無数の同時代人の心に燃えているものの百分の一にも満たないが）、声明の形にまとめた。詳細な根拠は省略し、簡潔にしよう——この声明に署名を望んだ人々はもとより同じ心であるし、この声明の反響が十分に大きくなれば、これを読む人々は、その内容によってではなく、その反響によって心を動かされるであろう。たとえ彼らが耳を閉ざし、助けを求める声が救いに結びつかないとしても、これは自らの良心を解放する叫びとなり、禍に手を貸さなかった数名の名前が記された、後世のための証拠となるのである。

声明

破滅をもたらす浪費と文化を脅かす危機、そして最近征服された天空への戦争拡大を含む、

文化的良心を損なう蛮行を前にして、私たちは今や至る所で始まっている飛行船の武装化を扇動する動きに抗議する。

野戦病院までも狙われた可能性のある、トリポリで実行に移された飛行機からの爆弾投下に対して、とりわけ激しく抗議する。

そしてできるだけ早く——可能ならば次のハーグ会議開催前に——第1回ハーグ会議において5年という期限で採択された飛行船からの爆弾投下禁止を更新するため、列強間で協定を結ぶよう国民の代表者と指導者に強く求める。

理性と慈悲の名において、そしてその誇るべき最新の偉業が一層高い文明時代への展望を切り開いた人間精神の名において、そして神の名（ここでいう神とは、信仰のあるなしに関わらず、各人が仰ぎ見る最も崇高なものと気高いものを含む）において、この要求は唱えられねばならない。

テキスト

Bertha von Suttner : Die Barbalisierung der Luft. Verlag der Friedens-Warte, Berlin 1912.

注

- 1) Bertha von Suttner (1843–1914)。オーストリアの小説家、平和運動家。キンスキー家の伯爵令嬢としてプラハに生まれ、33歳のときにウィーン北西の町ハルマンズドルフに領地を持つズットナー男爵家の令息アルトゥーアと結婚。1889年に反戦小説『武器を捨てよ！』（„Die Waffen nieder!“）を発表した後、オーストリアに平和協会を設立し、ハーグ平和会議をはじめとする様々な国際平和会議に協力するなど、ヨーロッパの平和運動の最前線で活躍する。一時期A. ノーベルの秘書を務めたことから、彼と生涯に渡る親交を保ち、ノーベル平和賞の設立にも大きな影響を与えた。1905年、女性として初のノーベル平和賞を受賞。彼女の主要な文学作品は、Bertha von Suttner : Gesammelte Schriften. 12 Bde. Dresden 1907. に収録。邦訳では代表作『武器を捨てよ！』（ズットナー研究会訳、新日本出版社、2011年）が出版されている。
- 2) Bertha von Suttner : Der Kampf um die Vermeidung des Weltkriegs. Randglossen aus zwei Jahrzehnten zu den Zeitereignissen vor der Katastrophe. 2 Bde. Zürich 1917.
- 3) ギリシャ神話に登場する少年。羽根を鐵で固めて作った翼で父とともに空を飛ぶが、あまりに高く飛翔したため太陽の熱で餌が溶け、墜落する。
- 4) William Thomas Stead (1849–1912)。イギリスのジャーナリスト。月刊誌『レヴュー・オブ・レヴュー』創刊者。
- 5) オレンジ王家の夏の離宮。平和会議の会議場となった。
- 6) Ferdinand von Zeppelin (1838–1917)。ドイツの元軍人で発明家。また「ツェッペリン」は彼が発明し実用化に成功したツェッペリン飛行船の略称。
- 7) 1903年12月17日、ライト兄弟は飛行機の初飛行に成功する。第1回の飛行は12秒間、飛距離はおおよそ37メートル。4回目の飛行で、59秒間、おおよそ260メートルを記録した。

- 8) 7月25日、ルイ・ブレリオ (1872-1936) はドーバー海峡横断初飛行に成功。10月18日、シャルル・ド・ランペール (1865-1944) はパリのエッフェル塔を50分あまり周回飛行した。
- 9) オーストリアの首都ウィーンの南方50キロに位置する町。1909年、飛行場が建設された。
- 10) ポーン、ナイト、クイーン、キングはチェスの駒。
- 11) キング (将棋の王将に相当) を安全な盤の端へ、ルーク (飛車に相当) を活躍しやすい中央へと同時に移動させる手。
- 12) Herbert George Wells (1866-1946)。イギリスの小説家、評論家。ロンドンの理科師範学校で学んだときに、進化論の立場をとる T. H. ハクスリーから大きな影響を受ける。『タイムマシン』(1895)、『宇宙戦争』(1898)、『空の戦争』(1908) など。
- 13) Jules Verne (1828-1905)。フランスの作家。劇場や証券取引所に勤務しながら劇作を続けていたが、その後多くの空想的科学小説を執筆して、SFの分野を切り開いた。『海底二万マイル』(1870)、『八十日間世界一周旅行』(1873) など。
- 14) 以下の引用は、ウェルズの『空の戦争』(1908) からのものである。
- 15) 第1回万国博覧会が1851年にロンドンで開催されたおり、J. バクストンの設計によって展示館として建設された建物。材料はほとんどが鉄とガラスで、その斬新で機械的な美しさから初期近代建築の代表作とされている。
- 16) 現在のフランス東部、アルザス・ロレーヌ地方にある山脈。この地方は歴史的にドイツとフランスそれぞれが領有権を主張してきた。『空の野蛮化』執筆当時はドイツ領 (1870-1919)。
- 17) August Heinrich Euler (1867-1957)。飛行機製造工場を造るなど、航空分野で活躍。ドイツ初の飛行操縦ライセンス取得者。
- 18) 451年、フン族と西ローマ・西ゴート連合軍が戦い、フン族が退けられる。
- 19) フランス北東部の都市。
- 20) パリ近郊の町。
- 21) 1908年に創設された国粋主義的暴力組織。
- 22) イスラム諸国で用いられている、赤十字社の標章 (赤新月) を指す。
- 23) Josef Lister (1827-1912)。イギリスの外科医。フェノールによる無菌手術の創始者。1897年に、医師として最初の男爵を授けられる。
- 24) Thomas Hardy (1840-1928)。イギリスの小説家、作家。代表作に『テス』(1891)、ナポレオン戦争を題材にした長編叙事詩『霸王』(1903-08) など。
- 25) John Galsworthy (1867-1933)。イギリスの小説家、劇作家。代表作に、三部作『フォーサイト家の記録』など。1932年にノーベル文学賞受賞。
- 26) Conan Doyle (1859-1930)。イギリスの推理小説作家。「シャーロック・ホームズ」シリーズで人気を博す。
- 27) ロシア皇帝ニコライ2世は、1894年に軍備縮小と国際平和会議の開催を求める平和のマニフェストを布告した。

Bertha von Suttner: “The Barbarization of the Sky”
(„Die Barbarisierung der Luft“)

Translated by Osamu ITOIGAWA and Mitsuo NAKAMURA
Foreword by Peter van den Dungen (Translated by Kazuyo Yamane)

“The Barbarization of the Sky” („Die Barbarisierung der Luft“) is a booklet published in 1912 written by Bertha von Suttner (1843–1914), the Austrian novelist, peace activist and first woman Nobel Peace prize laureate (1905). Following the success of her novel, “Lay Down Your Arms!” (1889), she became a leader of the European and international peace movement who incessantly wrote (and organised) for disarmament and the abolition of war, especially for preventing a threatening world war.

This essay, one of the many fruits of her political journalism, warns of the possibility of the destruction of civilization as H. G. Wells had depicted in his science fiction when an airship or airplane is used for war as a result of the remarkable development of aviation technology. The direct motive for writing this essay was the first air raids in the Tripoli War in 1911. She published it as a booklet so that she could inform many people of the barbarization of the sky which she regarded as a serious problem in the history of civilization. This year marks the 100th anniversary of the publication of the essay. The Japanese translation of this important and prophetic essay makes it available to many new readers who will appreciate the author’s significant role in the peace movement of her time.

「能仁新報」よりみた名古屋の仏教（二）

——明治二十四年一月～明治二十四年十二月——

川 口 高 風

凡 例

- 一、本稿は「能仁新報」に掲載されている現在の名古屋市内にあたる地域の仏教関係の記事を採録した。「能仁新報」（名古屋朝日町五十六番戸 能仁社発行）の原本は東京大学法学部の明治新聞雑誌文庫に所蔵するものを使用した。同文庫には明治二十三年五月十二日発行の第一号より明治三十三年六月二十五日発行の第六四九号まで所蔵するが、明治二十四年六月八日（第五十七号）、六月十五日（第五十八号）、同二十七年九月七日（第三三三号）から同二十八年七月三十日（第三七〇号）、同二十九年十一月十六日（第四三八号）から同三十一年八月三十日（第五五五号）までの発行号数は欠本となっているため、その間の記事はない。
- 一、第二回は「能仁新報」第三十五号（明治二十四年一月五日）より第八十六号（明治二十四年十二月二十八日）までから採録した。ただし、第五十七号、第五十八号は欠けている。
- 一、翻刻にあたり仮名使いは原文のままとし、旧漢字は新漢字に、変体仮名はすべて平仮名に改め句読点を付した。なお、記事に付してある漢字のルビは削除し、明らかな誤植は訂正した。
- 一、記事は掲載年月日順に配列したが、記事中に「当市」とあるのは名古屋市のことである。

和同教会の演説〔明治24年1月5日 第三十五号〕

新年の大演説を、来る七日午後六時より杉村久国寺にて開会せらるゝ由。

愛知仏教会の理事〔明治24年1月5日 第三十五号〕

水野道秀、伊藤覚典の両師は、俄かに見附地方有志者の招聘に応じて、本日より該地へ赴かる。

温知会講義〔明治24年1月5日 第三十五号〕

同会は例の如く、十日には講義を開き亦討論会をも催さると云ふ。

新年法会及演説の概況、予て報導せし一月一日、大光院に執行せられたる羅漢供養会は、参詣最も多く七百余名と見受たりしが、参詣者には供物を配付し、亦福引等の進物を施与せられなり非常の盛会なりき。△二日浄念寺に催されたる仏教会派出演説は、全日午後〇時廿分頃より参聴者続々詰かけ、二時頃は四百余と見受たり。第一席黒田安麿（開会の趣意）、第二太田慈観、第三土方軼鞞（道徳の必要）、第四水野道秀（新年の仏法）、第五黒部莞善（實際の必要）、第六（仏教の来歴）、広間隆円、その他笠間龍跳、伊藤覚典氏交々演壇に登り能弁を振はれたり。△廿三日夜中、市場町仏教会講義堂に於て催したる演説も出席、例の広間、伊藤、水野、土方等の諸氏にて聴者満堂、新年の仏教運動に斯く盛会を報ずるを得るは、読者諸君と共に我が仏教の万歳を観念す

るなり。

篤信の老尼〔明治24年1月5日 第三十五号〕

当市の豪商なる森本善七氏の北堂周光尼は、曾て曹洞宗故管長突堂禪師に帰依し、参禪の法を聴聞せられしことありしか、遂に得度式を受、其の法弟となられ、時後深く仏教を信し、毎月各寺院に行はれし授戒及説教の法席へは、風雨をも厭はず怠りなく参詣せられ、頗る篤信の老尼なりしが、去月中旬より胃弱重症に罹られしとの事なり。

山内宗弘氏〔明治24年1月5日 第三十五号〕

全氏は曹洞宗照運寺の元徒弟なりしか明治十二年に全宗大学林へ入り、其の学を卒爾後研究生に挙げられ、各宗の教義を研究し、亦其の業を卒へ目下帰名中なりとの事なり。

仏教青年懇話会の景況〔明治24年1月12日 第三十六号〕

去る五日、当市七ツ寺万梅に於きて開きし仏教青年懇話会は、同日午前十時より門前町善篤寺に於て大演説会を開き、数十名の弁士は各々雄弁を奮ひて得意の演説を終り、午後二時より宴を張りしが、先づ七ツ寺の門前には六根色の彩旗を交叉し、境内外には数千の球灯を点し、席上には世尊の尊影を安置し、之に相對したる東面に 陛下の御写真を奉し、席定まるや高橋仙定氏立ちて來会の辱けなきを謝し、次て黒田安麿氏開会の主意を述べられし

が、終つて鳴海青年会員某、次に宮田某、安藤、山田、土方の数氏等の演説ありて盛大なる宴を開きて退会せしは午後六時頃なりしが、当日の来会者は左の如しと云。

高橋仙定	黒田安磨	伊藤栄二郎
黒部莞善	広間隆円	日下部徳兵衛
近藤疎賢	中村颯宗	高橋順庵
福田伝兵衛	小林新三郎	鈴木鏢太郎
片桐孫六	吉川鉄二郎	丹羽如元
中村鉄二郎	虎山義舜	渡辺元令
安藤 儼	土方善照	土方鞆鞆
細井鏡二郎	鬼頭宗誠	伊藤由太郎
高木礼讓	佐久間国之助	早瀬了源
毛受 鼎	松井万作	安井得珠
安部亮真	内山全芳	山本竹三郎
小楠月潭	森 無隠	関 灯心
長橋芳太郎	成田観順	伊奈全馨
雑本宋隣	伊藤慈言	横山証太郎
山田龍太郎	石黒柳太郎	中村鎗太郎
太田助作	伊奈田善助	宮田由太郎
市川吉作	杉山源太郎	古沢鍵治郎
都築種吉	都築定二郎	山田尊照
浅井密成	加藤賢龍	牧野蟻熊
小島麿	近藤一二郎	加藤某

山崎熊龍	青山禅明	橘 成典
鈴木唯之	棚橋半三郎	羽塚慈音
木村藤四郎	天野憲意	中野勘左衛門
高橋駒之助	阿部小兵衛	神谷兼吉
平野大仙	野田弥十郎	田中祖芳
玉田宗運	鈴木徳宗	大崎 某
大田慈幹	伊藤慈眼	武市 某
小友 某	扶桑社員市川	勇猛会某

報恩講〔明治24年1月12日 第三十六号〕

昨十一日より五日間、門前町西別院及び替地町高田別院に於て宗祖大師の報恩講を修行せらる。尚ほ西別院の説教は本多浄嚴師なりと云。

曹洞宗親睦会〔明治24年1月12日 第三十六号〕

過る六日午後一時より宮出町永安寺に於て全宗の有志会散会に就き、将来は一宗協同一致して宗門の隆盛を図らん為め催されし由にて、本社員の全席に列せし者の話に、当日は全寺門前に親睦会場の紅札を掲げ、且つ六金色の旗数流を交叉し、会場は全寺大書院にて参会者は知多、海東、中島、東春日井、西春日井、愛知、海西等各郡より三河地方等各郡よりも惣代員を派出し参会せられたり。着席後会主は祝詞を朗読し、続て有志会本部より解散を報告せし第一義号外の朗読、其の他当支校教師雑本東隣氏祝詞及近

藤疎賢、伊藤寛典、水野道秀氏等交立て席上の演説を成し、一同歡を尽して散会せしは午後六時なりき。

般若心経講義〔明治24年1月12日 第三十六号〕

当市宮出町永安寺に於て、毎月十四日午後一時より笠間龍跳師の派出講義は、久しく全師が各地方巡化中にて休会なりしが弥来る十四日より開講せらると云。

四恩会と温知会〔明治24年1月12日 第三十六号〕

二会共一昨十日は例会日にて、四恩会は午後一時より出席弁士は黒田安麿、伊藤寛典、近藤疎賢、中村甄宗等の諸氏にて参聴百五十余貧民へ施米等もあり。亦全夜六時より開会せし温知会の講義は出席広間隆円、水野道秀、江尻深海、平野允仙、高橋仙丈の諸氏にて最後討論会となり、「宗教伝道は直接と間接と功力如何」と云の題なりしが、各論者は一々発言壇に登り雄弁を振はれしが、全夜は先づ中止して閉会せられしが、参聴は無慮三百余名と見受たり。

刈谷仏教青年会の運動〔明治24年1月12日 第三十六号〕

同会員は同地へ耶蘇宣教師の入り込み布教せしの故を以て一大運動を為し、該教をして容るゝに余地なからしめんとて、名古屋より西川弘情居士を聘して今十二日大演説会を開かるゝ由。

仏教会演説〔明治24年1月12日 第三十六号〕

来る十六日、上宿大谷派興西寺に於て同会の演説を開かるゝに付き、出席せらるゝ弁士は水野道秀、土方軻鞞、伊藤由太郎の諸氏なりと云。

仏教勇猛会発会〔明治24年1月12日 第三十六号〕

当市中央部の有志会諸氏の設立なる同会の新年発会を、本日午後三時より七本松牡丹亭にて開かるゝ由なるが、該会は壮年諸士の団体にして専ら仏書の研究を基として自行化他の目的より成立し居るものなりと。

自由神学布教者ペリン氏と近藤疎賢氏の問答〔明治24年1月19日 第三十七号〕

去る十五日夜、当市本重町新守座に於て演説を開会し大失敗を取りたる神学博士ペリン氏は、曾て当市の諸新聞に自由神学の質問を為さんと欲する者は旅宿に於て許すべし云云との広告に由り、当杉村久国寺住職は去る十五日午前九時より秋琴楼に於きて同氏と問答せし顛末となりて、特に本社に寄せられしかば掲げて以て読者の一覽に供す。

小杉氏の講話〔明治24年1月19日 第三十七号〕

昨十八日、当市中市場町仏教会仮講堂に於て開講せらるべきの処、都合に由り関鍛冶町三丁目菅井孫右衛門氏方にて開講せられ

しが非常なる盛会なりきと。尚同菅井氏は共済会の為め目下専ら尽力せらるる居る由なるが、仏教の為め真に賀すべき事なり。

軍人説教と法雨協会の演説〔明治24年1月19日 第三十七号〕

昨十八日、当東別院に於きて午前は師団の軍人説教、午後は法雨協会五週年の大演説を開かる。

熱田西福寺の婦人会演説〔明治24年1月19日 第三十七号〕

来る廿一日に開会さるゝ同会の演説には、当地より青年会の主唱者黒田安麿氏が出席さるゝ由。

講義〔明治24年1月19日 第三十七号〕

本日午後六時より塩町榊原栄蔵氏宅に於て、仏教会の派出講義を開会せらるゝ由にて、出席は広間隆円、水野道秀、笠間龍跳氏等なり。

愛知曹洞宗の雲行き〔明治24年1月19日 第三十七号〕

全宗は目下取締改撰期にて、既に各寺院住職へ本月十日迄に投票し、之を支局に進達し、支局は亦之を纏めて本月廿日迄に東京宗務局へ送致するの手續きなれば、中原の鹿は未だ其の何人の手に落ちるやを知るに由なきも、今測候器に依て推考せば、其の雲行きは実に変幻窮りなき異動を示して予想し難し。近頃愛知県には三派を生し笠間派、曰く杉本派、曰く生駒派と、而して其の生駒派

の人々は、此頃も当市三新聞か一時に書き立し如く、生駒氏は高德なり碩学なり事務家なり事業家なりとの標準あり。或は外人を投票せば封紙外より頭れ出て、他日眼玉を頂戴してはとの御用心の方もある由、亦笠間派の人々は、全氏は前年取締を勤務せられし事もあり。且つは取締期限を三ヶ年とあれば時々交迭して勤務するは法律の精神なれば、交迭方可然の人も多きが、何分笠間氏は取締事務の如き繁忙なる事は面倒なりとて、既に此頃も本山より山詰執事の内命ありしも辞せられし程の事なれば、迎も就任はせられまじきが、亦杉本派の人々は取締職を老境の人のみに推して当らしむるは、将来繁忙なる宗教社会の得策にあらず。断然全氏を推すべしとて知多、三河、地方非常に熱心の由なるか、何んにしても其の雲行きは随分冬の天候に能く似たりと投書の俚。

愛知仏教会講義〔明治24年1月19日 第三十七号〕

門前町大光院内転愚堂に於きて、毎月十五日廿七日午後第七時より

羽翼原人論

講師 笠間龍跳師

愛知仏教会講義〔明治24年1月19日 第三十七号〕

中市場町二丁目中村嘉兵衛氏方にて、毎月三の日午後七時始

原人論

講師 伊藤覚典師

三国仏法伝通縁起

講師 広間隆円師

江崎接航師〔明治24年1月26日 第三十八号〕

同師は曾て当市に住職せられし事もありしが、前年曹洞宗管長の命により対馬国々分寺に住職となられしより絶海の孤島にありて、頻りに宗教の拡張に尽力せられしが、元來同国は全島悉く曹洞一宗にて、大に同宗の爲め本山に於ても布教に注意せられしが、特に今回同島に警備隊を置かれし以來、将校の渡島せらるゝもありて、学識徳望共に高き者を要するより師の任命ありしに、客年十二月同宗本山より宗局詰を命せられしに、同島民は大に師の徳望を慕ひて在島の義を請願せしも、遂に許可せられざりきと。

一切経を寄付せらる〔明治24年1月26日 第三十八号〕

当市の豪商原兵一郎氏は、愛知仏教会の主義を賛成して入会せられしのみならず、曾て秘蔵せられし一切経の印本を同会に寄付せられし由。同氏の特志感ずるに余りあり、尚ほ同会には之れを秘蔵する方法等の協議中なり。

演説に示談〔明治24年1月26日 第三十八号〕

当市大津町光円寺に於きて、毎月二十四日午後一時より演説を開き広く青年有爲の人をして仏教の妙理を知らしめ、夜間は法筵を開きて信者を集め一宗の安心を決定せしめんと既に先般来開講せ

られ居りしか、去る廿四日も同様開会せられ、尚ほ爾後は毎月開会せらるゝと云ふ。

愛知仏教会講義〔明治24年1月26日 第三十八号〕

門前町大光院内転愚堂に於きて、毎月十五日廿七日午後第七時より羽翼原人論

講師 笠間龍跳師

愛知県曹洞宗中学林〔明治24年2月2日 第三十九号〕

勅語贈本奉載式は、廿八日学林監理代岡田玄峰、教授楠成典の二氏は市役所より奉載し来られ、職員及び生徒一同は門内に整列して雷鼓に連れて同林大講堂に奉安し、同宗の法式に由り祝聖即ち今上皇帝の万歳を祝し奉り、監理は賜勅の所以及び訓示諭告等を一統に報告し終りて行茶室に著席して一同へ茶菓の礼を行はれしと云ふ。

織田氏の菩提所荒れなんとす〔明治24年2月2日 第三十九号〕

本号に掲げし織田公の真像は、当市裏門前町臨濟宗総見寺寺号は信長公の号は内大臣信雄公御父信長公の爲めに創立ありし名刹にして、一千三百余石の香華料あり。且右府信雄、豊太閣等の諸公の遺墨等も今に現存せるが、去る年出火の災に罹り、殿堂悉く烏有に皈せし上、寺祿奉還等の爲め目下漸く仮堂に諸公の靈牌等を奉安しある位なるを、現住酒井恵遂氏は深く慨歎し、四方の有志と謀り本

堂庫裡を再建せんと企てられしを聞召され、宮内省より若干円と内務省よりは若干の寄贈ありしも、何分容易の事業に非ざれば何れ同寺の寺伝をも本紙に掲ぐべけれど、斯る名刹の荒敗せんは歎はしき至りなり。

法園会の演説と新年会〔明治24年2月2日 第三十九号〕

去る廿二日、当市鍋屋町円明寺に於きて定期演説及び新年の宴を挙行されしが、門前には六根色の彩旗を掲げ、境内には数百の球灯を点じ、山形にツルシ書院の広間の正面には、陛下の尊影を奉じ神酒饌物を捧げて会員交々奉拝し畢て、惣員起立して 天皇陛下の万歳を、仏教の万歳を唱へ終て、広間隆円、近藤疎賢、西川弘情、土方鞞の諸氏の演説ありしが、同夜は同会の新年会を催ほし席上数氏の演説等ありたる由なり。

熱田通信〔明治24年2月2日 第三十九号〕

愛知仏教会熱田支部会に於ては、去る廿四廿五両日日本部より近藤疎賢氏を聘し大演説会を催せり。因に出席支部員には加藤灌寛、安達恵等、浅野提鈿、岩田廓念、神坐榮彦、等の諸氏なりしが参聴頗る多く、最と静粛として時に拍手喝采あり。頗る感動を与へられたり。亦去月以来組織せられたる加藤灌寛、安達恵等其他諸氏の主唱に係る仏教青年会は、破邪顕正外教撲滅を目的として頻りに運動せらるといふ。△熱田仏教青年会は昨年十二月中旬、横井灌瑞、林泰寛、加藤灌寛、其他両三名の青年諸氏が破邪顕正の

主意を以て当地に耶蘇教の跡を絶滅し、熱田神宮の靈地をして永く清域たらんとするの熱心より之が首唱者となり、頻りに奔走尽力して同志を結合し、去月十一日、神戸亀井山に於て始て懇親の宴を開き相会する者廿余名、互に温話霽然、茲に弥々本会を組織するに決し、直に投票を以て幹事六名を撰定し了て吉田、安達、加藤、神座、平野、浅野等の諸氏各々席上演説祝交朗詠幻燈の余興を添る等、実に盛況を極めて歓喜の中に退散し、更に十六日を以て相談会を催し、本会規約十五ヶ条を評制し、其第一着の運動として十八日午後六時大演説会を開筵し、岡谷、加藤、神座、浅野、安達等の諸氏外両三名各々雄弁を逞して本会の主旨を発表し、尋いて廿三日午後七時、原人論を開講し以後毎三回の講義、一回の演説を以て漸次本会の目的を達するの経緯として一団体を成す者なり。而して衆人の推す所を以て足利灌柔氏を会長とし、坂本三太郎、佐治七三郎、林泰寛、横井灌、安達恵等、平野貞道の六氏幹事たり。講師は平野貞道氏が当分担当する所なり。会員は目今四十余名に達せり。尤も講義は会員外の者と雖も随意に参聴を許すこととせり。

大高通信〔明治24年2月2日 第三十九号〕

愛知仏教会大高支部に於ては、過る廿六日全新東昌寺に於て定期演説を開会し、本部より石川穰然、伊藤慈玄の両氏を聘せり、参聴旧年末にては僅かに七十余名なりしが頗る謹聴せられたり。旧春は盛大なる新年会を催すの計画なりと云ふ。

仏教会派出演説〔明治24年2月2日 第三十九号〕

過る廿八日、大光院内転愚堂に於て催されたる全演説は、出席水野道秀、伊藤寛典、渡辺玄齡、伊藤慈玄、土方全禅等の諸氏なりしが、参聴凡そ三百余名と見受たりしが、最も静肅として時に拍手起り頗る感情を与へたりき。

仏教会本部移転〔明治24年2月2日 第三十九号〕

全会の本部は門前町極楽寺なりしか本日 of 広告欄にもある如く、全処は狭隘にして会務取扱上不都合なればとて、大光院内へ移転せられたり。

曹洞宗学林〔明治24年2月2日 第三十九号〕

全宗の学林は小学林中学林の二科にして学生九十余名あり。総監督山崎眠龍、教師橋成典等の諸氏は、同林内の綱紀を厳肅にし頻りに策励に熱心せられしより、大に近来は学生の風紀を整へりとの事は聞及たりしか、過る廿日以来臨時試験を挙行せられたりと云ふ。

雲英晃耀氏の還曆賀〔明治24年2月2日 第三十九号〕

因明を以て有名なる真宗大谷派嗣講三河国雲英晃耀師は、本年還曆に当るを以て四方詞客の文詞を募り祝賀の筵を開かるゝよしなるが、寄稿は詩歌画の三種にして縦八寸横六寸二分(曲尺)の鴛さ、又は白紙にして届所は当市皆戸町長徳寺、或は押切三丁目富

田領助の二氏方へ二月十五日までなりと謂ふ。

愛知仏教会講義〔明治24年2月2日 第三十九号〕

門前町大光院内転愚堂に於きて、毎月十五日廿七日午後第七時より

羽翼原人論

講師 笠間龍跳師

広告〔明治24年2月2日 第三十九号〕

当会本部位置二月一日ヨリ門前町大光院へ移転ス

愛知仏教会本部

本会々員募集儀各位の御精力に依り、大に整頓の場合に至り。既に一万余に達せり。猶此の際各位の御精力を得て会員を増殖し、本会の目的とする数種の事業を挙行し、吾が仏教の光輝を中外に発揚せんとす。各位護法の為第一層会員勸募御尽力に相成度候也。

明治廿四年二月一日

愛知仏教会本部

本市各宗御寺院及本会奨励委員御中

愛知仏教会講義〔明治24年2月2日 第三十九号〕

中市場町二丁目中村嘉兵衛氏方にて、毎月三の日午後七時始

原人論

講師 伊藤寛典師

三国仏法伝通縁起

講師 広間隆円師

真徳講〔明治24年2月9日 第四十号〕

当市真宗大谷派部内に設立したる真徳講は来る廿日、小林町楽運寺に於て開講の式を挙ぐるに付、同派本山よりは御消息の下賜ありたるが、当日は海東郡万須田村速念寺住職にして三等勸令使なる前田学師を聘して説教を開筵し、右消息も拝読致さるゝ由。

仏教青年会の改名〔明治24年2月9日 第四十号〕

今度当市に設立せし仏教青年会を仏教青年団と改名致したるは、各地の仏教青年会と紛るゝの恐れあるよりなりと、又全団は来る十一日午後一時より夜に引続き、当市蒲焼町善導寺に於て団員募集演説并に討論を開くと云。

醍醐教会〔明治24年2月9日 第四十号〕

本月十五日、当市橋詰町円頓寺に於て、林鳳宣、服部日題、石川穰然、大島通寛外数名にて、午前は法会を修し午後第一時より仏教演説を開会する由。

寺院の苦情〔明治24年2月9日 第四十号〕

曹洞宗の寺院に於ては、目下大本山貫主の勇退及有志会の解散等の種々なる出来事のあるにも不拘、十二月以来未だ一回の達書も回らず、然るに東京よりは既に二三回の達書ありしとの事なる

か。当市の支局は達書を如何せられしや云々の投書が編輯局へ舞込まれた。

末広座演説〔明治24年2月9日 第四十号〕

此頃中、全座に於て催せし西川弘情居士外数名の演説会は参聴頗る多く、毎日二千余に降らざりしが、就中去る六日の夜は殆んど二千五百余と見受たり。元来仏教演説は無届にて開会する事を得る程の事なるに、近頃は当地各処に開会せる破邪演説には警察官の保護の厚き三四名、或は六七名の警官出張せられ時としては外教を破するに当て治安妨害と認定せられ、往々中止を命ぜらるゝ事ありしが、弁士も亦外教を破斥する余り過激に失するの辺も尠なからざりしが、夫れ此れの為め演説を聞くよりは寧ろ演説を見ると云の傾きにて、毎度ながら盛会なるも警官は殊に注意を加へられ、過る六日の夜会の如きは警部巡查等は二十余名も劇場内に見受たりとの事なるが、宗教の演説は可成政治家の干渉を受けず、亦た居士なりとも宗教家として宗教の演説をするなれば、温厚に着実に正々堂々論理上外教を破斥せらるゝ、様望ましき事なりと。

特別広告〔明治24年2月9日 第四十号〕

特別広告

愛知仏教会一周記念大演説会

出席弁士 弘中唯見師
笠間龍跳師

右本月十四十五兩日午後一時より開会す、会場は追て報告すべし
但開会時会前と雖も会員満場の上は入場を謝す

愛知仏教会本部

仏教会演説〔明治24年2月9日 第四十号〕

来る十六日午後一時より昼夜、上宿興西寺に於て仏教演説開会、
出席弁士近藤疎賢、黒田安麿、伊藤寛典の諸氏なり。

愛知仏教会講義部〔明治24年2月9日 第四十号〕

全会は中市場町中村嘉兵衛方及本部内転愚堂及鹽町の三所に設置
し、毎月怠りなく施行せられしか、中市場町講義所の家主中村氏
は頗る護法愛国の熱心家にして該費用の如き悉皆自弁せらるゝと
云ふ。亦各処の講義所も一回毎に聴衆増加せしと云、転愚堂に於
ては近藤疎賢師か已後孝論を講せらるゝ事となりしと云。

国風会〔明治24年2月9日 第四十号〕

全会の講筵は来る十一日、若宮の社務所に於て開会する筈なりし
が、都合にて延期せりと。又同会の国学校は来る十一日、三大祝
日奉賀の為め同校に於て午前第九時より生徒一同を召集し奉賀式
を挙行するよし。

旧正月の元日〔明治24年2月9日 第四十号〕

当市中の各戸は、門松七五三飾りなどの御儀式はもはや新曆に済
ませしも、真正の御正月はまたすまぬものによ、二三日前日より
勢よき餅搗の音は何処もかも響きしが、定て真正の御正月は本日
ならん。また各劇場及寄席等も本日をも以て蓋明けする由なれば、
近在の若衆が出掛けんには下向も賑かなるべし。

西川穆山老師の近状〔明治24年2月9日 第四十号〕

全師は客冬、当市へ授戒会の請に応じて来名せられ、爾後岐阜地
方へ赴化せられしか、亦過日駿河地方を巡化し一日も閑暇なきと
の事にて、過る二日、社員水野道秀及伊藤寛典の両氏は三尺坊大
士參拜の爲め上山し、因に老師を訪問せしに、師は昨夜駿地より
帰寺せりとして種々懇話せられたりしか、然るに何物の悪戯にや、
師は既に示寂せられたりと訛伝せしより、両三ヶ所より実否を照
会せられたりと語られたりしか、師は健全鑲鑲として諤々喋々論
談し、壮者も及さるの風ありて、此の寒天地に当て東西に赴化せ
らるゝ、実に感すべきなりと帰社しての物語なりき。

関鰲巖老師示寂〔明治24年2月9日 第四十号〕

久しく臨濟宗に於て禅学の泰斗と仰かれし当市新出来町徳源寺貫
主鰲巖禪師は、齡既に古希に達せらるゝも、猶鑲鑲として雲衲及
居士等を接待せられ怠なかりしか、本年は其の古希に達し示寂の
期近にあれば、世俗を襲て賀筵を催さんとて、過る一月廿五日に

は会下の僧衆及居士信徒を招き、頗る盛大なる寿筵を開かれ、当日は老師の居士として有名なる井上浮水、水野門水、河村鉄関等の居士は能狂言の余興を催されたる程の事なりしか、本月二日に至り、急に会下の僧衆及居士等を集め化縁の既に尽きたるを告げ、全三日午前五時世分、全寺の別邸なる瑞応軒に於て結跏趺坐の俣従容として示寂せられたりと。依て過る六日、其の密葬儀を挙行せられたり。(本葬式は二月廿一日に挙行せらるゝと云)今其概況を記さば、全日は前日よりの降雨なりしか、午後二時其の別邸なる車道町瑞応軒より発棺、行列最と静肅として雲衆居士等無慮三百余名と見受たりしに、大導師は拍樹軒潭海老師、鎖龕師は実叢師、(後住候補者)起龕師大坂江国寺主万溟師、其他会葬寺院には濃州虎溪山主毒湛師、江州千手寺主釣叟師、山城円福寺伽山師、当市総見閑居靈源師、政秀寺主惟三師、海福寺主曹源師等其他全宗諸寺院無慮五十余名と見受たり。亦愛知仏教会本部よりは常務理事水野道秀師か赴吊参列せられたり。亦老師の居士諸師には、何れも黒の安陀衣を掛け最と懇慫に焼香せられたり。了て全寺の墓地に埋葬せられたりき。

村地氏の葬儀 (明治24年2月9日 第四十号)

当控訴院判事村地正治氏の実父村地成珍君は此の頃流行感冒に罹られしが、俄かに脳症に變じ、遂に七十八年を一期として逝去せらる。過る二日、当市松山町梅屋寺に於てと鄭重なる仏葬儀を修行せられたり。因に会葬せられしは中村控訴院長、岡村全部長、

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教 (二)

植崎、山岡等判事数名、其の他、進地方裁判所長及両新の職員一同無慮二百余名と見受たり。因に成高君の辞世なりとて左に、

なき殻は世を空蟬のから衣
着つゝなりにし其の俣に焼け

温知会講義 (明治24年2月9日 第四十号)

全会の定期講義は例月の通り、明十日午後六時より東田町宗円寺に於て開会せられ、出席講師には伊藤覚典、広間隆円、水野道秀、黒田安麿等の諸氏なりと云ふ。亦討論会をも催さると云ふ。

四恩会演説 (明治24年2月9日 第四十号)

全会の演説は、明十日午後二時より例の如く巾下新道町海福寺に於て執行せらる。出席弁士には近藤疎賢、水野道秀、中村甄宗の諸氏なりと云ふ。

当市仏教各団体の懇話会 (明治24年2月9日 第四十号)

全懇話会は、本月は法園会の当番にて予て広告欄にも掲げし如く、十四日鍋屋町円明寺に於て催さると云が、本回は当四月開設する全国仏教者大会に提出する議案及其の準備等の為め、各会互に協議を要するの件は六七ヶ条もありと云ふ。

法会と説教 (明治24年2月9日 第四十号)

本日は、古渡町東海寺に於て曹洞宗にて名ある森田悟由老師が大

導師にて大布薩会を修行せらると云。亦松山町安齋院に於て、国家清平祈念の爲め大般若經を転読し、續て説教を修行せらるゝと云ふ。

前管長授戒会〔明治24年2月9日 第四十号〕

浄土宗前管長の前智恩院貫主徹定老師は、本月十五日当市白川町光明寺に着せられ、全十六日より全寺に於て授戒会を執行せらると云ふ。全師は各宗高僧の中には最も博学文才に富祐なるの老師なれば、定て信者の授戒するのも亦多かるべし。

愛知仏教会講義〔明治24年2月9日 第四十号〕

門前町大光院内転愚堂に於きて、毎月十五日廿七日午後第七時より

羽翼原人論

講師 笠間龍跳師

孝論

講師 近藤疎賢師

愛知仏教会講義〔明治24年2月9日 第四十号〕

中市場町二丁目中村嘉兵衛氏方にて、毎月三の日午後七時始

原人論

講師 伊藤寛典師

三国仏法伝通縁起

講師 広間隆円師

雑報〔明治24年2月16日 第四十一号〕

○愛知仏教会一週紀念大演説会の概況

一昨十四日より昨日にかけ、両処に催されたる全会一週紀念大演説会の概況を記さば、当日大光院即ち会場門前には、大国旗を交又し、亦中門は六根色の大仏旗を翻し内外最と鄭重に装置せられたり。正午頃より参聴者は続々詰かけ、聴て一時頃には流石に広き大本堂も立錐の余地なき程なり。第一席開会の主意近藤疎賢師、第二席笠間龍跳師、不如三界見於三界と題せる法花經の文を始め、句点字義より説き起し、三界の事相を弁せられし凡夫は、三界の事相に執着し、聖者は三界の理体に通達せらるるを論じ、終りに編計依他円成等の三性を弁し、最と緻密に論ぜられしに、満場の聴衆は静粛たり。第三席弘中唯見師余は宗教固有の活動を望と云の題にて、始め宗教運動には固有性の運動と偶有性の運動との二種ある所以を弁じ、近時仏教の運動は偶有性に属せるを以て、将来の仏教は固有性の運動に一変せざるを得ずと論じ、今日固有性の運動を停止せしは、遠く徳川時代に胚胎し、世人は徳川氏は仏教を保護せしと云も今日より見れば、運動を停止し仏教を眠らしめたりと論じ、若し一宗教固有の運動を活動せしなれば、政治家も一步を譲るに到るべしと古例を列挙し、反覆叮嚀師が得意の雄弁を振はれたり、之亦最と静粛たりしも、議論妙処に至る毎に拍手喝采湧が如く頗る感情を与へたりき参聴は無慮一千余名

と見受たり。

全十五日概況〔明治24年2月16日 第四十一号〕

全日は会員の便宜を謀り橋詰町慶栄寺に於て開会せられたりしが、第一席伊藤覚典師（愛知仏教会の紀元）第二席林鳳宜師（僧字の解）第三席弘中唯見師（誰が仏教を虚幻なりと云や）。始めに物体は自動体と他動体の二種ありて、人類は自動的物質なれば、精神の活動喚起して宇宙万有の内在ながら、其の宇宙万有の外に活動せしめざる可からずと弁し、夫より哲理二学の原則を談して、仏教は此の精神的活動を喚起するの最大作用ある所以を最と精密に雄弁快活に論述せられたり。本日は参聴満場にて殆んど八百余と見受たり。当日は大谷派大学師吉谷覺寿師に出席を請ひしか、全師は正午十二時の開会なれば出席すると迄申されしも、参聴者の遅き為遂に不果残情の事なりしが、全会全体には非常の盛会にて会員一同も頗る満足の色を呈せられし、閉会せしは午後五時なりき。

笠間龍跳師〔明治24年2月16日 第四十一号〕

愛知仏教会の講師にして本社講義部を担当せらるゝ全師の客冬、全宗大本山より執事の内命ありしも聊か脚部の病症の為め辞せられしか、当市各処の講義所及演説場へ腕車に依り怠りなく各処へ巡回せられし事なりしか、本回は亦た東京宗務局よりは宗制改良編纂委員長を命せられ、本月廿八日着京す可旨達せられし由

なる。然かし本社の講義部は公務の余暇、従前の通り其の担当を請ひ置きたれば、次号より原人論の講義を続々掲載致す筈なり。

塩町講義会〔明治24年2月16日 第四十一号〕

愛知仏教会にては、例月派出せらるゝ全講義は本月十九日午後六時より全町原兵一郎氏宅に於て、全会の講師笠間龍跳師、広間隆円師か出講せらると云ふ。

大高支部会〔明治24年2月16日 第四十一号〕

愛知仏教会の支部なる全会は、本月廿二日夜其の定期演説を挙行せらるゝ由にて、本部よりは近藤疎賢氏外一名派出せらるゝと云ふ。

交和会の組織〔明治24年2月16日 第四十一号〕

当市石町三丁目の有志者には、題号の如き仏教主義団体を組織し、毎月十三日に其の定期会を開き仏教及社会に有益なる談話を催さるゝと云ふ。

仏教会派出演説〔明治24年2月16日 第四十一号〕

来十八日午後六時より、当市東田町大円寺に於て派出演説を修行せらる由。出席弁士は伊藤覚典、土方鞆鞆、水野道秀、石川穰然の諸氏なりと云。亦上宿興西寺に於ても本日全夜演説を挙行せられ、笠間龍跳師が出席せらるゝと云ふ。

徳源寺本葬儀〔明治24年2月16日 第四十一号〕

当市出来町臨濟宗なる全寺密葬は前号に報導せしが、其の本葬儀は弥々廿一日に執行せらる由。翌廿二日には初七日大法会を修せらるゝ予定の由にて、本社へも案内状を送られたれば、参列の上亦次号に其報導を致事と致しましょう。

広告〔明治24年2月16日 第四十一号〕

当会本部位置、二月一日ヨリ門前町大光院へ移転ス

愛知仏教会本部

愛知仏教会講義〔明治24年2月16日 第四十一号〕

門前町大光院内転愚堂に於きて、毎月十五日廿七日午後第七時より

羽翼原人論

講師 笠間龍跳師

孝論

講師 近藤疎賢師

愛知仏教会講義〔明治24年2月16日 第四十一号〕

中市場町二丁目中村嘉兵衛氏方にて、毎月三の日午後七時始

原人論

講師 伊藤寛典師

三国仏法伝通縁起

講師 広間隆円師

此の期失ふべからず〔明治24年2月23日 第四十二号〕

来る四月二十日より三日間を期し、全国仏教者の大懇話会を当名古屋に開かれんとす。憶ふに仏教者大懇話会の濫觴は、実に昨年東京に於きて開かれしを以て初めとす。其の当時や、初期の国会將に開かれんとし四民悉く心を議員の撰挙に傾け、政事熱に浮されて又他を顧みるに由なかりき。然るに今や議會開かれ既に其半以上を経過し、紛乱と錯雜の実に世人の予想に出でぬ。而して其解散と閉場は未だ卜するにすする事を得ずと雖とも、或は吾人に与ふるに不吉の報を以てせざるなきやと疑ひを杞人と等しくするものさへ多し。若しも国会にして目出度閉場を告げんか、吾人は將に以て次回に呈出すべき我々仏教者の希望多し、若しも不幸にして解散等の事あらんか、吾人は更に第二の撰出者に向つて望み多し。況んや彼れ外教者は増々種々の手段を以て布教の策を講ず。去れは此れ仏教僧侶は倍々之れに匹敵し、以て我が教田を耕し、彼れが妄を破せざるべからざる時なるに非ずや、去れは、内には多望、外には多端、実に寛漫として木魚聲裡に黙々たるべき時に非ず。然るに今や第二回仏教者の大懇話会を日本の中央なる名古屋に開かれんとす。嗚呼何ぞ吾人仏教者に与ふるに好期を得せしむる者ぞ。去れば吾人と其感を同しくする仏教者たらんものは、奮つて以て此の会に出席し、議案を提出し、意見を吐露し以て吾々仏教徒の意思と希望を天下に表白し、与論を振起し以て邪教

撲滅眞理顕揚の策を講し、大に遺弟たらん本分を尽し仏祖の恩徳に報ゆると共に大に国家の爲めに斗る所なかるべからず。故に苟も名を仏教の下に揚げたらん各団体の諸氏は、奮つて以て委員を派出せられ、大に吾人と共に斗られん事を請ふ。此の期を失して以て亦た望むべきの時あらざるなり。

智恩院前貫主の御親化〔明治24年2月23日 第四十二号〕

曾て本紙前々号に報導せし全貫主の御親化は、過る十六日より白川町光明寺に於て授戒会を執行せられしが、説教師として三衣專明氏が随行せられ、全御貫主には七十八年の老境に在せらるゝも最と鑊鏢として御教化怠りなく、殊に受戒信者も殆んど七百余名なりしとの事なるが、過る十九日には愛知仏教会理事として社員日下部徳兵衛、伊藤栄二郎、水野道秀の三氏が貫主前へ伺候せしに最と長々の法話を承り、猶仏教会及本社 of 事業に就て全宗末寺院へ充分尽力すべき様申聞す可きなりと、最と懇々の御親話には三氏も非常に感激したりと、猶全御貫主には、名古屋市は三府に亜の大都会なるも仏教の盛大なるは之に勝るなりと仰せられしが、未だ仏教上の事に就ては十分の運動をも成し得ず、実に残念の事なりと帰社しての物語なりき。因に全貫主殿には昨廿二日発車丹羽郡岩倉村誓願寺に於て二日間の布教にて、夫より清須駅正覚寺にて布教せらるゝ予定なりと云ふ。(別項參觀)

塩町演説会〔明治24年2月23日 第四十二号〕

去る十九日夜、全所原兵一朗氏宅に於て催せし全会は、前号に講義と報導せしが全町有志者の希望に応じて、俄かに模様替となりし由にて、出席弁士は笠間龍跳、水野道秀、大田元遵、伊藤寛典、近藤疎賢、辻達輪、橋本定仙の諸氏にして、全会は単に全町有志者のみ參聴の筈なりしが殆んど一百余名と見受たりき。△昨廿二日、全所長谷川太兵衛氏宅に於て曹洞宗の碩徳なる白鳥鼎三老師を聘し大般若会を修せられ、社員水野氏も招きに応じて參席したりき。

捧読式及び卒業証書の授与〔明治24年2月23日 第四十二号〕

一昨廿日、当市白川町法雨学会にては勅語捧読式を兼ね卒業授与式を挙行せり。式場には勅語始め文部大臣等の訓示を扁額とし正面に掲げ、午後四時三十分を報ずるや一同整立敬礼。瀬尾教師は忝く勅語及訓示を捧読し併せて聖意を敷衍せり。夫より岡本山羽両教師を始め法雨協会本部より本多氏会員諸子等何れも輒今我国民の徳育の大に腐敗せるに聖慮を悩され、辱くも這回優渥なる勅語の贈本を下賜せられたれば、従来本会の主義として運動し来る所亦聖旨に外ならずと雖、今より洗心革面徳育の上進を促し智育を併行し、所謂文明の良民に恥ぢず聖旨に奉答せん事を誓ふの主意を諄々演説し、尋て山田竹次郎、土岐弥寿松の両会員へ本会英語修了証を山羽教師より授与して、本会より一般会員へ茶菓を供し式典全く終りしは殆ど六時三十分なりき。夫より山羽岡本瀬尾

の三教師法、雨協会よりは本多池田鼻輪の諸氏及会員諸子等にて別席祝宴を開き、席上演説等ありて最と盛大なりしと云ふ。

因明活眼講義 (明治24年2月23日 第四十二号)

彼の有名なる因明の博士とも称すべき大谷派本願寺一等学師補雲英晃耀師は、曩に日本活論理とも称する新々因明論法を著述せられ、其当時東京日々新聞を初め数十種の新新聞雑誌は之が批評を為し大喝采を得られしが、今度は当市皆戸町長徳寺に於て因明活眼の講義を開筵せらるゝとの事なるが、該書は因明の三支立量を活用せしめんとするに付て、一部を十二章段に分ちて大綱要領を示し、尚ほ一個の新作法を基礎として三十三種の過失及び十四過類を解し易からしむん為に、世間熟知の事柄を挙げて一々指示せしものなれば、吾人の因明を活用せんとするには眼目とも称すべき要書なれば、方今種々の議会起るに際し、苟しくも論理法を講ぜんとする人々は、続々参聴されては如何蓋し其得る所少なからざるべし。

知恩院前門主の巡化 (明治24年2月23日 第四十二号)

去十六日より廿日まで、当市白川町浄土宗鎮西派光明寺に於きて知恩院前門主鷹養徹定師の授戒会を行はれしが、戒弟は七百余名にして日々の参詣は堂外に亅む位の有様なりしが、師は七十八才の高齡にてましますにも関らず、宗法興隆の爲め日々長の勤を行はせられ、殊に去る廿一日は宗祖大師の御忌日なればとて頓写法

要を行はれし際は導師をも務められしが、同日の奏楽中平語は有名なる小松景和氏にして、尚同師授戒中の説教は和州大光寺々住三衣専門なりしと。又師は昨日午前八時出発清洲へ向け巡錫せられしが、来る十一、十二の両日は再び当市来錫の筈なり。

樹心会 (明治24年2月23日 第四十二号)

当市下茶屋町大谷派普通学校僧生が設立にかゝる同会の一週年紀を、去る廿一日施行せられ演説及び講義等を催されぬ。

徳源寺茶毘式概況 (明治24年2月23日 第四十二号)

前号に報導せし全葬儀は、予期の如く一昨廿一日に挙行せられたり。今其の概況を記さば、当日は前夜より聊か降雨ありしも早朝より半晴となり、余寒も稍温和にして遠近の参詣者には頗る好都合なりき、偕て会葬者の過半則千行列に加るべき人々には、全寺の別邸なる車道町瑞応軒に参集せられ、聽て午後一時より起合龍の誦経あり。夫より出棺となりしが、全所より全寺迄の距離は凡そ五丁余程もありしが、参観の老若男女は其の沿道両側に並列して恰も長堤を築きし如く、殊に出来町通り及全寺門前は頗る混雑を極めしも、警部巡查等数名出張して保護せられたり。亦全寺本堂内の模様は仏殿の正面には大導師関無覚老師、其の左右には奠茶師、大和伽山師、奠湯師虎溪毒湛師、全派管長代理今川貞山師、総監酒井恵遂師を始め、左右両序の役僧及び其の両側の後列には各大本山の使僧、各地寺院の住職等何れも班列正しく着坐せ

られ、而して其の両側共に後部には青竹の手摺を構へ、其の外部を一般参詣者の席に当てられ、亦各宗寺院及奏楽人等は仏殿の兩脇に席を設け、亦本堂前面には五十余坪の掛出しを設け中央に靈棺台及高卓其の他左右に供物の机等を並列し、何れも白の覆紗を掛最と清潔に裝飾せられたり。而して其の左右には小師及参隨の僧徒、尼僧、居士方を始め故老師に有縁の信徒等の参列席に充て、頗る群集せし会葬者も席次は予定其の宜しきを得て最と静肅として混雜を感じざりき。当日会葬者には管長代理今川貞山氏、西京天龍寺僧堂、全南禪寺僧堂、濃州天猷寺僧堂、全瑞龍僧堂の禪外師、鎌倉円覚寺、筑後梅林寺、奥山方広寺、妙興寺、江州永源寺其の他本県及隣県全宗寺院住職無慮三百余名と見受たり。亦愛知仏教会理事として伊藤寛典及社員水野道秀氏も参席せり。其の他一般会葬者は無慮三千余名に見受たり。猶昨日は其の初七日法会にて社員伊藤栄次朗、日下部徳兵衛が参席、猶無学禪師の法話を得しが次号に録する事とせり。茲に全日今川貞山師か棺前に於て朗読せられし管長より贈られし詞を左に、

故 鰲巖和尚

往昔維新の後、官始て教部省を置き大教院鼎建の際、本宗管長の職に在て我道の既運を挽回し、微笑の色香を保全して今日あらしむる者、実に師の拮据經營の力夥きに居る。其平素輪下の衲子を正案傍提し慧命を継続するに、懇篤なる世の挙て称賛曉識する所たり。更に何をか謂ん哉。今溘焉として法席を他界に戢めらる人天の哀惋は、啻に沙羅双樹間の恩に於るのみならず是に非典の

香資を供具し、聊か師の功德を頌す定中昭々鑑みよ尚饗

明治廿四年二月三日

妙心寺派

管長 蘆 匡道

廣告 (明治24年2月23日 第四十二号)

説教 来ル廿五日ヨリ
廿八日迄四日間

教 弘中唯見師 を聘し開筵す、此
師 段信徒諸氏に告ぐ

名古屋市門前町

本願寺別院

廣告 (明治24年2月23日 第四十二号)

全 第
国 仏教者二大懇話会
回

客年四月、東京に於て第一回大会の議決に依り、本年は当名古屋に於て、四月廿日より三日間仏教上時事に緊要なる問題評議の爲め大懇話会を開設す。依て愛国護法有志の僧侶及各仏教団体の會員信徒諸君は勉て御出席相成度候

御出席者は、左の要件御承知相成度候

○各地方より本会へ提出せらるゝ議案は、成べく明了に認め説明書を添へ三月十五日迄に送致の事

○議案編纂及印刷等の都合も有之候条日限後に至り到着の分は原案に編入せず。

但し議案の旨趣大同小異亦是全一事件なれば到着の前後に依て取捨する事あるべし。

○開会日数は大約三日間と予定するも議会の評決に依り伸縮する事あるべし。

○名古屋市に於て御定宿無之御方は極て便利なる旅舎を事務所より紹介すべし。

○右懇話会へ出席の御方は準備の都合も有之候条三月廿日迄に住所姓名を詳記し事務所へ御申込に相成度候会場は追て報告すべし。

○会費として金三十錢到着の際御差出しの事

○右開会中は毎夜大演説会を開き弁士は各地より出席の方に請ふべし

愛知県名古屋市

当番幹事 同盟仏教各会

名古屋市門前町大光院内

事務所 愛知仏教会本部

当会本部位置二月一日ヨリ門前町大光院へ移転ス

愛知仏教会本部

愛知仏教会講義〔明治24年2月23日 第四十二号〕

中市場町二丁目中村嘉兵衛氏方にて、毎月三の日午後七時始

原人論

講師 伊藤覚典師

三国仏法伝通縁起

講師 広間隆円師

愛知仏教会講義〔明治24年2月23日 第四十二号〕

門前町大光院内転愚堂に於きて、毎月十五日廿七日午後第七時より

羽翼原人論

講師 笠間龍跳師

孝論

講師 近藤疎賢師

鰲巖和尚への繪旨〔明治24年3月2日 第四十三号〕

過日長逝せられし当市徳源寺の前任なる同禪師が、曾て本山妙心寺に住職せられ際降し賜ひし繪旨の写は左の如し

妙心寺住持職事所有 勅請也殊専仏法紹降

可奉行 宝祚延長者 天氣如此悉之以状

慶応三年十一月二十日 左中将華押

鰲巖和尚禪室

嗚呼仏法紹隆 宝祚延長是れ吾人の常に称する所又同禪師本葬の際その舞炬師たる全宗前管長関無字師が提唱せられし法語は左の

如しと因に記す。本紙次号には同禪師の肖像及び略伝を掲げん。

伏乞 無学九拝

瑞応大禪師

掩士

法 語

翻轆鷲王乳臭縁明投暗合壮皮円同条生也不同死夜壑深移満月船

恭 惟

再住妙心徳源二世鰲巖和尚大禪師

温而猶勁、簡而能全

受業禪隆 難兄難弟最冠殿後 遊方見性 馬領驢腰独占率先

壯歳起群多福何住古稀豈逝瑞応嚴然

紫海烟霞遠頑 錐存囊裡 々城風月長坐 鑑在機前

蓬来嗽石、霞谷枕泉

曩時結盟 接物称無量際 今日因甚 帶累向鑿頭辺

良久云

禪師云云

分分髓須張綱取脱着空棺莫誑人天

院

熱田町尾頭雲心寺々伝 (前号に真図を掲ぐ) (明治24年3月2日

第四十三号)

今を去る一百三十余年の昔、当市宮町萱津屋の二代武兵衛氏當時
隠居して元真と呼べり。氏に一人の娘ありしが廿四歳を一期とし
て黄泉不帰の客なりしより、不図世の墓なき様を觀じ四国西国を
巡拝して無き人の菩提を吊ひ、己が後生の一大事をも定めんと志

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教(二)

し、郷里名古屋を出発して西京に上り時の高德獅谷の万無上人に
面謁し、聞法の上随喜の余り剃髪し法号を西岸と給はり、師の戒
弟となり普く靈場を参拝し、帰名の後。元文五年二月今の地に獅
谷万無上人の靈場法然院を写し奉り、同師を開山と仰ぎ捨世準律
不断念仏の道場を建立しぬ。是れ今の雲心寺の始めなり。後百有
余年を経て堂宇悉く灰塵に帰せしが、其頃建中寺の住職立誉上人
熱田神宮の托宣により本堂庫裡樓門を建築し、丈六の阿弥陀の尊
像を安置せらる。是れ現今の堂宇にして、堀川に添える当時の旧
門は左甚五郎が作なりと伝へ、亦境内に支那盧山より移植せし純
白の蓮あり。

講師の上京 (明治24年3月2日 第四十三号)

愛知仏教会講師笠間龍跳師は全宗の宗規編纂委員長任せられ、上
京せらるゝ事は既に報導せしか。全師は全宗管長の授戒会を随喜
の上、本月十日発途せらるゝ由にて本社員及愛知仏教会理事の諸
氏には、全九日秋琴楼に於て送別の会を催す計画なりと云ふ。

転愚堂演説概況 (明治24年3月2日 第四十三号)

一昨廿八日、愛知仏教会本部内大転愚堂の演説は参聴凡そ二百余
名にて、伊藤覚典、水野道秀、近藤疎賢の諸氏出席至極静肅なる
演説にて頗る感情を与へしと云。尚近頃は仏教演説にも夥多の警
官臨場あらせられしが、当夜は更に警官の臨場を見受けさりし。

各地演説の概況〔明治24年3月2日 第四十三号〕

東春日井郡如意村の仏教有志者には過る二十二日、愛知仏教会の講師笠間龍跳師を聘し、全村岳桂院に於て般若心経の講義会を催されし由なりしが、将来は毎月一回宛開会せらるゝ事となり、目下熱心家は計画中なりと云ふ。△荻谷仏教青年会は全二十二日仏教演説を催し、弁士には萩倉耕造、成田某等にて参聴頗る多く不相変の盛会なりし由。△西郡鳥ヶ地新田に於ても、過る二十五日全所弥勒寺の住職萩泉智範氏の發起にて、笠間龍跳師を聘し演説会を催されたりしに、是れ又盛会なりと聞く△当市大津町光円寺に於て催されたる二十四日講の演説は、その名称の如く過る二十四日午後一時より開会せられたりしか、弁士は大田元遵、伊藤覚典の両師にして、了て黒田老師の説教をも執行せられ、参聴は二百余名なりき。△当市東田町大円寺に於て開会せられし去る二十六日の愛知仏教会の派出演説会の弁士近藤疎賢、広間隆円、黒田安麿等の諸師出席せられぬ。

曹洞宗大本山管主の御親化〔明治24年3月2日 第四十三号〕

全宗能大本山貫主法雲普蓋大禪師畔上棟仙師には当市裏門前町万松寺の請に依じて、来る三日より授戒会を執行せらるゝ由にて、弥本日正午十二時廿二分の列車にて着名せらる由にて、既に全寺よりは全宗寺院檀方惣代諸氏へ夫々笹島地方へ出迎すべき旨通知書を発せられしと云ば、定て笹島地方は賑合ならん。亦全大禪師には、当市にて授戒会を執行せらるゝは最初の事なれば定て受戒

者も夥多なるべし。

五女子村青年仏教会〔明治24年3月2日 第四十三号〕

一昨二十八日開会せられし同演説会には、名和大鳳師外数名出席せられ、聴衆は無慮五百余名にして同地未曾有の盛会なりきと。尚同会は皮相上の外見を脱し、専ら青年をして宗教心を發揮し徳義を重せんとする着実なる団体の由なれば、何れの団体も斯くあり度ものなりと世の青年諸氏に望む俛斯くは。

仏像自然に現はる〔明治24年3月2日 第四十三号〕

当市下園町学校向なる印板業某方の仏壇中へ、去る廿二日一体の仏像光明赫々として出現しませし由、態々本社を来訪せられて話されし物語を聞くに、同日午前八時頃仏壇内御本尊の傍に安置しある御名号の側ぎに御丈け八寸斗りなる阿弥陀如来の尊像輪御光赫々として出現しましたが、難有く感涙に咽ひて礼拝せしが稍暫くして尚同尊像のあり／＼と失せ玉はざりしは如何にも希有の事柄なり云云と。因に記す過日の開明新報にも同様木像の尊像より華を生ぜし記事ありしが、暫く記して江湖の諸君に質す。

熱田通信〔明治24年3月2日 第四十三号〕

来る四日午後一時より熱田町栄立寺に於て清正公の祭典を施行し、終て石川穰然、水野永遠等の諸氏演説及び説教を開かるゝ予定の由云云。

広告〔明治24年3月2日 第四十三号〕

全 第
国 仏教者二大懇話会
回

客年四月東京に於て第一回大会の議決に依り本年は当名古屋市中に於て四月廿日より三日間仏教上時事に緊要なる問題評議の爲め大懇話会を開設す依て愛國護法有志の僧侶及各仏教団体の會員信徒諸君は勉て御出席相成度候

御出席者は左の要件御承知相成度候

○各地方より本会へ提出せらるゝ議案は成べく明了に認め説明書を添へ三月三十日迄に送致の事

○議案編纂及印刷等の都合も有之候条日限後に至り到着の分は原案に編入せず

但し議案の旨趣大同小異亦是全一事件なれば到着の前後に依り取捨する事あるべし

○開会日数は大約三日間と予定するも議会の評決に依り伸縮する事あるべし

○名古屋市中に於て御定宿無之御方は極て便利なる旅舎を事務所より紹介すべし

○右懇話会へ出席の御方は準備の都合も有之候条三月廿日迄に御住所姓名を詳記し事務所へ御申込に相成度候会場は追て報告すべし

○会費として金三十銭御到着の際御差出しの事

○右開会中は毎夜大演説会を開き弁士は各地より出席の方に請

ふべし

愛知県名古屋市

当番幹事 同盟仏教各会

名古屋市門前町大光院内

事務所 愛知仏教会本部

愛知仏教会講義〔明治24年3月2日 第四十三号〕

中市場町二丁目中村嘉兵衛氏方にて、毎月一、二、三、の三日間午後七時始

原 人 論

講師 伊藤覚典師

三国仏法伝通縁起

講師 広間隆円師

愛知仏教会講義〔明治24年3月2日 第四十三号〕

門前町大光院内転愚堂に於きて、毎月十五日廿七日午後第七時より

羽翼原人論

講師 笠間龍跳師

孝 論

講師 近藤疎賢師

米商会所の法会〔明治24年3月9日 第四十四号〕

全会所有志者には昨八日裏門前町万松寺授戒会道場に就き、全会

商業繁昌の祈念大般若会を修し、続けて全会所故役員伊藤忠左衛門氏の追吊大法会を催されしか、全日は曹洞宗管長畔上大禪師の大導師にて大施餓鬼会を修せられ、全会所仲間商七十余員も其法席に参詣せられ、何れも誦経了て最と静肅として焼香せられ、最後に榊原栄蔵氏は祭文を朗読せられたり。終て八千久楼の新築にて最と閑清なる昼食を催され、午後一時頃夫々帰途に就れしか、全日は急報社よりは万松寺法席へ立派なる生花の奉納もあり。亦全寺の本堂前には大なる角塔婆を建設せられしか、其の銘は当日の大導師なる畔上大禪師の作にて左に

就尸羅場修甘露法門偈曰 誠哉宝戒可憐生

龜岳山頭弟与兄 月靈灑清看自性 今身即得

毘尼城

全日発起の重なる人々は村瀬庫次、長谷川、山本、大野、榊原、京、伊藤、渡辺、高橋、小林、石塚、近藤等の諸氏なりと云。弊社よりは全法会には水野道秀氏出席したりき、亦故伊藤忠左衛門氏の法名は誠忠院重願道誓居士と云由、全氏は生前当市公共の事業に頗る尽力せられしが、北海道札幌に於ても北海銀行にて全氏の為に大法会を修せられしと云。

雲英光耀師〔明治24年3月9日 第四十四号〕

因明を以て有名なる同師には、去る二十六日より五日まで当市皆戸町長徳寺に於て同講筵を開かれしに、当師団の奥村大尉、水島中尉等も来聴せられ、他宗の僧侶多く来聴せし由にて、尚ほ去る

六日七日は押切町養照寺に於て同様開筵せられしに、何れも聴者堂に満ちたりと云。

瑞応老大師略伝〔明治24年3月9日 第四十四号〕

師諱は道関、字は鰲巖軒号を瑞応と称す。本州熱田伊藤氏の子なり。天性聡敏幼より出塵の志操を抱き、歳十才に至り飯田町禪隆寺に於て祝髪受戒す。一日書中前境の荒田誰が主と為ると云句を見て疑団氷消せず。年十有六才にし始めて錫を熊本見性寺に掛け後ち、故省へ贈る詩を賦して曰（訪道尋師出故山一朝飛錫透金関苦来法戦城中客禅若不成終不還）霜辛雪苦古則に秀得すること十有八年の大事了畢の後ち、豊後多福に住し転職の際元白杵藩主稲葉伊予守殿より金百円を賜はり、年過ぎ本山妙心寺に於て改衣執行の時日、同藩主金一百五十円を給せられ多福聖胎長養せらるゝこと廿余年なり。元治元年蘇山神機妙用禪師の遺命を以て、遂に来て浪越徳源寺の住職に重任し、師に代て専ら学生の接得に従事す。四方其の徳を慕て錫を引く者陸續、随て官吏紳士の往来も亦日に盛なり。明治余年京都本山妙心寺住持の責任を帯ひ、同五年維新革命、官始て教部省を設置せられ大教院鼎建の際、本宗管長の職に権与し大教正の命を受け宗風を振起す。是即ち管長の嚆矢と謂つべし。且つ師は常に雄弁を振はず。点然として白眼に世上の人を見得する眼を具して群倫を度すること夥し。是れ能く人の知る処なり。于時全国派内の諸寺院より拝請を受け江湖会を営みたる其の数は挙て数ふべからず。同二十年春期諸国の諸老宿及四

方の雲納八百余名を懇請し末後の勝会を営む。序で信徒の為に授戒会を設け、戒徒千四百余名あり。其の盛大なることは言べからず。同二十三年冬毎歳の臘八大接心を修するの日、伊藤玄機、水野門水、井上浮水、河村鉄閔、矢野宗雄の各居士等に命じて古稀の賀を促し、此時師自ら謂て日賀を修し了らば朝に死すとも可也。所謂る七日以前予じめ死の到るを知ると恐べし。夫より十日を経て師の威儀尋常ならず。本年二月三日は嗚呼如何なる日ぞ、午前五時四大分離の大相を示さんが為め男女信徒を招集し、師も同じく端坐して自ら四句の誓願を唱ふる俣溘然として入寂せられ、此に於て乎医師村瀬氏終焉の検視を成して、過る二月六日徳源精舎に葬むると爾云。

光明寺法主来名〔明治24年3月9日 第四十四号〕

兼て記載せし当市門前町浄土宗極楽寺宗務支院に於て、来る十日より十六日まで授戒会を執行され、戒師西山派総本山京都粟生光明寺法主には十日正午十二時笹島着の汽車にて来名に付、当市信徒有志者数千名は該所迄出迎かはるゝ由。

畔上大禪師の授戒会〔明治24年3月9日 第四十四号〕

当市裏門前町万松寺に於て執行中なりし全授戒会は、弥々本日を以て其の完戒日なるよし。受戒信者も殊に多く四衆凡そ七百余名にて流石に広き本堂も立錫の地なく、加ふるに日々の参詣者も亦夥く為に、毎日内外共に非常の賑ひなりき。亦全大禪師には完戒

上堂の後は直ちに当市呉服町久松丈助方へ赴むかせられ、全家に御一泊の筈なりと云。

四恩会演説〔明治24年3月9日 第四十四号〕

全会は来る十日、其の本部なる巾下新道町海福寺に於て定期演説を催さるゝ由にて、出席弁士は伊藤寛典、中村頼宗、近藤疎賢の諸師なりと云ふ。

善光寺参詣〔明治24年3月9日 第四十四号〕

当市七ツ寺境内善光寺堂講中には、毎年五月一日出立して善光寺へ参詣せらるゝ由なるか、本年も五月一日を期して出立する由、殊に本年は大本山善光寺より御分身の一光三尊仏を贈らるゝ由にて、其の御分身御迎ひ旁々講中の信徒男女は一層勇みて参詣せらるゝといふ。

曹洞宗管長の着名〔明治24年3月9日 第四十四号〕

去る二日、浜松第二列車にて当地万松寺へ安着せられし同宗能山管長畔上海仙師には、停車場前有隣亭に於いて小憩後、馬車にて同寺へ到着せらる。尚当日の奉迎者には愛知仏教会員及び同宗の緇素数十名なりしと。又同師の随行者は兼て麻蒔舌溪氏の由記載せしが、同氏は俄かに九州地方へ巡回せられしを以て大湊泰嶺氏が長に、石月無外氏が次長として来名せられぬ。尚其の翌々四日に弊社員及び愛知仏教会の理事は同師を伺ひ主意書等を進呈せし

に、最と丁重なる挨拶の上将来末派寺院として尽力せしむる旨懇話されぬ。

臨濟宗取締改撰の期（明治24年3月9日 第四十四号）

当市臨濟宗取締酒井惠遂氏は現任同宗取締なるが、今回改撰の期に際会せしを以て、同師は後任者に其職を譲与せんと欲せらるゝも、同宗の各寺院は勿論其他の仏教者中には尚ほ同氏の再勤あらん事を懇願して止まざると云。

広告（明治24年3月9日 第四十四号）

全 第
国 仏教者二大懇話会
回

客年四月東京に於て第一回大会の議決に依り本年は当名古屋市中に於て四月廿日より三日間仏教上時事に緊要なる問題評議の爲め大懇話会を開設す依て愛國護法有志の僧侶及各仏教団体の會員信徒諸君は勉て御出席相成度候

御出席者は左の要件御承知相成度候

○各地方より本会へ提出せらるゝ議案は成べく明了に認め説明書を添へ三月三十日迄に送致の事

○議案編纂及印刷等の都合も有之候条日限後に至り到着の分は原案に編入せず

但し議案の旨趣大同小異亦是全一事件なれば到着の前後に依り取捨する事あるべし

○開会日数は大約三日間と予定するも議会の評決に依り伸縮する事あるべし

○名古屋市中に於て御定宿無之御方は極て便利なる旅舎を事務所より紹介すべし

○右懇話会へ出席の御方は準備の都合も有之候条三月廿日迄に御住所姓名を詳記し事務所へ御申込に相成度候会場は追て報告すべし

○会費として金三十銭御到着の際御差出しの事

○右開会中は毎夜大演説会を開き弁士は各地より出席の方に請ふべし

愛知県名古屋市

当番幹事 同盟仏教各位

名古屋市門前町大光院内

事務所 愛知仏教会本部

当会本部位置二月一日ヨリ門前町大光院へ移転ス

愛知仏教会本部

愛知仏教会講義（明治24年3月9日 第四十四号）

中市場町二丁目中村嘉兵衛氏方にて、毎月、一、二、三、の三日間午後七時始

原人論

講師 伊藤覚典師

三國仏法伝通縁起

講師 広間隆円師

愛知仏教会講義〔明治24年3月9日 第四十四号〕

門前町大光院内転愚堂に於きて、毎月十五日廿七日午後第七時より

羽翼原人論

講師 笠間龍跳師

孝論

講師 近藤疎賢師

大光院略伝〔明治24年3月16日 第四十五号〕

当院は当市門前町に在りて曹洞宗の大地なり。今当寺に伝はる記録に依りて些か寺伝を記さんに、当院開基は慶長の始め従三位中将忠吉君清洲在城の時、雲門寺といへる廃寺の跡に此寺を建立し、旧名雲門を以て寺号とし明嶺和尚を請じて開山となし玉へり。忠吉公は東照神君第四の子にして天正八年浜松に生る。松平甚太郎家忠の猶子となる故に幼名を甚太郎と云ふ。文禄元年壬辰春二月十九日武州忍が城に守たり下野守に任ず。此時、江州沢山の城主石田三成浮田毛利佐竹等と謀つて反す家康公親から之を征し玉ふ。公も亦三軍に従ふ。両軍共に美濃の関ヶ原に会ふ。家康公軍を分つて三つとなし福島正則先鋒たり、井伊直政中軍にあり、後軍は即ち公なり。早く敵の強弱を慮つて、密かに直政と俱に突出して戦ふ当るところ敵なし其功衆に勝ぐ。家康公其雄略を

感じて特に優賞を加へ玉ひぬ。実に慶長五年秋九月なり。時に公二十有一神君公を尾州四十余万石に封し玉ふ。侍従に進み薩摩守に任ず。茲に於て清洲城に移り従三位左近中将に進む。公時に年廿有六なり。慶長十二年春三月故あつて江戸芝の邸に薨し玉ふ時に二十有八なり。初め公の忍城に居す。時々駕を成田に枉て、禪に龍淵叱潤和尚に参す。後ち治を清洲に従すに及んで、同師を清洲に請ず。時に茲に無住の寺あり。因て武州忍より三寺を移す。長久寺、正覚寺、清善寺なり。正覚を改めて性高院と号し、清善寺を大光院に請す。大光院は豊臣秀吉の家弟大和納言追福の爲め秀吉の創建するところなり。後ち廃して雲門寺と名づく。唯朽壞せる伽藍のみ存す。公大に修繕を加へて叱潤和尚を住せしむ。後ち叱潤和尚武州に帰り、明嶺和尚代つて寺を續ぐ。公の西征し玉ふや叱潤和尚をして出師の日を扱ばしむ。和尚四の凶日を述べ、且つ爲めに直鉾の二大字を書して旗号をなし、以て軍に進ましむ。後公明嶺和尚の房に就ひて之が故を尋ね玉ふに、明嶺和尚判して曰く士たるもの一たび戦場に出る時は身を惜むことを爲さずして国の爲に毫も命を顧ず。以て敵に臨み三軍兵を交るの時と雖も奮然として進み、戎馬の間に死すると雖も以て大計を後になし、大功を前に顕んと欲する者に非ずんば何ぞ勇士と云はん。是乃ち凶を以て彼に帰せしめ、以て之が大功を成すの謂か。蓋し不祥を祥と爲し、不吉を吉と爲す。所以か公聞て善しとなすと。公又明嶺和尚に法名を請ふ。師籌山宗勝と号すべしと。答ふ蓋し籌を帷幄の中に運し、勝を千里の外に決すと云ふ義に取れり。当

時寺号を清善と云ふ故に、朱印にも清善とあり。後大光の旧名に復す故に、公の薨するや大光院殿籌山宗勝大居士と称す。後ち敬公の名古屋に城て遷り玉ふや、猶を日置村に賜ふて寺を移す。今の境内即ち是なり。寺号を日置山大光院と云ふ。後山号を興国山と云ふ。旧号に復す。尚ほ是れ洩れたる事あるも煩を恐れて記さす。

安斉院の観音懺悔〔明治24年3月16日 第四十五号〕

来る十七日より同院に於て同会を行はるゝ由。

法園会講義〔明治24年3月16日 第四十五号〕

全会は来る十八日、鍋屋町円明寺に於て午後六時より催さるゝ由。講師は広間隆円師（八宗綱要）近藤疎賢師（孝論）等にて、爾後毎月八日、十八日の両日開講せらると云ふ。

四恩会〔明治24年3月16日 第四十五号〕

当市中下新道辺の仏教熱心家の組織せる四恩会演説は、連月海福寺に於て興行せらるゝ定例なるが、去る十日は同町浄土宗宝周寺にて近藤疎賢、伊藤覚典、中村軫宗の三氏出席の上演説、続いて貧民へ施米数名ありしと。因に全寺は当市の伊藤、関戸両家の菩提寺にして、営繕等は能く行届き、且つ住職も今回より毎々演説をも営み、且爾来は一層仏教会の爲め会員募集に尽力すべしと話されし由。

松山大僧正の授戒〔明治24年3月16日 第四十五号〕

浄土宗西山派総本山なる京都粟生光明寺松山円瑞大僧正は、当名古屋市門前町同派支庁極楽寺に於て本月十日より十六日まで一週間の授戒に臨錫せられ目下其法要中なり。其概略は同派寺院檀信徒の組織せる布教講の發起にて其招に応し、去る十日笹島停車場へ午前十一時十四分に着せられ、同派寺院及び各檀信徒の出て順誘整々、極楽寺へ安着あらせられしが、目下戒を受くる信者殆んど七百名に及へり。右法要中の説教師は美濃国立政寺清水中僧正、戒師大僧正随行は権中僧都高橋沾瑠氏と外兩名にて、帰京は十六日午前たるよし。目下宗教振起の爲め各宗本山方も西奔東走布教に尽力せらるゝも、就中右松山大僧正には昨十一月より福岡大分山口の三県下寺院信徒の招に応し、本年三月廿七日に漸く帰山。又た当地へ飛錫、猶来四月一日より復京都本山にて一週間授戒の大法要を修せらるゝと云。

笠間龍跳師〔明治24年3月16日 第四十五号〕

全師は過日、曹洞宗務局より全宗の宗制改正編纂委員長を命ぜられし事は既に報導せしか、弥昨十五日終列車にて東上せられたり。亦全師の送別会として過る九日、秋琴楼に於て催したる席上には仏教会理事及び本社員等潔齊にて最も静肅たる宴席なりき。

授戒会〔明治24年3月16日 第四十五号〕

当市松山町曹洞宗安斉院住職野々部至遊氏は頗る布教興学の熱心

家にして、既に前年より多数の僧侶を集めて修学を策励され、殊に客年よりは全宗の私立小学林を設立し、亦全寺及庫裡をも客年中に新築せられしか、夫れ等を祝する為め来る四月廿一日より授戒会を執行せられ、大に縑素の二流を化導せらると云ふ。

仏教演説〔明治24年3月16日 第四十五号〕

明十六日午後一時より中下興西寺に於て、近藤疎賢、水野道秀、伊藤慈眼氏等は演説仏教会の派出演説を、来る廿一日より彼岸中正福寺に於て大施餓鬼を修行し、続て伊藤覚典氏は説教を行はる、由。

長谷川氏宅の法要〔明治24年3月16日 第四十五号〕

来る十八日午後には当船入町の同氏宅へ加賀天徳寺の森田悟由禅師を招待し、同氏が亡母の追善を営まるゝに付き、仏教会員にも招待を受けられし方ありと云。

仏教各団体の懇話会〔明治24年3月16日 第四十五号〕

当市和同協会か会主にて、一昨十四日午後一時より全会本部清水町久国寺に於て催されしか時刻より各団体の代表者も続々参合せられて、時事要件四五件も懇話せしが中には全国仏教者大会の準備件もあり。亦既に秋田県、長崎県等の団体等より照会せし書類等多分ありて、夫々報告を了り散会せしは午後四時なりき。因に出席せし人員は左に、

唱道義会員桜木利太郎 温知会員松井万作宮橋勝次郎 法園会員
小林新三郎佐藤半兵衛 顕正会員大脇吉兵衛水野亀太郎 紹隆会
員日下部徳兵衛 和同教会員伝泰賢、近内靈瑞、近藤疎賢、高橋
有貞、矢野善九郎、谷吉次郎、丹羽慎三郎、外山鎌吉

鳴海通信〔明治24年3月16日 第四十五号〕

去る六日、当駅大心進徳会に於て催したる仏教大演説会は出席弁士比達倫、小杉陶蔵、近藤疎賢等の諸氏にして参聴最も多く場外に溢れたり。当日は榊原重義、梶川初蔵氏は頗る斡旋し亦た青年会員には浅井、牧野、近藤、佐藤、小笠原、伊蔵、樋口、市田、山口、安藤等諸氏は非常に尽力せしか将来は一層同地仏教の為めに尽すの計画なりと云ふ。

広告〔明治24年3月16日 第四十五号〕

全 第
国 仏教者二大懇話会
回

客年四月東京に於て第一回大会の議決に依り本年は当名古屋市内に於て四月廿日より三日間仏教上時事に緊要なる問題評議の為め大懇話会を開設す依て愛国護法有志の僧侶及各仏教団体の会員信徒諸君は勉て御出席相成度候

御出席者は左の要件御承相成度候

○各地方より本会へ提出せらるゝ議案は成べく明了に認め説明書を添へ三月三十日迄に送致の事

○議案編纂及印刷等の都合も有之候条日限後に至り到着の分は
原案に編入せず

但し議案の旨趣大同小異亦是全一事件なれば到着の前後に
依り取捨する事あるべし

○開会日数は大約三日間と予定するも議会の評決に依り伸縮す
る事あるべし

○名古屋市に於て御定宿無之御方は極て便利なる旅舎を事務所
より紹介すべし

○右懇話会へ出席の御方は準備の都合も有之候条三月廿日迄に
御住所姓名を詳記し事務所へ御申込に相成度候会場は追て報
告すべし

○会費として金三十錢御到着の際御差出しの事

○右開会中は毎夜大演説会を開き弁士は各地より出席の方に請
ふべし

愛知県名古屋市

当番幹事 同盟仏教各位

名古屋市門前町大光院内

事務所 愛知仏教会本部

愛知仏教会講義〔明治24年3月16日 第四十五号〕

中市場町二丁目中村嘉兵衛氏方にて、毎月一、二、三、の三日間
午後七時始

原 人 論

講師 伊藤覚典師

三国仏法伝通縁起

講師 広間隆円師

愛知仏教会講義〔明治24年3月16日 第四十五号〕

門前町大光院内転愚堂に於きて、毎月十五日廿七日午後第七時よ
り

羽翼原人論

講師 笠間龍跳師

孝 論

講師 近藤疎賢師

仏教会巡回演説の概景〔明治24年3月23日 第四十六号〕

去る十六日午後一時より上宿支部の演説会は折悪敷、昼間は弁士
近藤疎賢、伊藤慈眼の両氏、臨時支店の為め出席なきを以て満堂
の聴衆激昂の様子なりしかば、会主は参聴人に対し弁士不参の理
由を丁寧に謝辞せられ、夜に入ては例刻より近藤疎賢、伊藤覚典
の両氏交も登壇し、熱心に仏教の真理を纏々弁せられしを以て参
聴人も大に満足して帰宅せられし由。亦去る十八日夜、当市小船
町長谷川太兵衛氏宅に於て仏教演説開会せしが、時未だ到らざる
に聴衆は全宅に充滿して余地なかりければ、定刻前に水野道秀、
広間隆円、日下部徳兵衛、伊藤覚典の諸氏登壇して各々熱心に仏
教の教理と応用とを弁せられたれば、聴衆は甚だ満足の様子なり

き。終て会主長谷川太兵衛氏は弁士及び參聽人数名を丁寧に饗応せられしと云ふ。

仏教会演説〔明治24年3月23日 第四十六号〕

来る廿五日午後二時より十一時迄、当市南奥田町西念寺に於て仏教演説開会、出席弁士は真宗本派より広間隆円、日蓮宗より吉野法英、原洋円、田中栄盛、曹洞宗より水野道秀、伊藤寛典の諸氏なるが、将来は毎月一回づゝ全寺にて開会し、往々は仏教会の支部を設置する見込なりと。

愛知育兒院育兒へ十念並寄付〔明治24年3月23日 第四十六号〕

浄土宗西山派総本山京都粟生光明寺松山円瑞大僧正は名古屋市門前町同派支院極樂寺に於て、本月十日より授戒に臨錫せられたるに、去る十六日午前、育兒參拜したるに礼儀式の前同寺の書院にて同兒等限り特別丁寧なる十念を授けられ付て、美濃国西の莊立政寺清水範空中僧正も同様授けられしに依り、同兒並び乳母付添係り員も皆ありがたき授けなり迎かんるいにむせびしとぞ。

其節松山氏より即納金三円○清水氏よりは育兒に菓子料同金二円○同日參詣之慈善者中より同金二円十五錢三厘差出されたるよし。又知多郡有松村加藤甚三郎即納金百円の殘金四十円を去る二月廿五日に即納○名古屋市研屋町服部鉄治郎同金二十錢○同市花車町淨信寺住職羽塚慈青小兒縞綿入一個○同市東田町村瀬五兵衛育兒へ菓子料同金五十錢○同市慈無量講より育兒へ本月分白米五

升即納右諸氏より寄付されしと同会よりの報知。

名古屋市各仏教団体の懇話〔明治24年3月23日 第四十六号〕

来る四月三日、大津町光円寺に於て正午十二時より紹隆会員の遣番を以て開かるゝ由なるが、同日は大懇話会に關する事件の打合せを始め其緊要なる事件も有之に付き、当番会員は勿論他にも既に昨今より開会に付き協議相談を遂げ居らるゝ由なれば定めて盛会ならんと今日より予想せらる。

春期彼岸〔明治24年3月23日 第四十六号〕

去る十八日より春期彼岸の爲め近郷遠在より市内各寺院へ參詣の向も多きが、殊に其の中日は初馬と同日なりしを以て、孰れも其日を當てて爲し居たりしに近來になき暴風雨なりしも翌日に至り快晴となりしかは、東郊は始め市内各所は随分の賑合なりしが例年に比して大谷派別院の賑はざりしは多分来月の御法要に參詣せん爲め、此の彼岸の參詣を見合せしならんと謂へは、来早々の御法要は必ず非常の賑合ならん。

演説と講義〔明治24年3月23日 第四十六号〕

来る廿四日午後三時より大津町光円寺に於て演説及び法話会、全廿七日午後六時より門前町大光院内転愚堂に於て近藤疎賢、伊藤寛典の諸氏出席講義を、廿八日には広間隆円、水野道秀、伊藤慈音、高橋仙定の諸氏出席演説を開かる。

熱田通信〔明治24年3月23日 第四十六号〕

去十一日は青年会例月の演説にて不相替盛会なり。出席弁士は石田、浅野、神座、安達、平野の諸氏にて演説終るや破邪顕正の運動歌を聴衆一同へ施与せられたり。同会は去る十三日の講日を以臨時会議を開き大に規約を改正し、更に名誉顧問の二員を設け、其他教件を協議し、特に同地高等小学校教授耶蘇信者樋口某の挙動に就き、生徒の父兄等は非常に激昂の有様故今回同会員連名にて郡長町長に向て樋口某解雇の建白書を呈せんとの準備中なり。尚来る二十四日旗屋春養寺に於て臨時演説を開会せらるゝ由。去る十四日中道蓮座に於て津村俊、桜井幸太良、深谷源太良の各氏の発起にて医業分業の事に就て演説を開会し、翌十日同地衛生会員同座に於て大演説を開き、各々得意の雄弁にて衛生の忽せに付す可らざるを述べられ、聴衆も頗る感動の有様なりし。去廿一日は白鳥山に於て、例年の無縁大施餓鬼を修行し、次て説教あり。参聴者一同へ饗飯を施与せられたる由り。

広告〔明治24年3月23日 第四十六号〕

三月廿五日午後二時ヨリ 於南奥田町

仏教会演説 西念寺

出席弁士 広間隆円君 水野道秀君
吉野法英君 原泰円君
田中栄盛君 伊藤覚典君

生徒募集広告〔明治24年3月23日 第四十六号〕

本校第一年度ヨリ第二年度迄各級へ入学ヲ許諾ス

本校学科 普通学
程 度 高等小学

男子部十五名女子部二十名募集ス

当市宮出町永安寺境内

愛知育英学校

広告〔明治24年3月23日 第四十六号〕

全 第
国 仏教者二大懇話会
回

客年四月東京に於て第一回大会の議決に依り本年は当名古屋市内に於て四月廿日より三日間仏教上時事に緊要なる問題評議の爲め大懇話会を開設す依て愛国護法有志の僧侶及各仏教団体の会員信徒諸君は勉て御出席相成度候

御出席者は左の要件御承知相成度候

○各地方より本会へ提出せらるゝ議案は成べく明了に認め説明書を添へ三月三十日迄に送致の事

○議案編纂及印刷等の都合も有之候条日限後に至り到着の分は原案に編入せず

但し議案の旨趣大同小異亦是全一事件なれば到着の前後に依り取捨する事あるべし

○開会日数は大約三日間と予定するも議会の評決に依り伸縮する事あるべし

○名古屋市に於て御定宿無之御方は極て便利なる旅舎を事務所より紹介すべし

○右懇話会へ出席の御方は準備の都合も有之候条三月廿日迄に御住所姓名を詳記し事務所へ御申込に相成度候会場は御到着の上報告すべし

○会費として金三十銭御到着の際御差出しの事

○右開会中は毎夜大演説会を開き弁士は各

愛知県名古屋市

当番幹事 同盟仏教各会

名古屋市門前町大光院内

事務所 愛知仏教会本部

〈愛知仏教会講義 (明治24年3月23日 第四十六号)〉

中市場町二丁目中村嘉兵衛氏方にて、毎月一、二、三、の三日間午後七時始

原 人 論

講師 伊藤寛典師

三国仏法伝通縁起

講師 広間隆円師

〈愛知仏教会講義 (明治24年3月23日 第四十六号)〉

門前町大光院内転愚堂に於きて、毎月十五日廿七日午後第七時より

孝 論

講師 近藤疎賢師

裁断橋及び姥堂記 (明治24年3月30日 第四十七号)

熱田伝馬町の東精進川に渡せる橋なり。今さんが橋ともよべり、昔此所に裁断所ありて政務を行ひし故名くとも、或はさうづが橋の転じてさんだんとなりたるかとも云。精進川は彼夏越の祓するより起れる名なりといへるはさもあるべし。又欄干の擬宝珠に漢文と仮名文字との銘を彫付たり。其銘に曰、

熱田宮裁談橋右檀那意趣者堀尾金助公去天正十八年六月十八日於相州小田原陣中逝去其法名号逸石世俊禅定門也慈母哀憐余修造此橋以充三世忘普同供養之儀矣と此名に依而見は裁談橋とも書しにや

天正十八年二月十八日に。小田原への御陣。ほりを金助と申。十八になりたる子を。たゝせてより。又ふためも見ざる。かなしさのあまりに。いま此橋をかける事。はゝの身には。らくるいともなり。そくしんじゆうふづし給へ。いつがんせいしゆんと。後のよの又のちまて。此かきつけを見る人念仏申たまへや。世三年のくやうなりと

かくかなにて彫付しは不学の人にたよりする老母の心中見るにつきてもいと哀なり。此傍に婆堂あり。安阿弥作の奪衣婆の座像を安置す。いはゆる三途川の姨子、是なり。又熱田旧記に永祿の比、幸順僧都といへる沙門、此川を歩行渡りせしに折ふし水高け

れば誤つて溺死せり。故に僧都川と呼、初めしよし其比此辺に貪欲の老婆ありて彼僧の衣類をも剥取りしに老婆程なく命終せしが、欲心深き老婆なれば魂霊よなく、此あたりをさまよひけるに、其縁類是を憐み罪障消滅の為三途川の姥の縁を安置すとも云り。

大懇話会の準備〔明治24年3月30日 第四十七号〕

来る四月廿日より当市に開設せる全国仏教者大懇話会は、其の準備委員には過る廿三日其の事務所なる愛知仏教会に於て諸事打合の為め小会議を開かれし。今聞く所に依れば既に各地より続々参会を申込、或は議案を贈達せらるゝ向も尠なからず。亦其会場も弥々当市大谷派別院に於て開会する事に決し、一両日中に会場準備に着手せらるゝ由。亦開会中毎夜開設する演説の会場及大懇親会の場所は目下撰定中なれども、多分懇親会場は有名なる秋琴楼に於て催す筈なりと云ふ。亦原案編制の委員には酒井恵遂、伊藤栄二郎、日下部徳兵衛、中野徳二郎、高橋順庵、太田元遵、山田良海、広間隆円、河村文六、水野道秀、安藤清次郎、堀部勝四郎等の諸氏を始め各仏教団体より一名宛の代表者外に事務員を若干名宛出す筈なりと云ふ。亦各県出席の人員の内には東京より石上北天師も出席せらるゝ由。其の他平井龍華、南条博士、村上専晴、堀内静宇其の他有名なる仏教学士、居士は特別に招状を發せられし由なれば、定て参集せらるべし。

曹洞宗支局会議〔明治24年3月30日 第四十七号〕

本県全宗の宗務支局は配下六百廿余ヶ寺にして、之を廿分局に区分して支配されしか、毎年春際此の二十分局より各一名宛の代表議員を招集して全支局全体の経済より布教上の事をも議会の評決を経るの成規なりしか、本年も弥々四月一日より開会せらるゝ由にて、社員水野道秀氏も第一号分局寺院代表者として出席せらる由なれば、亦其の顛末は聞込次第報導致すべし。

西念寺演説概況〔明治24年3月30日 第四十七号〕

当市下奥田町真宗西念寺に於て、過る廿五日午後一時より開会せし愛知仏教会の派出演説は参聴殊に多く、就中夜会の如きは流石に広き本堂も立錫の地なく頗る盛会なりしか、参聴者には仏教会より夫々饅頭を配与せられ閉会せしは午後十一時なりき。将来は全町に支部会を設置し、毎月定期演説を開会し、亦全地の貧窮者へ漏れなく布教するの計画なりと云ふ。

東春日井郡通信〔明治24年3月30日 第四十七号〕

本郡小野村大字上中切曹洞宗長全寺に於ては、住職大谷大馨氏が発願にて大洞院開山恕仲禪師の御分身を奉迎し、過る廿七日其の勸請式を挙行し、隣峰寺院を招き大般若経を転読し、続て水野道秀師説教あり。亦全夜演説会をも催せしか第一席（開会の旨意）大谷大馨、第二江尻深海、第三水野道秀等の諸氏にして参聴頗る多く、殆んど四百余と見受たり。亦大谷大馨氏には曾て当地に小

学教員を勤務せられし事ありしか、本回は当地に於て旧学生諸氏を集め、更に學術及仏教を研究する為青年会を組織するの計画なりと云ふ。

広告〔明治24年3月30日 第四十七号〕

全国仏教者大懇話会

全国仏教者大懇話会と題し西京なる経世博議は、来る四月廿日より三日間名古屋に於て開会せられんとす。而して其目的は仏教上時事に緊要なる問題を評議せんとするに在り。従来一宗一派一地方一団体の間に踟躕し、社会の大局面に向て一致の運動を試るの勇氣なかりし仏教者が、茲に胸襟を洞開し仏教拡張の方策を画せんとするは吾人の切に賛成して休まざる所なり。然れども過ぎたるは猶及ばざるが如し。若し夫れ自家の重大なる資格を忘却し輕挙暴進濫りに政法界裡に侵入するが如きとあらば実に由々しき大事なり。吾人が同会の委員諸氏を信ずるの厚き決して是等の事なきを知る。然れども事物に熱中するときは知らず識らず邪徑に履み込むとあるは是れ人情の弱点なり。吾人は諸氏が深謀遠慮いて事に当られんことを望むや切なり矣と。吾人は其の誼の深切なるを謝し、未だ吾人委員等の精神を知らざるを憾む。

広告〔明治24年3月30日 第四十七号〕

熱田町 陽泉寺 四月 自六日
新尾頭 至八日

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教(二)

小児 三宝大荒神大祭執行す
虫封

廿四年三月 陽泉寺世話人

広告〔明治24年3月30日 第四十七号〕

名古屋市内各仏教団体の懇話会を
来る四月三日正午より 開会
大津町光円寺に於て
す 仏教紹隆会

愛知仏教会講義〔明治24年3月30日 第四十七号〕

中市場町二丁目中村嘉兵衛方にて、毎月一、二、三、の三日間午後七時始

原人論

講師 伊藤覚典師

三国仏法伝通縁起

講師 広間隆円師

愛知仏教会講義〔明治24年3月30日 第四十七号〕

門前町大光院内転愚堂に於きて、毎月十五日廿七日午後第七時より

孝論

講師 近藤疎賢師

曹洞宗会議の概況〔明治24年4月6日 第四十八号〕

曾て報導せし本県下の全宗廿号分局及寺院の会議は、予期の如く過る四月一日より裏門前町万松寺に於て開会せしか、一市各郡撰出の議員には伊藤隆盛、鈴村泰暈、阪井袒仙、水野暁山、菅器玉、茶原良栄、村田大音、西尾令準、寺本賢瑞、益山慈照、近藤覚禅、梶川賢明、安永貫道、佐藤祖閑、長谷川悦翁、佐藤靈源、寺西確門、小寺黙音、友松湖岸、水野道秀等の諸氏にして、番外には支局取締生駒円之、学林監督山崎眠龍の両氏にて各員着席後支局取締りは通常開会の旨を報し続て議事となりしか、当日は布教の件二ヶ条外一項にて午後四時閉会し夫より小会議を開き、廿三年度精算書中予備費費途に就き各議員は受持を定め当局者へ説明を要求する事とし散会し、翌二日午前八時開会出席総員議案支局及学林経済の件なりしか、原案収入額及其の方法を議するに當て先づ支出方より議せんとこの動議起り多数の賛成を得て支出方を議するに當り、或る議員は廿三年度の精算報告を検するに支局定額費の外予備金に於て臨時に消費せし金額は殆んど定額金の半額に達せり。依て本年度に於ては、定額費の外は決して消費せざるの方針を当局者に於て確守せられたし、亦如斯場合に至るは畢竟予備金の多額あるより此に至るものなれば、本年度は可成予備金を少額にせんとて、原案中にある補欠米金及篤整利子金の徴集は本年度に於て中止するとの動議に決して予備金消費説明要求書を当局者に提出し午後六時散会せり。○三日午前八時開会出席総員議員建議に係る学林監理者及寺院總代五名撰定の後年俸旅費

確定の件及前年度予備金消費理由当局者より懇々説明あり。散会せしは午後三時なりき。

全余聞〔明治24年4月6日 第四十八号〕

議員は何れも熱心に議場に在て討議せらるゝも、中には番外か説明せし件に就き番外に賛成なぞと云議員も多くありたり。亦原案に何々するの可否と云原案ありて、議長は原案賛成は起立と命したる時きなそは一同起立せし事なりしが、どちらか判らず亦議事細則中に何々を許さすと云箇条は六七ヶ条もありしか、細則は都て議員の討議を得て規則となるものなれば、命令的の字よりは何々するを得すと改正せられたり。亦議長か採決の時き原案は動議との区別もなく、亦動議にも発言者の前後の区別もなく採決せらるゝ様に見受あり。其の他三四箇の不都合もありと見受たりしか、明年の議会までには議事法の研究望みたき事なりと。

鐘供養〔明治24年4月6日 第四十八号〕

今六日午後一時より、当市中下紙漣町真言宗堪忍堂に於て見出しの如く鐘供養を執行せらる。其大導師は真言律宗八事山大和上を聘し、随喜の寺院廿七ヶ寺集合して音楽稚児及投餅等をも為さるゝ由。

大谷派門跡殿へ伺候〔明治24年4月6日 第四十八号〕

当市御滞在中なる大谷派管長殿下へ、昨日午前十時愛知仏教会本

部理事古沢全誠、河村武七の二氏並に本社の水野道秀、日下部徳兵衛等伺候せしに、全門跡殿下には全別院古御殿にて謁見せられ、御教示中目今は各宗聯合の必要なる時代にて既に各宗本山に於ても夫々協議の上該協議所を東京に設置し、予も先月迄は其事務を管督せしほとこの事なれば、各地方の僧俗に於ても此を体認し、国家及宗教の為には着実なる方針を取り精々尽力すへき様と懇示せられたり。了りて渥美執事より最と鄭重なる挨拶ありしか、理事諸氏には既に準備中なる大懇話会は各宗本山執事の臨席を請の計画なれば万障操合せ出席にありたく、亦何れ全会の結果は定て各宗本山へ関する事項もあらんか、諸事御本山に關するの事項は御幹旋の勞を御取ありたしなど懇話して歸りたりにき。

養鷗徹定師の追悼会 (明治24年4月6日 第四十八号)

去る一月十五日に遷化されし浄土宗総本山智恩院前々門主養鷗徹定上人の追善を去る二三四の三日間、当市白川町光明寺に於て営まれたり。

外人五百羅漢を撮影す (明治24年4月6日 第四十八号)

当市新出来町なる五百羅漢大龍寺へ米人ボールローチンが写真師を引き連れ行き、同寺に安置する羅漢の木像を撮影せしめて本国に送りし由、羅漢の洋行偕一時に五百人とは多分出稼ならんか。

愛知育英学校の試験 (明治24年4月6日 第四十八号)

去る三日、同校第一期修了証書授与式を挙行せられし概景は、当日午前九時頃より愛知仏教会の役員能仁社員同校設立委員及び生徒の父兄共に数百十名来校せられ、同しく十時半より教場に臨み順次証書を授与し終て校長織田宝山、伊藤覚典教師、山本竹次郎、丹羽女史の祝詞ありて、次て君が世の唱歌を奏し畢て来客及び生徒の父兄諸氏へ祝饌を饗し、談話数刻の上散校せられしは午後二時頃なりき、因みに同校生徒九十七名中、今回の試験に優等なるものは男子部にて安井耕秋外二十八名、女子部にては沖れい女外十二名なりしと云。

仏教会演説 (明治24年4月6日 第四十八号)

当市新地女工場にて、去る二日広間隆円、石川稷然の二氏演説、又西春日井郡如意村岳桂院の演説は去廿七日と五日二回にして伊藤覚典氏出席。又荊谷にては同町仏教青年会に来る十四日午後一時より第五次回の仏教演説会を開かる、由。出席弁士は伊藤覚典、黒田安麻呂外数名なり。来る十日午後二時より四恩会演説。出席人は近藤疎賢、中村甄宗、水野道秀、同日午後七時より東田町温知会にて仏教法話及び討論会ありしが、出席人は仏教会の弁士に仏教青年団の弁士と同会の会員なる由。

育児に第一等賞 (明治24年4月6日 第四十八号)

愛知郡熱田町大字伝馬吉川田鶴方に預りある愛知育児院育児富田

しんは昨年より同町尋常小学神戸学校へ通学せしめられしに、去月廿五日同校大試験の折右しんの成績は修身百点、読書百点、作分百点、習字九十点、算術百点、総点数四百九十点、平均点九十八点、小試験点九十七点、成点九十八点なりしかば、全郡役所より学力優等に付、太筆一対賞与相成り、同校よりは第一年の課程を修了せし証をわたされし由。又同児は育児通学の嚆矢なりと云。

故佐藤牧山鴻儒の法会〔明治24年4月6日 第四十八号〕

過る三日、当市門前町極楽寺に於て門生太田寛、高橋磯八郎、成瀬日俊、大田元遵、伊藤由太郎、小川亮、下条将太郎、三輪文治郎等の諸氏の發起にて、其の尽七日諱を修営いせられたり。今其の概況を記は、全寺本堂の正面には称名院清誉牧山居士と認たる靈牌及老先生の中判形の写真を安置し、大塔婆供物立花等最是鄭重に献列し、聽て午前九時より門生辰巳守氏の献納に係る音楽を始めたり。各来会の旧門生及僧侶方は奏樂に随つて本堂に整列し、夫より大施餓鬼会を修せられたりて奏樂の内に参会の門生諸氏は交々最と静肅として焼香せられたり。旧門生にして参会の僧侶には武田鼎立、杉山徴典、河村宗純、松平龍舟、住田祐信、横江覚城、広間隆円、水野道秀等の諸氏は大法衣を着し誦経せられたり。参会者には福岡敬堂、鈴木乾堂、吉田高朗始め無慮一百六十余名にて老先生の旧里なる山崎村よりも親戚方七八名も参会せられたり。

広告〔明治24年4月6日 第四十八号〕

全 第
国 仏教者二大懇話会
回

客年四月東京に於て第一回大会の議決に依り本年は当名古屋市に於て四月廿日より三日間仏教上時事に緊要なる問題評議の爲め大懇話会を開設す依て愛國護法有志の僧侶及各仏教団体の會員信徒諸君は勉て御出席相成度候

御出席者は左の要件御承知相成度候

○各地方より本会へ提出せらるゝ議案は成べく明了に認め説明書を添へ至急送致の事

○議案編纂及印刷等の都合も有之候条日限後に至り到着の分は原案に編入せず

但し議案の旨趣大同小異亦是全一事件なれば到着の前後に依り取捨する事あるべし

○開会日数は大約三日間と予定するも議会の評決に依り伸縮する事あるべし

○名古屋市内に於て御定宿無之御方は極めて便利なる旅舎を事務所より紹介すべし

○右懇話会へ出席の御方は準備の都合も有之候条至急に御住所姓名を詳記し事務所へ御申込に相成度候会場は御到着の上報告すべし

○会費として金三十銭御到着の際御差出しの事

○右開会中は各地よりの出席者交互に毎夜大演説会を開く

愛知県名古屋

当番幹事 同盟仏教各会

名古屋市門前町大光院内

事務所 愛知仏教会本部

愛知仏教会講義〔明治24年4月6日 第四十八号〕

中市場町二丁目中村嘉兵衛方にて、毎月一、二、三、の三日間午後七時始

原人論

講師 伊藤寛典師

三国仏法伝通縁起

講師 広間隆円師

愛知仏教会講義〔明治24年4月6日 第四十八号〕

門前町大光院内転愚堂に於きて、毎月十五日廿七日午後第七時より

孝論

講師 近藤疎賢師

陽泉寺の虫封し〔明治24年4月13日 第四十九号〕

去る六七八の三日間、当国熱田陽泉寺に於て同会を施行せられ加賀金沢天徳院住森田悟由師を聘して大般若の転読及び羅漢講式を行はれしが、連日共数千人の参詣にして近古未曾有の盛会なり

き。

醍醐教会の演説〔明治24年4月13日 第四十九号〕

来る十五日午後一時より当市橋詰町円頓寺に於て全会の大演説会を開く由にて、その弁士は児島敏海氏を聘し、会員には水野菜遠、石川穰然、大島通寛等の諸氏なり。

大谷派普通学校の遠行運動〔明治24年4月13日 第四十九号〕

当市なる大谷派本願寺公立大谷派普通学校の生徒数百名は、去る十日午前六時同校を発し、職員教員の引率にて犬山へ向け遠足運動を行はれし概況なりと謂ふを聞くに、当市清水の先きにて小休止を為し、三階橋を経味碗原より小牧を通過し藤の棚にて昼食を喫し、午後二時三十分犬山町に到着せり。当日の途中は列伍整々として時々仏教軍歌、或は陸軍々歌などを唱へ勇ましく進み行かれしが、一泊の上翌十一日は五時に床を起き、同町なる大谷派淨誓寺の本堂へ一同参拝し畢て朝食直ちに天守閣を觀覽して帰途に就きしが、同日の中食は小牧町西源寺住職織田氏の招きにて、同町小牧山の頂上に於て丁寧なる饗応を受けしが、是れに先き立ち生徒一同は同寺の本堂前にて参拝を為し、歩を揃へて登山し、食後再び列を調へ同山を下り、南に向くて帰校せしは午後五時過ぎなりしと。因に記す同校は高等小学より稍高尚なる程度以上中学課程の教授を為すものなるより生徒の年齢にも甚たしき相違あれど、当日の運動会には一同出場せしも若年者は却て壮年に勝りし

効果ありと、又遠隔地より通学する生徒の健足なりしは、全く平常運動上より致す所ならんなど大に得る所ありし由なりと云。

法雲普蓋禪師

法会と授戒会〔明治24年4月13日 第四十九号〕

当市松山町安齋院に於ては、来る十七日午後二時より観音懺摩法会及説教、全廿一日より授戒会を修行せらると云、亦住職野々部至遊氏には五月上旬より島根県石見国迹摩郡波積村岩滝寺へ授戒会のため旅行せらると云ふ。

慈善者へ褒状〔明治24年4月13日 第四十九号〕

県下熱田町字新宮坂湯屋加藤みし女は仏教篤信且つ慈善の間へありしが、過般同町成福寺の堂宇なきを憂ひ、自から数百円金を喜捨して之を再建し、其他諸寺院へ仏器等を寄付し、或は貧民を救恤せられんことは能く世人の知る所たるか、茲に其慈善の心を嘉みせられ曹洞宗両大本山両大禪師より左の賞状を下賜せられたり。

熱田成福寺信徒

村瀬 みし

夙に曹洞宗の教義を篤信し、志操温良行持純正能く信徒の本分を尽して他の模範と為るは奇特の至に付、茲に賞詞に及候事

曹洞宗大本山永平寺

真晃断際禪師

曹洞宗大本山総持寺

愛知仏教会講義〔明治24年4月13日 第四十九号〕

中市場町二丁目中村嘉兵衛方にて、毎月一、二、三、の三日間午後七時始

原人論

講師 伊藤覚典師

三国仏法伝通縁起

講師 広間隆円師

愛知仏教会講義〔明治24年4月13日 第四十九号〕

門前町大光院内転愚堂に於きて、毎月十五日廿七日午後第七時より

孝論

講師 近藤疎賢師

風説〔明治24年4月20日 第五十号〕

誰謂ふとなく道路に伝ふる所を聞けば、能仁新報の編輯及び印刷を新愛知社に托すると謂ふものあれども、成る程能仁新報も昨年の五月発行の節は万事不慣の素人寄合なれば、印刷の約定中甚だ不都合なる廉ありて、莫大の損失を招き為めに前途の維持も甚だ困難なりしが、幸に読者諸君の愛顧と社員の熱心によりて漸く該契約期限則ち一年間を無事に経過せり。去れども編輯は他に職務

ある元亮が単身其衝に当りしは止むを得ざる事情のあるありて、若しも其衝に当るを避けんが、今日此の能仁新報の存命を見るべからざる運命なりければ、法の為め国の為めと寸暇を偷み難難辛苦漸く今日に至れり。然れども今後印刷の契約さへ改正し得ば、

本社の維持も難きに非ざれば、此の際良記者を聘して万事を依托し、元亮は退かん事を乞へども尚暫く従事し呉れる様にと以来に由り一二ヶ月は勤統致すべけれど、遠からず良記者を聘し紙面に一大改良を施し、能仁子の光明を十方に放ち一切衆生を濟度するの期はあれども、其の編輯は勿論印刷をも結社の際より世間の新聞社等に托せざる規約書なれ、道路の風説の如き事は万々なきのみならず、能仁新報は早晩一大改良の時期あるべければ看者暫くの間を待ち玉はらん事を希望す。

愛知仏教会講義〔明治24年4月20日 第五十号〕

中市場町二丁目中村嘉兵衛方にて、毎月一、二、三、の三日間午後七時始

原 人 論

講義 伊藤寛典師

三国仏法伝通縁起

講師 広間隆円師

愛知仏教会講義〔明治24年4月20日 第五十号〕

門前町大光院内転愚堂に於きて、毎月十五日廿七日午後第七時よ

「能仁新報」よりみた名古屋の仏教（二）

り
孝 論

講師 近藤疎賢師

能仁新報の改良〔明治24年4月27日 第五十一号〕

本社新報の創立者は実に名古屋に於ける仏教団体の祖先とも謂ふべき紹隆会員九名の者にして、今日に至るまで実に莫大の辛苦艱難と資金とを投し、特に発行当日の如きは毎号徹夜して今日に至る者なり。然れど編輯其他に於ては到底専任の者あるべからざるは勿論なれども、発刊の初め印刷の請負人を定むるや何分素人の寄合なれば甚た不完全なる契約を為し、為めに莫大の損失を蒙りしは固より営業の主意にて発行せしに非ずと雖も、実に其の上記者及び役員を置くに堪へざるよりして毎発行毎には社員は何れも徹夜を為し編輯も他に業務ある社員のものにて負担せしより不完全勝ちなりしは実に謝するに辞なけれども紙数も次第に増加し、今や名ある日刊新聞と同等の刷り高に至りしは、実に愛読者諸氏が本社を愛憐せられしによらずんばならず。故に印刷請負人との契約は本号にて尽きたれば、以後は紙数を従来の八頁を増加して十頁とし、記者を聘し一切の社務を改むるの幸運を得たり。因て本社の主意と組織は更に従来と換る事なけれども紙面に一大改良を施し、先づ第一着として次号には三十余頁なる講義録を付し、且つ挿画も二個とし毎号読み切りの小説を掲げ名僧知識高德の伝記と尾三両国の名勝古跡を毎号異りたる画家の揮毫にて挿入するは

従前の通りなる上、次号より更に日本全国中有名なる勝景を始め古寺古社及び遺跡の図を交へ、其の伝記を掲げ大に旧来の面目を改め愛顧せられし読者諸君に報ひんとす。乞ふ次号の出づを見て其の虚ならざる事を知り玉へがし。

授戒会〔明治24年4月27日 第五十一号〕

予て報道せし如く、当市松山町安斉院に於ては過る廿一日授戒会を修行せられ、弥本日は其の完戒なりしか全戒弟は殆んど五百名に達し非常の盛会にてありしと云ふ。

演説彙報〔明治24年4月27日 第五十一号〕

明廿八日は大光院内の転愚堂に於て、愛知仏教会演説出席員は伊藤、高橋、水野等の諸氏、亦東春日井郡瀬戸村宝泉寺に於て廿九日水野道秀氏を聘して昼夜演説を開会せらる筈、亦西春日井郡下の郷村天桂寺にては任職野田道環氏が發起にて仏教団体を組織せられしか来る三日其の発会式を挙行せらる由にて本社の水野道秀氏出席する筈なり。亦過廿日愛知郡鳴海村大心進徳会に催されたる加藤恵証氏、松田鏝齊氏の演説は参聴頗る多非常の盛会なり。亦当市大曾根町顕正会の催しにかゝる去る廿五日加藤松田氏の演説は前全様の盛会なり。

安斉院の大般若〔明治24年4月27日 第五十一号〕

同院にて授戒会を開かれし事は別項に記るしあるが、尚ほ同院に

ては曾て米商原兵一郎氏より寄贈せられし大般若經六百巻を奉読し、右施主の大祈祷を行はるゝ旨。

大谷派顕光会〔明治24年4月27日 第五十一号〕

去る廿四日、当市新守座に於て開会せし同会の発会式に弊社へも招状を辱くせしに付き出席せばやと存し、其の会の果して名称の如く大谷派其の者の設立なりや否を同派へ問ひ合せし所、同派にては更に關係なしとて事なれば、其の設立者を聞きたゞせしに宇佐美鎮雄氏は日蓮宗、梅原薫氏は曹洞宗等にして同会へ出席せられし弁士の加藤恵証氏は本願寺派なりとの事なりと。時に編輯局の隅より夫はチト変だよと謂ふ声の興りければ、記者は咳一咳して否大派の爲めにせらるゝ新趣向なりと答へぬ。

愛知仏教会講義〔明治24年4月27日 第五十一号〕

中市場町二丁目中村嘉兵衛方にて、毎月一、二、三、の三日間午後七時始

原人論

講義 伊藤覚典師

三国仏法伝通縁起

講師 広間隆門師

愛知仏教会講義〔明治24年4月27日 第五十一号〕

門前町大光院内転愚堂に於きて、毎月十五日廿七日午後第七時よ

り
孝論

講師 近藤疎賢師

本紙の改良に就て〔明治24年5月4日 第五十二号〕

吾人能仁子は昨年本月本紙発行の始めに当り、発行の主旨として
実に左の言を為しぬ。曰く、吾人は現時の仏教々会を以て仏教の
感化を及ぼすに足るものとは信する能はず。又た現時の仏教々会
を以て文明日新の今日に応する組織制度なりとは信する能はず。
又た現時我邦の仏教信徒則ち名義上に於て徒に仏教信徒と称する
者を以て真正に仏教の感化を蒙り仏教の信仰を有する者とも信す
る能はず故に、全国の最も信仰あり最も見識あり最も熱心に最も
懇切に最も進歩したる思想を懐き、最も厳毅なる精神を有する所
の仏教の徒の相協同し相提携して、大に振て仏教革新の正義を主
張せんとす。然れども其の改革の方略と手段とに至りては、過激
なる者を避けて着実なる者を取り、架空迂闊なる者を棄て、穩当
適切なる者を撰はんと欲すと。
是れ吾人能仁子が初刊の辞にして、爾来一週年の間実に以上の数
語を骨髓とし手を挙げ足を投するも一には主義ならざるはなかり
き故に、愛読者は次第に増加し、今や紙面を改良するの好時を得
たり。去は吾人能仁子は、一は愛顧の厚き読者に対へ、一は吾人
が初刊の厳言に対し將に進んで腐敗し沈滞し枯朽したる我が仏教
をして、其の元気を回復せしめ我が国運と等しく倍々隆盛ならし

めん事を希望するが為め、大に仏教革新の大義を唱へんとす。故
に吾人が将来に於ける挙動と方針とは、猶ほ既往に於けるが如く
一意仏教の革新を以て自から任し、大に仏教の光輝を發揚して社
会の汚物を一掃し、日本帝国の元気を振作して有形の文明と相雙
ひて無形の文明をも進歩せしめん事に努力すべし。敢て本紙改良
の時に際して言を為事斯の如し。

普茶式〔明治24年5月4日 第五十二号〕

過日、仏教者大懇話会の後、当市洲崎橋畔金城館に於て催せし園
遊会へ、愛知仏教会理事河村武七、井上重兵衛、水野宇右衛門の
三氏より同園内に於て来会者一同へ普茶の饗応ありしが、右普茶
の起原及び其の式に付き、黄檗宗東輪寺に就きて左の数件を聞き
得たるを以て左に録す。

黄檗宗に行はる、普茶は、其昔承応三年即非禪師支那広東より帰
化せられしより我邦に伝はりしものなり。師は寛文十二年、後水
尾帝の戒師となり黄檗山三世に準せられしが、諸国巡化の際当名
古屋に來り。同宗なる東林寺の開山となられし事は既に本紙に記
載しぬ。偕普茶とは黄檗宗の齋時の名にして、則ち齋食なり。其
の法齋堂に於て四人乃至十人廿人等飯台に就て喫するものとす。
四碗五碗六碗等の饗ありて飯食の事なり。飯台に向ふは一二三四
と互に相對するを例とす。台上には皿、飯碗、茶碗、散蓮華、ヒ
等を銘々に供へり。而して食物は相對したる中間に置ける事支那
料理に異ならず。侍者ありて之れを運搬す。中間に人数に應した

る箸を置けり。偕齋堂に入るには、雲板の声に応し門送に誘はれ行き席に着や十仏名を唱へ畢て食す。小菜大菜の二種あり。先つ小菜より饗す。酒は唐茶と称し用ふる者は此の間に於て飲むなり。畢て大菜を出して飯を食す。今混立中の二三を記さば箸羹として蟹蓮根雪輪慈姑唐饅等の盛物あり。麻蕪として胡麻豆腐あり雲南とて豕（僧家にては他物を用ひて類似の者を製す）キクラギ筍等の揚物あり。生盛として麩割干等の辛合あり。惣て支那広東地方の料理法にして則ち開祖林氏（即非）帰朝以来今に当市東橋町の東輪寺に伝ふ故に、同寺に就て右の普茶式を望むもの往々これある由にて二三日前に申込まば二十五錢位の間に応し得る由。同寺内の者の物語りなりき。

曹洞宗の騒動

同宗内の騒動たる一昨年有志会の起りし以来、曾て紛擾騒動の絶へし事なき為めに、本社は逐一報道を怠らざりしか、客冬に至り漸く調停に帰し為めに有志会は解散の場合に至り。茲に第一の騒動は極を結ひしが、爾後一変して滝谷琢宗禪師の退董となり、再變して末派寺院より全禪師永住の請願書を捧呈する事となりしが、全禪師の決意遂に其の請願をも採納せられず。今や第三の騒動として目下全宗制度の改革となれり。元來全宗大本山は越前永平寺、能登総持寺の二本山にして、各其の末派寺院へ法服の制度法式の制度を殊別にして互に軋轢せし事尠ならず。既に明治維新の始にも両山権利の争ひよりして一大葛藤を醸し、当時西京の政庁なる大蔵省の説諭に依り両山盟約書を製して和解し、権利は

両山均一にして唯た席次のみ永平寺は始祖道元の靈場に就き上席たるべしとて、一宗統治の大権者なる曹洞宗管長は両本山毎一年交代に勤務する事となれり。然るに曾て殊別なりし法服の制、法式の制は近年改良して漸く一途に帰したりしか、緊要なる一宗統治の大権者にして最短なる一年交番にて勤務するか如きは自然其の宗政は姑息に陥り苟安に流るゝの弊を免れずとて、本回は滝谷禪師の勇退に際し一宗一管長にせんとの議論起り、遂に全宗寺院一万三千余寺の代表者を招集して臨時大会議を開き、制度改革の端緒を啓発せりと云ふ。之れを同宗三次の騒動とす。

総見寺々々伝と信長公自筆の扁額（明治24年5月4日 第五十二号）

総見寺記を按するに、尾州愛知郡名古屋景陽山総見寺は山城国西京正法山妙心寺の末なり。創建せられしは内大臣織田信雄卿なり。公は其の頃ろ伊勢国五郡を領せられしが、日夜父信長公が菩提の為め一字の寺を営まれんと志さゝれしも、国内良材に乏しきを以つて如奈ともすること能はざるを歎き居られしが、幸ひに全国大島に景陽山安国寺とて虎山和尚の開基寺ありしが、久しく無住の廢寺となり居るを城下に移し、忠嶽和尚を請じて寺号を改め総見寺と号し信長公の菩提を弔はれぬ。抑も総見寺の号たる曾て信長公在世の砌り、江州安土に一字を建立せられしに堂上一の二十四郡を望み得られければ、近侍の士に謂はるゝ様此の寺中能く二十四郡を総見し得へし。宜しく名を総見寺と号すべしと是れ総見寺々々号の始めなり。（後、信長公薨去の後、法号を総見院と

号せり)(中略)又信長公の忌辰に逢ふ毎に寺秩を増加して冥福を祈らるゝ事毎々なれば、寺祿積んで一千三百二十六石に至れり。後秀吉公の世を一統せらるゝや、更に一千三百二十六石の朱証を賜ひて香華の供を弁せらる。然るに慶長中伊那備前の守国中を点検して、私に千二十六石を闕略して只三百石を宛て行ひしが時の住職山翁は、三百石の料尚ほ奠供に余りありとて敢て求むる所なかりき後、国守義利公及び光義公より黒印を賜ひて永く山門に鎮められし由緒寺なる事は、曾て信長公の伝と共に本誌に掲載せし事ありしが、斯る名利なるも維新の変動によりて寺門大に衰頽せしのみならず、曾て炎上の災に罹りしより今は僅かなる仮宇の中に信長公の霊位を納め奉りあるは歎はしき至りなり。由て現住酒井恵遂師は為に寺宇を再建せんとて檀信諸氏と相謀らるゝや宮内内務の両省より若干の金員を下賜せられしのみならず故、三条内府を始め徳大寺内大臣鳥尾三浦曾我の三將軍、白根内務次官、其他織田公に縁故ある華族諸公と紳士豪商の贊助により、愈々堂宇再建の運に至られければ旧に復して信長公の霊を慰め、信雄公の志を安するも近きにあるらん。左に掲ぐるは信長公の霊屋(今は仮堂)前に掲げある扁額にして、則ち信長公が在世の砌り江州安土の城上に自筆して掲げられしハンジ物の額なるを公の曾孫織田貞幹氏の臨写して全寺に納められし物の写なり。額は凡そ縦四尺横六尺にして桐を以て製し、半面は左の図にして半面に左の文あり。

正法眼蔵

此図也者

総見寺殿贈一品大相国公江州安土城之額也熟視有人憚開胸襟捨片篋傍設蚊帳左持直木右擎篋箕者是形我国之諺於絵事而以教人也販夫知之牧豎識之不用訓詁著矣見者勿以易解忽諸也儻施之於辞則曰其為丈夫者心体広胖氣宇高直而内無詭曲外勸家業則終能保身也繁相公之意而從著至微之捷徑也所謂脩身齊家治国平天下之道亦不出乎是矣厥曾孫織田貞幹臨写付乎山謂曰斯事逸乎家譜惟志矣旃請作記永貼將來粵書顛

元禄元歲舍戊辰十二月穀日

勅住法山当寺六世白翁翁識



偕図は判じ物なれば、信長公の意を推し量るは甚た難き事ながら、白翁の判断によれば心体の広胖なるは氣宇の高直にして内詭曲なきなり。其の様の家業を励めるは能く身を保つ所以なりと文せられしかど、尚ほ蚊帳及び其の他の図につき或る判断家の判断あれば次号に掲ぐ可けれ共、看客諸氏も能く意を凝して判断し、其当否を試られん事を。

生駒円之師(明治24年5月4日 第五十二号)

全師は過般來、曹洞宗臨時大会議開設請願の爲め上京なりしか、

弥々全師始め二十一名の建言は宗務局の採納せらるゝ事となり、五月二十五日より議会開設すべき指令を得て、過る廿八日一と先づ歸寺せられたりしか本月廿日頃再び上京せらるゝと云ふ。

笠間龍跳師〔明治24年5月4日 第五十二号〕

全師は過般より曹洞宗の宗制編纂の委員長を命せられ目下上京中なるが、此頃中流行感冒に罹り為に引籠り居られし由。亦全宗も近日に至り、宗規上の一大改革説出てゝ為に別項に記せし如く五月廿五日より臨時大会議を催さる由。右に就き自然宗制にも變動を来す事なれば、都合に依り一週間程の賜暇を得て本月十日頃歸寺せらると云ふ。亦全師は本社新報改良の予告を見て左の和歌を寄せられたり。

能仁新報の改良をよろこびて

愛知仏教会員

笠間 龍 跳

み仏の言の葉毎に色まして

緑りすゝしき夏ぞ来にける

また

鷲山の文のはやしの若みとり

しけりゆくかけたのむうれしき

僧侶の龜鑑〔明治24年5月4日 第五十二号〕

此頃、当市に於て開きし全国仏教者の大懇話会へ来会せられたる

長崎県真言宗東漸寺住職松田鏗齊氏は、当市小伝馬町に八木初次郎とて貧困なる者ある由を聞き、去る廿七日其の窮状を見んとて態々訪はれしかど、何分土地不案内の爲め居宅の分明ならざりしも救助の念止まざりければ、更に人をして居宅を捜さしめ、当人を旅宿へ呼び寄せ其の物語りを聞きて辛ろに愍然の志を催し自身着用の衣類を脱ぎ与へ、尚ほ全人が不自由なる身体に纏付く孫ある由を聞き、其の孫の養育の事など懇ろに論し老人を慰めて帰されしが聞きしに勝りし貧困者なりしとて、眼を湿して社員に語られぬ。因に記す。氏は非常なる篤信家にして昨年東京に開きたる大懇話会へも出席せられて当地の委員三名との協議により、毎年一回全国の都会に於て順次開設すべきの建議案を提出し、一同の賛成を得て本年当地に開くべき運ひに相成りたること故、氏は遠路を厭はず開会の数日以前より準備等の爲め、特に奔走の勞を取られたるは実に今世に稀なる末、頼母敷き壮年僧侶なるか陋僧方否な老僧方の反省とて記す者は社員某なり。

愛知仏教会講義〔明治24年5月4日 第五十二号〕

中市場町二丁目中村嘉兵衛方にて、毎月一、二、三、の三日間午後七時始

原 人 論

講義 伊藤覚典師

三国仏法伝通縁起

講師 広間隆円師

大須宝生院の昇格〔明治24年5月11日 第五十三号〕

去る四日、同宗管長猥下より左の通り準別格本山に昇格せらる。尚ほ同願件に付き同寺の来歴を得たれば次号に掲げん。

愛知県名古屋市

宝生院

準別格本山昇格之儀允可候事

明治廿四年五月四日

真言宗長者

大僧正原心猛

別紙御辞令之通り宝生院寺格昇等之儀御允可相成候条請書可被差出候也

廿四年五月四日

法務所庶務課

宝生院住職

権少僧正滝実昇殿

追て地方庁本山并に支所等へ届出可有候也

笠間龍跳師〔明治24年5月11日 第五十三号〕

全師は前号に報導せし如く一時は重症に悩み居られしか、稍快気に赴かれしを以て一先帰院せられしが、全宗の会議も近々なれば、来る十七日頃には再び上京せらると云。

大須宝生院の興教大師の遠忌〔明治24年5月11日 第五十三号〕

同宗の中祖たる大師の七百五十年忌を引き揚げ、明十二日同院に於て末寺各院并に同宗の僧侶五十余名を召集し施行せられ同時に別項昇格の披露を。

大般若の奉読〔明治24年5月11日 第五十三号〕

例年正五九の三ヶ月に同経奉読の祈祷を施行せらる、当市栄町の秋琴楼、森本善七、大沢重右衛門の三氏は今回大光院主の婦名を幸とし、既に本日をして秋琴楼、伊藤氏は行はる、由。

亀鑑〔明治24年5月11日 第五十三号〕

当市裏門前町曹洞宗福寿院住職栗木碓伝氏の徒弟なる智堂氏は、曾て本県中学校に在学中は頗る頭角を現はし、最優等生の位置を占め居られしが、今回卒業の上更に進みて第一高等中学校に入校せらる、為め、昨十日白鳥鼎三師を始め数名の僧侶と知友を招かれしが、本社の水野も招きに応じて列席せり。因に記す同智堂氏は、当中学校の規則として洋服ならでは昇校を許されざれど、全氏は門前までは法服を着し、洋服は常に門番に預け置きて寒中と雖も厭ふ事なく脱ぎ換へられし由。兎角僧侶が俗人を真似たがる当世にも似ず、独り斯く之行ひありしは偏に今日ある結果なりと帰社の上の物語を掲げ、世の俗僧輩の亀鑑とす。尚高等中学へ入学以前、同宗制に由り首座職（長老）を襲かる、由なりと云。

愛知仏教会の准仏会〔明治24年5月11日 第五十三号〕

来る十五日は仏誕生の准仏会につき、全本部なる大光院に於て全會を修する筈につき、会員は一同参拝あり度と同会の常置理事より申越されぬ。

信長公祀堂の手斧始め〔明治24年5月11日 第五十三号〕

本紙前号に掲載せし当市裏門前町なる右大臣信長公が菩提所の総見寺の祀堂再建の爲め、一昨九日其の手斧始めを行はれしか、其の経費は凡そ二千円の見込なる由。

広告〔明治24年5月11日 第五十三号〕

予テ上京中ノ処病氣療養ノ爲メ、一週間ノ賜暇ヲ得テ一昨日帰院致候条此段謹告ス

五月十一日 笠間龍跳

本会派出演説〔明治24年5月11日 第五十三号〕

- 本月十六日昼夜 上宿 興西寺
- 全十七日午後二時 七小町 普蔵寺
- 全十八日午後二時 松山町 梅屋寺
- 全廿一日昼夜 下奥田町 西念寺

右の箇所にて開会候条付近の会員は御参聴相成度候也。

五月 愛知仏教会本部

八事山〔明治24年5月18日 第五十四号〕

八事山は名古屋の東二里斗にあり山に寺あり、興正寺と号す。茲に掲ぐる図は、広路村招魂社下より其の塔尖を望む図なり。寺は遍照院とも号し、真言宗和泉国大鳥郡大鳥山神鳳末派なり。元禄元年八月二十八日国君の建立にして弘法大師を開山とし、天瑞比丘を中興とす。山は東西の二山に別ち、東山には大日如来を安置し、古は高野山に準ひて東山の中腹山門以内を女人禁制とせり。現に有無縁の石塔数基ありて高野奥の院に似たり。東に開山堂、鎮守殿あり。西山には馬頭観音を安置す。其他能満堂あり。五重の大塔あり。又春秋の際は遊山の客踵を接す。総て東山遊ひと云ふ。又簞の生するを以て簞狩に適せり。

授戒会〔明治24年5月18日 第五十四号〕

愛知郡弥富村大字中根宝蔵寺に於て、来る本月十八日より廿四日まで授戒会を営む。戒師は名古屋市上前津町長松院住職水野道戒師にて、同師には当夏江湖会をも挙行するの由

法会と演説〔明治24年5月18日 第五十四号〕

予て報導せし如く、本日は七小町普蔵寺に於て大般若経転読、午後演説にて出席、広間、伊藤、水野、近藤の諸師、明十九日には松山町梅屋寺に於て午後一時より羅漢尊供養及演説出席員前項諸師、亦廿一日には下奥田町西念寺に於て、午前盛大なる祖師降誕会を修せらるゝ計画にて、午後は演説を催さると云。亦十九日午

後六時よりは塩町原兵一郎氏宅に於て仏教演説を催さると云ふ。

熱田通信〔明治24年5月18日 第五十四号〕

愛知郡熱田町大字白鳥法正寺住職吉田義道氏は当夏江湖会を修行せられ、去る二日には上堂大問答あり。翌三日には首座の法戦あり。五日よりは生駒円之師戒師にて授戒会を啓建せらる。申込の戒徒は已に百五十余名なりと云へは、定めて盛況なる可し。○又同所月笑軒住職明達慧等氏も当夏白鳥山主大島天珠師を西堂に請し江湖会を修営し、来十二日に上堂大問答并に説教を開筵せらる、と云へは是亦盛況なる可し○熱田仏教青年会にては、大懇話会へ出席の石上北天、加藤恵証、堀内静宇の三氏名誉員たることを承諾せられたり。尚近日より規模を拡張し、派出演説をなし、会員募集に尽力し一層本会の隆盛をなすの計画中なり。○仏教会熱田支部は会員証の門戸標をも調製し、最早三分の一は家々に貼付し、随分盛大に赴き有益の事業も興る可き兆候なりしに、近頃は兎角因循の姿となり、有志の僧侶は其不振を痛歎し居れり。

本会派出演説〔明治24年5月18日 第五十四号〕

- 今十八日午後二時 松山町 梅屋寺
- 来廿一日昼夜 下奥田町 西念寺

右の箇所にて開会候条付近の会員は御参聴相成度候也

五月 愛知仏教会本部

曹洞宗中学林役員の改撰〔明治24年5月25日 第五十五号〕

全宗学監を六名と定め、此頃所轄内寺院より投票を纏集し撰挙会を開かれし由。今其の報告を得たれば、

明治廿四年五月廿日中小学林学監投票開緘顛末左の如し

愛知県第一号曹洞宗務支局所轄寺院

総計六百二十九箇寺

内百三十六箇寺投票棄権者

総数四百九十三票 内白紙二票

正票四百九十一票

- 三五二 龍桑巖 一三三 小寺黙音
 - 二九七 阪井龍仙 九七 梶川賢明
 - 二七二 織田宝山 九三 山本珀芳
 - 一六一 持永真応 九一 温嶽耕堂
 - 一五一 水野道秀 八三 近藤隆成
 - 一五〇 鈴木泰量 七四 村田大音
- 以上当撰者

- 一三九 田中見門 七四 菅 器玉
 - 一三三 青山鶴堂 五五 岡部万中
 - 五〇 暮石普門
 - 四十一票以下一票迄 得票者 七十五名
- 右之通り相違無之候

取締 生駒円之印

以下立会人列名印

○役員撰挙の結果 別項記載せし如く曹洞宗務局に於て役員撰挙会を開き、夫々当撰者へ通知書を発し、既に本日午前八時より当撰諸氏には執務上の協議会を開かるゝ由なるが、本社々員水野道秀も当撰せり。去れど本回の撰挙は予め支局より適任候補者十余名を定め、之を所轄内寺院へ配付して撰挙せしめしとの事なるに、社員水野の如きは其の候補者と云ふにもあらず。殊に目今は愛知仏教会の常務を監掌し傍ら本社業務にも関係しをる程の事なれば、本回の役員は勿論辞する考へなりしか、学事の盛衰は其の宗将来の榮枯に係る重大なるものなれば進んで之に当るべし。殊に候補者以外の者にして当撰せらるゝ如きは其の名誉も余りありとて、社員は勿論同宗内にも奨励せらるゝ人々多きを以て、又其の好意に酬る為め一層尽力すべしとて漸く就職する事に決定したり。

牧野神爽師〔明治24年5月25日 第五十五号〕

大谷派に於て学徳共に高き同師を聘し、去る廿三日午後より中下法蔵寺に於て、廿七日午後より押切の養照寺に於て孰れも説教を開筵せらる。

法苑学会の講筵〔明治24年5月25日 第五十五号〕

当市裏門前町総見寺前なる光勝院中にある同会には、曾て持永真応師を聘して八宗綱要を講せられしが、去る二十三日より午後七時世分開講入阿毘達磨論を講せらるゝ由。其の傍聴は僧俗共に随

意なりと云。

醍醐教会の演説〔明治24年5月25日 第五十五号〕

明廿六、日当小川町照遠寺に於て水野榮遠師を聘して午後一時より開会せらる。

大須宝生院昇格願〔明治24年5月25日 第五十五号〕

過般、別格本山永寺格を允許せられし当市大須観音の寺門起立書及び略縁起は左の如し。

愛知県名古屋市門前町新義派格院

大本山智積院末 宝生院

当寺儀は、原と美濃國中島郡長岡庄大須村に開創して、開山能信上人は智徳群に越へ名声高く聴へ、御醍醐天皇深く御帰依被為在、元享年中天皇の御願によりて長岡庄に北野山天満宮を御勧請為被在、当寺を以別当職に被補 勅して北野山真福寺宝生院と号し玉ふ。其後相繼て 後村上天皇の御帰依により、正平五年十二月十三日撰津国四天王寺より弘法大師御作の正観世音を移し当寺本尊となし、永く 勅願寺たるへき 宣言を下し玉ふ。又 勅命を以て南都東南院二品聖珍親王付法の弟子信瑜を以当寺第二世となし 上御門二品任瑜親王を以第三世御継席に御治定被為在、則親王は永徳二年より四十一ヶ年の御任職にして伽藍の壮宏此の時最も全盛を極め勅使館の構となり、金輪坊と称し一山の繁昌無比類寺領三千石を有し、勢尾濃三遠信六ヶ国の本宗の寺院悉く末寺

となりぬ。又た 前大宰の師入道頼瑜法親王は任瑜親王の法資とならせられ、印璽相承して被為在当山に御座爾來御代々 天皇の御帰依特に厚く、第七世任慶代宝徳二年五月十二日 御花園院天皇の勅命を以等身の弘法大師御影像を御寄付被為在、当時にては実に前頭六ヶ国の大本山たりしも物替り星移り、其後兵乱の為に寺領を掠奪せらると雖とも織田信長公旧御門室の勝跡を貴て、更に知行五百石を寄付せられたるに此亦乱世の為に持続すること不能。加之慶長十年夏五月木曾川大洪水の為に堂閣悉く流散し、当時の住僧堯遍頗る苦辛を嘗め、全十七年に至り徳川將軍の台命を蒙りて寺基を現今の地に移せり。雖然幸に本尊始め相承の聖教并に数通の 御諭旨及び和漢の古書等夥多の什宝無欠減、今に伝来して現に日本三宝蔵の一ト言へり。既に去る明治十六年古書数点被為在

天覽稀世の名品に被 思召候条 聖諭を奉職して堅固保護可致旨被 仰渡候且又維新の際神仏判然等の為に、大に末寺を減少すると雖とも今尚尾濃両国に涉りて門末六十五ヶ寺現存して寺格來歴共準別格本山の資格に於て敢て不都合の義無之と奉存候条、何卒特別の御詮議を以智山末寺の俣準格別本山に昇格之義並に御允許被成下度、因之別紙寺門の起立書の上本山副書を以此上願仕候也

右宝生院住職

明治廿四年二月 権少僧正 滝 実昇

檀家及末寺總代数名

真言宗長者

大僧正原心猛

寺門起立書

愛知県尾張国名古屋市門前町

新義派格院 宝 生 院

一 創立 建久年中

一 開 基 能信上人

一本 尊 正觀世音菩薩木仏御丈三尺弘法大師御作

但 御村上天皇の勅命により四天王寺より移さる

一 境 内 二千五百八十二坪三合五夕官有地

一 公租地 五百廿七坪九合八夕 宅 地

此地佃金四百七十五円六十錢

一本 堂 十間、十一間三尺 一棟

一 釈迦堂 五間、五間三尺 一棟

一 不動堂 二間二尺、二間三尺 一棟

一 太子堂 二間、二間三尺 一棟

一 聖天堂 二間、二間三尺 一棟

一 五層塔 方三間 一基

一 文 庫 方二間 一棟

一 客 殿 六間三尺、十二間三尺 一棟

一 庫 裡 六間三尺、十二間三尺 一棟

一 仁王門 三間三尺、四間三尺 一棟

一 談林尾張国名古屋市長久寺町長久寺

一本 寺 大本山智積院

一門 末 六十五ヶ寺

一寺 格 四色着用地

但往古勅願寺にして親王御任職の勝跡

一法 流 建久年度より連綿相統

一移 転 慶長十七年美濃国より現今の地へ移転

一檀 戸 十七戸

一信 徒 無定限

右之通相違無之候也

右宝生院任職

明治廿四年二月 権少僧正 滝 実昇

檀家及末寺総代数名

熱田に於ける破邪演説〔明治24年5月25日 第五十五号〕

同地に於ては、近来又々邪教再燃の様相あるより、同地方の青年有志者は明廿六七の両夜破邪顕正邪教撲滅の大演説を開会せらるゝ由。

本会派出演説〔明治24年5月25日 第五十五号〕

本月廿四日午後七時より 皆戸町 真宗寺

本月廿六日午後一時より 南小川町 長全寺

本月廿八日午後七時より 大光院内 転愚堂

右ノ箇所ニテ開会候条、付近会員ハ御参聴相成度候也

愛知仏教会本部

広告〔明治24年5月25日 第五十五号〕

予テ帰省中ノ処去ル十九日發途上京曹洞宗務局ニ在勤致シ居候条此段仏教各団体諸君へ謹告ス

笠間龍跳

曹洞宗学林協議会〔明治24年6月1日 第五十六号〕

当市に設置せる全学林は既に報導せし如く新役員の協議会を開かれし由にて、今其の協議項目を聞くに、第一当撰学監は点数に依りて中学林小学林両学監に区分する事、第二中小学林の学監は事務扱上は互に之を管掌する事、第三六名学監は満期に至るまで執務上に於ては連帯責任たる事、第四服務期限は十二ヶ月として第一期龍桑嶺、織田宝山、第二期水野道秀、阪井禎仙、第三期持永真応、鈴木泰量、第五交迭の順序は廿四年後半期は龍桑嶺、織田宝山、廿五年前半期は龍桑嶺、水野道秀、全後半期水野、阪井禎仙、廿六年前半期阪井持永真応全後半期は持永、鈴木泰量廿七年前半期は鈴木、織田宝山、第六学監は隔月廿五日学林に参集して百般の協議を遂る事、第七俸給及臨時費の件、第八学監は都て配下寺院を代表するものなれば支局は第四号達書に基き服務中は取締の顧問に為し、且つ取締執務上の事件に付き都て回覧を要する等の如き件々迄協議し現取締生駒円之氏か不在故帰局次第事務の引継し成す筈なりと云。

祈祷大般若〔明治24年6月1日 第五十六号〕

過る廿八日、門前町大光院に於て全院住職等間龍跳師が疾病平愈の爲め、全師の徒弟石田溪龍、渡辺龍輔信澄及随徒の諸氏が發起となりて修行せられしか、全日は例月明王殿縁日にもあり帰依の信徒方も多く参集せられ最と静肅たる祈祷会なりき。因に記す筈間老師には、全宗臨時会の爲め病を推して上京せられしか日を逐て快氣に向はれしとよし。

演説と法会〔明治24年6月1日 第五十六号〕

来る四日、上堀川聖蓮寺に於て午後一時より宗建会の爲醜酬教会仏教演説には弁士として石川穰然、水野栄遠、大島寛通外数名にして、妙善寺住職浅井潮鮮師は説教をさるゝ由。尚五日には橋詰町円頓寺に於て身延山本延寺日修上人の追吊法会を営まるゝ由にて、有志寺院五十余ヶ寺の住僧は出場せられ説教等も行はるゝ由。

愛知仏教会記事〔明治24年6月22日 第五十九号〕

○會員区 第七区 第八区

右区域内本月十四日より向ふ一周間に会金纏集の爲め本会より使丁差出し候条、此段報告す。

○本会の事業として、当市内貧窮者に限り施療施薬の義実行致すべき筈に評決致し候条、本会々員近傍の貧窮者にして情状愀然なる者へは本会々員区担当奨励委員及理事並各宗寺院に於て其の事

実を視察し本会本部へ通知に相成候得は、本会は直ちに施療施薬の券状を授与し、又は其の情状に依て医師を派遣して懇切に治療を成すべし。此段報告す。

但し、本会の主義を贊助して自ら進て慈善業の任に当らるゝ医師諸君の姓名は遂て能仁新報に於て報告すへし。

愛知仏教会本部

榊原栄蔵氏の葬儀〔明治24年6月22日 第五十九号〕

全氏の実母園子は仏教篤信の老尼にて、此頃中病床に臥せられしか医薬その効を奏せず。過る十七日六十九年を一期として卒せられし由にて、全十八日同家出棺、納屋町通りを下へ日置橋を東へ旗屋町浄土宗法然寺へ埋葬せられたりしか、今其概況を記せば行列には長谷川、蜂須賀、村滝、山本、原、杉浦、伊藤、仁村、松山、商報社、三井物産社、消防組、其の他諸氏等より四十余対の生花を列し、榊原店中よりは大籠に生花を裁し四人掬を成し、亦愛知仏教会よりは六根色の大仏旗二流を持せしめ高張二対、紙蓮花一對、迎僧四人、尼僧三十余人、靈棺、喪主、親戚、会葬者等なりしか、葬場は三導師にて大導師は住職弁明、師左右導師には栄国寺素南師、極楽寺觀逸師、其他二十余名也。亦諷經には大光院笠間龍跳師、龍梅院、光明寺、宝殊院、安清院、養照寺、愛知仏教会代表として全宗高岡亮音師、亦伊藤覚典師及社員水野道秀、広間隆円も参列したり。会葬者には米商会所役員吉田頭取代理者及長谷川、村瀬、山本其他大野、伊藤、渡辺、蜂須賀の諸氏

を始め無慮七百余名にて三成社主岡上氏本社の中村も会葬したりしか、最と静肅たる葬儀なりき。

育児院総会〔明治24年6月22日 第五十九号〕

全会は過る十九日県会議事堂に於て全会を催されしか、当市及各郡地の会員には続々参集せられ、午前十時総員九十二名議場に列し院長岩村知事代理の口演あり。議長は片野東四郎氏にて、会計の報告より全院新築工事等数件を議了し、最後に一同撮影して散会せしは午後四時廿分なりき、亦全夜大光院内に全院拡張の演説を開会せり。出席は第一富田耕治、第二伊藤覚典、第三内海共之、第四近藤疎賢、第五水野道秀、の諸氏にて参聴は殆んど七百余名最と盛会なりしか、全院は逐々寄付者も増加し、弥々本回は全院新築の事に可決せりと云。記者は斯く仏教者か活運動を成すに至りしを喜悅するなり。

仏教会派出演説〔明治24年6月22日 第五十九号〕

一昨廿日午後七時より当市桜町本遠寺に於て愛知仏教会派出演説を聞き近藤疎賢、石川穰然の二氏出席せらる。

光円寺の廿四日講〔明治24年6月22日 第五十九号〕

来る廿四日開会せらるゝ同会は、例月の通り説教及び演説を開かるゝと云ふ。

興教会〔明治24年6月22日 第五十九号〕

昨廿一日、当市南鍛冶屋町真言宗万福院に於て興教大師の七百五十回忌を修行せられしに付、同寺信徒の面々へ何れも非時の饗応を為されしと云ふ。

演説〔明治24年6月22日 第五十九号〕

当市花車町浄信寺に於て、明後廿三日広告の通り演説会を開かれしに付、同寺住職羽塚慈音氏が工夫になりし大和楽を合奏する由。

議官法師〔明治24年6月22日 第五十九号〕

議官法師と其の名も高き元老院議官なりし町田久成氏は前号にも新寺建立云々の由を記載せしが、此頃当地一泊の上上京せられし際、大須真福寺に立ち寄り同宗々務局各務恵実氏に面談されし由。今同氏よりの物語を聞くに、麓末なる木蘭色の袈裟を着し最と殊勝なる姿にて談話数刻に移り帰途自筆の絹地に白衣観音を画きたるもの一葉を遺し去られしか、同像には既に六百余の号数ありて丈三尺巾尺位の金銀泥にて認めありぬ。

法要〔明治24年6月22日 第五十九号〕

去る十三日、当門前町善篤寺に於て県下三荔設楽郡長永田儼氏は公用を帯ひて来名の際、香華院なるを以て懇なる実父の法要を営まれし由。

広告〔明治24年6月22日 第五十九号〕

来る廿三日午後二時より 音楽合奏

演説及説教 於花車町 浄信寺

大田元遵氏

弁士 佐々木賢淳氏外数名
佐藤法忍氏

大和光明寺伝法の名灸〔明治24年6月29日 第六十号〕

曩に当市皆戸町真宗寺へ出張して多くの病者を治愈せられし大和光明寺相伝の名灸は、病症診察の上にて灸治をなして病根を和らけ、内は良薬を用いて其病毒を退治する奇法にして、又もや去る廿六日より七日間当市菅原町浄教寺へ出張の由。其功能は中風一生のとめ、せんき、かんしゃく、胃病、かつけ等に最も功ありとの由なれば、同病を患ひ悩まるゝ方は就て施療を受け玉へかし。

法園会講義〔明治24年7月6日 第六十一号〕

毎月八日、十八日午後七時ヨリ鍋屋町於円明寺開講ス。

出席講師

近藤疎賢氏 孝論
伊藤覚典氏 原人論

法園会講義〔明治24年7月6日 第六十一号〕

同会は毎月八日講義会を催さるゝの定期なるか、来る八日には其の本部なる当市鍋屋町円明寺に於て開会せらると云ふ。

愛知郡通信〔明治24年7月6日 第六十二号〕

兼て広告せし愛知郡島田村大字島田地蔵寺法会の概況は山門に教會の灯を掲げ、本堂前には東西より球灯を富士形に点し、庭の中央には五輪塔を樹て、其前には青砂摺の万靈塔を築き青竹の柵を以て囲み、六金色の仏旗を交叉し山門より本堂迄四十九院の五色幡を釣りに荘嚴せり。第一日は午後二時より毛替地藏供養を（地藏堂にて）行ひ畢て本堂へ移り、浅井密成師の説教午後六時退散午後九時より説教を聞き了て地藏歎偈を唱礼し、午後十一時退散、第二日は午後二時より大布薩式を（本堂にて）行ひ（浅井密成君式師巴）説戒了て午後七時退散、同九時より夜説、十一時退散、第三日は午後一時無縁大施餓鬼を（本堂にて）行ひ、次に全国水害溺死者三回忌及三界万靈の大施餓鬼を修し、午後五時頃より庭の中央に築きし万靈塔を天泊川へ送り、川施餓鬼を修し畢て塔を焼き帰途に就けり。三日間昼夜共十方より遠近の道俗群参じ、境内殆ど立錫の余地なく頗る盛会なりき。

法会及演説彙報〔明治24年7月13日 第六十二号〕

当市宮出町永安寺に於て、明十四日大般若転読及説教△全南伏見町に於て、十五日午後七時より勇猛団員の破邪顕正大演説出席近藤疎賢、黒田安麻呂、伊藤慈眼△全十五日午後二時大光院に於て布薩会及説教、亦全夜七時より原人論講義△十六日午後七時より上宿興西寺に於て愛知仏教会演説、出席広間隆円外一名△十七日午後一時より松山町安齊院にて薩摩法会及説教△廿一日午後一時

宮出町永安寺にて大施餓鬼会及説教△全日午後二時より西春日井郡小田井村に於て明道会大演説出席社員広間、水野両員

勇猛団の演説〔明治24年7月20日 第六十三号〕

去る十四日、当市桑名町に於て破邪の演説を開会されしが聴衆堂に満ちしが、恰も耶蘇教会場の真向なりし為め一層の盛会にて、拍手喝采は流石に耶教徒も堪え兼ねしにや、未だ一二席ならざるに閉会せしは、愍れ気の毒なる毎々の失敗。

仏教講義〔明治24年7月20日 第六十三号〕

午 起信論 第三
前 筈間龍跳師
午 心経平談 同
後 坐禅儀読講 伊藤文梁師
来る八月三日、四日 於門前町 大光院

法会及演説彙報〔明治24年7月27日 第六十四号〕

今明の両日、大光院に於て午後二時より吉祥講及布薩会にて両日共統て説教▲廿八日夜、全院内転愚堂に於て愛知仏教会演説出席数名▲八月一日、松山町安齊院に於て午後二時より祈祷大般若経転読及説教▲八月三日四日両日午後七時より、中市場町中村嘉兵衛宅に於て社員広間隆円師の法話▲過る廿五日温知会定期演説は参聴頗る多く盛会なりき、社員中村元亮氏は去る廿三日帰省す。

仏教演説〔明治24年7月27日 第六十四号〕

来る廿九日（旧六月廿四日）、愛知郡上中村妙行寺に於て清正公の祭祀に付醍醐教会員林鳳宣、石川穰然外数名、午後一時より仏教演説并説教を開筵し、猶同時宝物清正公の宝器古書等の虫払に依り参詣人へ縦覧せらるゝ由。又全日丹羽郡定水寺村妙泰寺にて日朝上人正当会に際し、全醍醐教会員大島通寛、水野栄遠外数名午後二時より仏教演説并説教開筵せらるゝ由。

総見寺の新築〔明治24年8月3日 第六十五号〕

全寺の信長公祠堂殿の新築工事は、遂に其の工歩を進め目下既に建前もすみ、両三日中に屋根廻り葺き上げとなる由。全工費の義捐者も続々ありて一大美観を呈するならんと云へり

唱道義会第三周年記念会〔明治24年8月3日 第六十五号〕

当市古渡町青年諸氏の組織に係る全会は、創立第三年の記念会として其の本部なる伊勢山町昌善寺に於て、来る五日午後一時より記念式を挙行し、全夜七時より橘座に於て仏教大演説会を催さるゝ由にて、出席弁士には岡無外、本多善明、小杉陶蔵、近藤疎賢、萩倉耕三、社員水野等の筈にて本社へも招状を送られたれば、参席の上次号に報導すべし。

愛知仏教会演説〔明治24年8月3日 第六十五号〕

本市松山町曹洞宗慈眼院に於て五日午後三時より全演説を催し、

社員水野、広間の諸氏出席せる筈なりき。

曹洞宗婦人会〔明治24年8月3日 第六十五号〕

本回大光院住職笠間龍跳師は、大に近來市内の豪商紳士等の婦人にして宗教感化の何たるを知らず、稍無宗教に流るゝ傾きあれば之を挽回せん者とを、此頃中婦人会組織に熱心せられしが、今学会の方法を聞くに毎月二回会員は其の会場に参集し、会員一定の札拜式を成し続て講師通俗的の法話を成し、次に仏経誦誦、次に仏教中仏語の質義等にて散会せるの事なりと云ふ。既に入会申込者あれば多分益後に発会を挙行せらるゝと云ふ。

加藤林造氏の供養〔明治24年8月3日 第六十五号〕

名古屋市東田町加藤林造氏は蚕問屋を営業せられしために多くの蚕を殺したるため、其供養を願徳寺にて修行す。

感心な事〔明治24年8月3日 第六十五号〕

蘇鉄町宿屋業石黒金松氏の發起にて同業者及宿泊人一般義捐を募り、廿三年四月より男女十九名当市白川町椋取院へ仮葬者の為八月五日を卜し、市内建中寺丈室を招請し大施餓鬼を修行すと実に感心の事なり。

曹洞宗学林修業証授与式〔明治24年8月3日 第六十五号〕

当市裏門前町万松寺に設置せる全学林へ過般來試験中なりしが、

過る廿九日各学生の修業証授与式を挙行せられたり。当日午前九

時全学林職員及学生一同講堂に参列し、監理代学監龍梁巖氏起て該式を挙行する旨報告し、順次各学生へ証状を授与し織田学監の演説、次に英学教諭内藤万治氏の演説、次に社員水野道秀も祝詞に代へ修学の方針を述、次に橘教師の簡短なる演説あり了て散堂の上一同に祝齊ありしが、当日修業証を受けし学生は左に、

中学林科一年級 鈴木敬岳、岩山家山、森川泰麟、塚本証玄、石川仏如、竹内黙音、山田活禪、横井龍吟、伊藤遼禪、中村樺苗、鈴木点笑

小学林全科卒業 畔柳斧山、安藤聰鮮、森達道東、大路鉄門、近藤道賢、後藤元鼎、谷口徳成、玉置俊透、西山法純、野呂天外、八尾泰能、伊藤戒芳、梶原鶴童、太田快順、大倉抽龍、加藤確翁、山田諦心

全二年級 石田克明、桜井耕雲、中西宏道、斉藤智昇、若松留旨、桑原円成、奥村祖道、長谷川禅棟、木村文翁、虫賀玄亮
全一年級 水谷良禪、日比野源成、荒谷心光、村田靈道、鬼頭偉運、児塚大旬、横井鉄門

亦全日、各級優等生にして賞与得し学生は一等賞鈴木敬岳、二等賞岩山家山、三等賞森川泰麟亦小学林全科卒業生にては一等賞畔柳斧山、二等賞安藤聰鮮、三等賞森達道、全二年級にては一等賞石田克明、二等賞桜井耕雲、三等賞中西宏道、全一年級にては一等賞水谷良禪、二等賞日比野源成、三等賞荒谷心光等にて何れも賞品として内外の書籍を受領したりき。亦全学林秋際より欠員生

徒を募集し、林規を厳密にして一層薫陶に注意を加へらるゝと云ふ。

私立小学林試験〔明治24年8月3日 第六十五号〕

松山町安斉院には昨年九月より全学林を創設し、学生二十余名は孜孜励学怠らざりしが、弥本月六日頃より大試験を執行せらるゝと云ふ。

仏教講義〔明治24年8月3日 第六十五号〕

午 起信論 第三
前 笠間龍跳師

午 心経平談 同

後 坐禅儀読講 伊藤文梁師

来る八月十五日、廿七日於門前町 大光院

曹洞宗巡教師大会〔明治24年8月10日 第六十六号〕

愛知県第一号曹洞宗務局下には全管下限り、巡教して自由に布教伝導すべき資格を有する全宗僧侶四十余名及全宗の布教拡張の専務に当り布教係と称する者亦四十名程ありとの事なりしが、此の多数の巡教師及布教係か其の意見区々にして布教伝導の行届かざるは勿論の事、亦近時党派及管長撰拳等の感情の爲め一県下の布教伝導を等閑に付するは残念なり。依て此の布教伝導の枢要に当る巡教師及布教係等の大会を催し、漸次全県下に全宗の布教伝導

を盛にせしものとして全宗の織田宝山、山崎眠龍、伊藤覚典、坂井禎仙、近藤疎賢、鈴木泰量、辻本玉乗、水谷貫之、雉本東隣、寺本賢瑞、佐藤禎閑、後道実道、近藤覚禅、中島禅友、益山慈照等の諸氏が発起として不日大会を開かるゝ計画なりと云ふ。

私立学林試験〔明治24年8月10日 第六十六号〕

前号に記せし当市松山町安斉院に設置せる曹洞宗小学林は、過る六七両日大試験を挙行せられしか、当日は監理兼教師野々部至遊、漢学教員和田丹齊、英学教員鈴木富二、数学歴史教員奥村初太郎等立会、因に学生父兄及隣寺等も參觀し頗る盛挙なりき。

学師死去〔明治24年8月10日 第六十六号〕

大谷派本願寺の学師にして当県愛知郡松葉村字四女子徳本寺住加藤法城師には、昨年来肺患にて京都にて治療中の処、今春に入り頗る快気の模様ありしに付只念其全愈を希望せしに、四五月より病勢一変、去月下旬に至り医師も危篤を報ずるに至り、其廿八日には学階一級を進め特に三等学師の称号を付与せられしか、其三十日午後四時頃に至り遂に薬石の効を失し遷化せられ、同三十一日花山なる火葬場に荼毘したる趣き、本葬は当地にて行はるゝ由、又右死去に付ては本山より五十円の葬資及び法主親筆の院号を下賜せられ院号は恭慎院と称する趣き

浄土宗愛知支校の新築〔明治24年8月10日 第六十六号〕

去月八日より三日間、当門前町阿弥陀寺に於て愛知宗学支校聯合部内学務委員の會議を開き支校新築を可決し、明治廿五年七月より新築事務所を建中寺山内に設置し、建築委員長一名、建築委員二名を置き、連帶責任を以て其事務に当り、係り員は学校委員會に於て撰挙し、工事は入札法を用ひ相當の保証金を納めしめ、尚ほ事務所設置までは一切の事務を校長幹事に依嘱する等の細則を定めたり。又其新築規約なりといふを聞くに左の如し。

愛知支校新築規約

明治廿三年愛知支校聯合学務委員會に於て当校新築の件を議決し、茲に左の条件を規約す

第一条 支校は名古屋市筒井町建中寺境内に新築する事

第二条 支校新築は来る明治廿五年中に着手し、全廿六年十月を期し落成せしむる事

第三条 支校新築予算金三千五百円とし、聯合五大教会部内各寺院並に檀信徒より徴集する事

第四条 前条予算金額分担当を定むる事左の如し

- 一金二千円也 愛知大教会部内
- 一金五百九十円 三重大教会部内
- 一金四百五十円 三河大教会部内
- 一金三百七十円 静岡大教会部内
- 一金九十円 岐阜大教会部内

第五条 支校新築に係る出納諸般は、第十一国立銀行に依托し総

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教(二)

て処理せしむ

第六条 第四条各部内負担金額は左の割合にて大中教会所の名義を以て主任銀行へ振込むものとす

明治廿四年十二月三十一日限り 三分一

全 廿五年十二月三十一日限り 三分一

全 廿六年十二月三十一日限り 三分一

第七条 支校新築に係る金額は何等の場合あるも決して他に流用する事を得ず

第八条 支校新築に要する細則は、来る明治廿四年学務委員通常

会に於て之を規定す

第九条 支校新築賦課金徴集方法は各大中教会部内の適宜とす右規定候也

愛知支校学務監督深見志運、全校長武田芳淳、愛知大教会学務委員中条大熙、三重大教会学務委員常住靈穩、全大野法音、全吉水靈信、三河大教会学務委員清水愍海、全近藤学文、静岡大教会学務委員泉寛啓、全浅井天察、岐阜大教会学務委員松尾学翁。

仏教講義〔明治24年8月10日 第六十六号〕

- 午 起信論 第三 笠間龍跳師
- 前 起信論 回
- 午 心経平談 同
- 後 坐禅儀読講 伊藤文梁師

来る八月十五日廿七日於門前町 大光院

明教記者〔明治24年8月17日 第六十七号〕

全記者は過日、全新誌雑報欄内に吾か愛知県地方の曹洞宗信徒吉祥講の諸氏は、本回の全宗貫主撰挙件の紛擾に就き運動すべき旨に報導せしが、吾曹か本県下各処に就て該件の模様を探究するに、遂に何等の影跡たに見る能はず。亦た本県下全宗寺院も本件に就きては何等の運動もなきなり。因に記す。既に前号に報せし如く本県下全宗の重なる諸氏は只管布教伝導の普及に熱心せられ、目下全宗の伝導大会の準備に余念なきものゝ如し。咄……何者の狡児か彼の虚構の説を報す。

法会及演説彙報〔明治24年8月17日 第六十七号〕

本日午後七時より本市上宿興西寺に於て愛知仏教会演説出席員一柳智成、佐々木祐継、社員水野▲廿一日午後三時より本市東瓦町威音院に於て大施餓鬼会及演説出席伊藤寛典、水野▲廿二日午後二時より本市松山町安齊院に於て大施餓鬼会及説教▲全日午前十時より全七小町普蔵寺に於て大施餓鬼会及説教

慈悲善行論〔明治24年8月17日 第六十七号〕

去る九日、名古屋市東田町乾徳寺にて全町加藤林三郎、木曾上松の樋口義一の両氏が発起し蚕供養として大施餓鬼を施行し、続いて愛知仏教会派出演説を開会の節出席弁士中伊藤寛典氏の

演説大要は左の如し。

今晚は樋口義一、加藤林三郎の両君より愛知仏教会へ派出の演説をせよとの事に因りて吾輩も出席するの光栄を得ましたは真に喜敷く御座います。然しながら其の光栄に報ゆるの迂俗の力量なきは甚だ慙愧です。乍去御来聴の僧僧君子よ。吾輩は幸に仏祖の加被力を蒙り居れば、其の加被力に由りて述ぶる所の亦心丈けを賛成し玉はらば幸甚、扱て演題は慈悲善行の一理と云へるのですか、仏教では慈悲と云ふ事には大略三段の判談があります。第一を有縁の慈悲と云ひ、第二を無縁の慈悲と云ふ。第三を法縁の大慈大悲と申すのですが、この弁明を詳細に致しますには数席を重ねんければ出来ません。吾輩の無学短才では幾席重ぬるも到底六ツケ敷あります。(ノウウ)依て余りあつかましひことながら、私は簡単に私一己の考へを申述るに過ぎませぬが、抑も目下の社会の慈善事業は往昔よりは余程縮だと云ひますが、私しが考へても全く縮退して居ますと存せられ升。(ヒヤ)就ては慈悲善行とは形体上に關係しないと云ふことなれども、思ひの外に現はれる者です。丁度錐を囊裏に包む様な者で、内に慈悲心あれば自然と我身修まり平素の言語もやわらかで社会交際の礼式も能く調つて自を愛し他人をも恵むの慈悲善行が漸々進歩すれば仏教に謂へる四摂法に契ひます者だ。(謹聴)

名古屋不実でない名古屋風は実だからこんな事はあるまいが、他所にあるとか風聞する某商会の頭取とか取締とか、又は某銀行の役人とか支配人とか、何かごまかしたとか奸策を廻らしたとかの

結果は、竟に経済社会の厄難否国民は多少の災害を蒙れりと云ふことです。茲に一の話しがある。昔し或る山中で一日夫婦に一歳程の男子と親子三人が畑の耕作にかけ路傍の簞の中に子供を入れ居いて夫婦共に無二無三と小麦に培しつゝ、小供を看れば、豈図らんや大なる鷹が一人子の男子を両足で掴み羽打ちて天外に飛あがらんとするところ、アトト一声嗚叫ぶや否や両親諸共に一生懸命となり後より逐いかけたものゝ、如何せん彼の鷹は何国へか其の男子を掴み去たと申事がある。又近来一種弁口めきたる人ありて質卜なる良民が血汗を絞り出したる一代生活上の基本財産則ち生命とつり合の預け金、又は株券などを掠奪同様の目に合せるとは彼の鷹の子供を掴み去ると一般で無慈悲の悪党者と云ふても敢て過言ではあるまい。是等を慈悲善行のなひ奴と申す或人の謂へるには慈悲善行即ち徳義などのことは商法人より見れば少しも関係なくとも宜しい。只管ら掛引と先見を以て狡猾に立廻れば壘断の利益ありと申すが、吾輩の観念は是れに反対です。決してソーでない所謂慈悲善行即ち徳義ほど必用のものはあるまい。如何んとなれば商法人ほど社会に交際の広いものは他に類がないと存じます。吾等人間社会には独立と云ふことも肝要なれども、万一にも独立さいすればよいと云ふて孤島に住居して独りで他に人がなくば商法は出来ない。例して謂へば此の扇子は十錢だと云ふとき客がモ一少し負けんかと問ひしに値段が高くばおきやかれと答へたらナント商法は出来まい。然のみならず、毎年之初売の日には諸君始吾等まで初荷とやらで、尋常の買先きより酒樽味噌樽溜樽

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教(二)

密樽等の各種の物品が殆んど山を成さんとするでしょ、然るに晦日勘定の砌りにも双方の間に強売したから銭は払はぬなどの激論は未だ聞た事かない。就中当市鹽町にもある米商会所仲買人の店にて諸方の客か数百万円の売買をなしても只に仲買人の手帳に記載する迄にて、客に半切の先にも受取は出さんけれども勘定期限数ヶ月を経過するも貸借の異論はないが、これぞ全く徳義の帳簿に塞り筆硯に満ちるのである。如是慣習否徳義か社国万民かまねをしたれば、警察官吏は鞅を脱き喉を掴みて日送りし裁判官吏は手を垂れ足を交つて居睡りて俸給を戴き、恰も太古結繩の政府もまだ愚か真の文明世界即ち仏教に所謂寂光浄土の現成です。してみると商法人には慈悲善行即ち徳義は必要でなきが如く、思ふものは夫れは未だ道德の顔を知るので商法人の道德は即ち斯くの如きものです。然るに商法人相互にして今日の取引も明日に至て其んな契約は無ひだの押売だから払ぬのなど、謂つたなら丸で社会は暗であり升。(未完)

和同協会の演説(明治24年8月17日 第六十七号)

来る廿日午後二時より当清水町開闢寺に於て開かるゝ同会の演説は近藤疎賢、萩倉耕蔵、梅原薫山の諸氏出席の由なれば相変らず盛大なる事ならん。

目玉を掠(明治24年8月17日 第六十七号)

掠にあらで桜町にありと聞へたる真宗某寺の和尚、否俗尚は過日

〇〇の末本社に來り手前方の新聞は去月限りで断つ筈だに、其の後も相変わらず以て來らるゝは一体合点が参らぬ(筈だ)。此の前者も其俣歸した筈だに今度も亦々配達するとは不都合千万だ。決して錢などは払ひはせぬから以來詰度注意せよとの厳命に、出版係は大閉口で子細を會計に話し升、と會計は無論無料で施す図りだ。チト感化する様に筆を執れとの仰せは編輯局も随分困難な役です。

仏教講義〔明治24年8月17日 第六十七号〕

午 前 起信論 笠間龍跳師

午 後 心経平談 同

午 後 坐禅儀読講 伊藤文梁師

來る八月十五日、廿七日於門前町 大光院

森田悟由師の略履歴〔明治24年8月24日 第六十八号〕

今回將に曹洞宗の管長に就かれんとする悟由師の略歴を記さば、師は天保五年二月尾陽に生れ、同十二年秋七才にして名古屋市門前町大光院廿八世龍山泰門和尚に就き初て出家得度の式を挙げ、後幾許ならずして其師泰門和尚は遂に遷化せられしかば、師當時泰門和尚の嫡嗣にして全市禪芳寺に住せられし某和尚の許に安居せらるゝ数年、時に全市紳商森本善七氏は非凡の大器なるを看破し、自ら親戚となりて学資を給し、百般の世話をなせり、と

師は之に依て当時尾張侯の碩儒にして明倫堂の督学たりし塚田先生の門に入て数年皇漢の学を修め、後ち嘉永五年春より東都駒込吉祥寺の学寮に在る、亦数年にして安政三年の頃より故管長たりし奕堂禪師に上州前橋の龍海院に参し、其他四方に参禅苦学せられしは枚挙に遑あらず、後加州金沢の龍徳、玉龍の二寺に住せらるゝも常に奕堂禪師の補弼とし、其左右侍せらるの久しきは世人の知る所にして、爾後明治八年今の金州天徳院に住山せられ、自ら七八十个雲侶水子を提携して四方に赴化せられ、曾て一行の有漏染汚生死に渉るなく金錫の巡る所三草二木、其の沢を蒙らざるなし。実に欽慕に堪へざる高德の師と云ふべし。今は法臘既に五十八なり。

少年会〔明治24年8月24日 第六十八号〕

当市門前町本願寺別院内少年教会にては、規約を改定し会員研究部を置き、講師を増聘し毎日午後四時より仏教、英学、数学、和漢文、地理、歴史等一般少年子弟に必須の普通学科を講究せしめ、専ら愛国護法の継統者を養成せんとせらるゝが、本月一日には会員章牌授与式を挙行し来賓職員等の祝詞演説あり。翌日有志会員は講師と共に知多郡大野村へ修学旅行をなし、又二日より二十日迄は夏期休会せられ、二十一日より始業せらるゝ由。少年子弟にして入会望みの人々は広告にある如く、本月三十一日迄に全會事務所へ申込まるべし。尤も当分の中仮講堂にて狹隘なるを以て講習生満員は百名を限ると云。

曹洞宗愛知中小学林〔明治24年8月24日 第六十八号〕

全学林は夏期休業にて久しく鎖林なりしか、弥々九月三日より始業をせらると云ふが、曾て本紙に記せる如く全林は今秋期よりは前教師橋成典氏は多年在職にて任職地且方より頻りに休職帰寺を促せし故、一と先づ辞任帰寺せられし事にて、其の後任として大小学林卒業生にして有名なる原坦山老師の門下に頭角を顕せし山内宗弘氏（本県出身）を聘し、其の他英数二科の教員にも交迭ありて秋期より一層林規を厳整にし、教育事業の進歩を計画せらると云ふ語を寄す。学生諸氏よ秋期は学期年度の起点と聞く、諸氏か之より万重の峻山を踰ゆる起程たり歩々着実に拮据黽勵之を最めよ之を勉よ。

浄土宗愛知支校〔明治24年8月24日 第六十八号〕

全校も夏期休業なりしか、弥々九月一日より授業せらると云、全校も役員諸氏の精勉にて大に面目を革新せらると云ふ。

真言宗当市中学林〔明治24年8月24日 第六十八号〕

長久寺内に設立せる同校は目下三十四名の生徒を有し、去る二日全科卒業再試験を行ひ、大小学林主管滝僧正の臨監を得て卒業証書を受与せられしは近藤果賢、宮崎恵真、安藤恵空、横山大宝、中西諦亮、近藤栄成、岩田大法、三谷融学の諸氏にして僧正の訓示あり。横山、中西、岩田諸氏の答辞ありて最盛なりきと云。

森田悟由師の美德〔明治24年8月24日 第六十八号〕

同師は別項に記す如く最も勢力ある候補者なるか、曾て或る熱心なる一党派の有志家か遙々目下師か布教前きなる越中国に赴き、若し貫主に当撰せし際には必ず辞職すべしと勧告せしに、師は温顔微笑貫主などの尊貴な位置は決して望なしと語られしとの事は、既に確たる処より聞及ひしか頃日、投票開緘に際し全師か成規に随ひ鄭重に認められし投票は西有穆山殿と在りしを見て、流石に其の反対派の立会人迄も其の度量の寛闊なるに驚嘆せりと師が洒々磊々として胸中万斛の船を浮る余裕沢々たるは、曾て記者躬ら参得して認むる処なりき、之に引替へ西有穆山師の投票は全派の北野元峯氏（東京青松寺住）を撰挙せられたりとの風説を伝ふ。此の風説にして信なりとせば、吾人は西有師の爲めに悲まざるを得ざるなり。然れとも静岡県二号支局は投票不正の爲め全体破棄せられたりとせば風説は全く……の風説ならん風になれ風になれ……

石川素童師〔明治24年8月24日 第六十八号〕

目下紛擾なる曹洞宗執政者として百方より其の焦点に当り頻りに非難を受け亦頻りに賛助を博せらるゝは則ち全師なり。師は本県出身の人物にして、曾て本市南小川町泰増寺住職たり後、彦根清涼寺住職に転せらる。師の性行温淳、質朴松柏的の人物より寧ろ楊柳風の才子なり。師にして今日の百非難を受けるは師の爲めに吊せざるを得ざるなりと市人より。

夜講〔明治24年8月24日 第六十八号〕

来ル九月二日三日午後七時ヨリ

門前町大光院ニテ

起信論第七回 笠間 龍 跳

広告〔明治24年8月24日 第六十八号〕

毎月十五日廿七日午後七時ヨリ

原人論続講 門前町大光院内

仏教会講義 転愚堂ニ於テ

愛知仏教会派出演説の概況〔明治24年8月24日 第六十八号〕

一昨廿九日当市橋詰町笑福座に催されし全会の模様を記せば、午後六時頃より参聴者は続々詰めかけ全七時に至り満場立錐の地なき程にて殆んど一千三四百名と見受たり。全日は全座の前に大國旗二流を飄し、場内には二千燭の弧光大電灯を点し燦然として昼の如く江尻深海（国宝論）伊藤覚典（慈悲善行論）梅原薫山（仏教の前途）近藤疎賢（真正の宗教）にて、社員水野も出席将来の仏教と題せるを演せしか、各弁士の演説中は場内頗る静粛として時々拍手鳴噪起り満場頗る感動の模様あり、近来の盛会なりき。

大神菩薩とならんとす〔明治24年8月31日 第六十九号〕

天爵大神との称を得られし水谷忠厚氏は、曾て国利民福を希図し頻りに各地に奔走し道路を開き橋梁を架設するに尽力せられし事

は人の知る所なりしが、近頃は思ひを仏教に傾け、頻りに仏母準提菩薩に依帰し、曾て有名なる村田寂順僧正に就き全薩陲の修法加持の伝授を得たりとて、既に一昨廿八日当市南小川町長全寺の法席に於て参詣人に向ひ、右の修法加持を行し懇切に祈念せられしか大神將に菩薩にならんとするか。

広告〔明治24年8月31日 第六十九号〕

来る二日、三日午後七時より門前町大光院に於て仏教夜講義

起 信 論 笠間龍跳

仏教講義

毎月十五日、廿七日午後七時より原人論続稿

門前町大光院内 転 愚 堂

萩野独園禅師の来名〔明治24年9月7日 第七十号〕

同師は昨六日午後四時着の汽車にて当市来名、右は当市なる高等官の招きに応せられし者にて、尚ほ明後九日には愛知仏教会にて同師を乞ひ法話を催さる由。又明八日は本社員にて同師を請招し、無門関の講義を聴聞する予定なり。

真宗講話会〔明治24年9月7日 第七十号〕

真宗講話会はかねて本部を当市押切町養照寺に置き専ら組織の準備中なりしが、会員も已に数百名を得たれば、去る三日午後第二時より本部に於て発会式を挙行せしが、其順序は第一点鐘にて大

和楽合奏会員着席し、第二点鐘にて発起人総代富田政次郎氏告白文を朗読し、次に創立賛助員富田順次郎、幹事総代小原与三郎、僧侶総代馬場広為等の諸氏祝辞を朗読し、最後に会員総代佐藤慶三郎氏答辞を朗読して休憩し、会員一同へは紅白の菓子を分与せり。第三点鐘にて大和楽合奏、次に権中助教牧野神爽師、正信偈講話二席を演述せられしか、会員及傍聴人等は堂上堂下に充滿して全く散会せしは午後第五時なりき、又門前には八藤と六色仏光との二旗を交叉し、本会の提灯数十張を堂前に配置して意外の盛況なりき。

火箸傘となる〔明治24年9月7日 第七十号〕

曾て大火箸の木拳を以て名を轟したる熱田円通寺の住職羽休達閑は、円通寺ならで随徳寺まで度々やらかせしが、今回愈々檀徒過半以上の信用なき為、去る二日同宗本山より傘一本を申付られし由、是れでは定めし羽を休める所もなからん。

広告〔明治24年9月7日 第七十号〕

真宗法話開筵○毎月四日午後七時より当市中市場町中村嘉兵衛方にて講者

三等勸令使前田学師

愛知仏教会講義 毎月 五日
午後七時より

三国仏法伝道縁起

講師 広間隆円師

仏教講義〔明治24年9月7日 第七十号〕

毎月十五日、廿七日午後七時より原人論続稿

門前町大光院内 転愚堂

広告〔明治24年9月7日 第七十号〕

本月十八日熱田新田ニ於テ川施餓鬼修行同日午前八時日置橋一町上ヨリ出舟候也

白川町 尋 盛 寺

熱田青年会〔明治24年9月14日 第七十一号〕

全会に於て、来る十六日午後六時より神戸町亀井山にて秋期大演説を挙行せらるゝ由にて社員水野か出席と云ふ。

愛知仏教会大演説概況〔明治24年9月14日 第七十一号〕

予て報告せし全会は、過る八日西別院対面所に於て催されたり。全日は全惣門前及中門に彩旗を交叉し席上中央に演壇を設け装置完備せり。第一開会の旨趣（近藤）本未忘る莫れ（荻倉）世界宗教の波瀾（東京中西元次郎）仏蹟復興に就き愛国と護法（西京江村秀山）仏教集合の中心（西京中西牛郎）等なりしか、就之元次郎氏は仏蹟復興の熱心家にして既に全件に就き外務大臣及英国公使等に面接して其の方法等を照会せし事より復興の急務なるを述

へ頗る丁寧なりき、亦秀山師は愛国と護法を論じて今日の仏教者か異域に向て復興の事件に熱心し、此の実を擧るは我國権を張り国威を示すの手段としても之を成すべきの事業なりと言辞平易頗る感情を与へたり。最後に中西氏は学問上の議論より懇切に本題の主意を布宣せられ最も感動を与へたりしか、既に日没し抵り稍降雨を催し帰途に就きし者ありしは残念なりき。参聴者には特に同会より発せられし招状を受け、来聴せし市内の豪商紳士始め殆んど九百余名と見受たり。

愛知仏教法話会概況〔明治24年9月14日 第七十一号〕

同法話会は過る九日午後二時より矢場町臨濟宗政秀寺に於て開会せられたり。今其の概況を記せば門前に彩色の大旗二流を懸し本堂の正面に高座を設け、廳て一時頃より参聴者続々参集し、高等官には八田少佐村地控訴院判事始め十数名にて参聴無慮男女五百余名と見受たりしか、開会の前に当て水野道秀開会の旨趣を述べ、次に荻野独園禪師高座に登り般若心経誦了て淳々法話を成したり、続て小憩の後臨濟録の講義ありて午後五時閉会されしか、全師は過る十一日帰寺せられたり。其の筆記は本紙に掲ぐ。

曹洞宗中宗林学監会〔明治24年9月14日 第七十一号〕

全学林は過る三日より授業を始められ、既に新入学生十六名ありて夫々入学試験をも執行せられ各級に編入済なりしか、過る十二日全学林学監諸氏は全林へ参集し三四ヶ条を協議し▲宗祖諱修法

の事▲体林生の為め特別試験する事▲教員俸給改革の件▲外数件にて午後四時散会せられたり。因に記す全学林は改革後、大に一般の学生は規律を厳肅に恪守し頗る勉学の模様ありと云ふ。

生駒円之師〔明治24年9月14日 第七十一号〕

曹洞宗永平寺貫主撰拳の立会員として、過般上京の処続いて加州金沢へ森田悟由師を請する為派遣を命せられ全地に赴れしか、既に別項にある如く師も就職を承認せられし故、生駒円之師には今明日中には多分帰寺せらるゝ筈なりと云ふ。

修証義の講筵〔明治24年9月14日 第七十一号〕

昨年曹洞宗両本山にて編輯せられし曹洞宗修証義は、同宗在家信徒の化導法の標準にして同宗一般の僧侶は常に之を研究しをかざるは申迄も無きことなるが、多数寺院中には之を等閑に付するの傾きあればとて、伊藤覚典社員水野等か卒先して本市松山町安斉院野々部至遊師に就き、本月十二日より一週間午前九時より右講筵を開かるゝ由。

授戒会〔明治24年9月14日 第七十一号〕

社員水野は曾て久しく故管長たりし久我環溪禪師に随従しをりしか、本回は其の鴻恩を酬ゆる為め南小川町長全寺に於て十月十七日より一七日間授戒会を執行して故大禪師の追善を修すると云ふ。

川施餓鬼〔明治24年9月14日 第七十一号〕

来る廿日午前八時出船（雨天順延）、例年之通熱田前新田に於て諸国天災水害溺死靈魂追福の爲川施餓鬼を修行并に大和樂合奏出船、納屋橋との事なれば有志の徒参詣あられよと当市東門前町西蓮寺より報知せらる。

デモ和尚〔明治24年9月14日 第七十一号〕

当市矢場町曹洞宗万年寺の住職某和尚は見出の通りデモ感心すべきは、御経の読売に熱心なるは流石、デモ和尚の布教に力を尽さるゝなれば定めて其筋の賞詞もあらんと知る人毎に賞し居るに是れは是れはデモ博愛主義か、近頃当市内なる耶蘇教者の死人を同寺に葬らしめし事の既に二度までも目撃せし人有りて、現に同寺内には天主子某墓と記したる者さへあれば紛れもなき事去り迎、同寺の墓地は総て仏教者のみを葬るべきに檀方も和尚も共にデモマー感するより外なし。

本遠寺川施餓鬼の由来〔明治24年9月14日 第七十一号〕

来る十六日、熱田本遠寺にて水済会と称し執行せらるゝ川施餓鬼の由来は、享保七年八月十四日熱田海浜に海嘯ありて多数者の死亡者ありしが、其後何となく海中異変の声ありて悲鳴頻りなれば城主徳川氏は右の異変鎮定の爲同寺に命じて川施餓鬼の供養を行はしめられしを始とす。去れば旧藩時代には御用施餓鬼と称へ、其の筋の保護も厚かりしか本年も旧八月十四日即ち来十六日を以

て堀川筋より午後十時を期し出船供養さるゝ由。

大法会并説教法話〔明治24年9月14日 第七十一号〕

愛知郡鍋屋上野村天台宗長養寺において、本月十九日梵鐘篤志者各君位追善供養の爲め大法会修行終て説教法話弁士は尾頭金鋼、輪田勝澄外数名の由なり。

仏教講義〔明治24年9月14日 第七十一号〕

毎月十五日、廿七日午後七時より原人論続稿

門前町大光院内 転愚堂

広告〔明治24年9月14日 第七十一号〕

本月十八日熱田新田ニ於テ川施餓鬼修行、同日午前八時日置橋一町上ヨリ出舟候也

白川町 尋 盛 寺

笠間龍跳師の病状〔明治24年9月21日 第七十二号〕

全師は今春以来兎角病に罹り不快勝ちなりしか、一時大に重症に至りしも爾後稍々快方に向ひ、爲めに本社か囑托せし原人論も既に執筆せらるゝ場合となりしも、亦復近頃は病症一変し体格も余程衰弱し、此頃社員某が訪問せし際にも此の様子にては、当分執筆は六ヶ敷依て看客諸君に御断りを願たしなど頗る窮迫の様子なるも懇々宗教将来の事などを談せられしは感激の外なしと帰社し

ての物語なりしか、先づ全師の病状は殆んど危篤の場合に非されども甚た六ヶ敷容子なれば、何卒仏教の為め師か一日も早く平癒あらんことを祈念して止まざるなり。

曹洞宗巡教師大会〔明治24年9月21日 第七十二号〕

曾て前々号に報導せし本県下曹洞宗の巡教師大会は、其の發起諸氏は各郡に在りしも、先づ其の發起人中より準備委員として伊藤覚典、社員水野等か斡旋せる筈にて既に其の準備も整頓の場合に運び、多分本月下旬当市に大会を催さるゝならん。

近藤疎賢師〔明治24年9月21日 第七十二号〕

全氏は活潑勇壯にして既に過般の貫主撰拳に就きても頗る奔走せられ、亦大谷派事件に就き裁判演説を開かれし事ありしか、近頃は感ずる処ありて将来は布教伝導の外、世の中の事は一切関せずと或人に語られしと雄壯なる氏にして果して之を守らるゝや否。

改良説教と女学校〔明治24年9月21日 第七十二号〕

当市なる真宗大谷派僧侶小椋諦善氏は、今回改良説教即ち立談にて塗板に賛題を書き示す等の方法を以て当市広小路辺に於て開場せらるゝ由、右に付鷲齋、千葉、智養の諸氏も賛助せられ、又非職陸軍歩兵大尉林陸夫氏は其の顧問となりて当市に一の女学校を設立さるゝ由、右二件に就ては専ら小椋氏が其の表面に立たるゝ筈なりと云ふ。

愛知仏教会施療の効果〔明治24年9月21日 第七十二号〕

当市上宿泥町百四十六番戸橋本伊之助（三十八年）、此頃隣家の家根茸を手伝し中足場を踏みはずし、遂に脚部を痛く負傷せしが、元来赤貧者にて自ら治療の資なきものから全会の施療券を得て、過日全会施療医高橋順庵君に就き施療を受けしが、同氏の施術と尽力とにより尚一回の施術を受けば全愈に至るべしとて、此頃仏教会へ謝状を呈せりと云ふ、亦全会へ各処より施療を申込むものもあるも往々赤貧の者にあらざる者等之れあるが為、全会は之が調査に苦まるゝ由にて、将来は各町に配置せる管区巡查が施療施薬の必要と認むる者は直ちに之を施行するの内規を定められしと云。

彼岸会〔明治24年9月21日 第七十二号〕

昨日よりは秋期彼岸の初日なるに、殊に日曜日にて当市大須及西別院辺は随分賑かなりしが、本年は各郡村落の農家は先づ豊饒の見込あれば、当彼岸中は田舎人の市内に来るもの例年より一層多らん。随て幾分か商業の景気をも添ゆるならん。従来の慣例に依れば、彼岸と云へば田舎人は名古屋見物か又は興行物遊覧、或は所有品に買入期の如く又市内の姉妹は孰れも晴の衣装を着飾り婀娜たる其の姿嬋妍たる其の美を競ふて散歩する七日の彼岸会は古来の習慣なれど、抑彼岸会は我が仏教の日本に伝来の始め勅命を以て制定せられし大法会にして、平常各種の業務に従事して仏陀に帰依し帰命するの暇なきものは、此の春秋雨期農事閑隙の気節

に就て其の業務を休み仏陀の涅槃なる彼岸の業務を成すを彼岸会と云ひしを弊習を襲ふの久しき、遂に今日に至りしものなり。

愛知仏教会各地演説概況〔明治24年9月21日 第七十二号〕

去る十日午後七時より当市桜町安清院に開会せる同会は雨天なりしにも拘らず、参聴二百五十余名あり。▲十六日上宿同会支部なる真宗興西寺に於て催せし同会は、近頃稀なる盛会にして流石に広き本堂も立錫の地なく殆んど四百余名と見受たりと。▲亦昨夜、熱田尾頭町陽泉寺に開会せる全会は出席伊藤覚典、社員広間隆円及水野なりしか、参聴は頗る多く殆んど三百余名と見受たり。

白鳥鼎三老師〔明治24年9月21日 第七十二号〕

全師は八十余の老境なるも鏗鏘として老て倍壮に、先頃中も全隱室に於て三同契を講せられし由なりしか、亦此頃よりは法華經の要解を講せらるゝ由にて、斯く老境追後進薰陶し倦ざりし成すへきなりと。

演説と法要〔明治24年9月21日 第七十二号〕

本日午後一時より当市宮出町永安寺に於て演説及び法要を営み終て同校生徒の大和楽合奏等を催さるゝ云。

曹洞宗大本山祖師〔明治24年9月21日 第七十二号〕

全本山越前永平寺に於ては、毎年九月廿四日より廿九日迄祖師の御諱大法会の執行ありて全国各地より全宗信徒全祖廟に参拝するもの多く非常の賑かなりしか、本年は既に当市よりも全宗信徒の全本山へ参詣するもの多く、何れも汽車の便に依り廿四五の両日に出発すると云、亦門前町大光院、松山町安齋院、裏門前町万松寺、袋町禪芳寺等には廿七八の両日、右御諱法会を修行し説教をも挙行せらると云ふ。

愛知育児院臨時会〔明治24年9月28日 第七十三号〕

愛知育児院臨時会は去廿二日、全院事務所なる矢場町白林寺に於て開会せしが、全日は全院の監督、計会、幹事を始め知多、中島、東春日井等の郡部幹事も一同出席、総員四十余名にて過般總會に於て議決せし全院の新築に関する建物、構造、坪数より右費金の募集方法等に就て協議せしが、右義捐金は本年内に各幹事に於て之を募集し、工事は来年一月より着手することに決せり、と而して全院の新築地所は矢場町一ノ切十番地にて境内五百余坪の地所へ六十六坪余の日本形二階造の建物を建築し、其間取りは玄関、応接所、育児教場、育児室三間、台所、事務所等にて二階は七十余畳の大広間（会議所）外六畳二間にて其建築費は一千五百余円の見込みなり、と又全新築事務委員には堀部勝四郎、平子徳右衛門、片野東四郎、北折源六、山田才吉、小島理兵衛、松田秀次郎、各務恵実、石塚無仏、高岡亮音の十氏之れに当り、尚全院事

務の拡張次第漸次養老院をも設くる手筈なりと云ふ。

法会及演説彙報〔明治24年9月28日 第七十三号〕

去る廿一日、宮出町永安寺にて愛知育英学校生徒百余名が大和樂を合奏し終て曹洞宗寺院三十余名列席大施餓鬼を修行し、續て山内宗弘氏信解行証と謂へる演題にて仏教演説有しも折悪敷雨天にて聴衆は漸く三十名程なりと▲廿三日南小川町正福寺にて大施餓鬼修行説教師伊藤覚典、近年に稀なる盛会なり、廿四日住吉町弘法堂にて伊藤覚典阿字不生の道理を説教せられしが、聴衆百名程ありて仏教と教育とに關係あるを感動せり▲廿六日栄町秋琴樓にては大般若修行導師大光院方丈にて、野々部至遊師は從喜に出席せり▲廿七日西春日井郡下郷村天桂寺にて仏教演説会出席弁士は水野道秀、佐々木祐繼の二氏出席盛会なり、廿八日より知多郡共和村地方へ向ふ四日間伊藤覚典氏巡回説教を行はる▲廿九日廿日両日、松山町安斎院に於て宗祖承陽大師御祥忌法会及説教亦十月五日全寺に於て羅漢尊供餌会を修せらるゝ筈なりと云ふ。

総見寺信長公祠堂建築寄付人名

一金三十錢 瀬尾ジャウ子
 一金一円 桶屋善兵衛君
 一金一円八錢 前田辰次郎君
 一金五十錢 橋本喜三郎君
 一金五十錢 小出 藤七君
 一金十錢 城 丈君

一金五十錢 本屋榮三郎君
 一金三十錢 神納千之助君
 一金二十錢 渡辺文之助君
 一金一円 水野 源助君
 一金一円 水野又兵衛君
 一金一円 小川 佐助君
 一金一円八錢 伊藤 政尾君
 一金二十錢 成田 久助君
 一金三十錢 馬淵 源六君

広告〔明治24年9月28日 第七十三号〕

新十月十七日より全廿三日迄
 旧九月十五日より全廿一日迄

●授戒会 名古屋市長全寺
 南小川町

今回故管長久我環溪大禪師殿七回諱御追善ノ為メ右大法会執行仕候条、諸事御操合御入戒相成度、殊ニ同大禪師ニ就キ曾テ御接化ヲ受ラレシ御方ニハ可成御參詣被成降度候也

小栗栖香頂師の来名〔明治24年10月5日 第七十四号〕

去る二十九日より当市大谷派別院にて説教を営まる

南条博士の来名〔明治24年10月5日 第七十四号〕

同師は去月十八日来名の処、来る十四日当市南条名町信道説教場

の開場式に臨場の為来名せらる由、因に記す。曾て九月十四日に開場式の様に記したるは十月の誤り

先生〔明治24年10月5日 第七十四号〕

田中智学氏の名古屋に來りて演説を公開するや路傍に張して「仏教実義大演説会弁士田中智学先生」と大書す。頑童見て以て先生の仏教演説会……

生駒田之師〔明治24年10月5日 第七十四号〕

全師は過般來曹洞宗永平寺新貫主請の爲め、久しく金沢市に滞在中なりしが、爾後其の要務を了畢し東京宗務局へ復命せらるゝ筈なりしが所勞の爲め、当分上京を見合去月廿二日歸寺後は専ら支局事務を管掌しをらると云ふ。

真宗講話会〔明治24年10月5日 第七十四号〕

当市押切町なる同会は、曾て盛大なる発会式を挙行せし事は前号の紙上にも記載せしが、本日 of 広告にもある如く、来る十一日午前八時より真宗大谷派の有名なる一等学師補小栗栖香頂師を聘して三經大綱の講話を開き、尚ほ羽塚慈音氏が大和樂の合奏を催さるゝ由定めて盛会なるべし。

熱田通信〔明治24年10月5日 第七十四号〕

熱田仏教青年会は秋期大会議にて愛知仏教青年会と改称し、広く

「能仁新報」よりみた名古屋の仏教(二)

愛知郡一般に及ぼすの計画なり。以來毎月十三日討論會、十八日演説會開會の定日とす。来る八日小杉陶藏氏の第四回原人論講義開筵參聽随意の由。

醍醐教會の仏教演説〔明治24年10月5日 第七十四号〕

今明二日午後六時より当市南小川町本源院に於て開會せらるゝ同會には、水野永遠、釈覺円等出席せられ、終て浅井潮鮮氏の説教をも開かるゝと云。

相応寺院殿の二百五十回忌〔明治24年10月5日 第七十四号〕

当市山口町なる同寺には、去る十六日は恰も同寺大檀那の祥忌に相当せしを以て大法要を営まれ、終て大施餓鬼を修せられし由。

参禅要路〔明治24年10月5日 第七十四号〕

左の一篇は参禅要路と題して、某禪師が某居士等の請に応して指示せられしを筆記せし者なり。予此の頃篋底を検し偶此の書を得たり。幸に僧風頹敗の時大に有益の文字なりと認むるを以て貴社に投ず。余白あらば御登載あらん事を希望す。

愛知仏教青年會員 浅野提鈿

夫れ仏道長遠なりと雖も畢竟大地に寸土なし、三大阿僧祇却に修証弁成すと雖も真心遠からず、五百里峻難の道あるも実所近きに在り、参禅学道の人若し一步を誤まり一念を動すれば十万億土百千万却を隔つ、直に須く見性成仏すへし、如来一代の經教は見

性の開示にして其見性悟道に至ては教外別伝不立文字なり。利鈍貴賤出家在家東土西天古代今時の差別ある事なく只道心の有無と開示の邪正によれり。千仏万祖指南するとも自ら信心純一正念相続せされは見性悟道の時節あるへからず。是れ自心を以て自性を悟り亡眼を開ひて己身を明らむる所以なり。若し正念相続せず工夫純一ならされは徒に海へ入りて砂を算ふるのみ。其正念とは無念なり、工夫とは無想なり、祖師曰く非思量底を思量する是れ坐禪の要術なりと、十二時中動静三昧し理事に一色して猛烈に工夫せは内外の諸魔便を失ひ、一切の障礙を離れ、善悪是非苦楽順逆一時に脱落して無始却来無明の命根を載断し、空却已前本来の面目を相見せん、空却已前とて遠き久しき事に非ず、古き昔しの事と思へからず、即見性の端的なり放身捨命の時節なり、念仏誦經も同じくこれ命根を載断するの利剣なりと心得べし、功を積み徳を累ねて往生見仏すと思ふべからず、福德果報を求むること勿れ殊勝奇特を離却すへし、三世心不可得なれば正念自から現前す、行住坐臥専精に工夫して見聞覚知喜怒哀楽の主人公を疑着せよ。

(未完)

広告〔明治24年10月5日 第七十四号〕

本門再建供養会執行

十月七日午後一時 菅原町興善寺

御連枝恭敬院殿

真宗法話〔明治24年10月5日 第七十四号〕

毎月四日午後七時より中市場町中村嘉兵衛方に

三等勸令使前田学師

真宗大講話会〔明治24年10月5日 第七十四号〕

講師 小栗栖香頂師

来ル十一日午前八時ヨリ 開筵

当市押切町養照寺ニテ

明治廿四年 真宗講話会幹事
十月

各宗協会へ照会〔明治24年10月12日 第七十五号〕

過般当市に開設し、全国仏教者第二回大懇話会に於て全国仏教者の与論として数ヶ条の事項を評決し、之を各宗協会へ進達し全会の会議に付して可然ものは各宗共に実施せられん事を希望せしに、豈図らんや各宗の協会は右の議決書及願書等を受領せられしも今日に至り、未た何等の沙汰もなく亦之を会議に付せられたるの模様もなく殆んど打捨同様の始末なれば、右懇話会の主幹たりし愛知仏教会役員に於ては、右の始末取調の為今回全会の役員にして大懇話会に於て副議長たりし(代議士)堀部勝四郎氏か上京せらるゝに付、全氏より全会へ向け照会する筈なるも尚全会へ向け愛知仏教会より伺書を提出したりと云。

信道説教場の開場〔明治24年10月12日 第七十五号〕

明後十四日午前十時より南伏見町なる近藤友右衛門氏か今回新に設立されし同説教場の開場式を行ひ、十五日は見真大師の諡号會、十六日に恵灯大師の諡号會、十六日には三尊の開導式を行はるゝに付、御連枝撰光院（大垣御連枝）の御來場をも仰かれ、十七八日の両日は南条博士宮部勸令使の説教及び演説を開れ十九、廿、廿一、の三日間は牧野神叟師の説教を開かるゝに付、本社へも其の招状を贈り越されぬ

愛知育英学校の運動會〔明治24年10月12日 第七十五号〕

愛知仏教会の監督に係る全校は、過る五日午前八時全校に於て生徒一同集合の上隊伍を整へ大旗を翻し教師役員等之を引卒して八事山に到り綱引旗取等の運動を成し、午後四時帰校したりと云。

曹洞宗支局派出説教〔明治24年10月12日 第七十五号〕

本県第一号支局にては配下各寺に春秋兩度説教を挙行するの成規なるか、当時丹羽郡地方へは安齊院住職野々部至遊師か巡回中なりと云ふ。

米田氏の講筵〔明治24年10月12日 第七十五号〕

当朝日町共済會長なる同氏には、毎日午前七時より因明入正理論を講筵せらるゝ由にて参聴を乞ふ者は同会員の紹介を要すと云。

四恩会第三週紀念會〔明治24年10月12日 第七十五号〕

当市新道町海福寺に設置せる全會は一昨十日紀念會を催されしか、今其の概況を記さば全日は門前及本堂前には仏旗を交叉し、正午十二時より會員先祖の爲め大施餓鬼會を修し、全午後二時より演説を開會せられしか、出席には鵜飼祖箴、梅原薫山、伊藤寛典及社員広間隆円、水野等なりしか、羽塚慈音氏は愛知育英学校女生徒数名を卒へ、出席各弁士出席の前後に大和樂唱歌を奏せられたり。

参禅要路〔明治24年10月12日 第七十五号〕

（前号の続）

浅野提齡 寄稿

若し氣力微弱なる時は真疑現前せず妄想除き難し、早成を得んと欲せば心王付与の宝剑を提て一氣に進み、仏に逢はゞ仏を殺し、祖に逢はゞ祖を殺し、父母に逢はゞ父母を殺し、衆生に逢はゞ衆生を殺し、乃至有情無情森羅万象山河大地三世十方善惡是非其外六根門頭七識街辺に出没去來するもの一切皆殺し尽して大虚空界を御身出頭せは真の大丈夫と云つへし、這裡に到て諸仏衆生菩提煩惱生死涅槃天道地獄惣に夢幻空華なることを疑はず。且つ参禅は刹那も油断有へからず、出息入息精神を抖擻し、前歩後歩脚下を照顧して匹馬单刀百万の敵軍に駆入るか如くせよ、只動靜の二境に対して、工夫純一ならされは少分の相応得がたし、正念工夫は動作中最とも修練すへし、必らずしも静を好むへからず、

往々静かなれば修行事果敢行様に思ひ動中は散乱する様に思へとも静処ばかりの修練得力は動境に対するときに慥かに用ひられず、臆病懦弱の働らきある者なり、然らは何をか得力と云はん、正念工夫とは十二時中吾に有る三昧吾も亦た不知なり、終日作務弁事すれども疲労あることなく長時独坐黙立すれとも退屈せず、理事一色して究明するを実参実学と云ふ、早く諸法に通達し万事に自在なることを得んと欲せば動中の工夫に越たるはなし故に、弁道参玄の衲子は声色推裡に向て坐すへしと、三祖大師の曰く一乘に趣かんと欲せば六塵を悪む勿れ、是れ六塵を教奇好めと云にはあらず、水鳥の水に入れとも翎の湿れざるか如く平生六塵の上に於て取らず捨す正念相続せよ。(大尾)

広告〔明治24年10月12日 第七十五号〕

新十月十七日より全廿三日迄
旧九月十五日より全廿一日迄

●授戒会 名古屋市
南小川町 長全寺

今回故管長久我環溪大禪師殿七回諱御追善ノ為メ右大法会執行仕候条、諸事御操合御入戒相成度、殊ニ同大禪師ニ就キ曾テ御接化ヲ受ラレシ御方ニハ可成御参詣被成降度候也。

広告〔明治24年10月12日 第七十五号〕

●来ル十六十七ノ両日午後六時ヨリ
●南桑名町千歳座ニ於テ開会(参聴無料)

●日蓮正宗大演説会

●弁士 釈 妙覚師

●真の道ト趣意書ヲ呈ス

真宗法話〔明治24年10月12日 第七十五号〕

毎月四日午後七時より中市場町中村嘉兵衛方に

三等勸令使前田学師

授菩薩戒会〔明治24年10月19日 第七十六号〕

曾て報導せし当市南小川町長全寺に於て一昨十七日より執行中なる曹洞宗故管長久我環溪禪師の追善授戒会は、戒師安齊院住職野々部至遊師にて、教授師は社員水野、随喜僧侶方は四十余名、昨十八日午後迄に菩薩戒受者として礼仏修行中の四衆一百五十余名にて参詣者も殊に多かりしか最も静肅に見受たり。亦全菩薩戒受者へは毎日夫々の信者より施齋ありしか、本社よりは明廿日菓石(晩食)の齋を受者一同へ供せる事とし、社員透関居士外一名は右戒法を受る筈なりと云ふ。

愛知仏教会の大会議〔明治24年10月19日 第七十六号〕

全会は過日来、市内会員門標帖付中にて既に第一区第二区を了り、目下三四両区の会員門標帖付中なるが悉皆帖付の上は多分十一月中旬を期して各宗取締り及理事等を招集し大会議を開設せるの計画なりと云ふ。

愛知仏教会上宿支部〔明治24年10月19日 第七十六号〕

全会は過る十六日定期演説なりしか、都合に依り鶴飼祖箴氏を聘して幻灯会を催せしか、參觀者は頗る多く殊に全氏の説明は能く仏教の真理を穿ち児童に迄了解したりと。

臨濟宗大会〔明治24年10月19日 第七十六号〕

当市飯田町禅隆寺に於ては、過る十七日より開山御諱及引続き大会を修行せらる由にて、近県全宗寺院雲衲三百余名参集せられ猶授戒会をも執行せらると云ふ。

各地演説の彙報〔明治24年10月19日 第七十六号〕

去る十四日、南小川町泰増寺に於て説教師織田宝山師の説教あり。十五日東瓦町威音院に於て野々辺至游師の説教あり。十六日宮出町照運寺に於て全師の説教あり。又全日夜は愛知仏教会の支部なる上宿興西寺に於て仏教幻灯会あり。説教師は鶴飼祖箴氏なるか参聴人は満場なりしと云へり。

一乗庵釈妙覚師〔明治24年10月19日 第七十六号〕

再昨十六日午後七時より当市南桑名町千歳座に於て日蓮正宗仏教演説を開会せり、弁士は静岡県人布教会幹事一乗庵釈妙覚師にて（宗教の沿革）仏教の起原より東漸仏教の状態を説き、偏自力偏他力を破斥したる末仏教は日蓮宗を措て他に真教無しと説き、或は専制政治の弊害を洗滌する事の出来ざるは浄土真宗ある故抔と

論告したる為め、聴衆中より藤井東洋と謂人大喝一声弁士と呼び

壇上に現はれ、弁士の所説曖昧なりと呵責し質問せんとするや討論質問を遮絶せられし故、聴衆は一時に騒ぎ随分混雑せしが、翌夜は先夜に引続き千歳座に於て日蓮正宗仏教演説を開席せられ、前席有元広賀氏演説中諸宗開山祖師の破斥に付き、礼の藤井東洋居士亦復出現し日蓮の妙力に就て建長寺等の事より質問せんとしたるに、妙覚師突然壇上に現はれしに身には被布（俗にカツパ）を着し、頭には仏蘭西形（ナポレヨン帽）の帽子を戴かれたるより藤井は其不敬を詰りたるに妙覚師は宗規なりとて脱せず。故に藤井東洋居士は日蓮宗の宗制寺法には此の如き法規なしと詰問したれば、夫れは内規なれば他人の知る処にあらずとて脱せられず、其の中には聴衆も騒ぎ出せしが幸に、警察官の出張ありて無事散会したる由。

仏教幻灯会〔明治24年10月19日 第七十六号〕

来る十九日午後六時より当市宮出町照運寺に仏教幻灯会を行ひ鶴飼祖箴氏は其の説明を為すよし。

環溪禪師の追懐〔明治24年10月26日 第七十七号〕

対馬国々分寺住職江崎接航氏は左の俳句を賦して、過般長全寺に営まれし同師七回忌の法要の席へ献けられし由

雪主翁の追善会に寄して

消しあつ月の清さや雲のみね

鷹啼くや日落ちて寒き海の面

長全寺授戒会直壇

十月廿六日

伊藤寛典

授戒会の余聞〔明治24年10月26日 第七十七号〕

全会 教授 水野道秀

前号に記せし長全寺授戒会には社員伊藤、日下部、河村、高橋、中村等は晩餐の供養を成し参詣せしが、全会にては施餓鬼を修し亦全宗祖師の編せられし法華転の誦経もありて殊勝なりき、全会は廿三日無事完成なりしか今全会へ施齊せられし重なる信者には久松丈助、内藤利兵衛、原兵一郎、榎原栄蔵、榎原治助、新見嘉治、加藤清左衛門、諸富保義、村地判事、福田伝左衛門、津田理三郎（各宗同盟仏教会役員）社員等なり、又物品を寄贈せられしは無慮百十名なりと云ふ。

禅隆寺の授戒〔明治24年10月26日 第七十七号〕

禅隆寺の授戒は徳源寺和尚の導師にて本日より開会さるゝが、右に付従来戒礼として何程宛かを定めて戒弟より徴集し来りしも、今回は大なる箱を供へ置き、戒弟の志納を以て戒礼を納めしむる事とせられ、既に三百余名の戒弟もあるよし。

広告〔明治24年10月26日 第七十七号〕

過日当寺授戒会ノ際ハ各位ノ篤信ト御厚意ニ依リ物品或ハ施齊等ヲ寄贈セラレ、為ニ菩薩戒受者百五十余名無事ニ七日間ノ修行ヲ了シテ得戒スルヲ得タリ。此ニ仏天ノ冥護ヲ感謝シ、併テ全会ヘ施物施齊等ヲセラレシ各位ニ拝謝ス。

曹洞宗の震災見舞〔明治24年11月4日 第七十八号〕

当市なる全宗の宗務支局教導取締生駒円之氏は今回全宗の寺院にして、其の堂宇の全く破壊に属せしもの百余ヶ寺にして、其の他大破損に至らざりしものも亦殆んど二百ヶ寺程なるが、此の多数の寺院及び其の檀徒の家屋の破壊等を慰問する為、左の諸氏へ慰問使を命し災害各地へ派遣し、夫々実地に就き慰問を遂げ亦事情をも取調へらると云、其の人名は左の如し。

一号、二号、四号、六号、支分局下 織田宝山

（名古屋、愛知郡、東春日井郡の一部）

八号、九号、支分局下 山田祖学

（東春日井郡の内一部、西春日井郡の内一部）

十号支分局下 清 俊瑞

（丹羽郡、葉栗郡）

十一号支分局下 水野道秀

（西春日井郡の内一部、中島郡一部）

十二号支分局下 伊藤寛典

（地方海東郡、海西郡一部）

亦全支局より堂宇破壊せし寺院へ伝へられし慰問状は左の如くなりと云ふ。

何々寺

今回震災に就き其寺堂塔伽藍の一朝にして破壊せしは悲痛禁ずる能はず、由て此際一層仏祖の道行を精勉し、尚ほ布教伝導無怠慢寺檀協力漸次復興の事業を經理する様祈念し、爰に使を派して災害を慰問す。

但し詳細取調本局へ具申の上、追て何分の慰問可有之義と推知致候也。

愛知県第一号曹洞宗務支局

明治廿四年十一月 教導取締 生駒円之

尾張に於ける潰倒寺院の数〔明治24年11月9日 第七十九号〕

尾張同派の寺院全潰凡そ二百八十ヶ寺なるが、尚ほ半潰等取調中なり

大谷派派出員の繁忙〔明治24年11月9日 第七十九号〕

名古屋別院内に本山震災救恤事務所を設け、重役出張昼夜救恤の事務に繁忙を極をらるゝ由。

名古屋市震災概表〔明治24年11月9日 第七十九号〕

当市中に於る震災死亡者は百八十七人、負傷者百九十一人、家屋全倒千二百五十六戸、全半潰千九十七戸、焼失二戸、橋梁破壊十六ヶ所、堤防一ヶ所、土地壊裂三ヶ所、救助を受け居る者千七百十九人なりといふ。

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教(二)

浄土宗及び臨済宗の法要〔明治24年11月9日 第七十九号〕

臨済宗にては、去る廿八日飯田町禪隆寺に於て今川貞山の導師にて二百余名の雲衲と共に震災死亡者の法要を、同じく去る三日には浄土宗市内寺院総出にて白川町光明寺に於て孰れも修行。

松山町安齋院の法会〔明治24年11月9日 第七十九号〕

明九日、同寺にて同宗一号分支局の僧侶を請し午後一時より施餓鬼を行はるゝ由、尚当日は例年の薬師の縁日に付法会を兼て施米をも為さる由なり。

前津長松院の大施餓鬼〔明治24年11月9日 第七十九号〕

来る十日、同院に於て震災死亡者の法要を営まるゝ由なり。

日置敬円寺の法会〔明治24年11月9日 第七十九号〕

同寺にては、来る十日震災死亡者の追薦会を修せらるゝ由にて、午前は同宗の僧侶、午後は曹洞及び浄土宗、其他の僧侶にて、同日は演説をも開かるゝ由、弊社にも招待を受けたり。

広告〔明治24年11月9日 第七十九号〕

本月十日、上前津町長松院於て震災死亡者ノ追福大施餓鬼修行營候間、当日午前十時ヨリ各信心有志ノ方ハ御参堂被下香水ヲ手向非命者ノ頓証菩提ノ為企望ス。

同寺 執事

森田悟由禅師の来名〔明治24年11月16日 第八十号〕

全師は岐阜県へ赴化の途次、去十二日石川県金沢市より関西鉄道を経て午後四時廿分、熱田港着の汽船にて来名せられしが、当日は当市古渡町吉祥講中及全宗寺院信徒には熱田迄出迎はれ万松寺へ着せられ、直ちに別項に記せる法会なりしか、全日は社員日下部、高橋、河村、水野、中村等も法会に参席し後ち禅師には親しく拝謁を許されしかば、懇談時を移して退席したり。

震災負傷者の見舞〔明治24年11月16日 第八十号〕

愛知仏教会慈善部にては、過る十三日当市公立病院及好生館に治療中なりし震災負傷患者一同及看護婦等へ菓子パン一包宛及半紙一折宛に仏教の因果を説ける法話一枚摺を添へ贈与せしか、当日見舞ひの顛末を記せば、先づ熊谷院長に面接し目下患者の状態を聴き、夫より応接掛の案内にて全院の北裏手に在る明地に至れば、震災後の仮屋として五間幅十間余と見受られたる四分板葺の仮屋二棟あり。(震災の当日建設せしと云ふ) 一棟を重傷患者とし(歩行し難き者) 一棟を軽傷患者とす。(歩行し得るもの) 二棟共中央を通路とし、何れも患者を両側に臥せしめ、之に番号を付しあり、腰骨を折しもの頭部を傷し者或は手腕等繃帯を纏ひ眼色蒼白し悲惨限り無き有様にて六十余人之を尾張紡績会社の負傷者なりと云ふ。亦其の南西位に当てテントを張りたる内に三人或は四人宛臥せる者四五ヶ所あり。何れも実に衰腿の有様にて、見舞の辞を発するも胸膈悲哀に迫り潜然として一行何れも涙にムセビ

たり。夫より好生館に到り北川館長に面接し、夫より佐藤医学士の案内にて各室を見舞ひしかば一々其の様態を説明せられたり。全館は大概一室、互に一人位にてこれ亦頭部の重傷、腰部挫折等更に大手術を施したるもあり。何れも悲嘆の有様なり、夫より出館門前に両側の明地藁葺き仮小屋幅六間整十間余座一面に筵を敷きしは市役所の設備に係る、全所にも十余名の患者ありし皆貧困者にして其の惨状一層憐むべきなり、何れも至る所一行の贈物を受け感謝の意を顕したり、世の慈善家諸氏よ此の最不幸なるの負傷患者を慰藉せられよ、全日右両所を見舞しは来名中なりし永平寺貫主森田禅師、監督生駒円之、理事河村文六、伊藤覚典、大沢恒太郎、中村元亮、水野道秀等なりしか帰社しての物語なりき。

災後曹洞宗〔明治24年11月16日 第八十号〕

本県第一号曹洞宗務支局にては、震災に罹り寺院の倒壊に至りしもの一百余、大破に属せしもの亦一百余にして、迎も本年後半期の納金は無論、明年の都て宗教及学事に係る経費の出処に大困難を来し、到底明年度の経費には五六百円の節減を要せざるを得ず。為めに近日臨時会議を開かる、由にて社員水野は其の調査を囑托せられたりと云ふ。

曹洞宗震災死亡者大法会〔明治24年11月16日 第八十号〕

全宗の当市紳商有志者には、過る十二日当市裏門前町万松寺に於

て執行せられたり。全日は全宗の大本山永平寺新貫主森田悟由禪師が岐阜県地方へ赴化せらるゝ途次、当市を通過せらるゝを機として全禪師を大導師に請し大施餓鬼会を修せられたりしか、今其概況を記せば、当日門前に仏旗を交叉し中庭に大塔婆を樹立し大施餓鬼棚を架し当市及熱田近村の全宗寺院僧侶無慮一百五十余名出勤して午後二時より誦経あり。続く説教野々部至遊師、次に伊藤覚典、山田大啓、中村颯宗社員水野等の演説あり。午後五時より森田禪師の大導師にて大施餓鬼を修せられ、続く全師の説教あり。参詣者には紳商森本、大沢、津田、伊藤、佐藤、永田守随氏始め四百余名と見受たり。

震災地実況図第二名古屋市門前町性高院本堂〔明治24年11月16日 第八十号〕

性高院は大雄山と号し京都智恩院末なり。天正十七年藩君忠吉君其の母君宝台院の御為に武州忍莊に建立し玉ひし正覚寺を慶長八年清洲に移し、同十二年同君江戸に薨去の後寺号を法号に改め、同十六年今の地に移せしものなり。朝鮮人来朝の時（寛永十三年）当寺を旅館に充てし事ありて、古は寺領百石を有せし、市内の名利なりしが惜むべし去る廿八日の震災に本堂の破壊せし有様図の如し。図は南筆先生の筆なり。

愛知仏教会の施米〔明治24年11月16日 第八十号〕

全会の慈善部にては、過る十二日前項万松寺大法会の席にて震災

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（二）

被害者救恤として予て市役所より末広町七面堂にて救助せらるゝ被災民百八十人、花車町光明院にて救助せらるゝ被災民百六十人、其他五十余人へ白米三合宛を施与せられたり。因に記す全慈善部にては順次中下及清水、西春日井郡地方へ施米に赴かるゝ筈なりしか、既に廿六日迄は市役所亦是郡役所にて災民へ日々救助せらるゝ由に就き、全会施米は廿六日後に延期せらるゝ事に決定せしと云ふ。

東輪寺の施餓鬼〔明治24年11月16日 第八十号〕

桶町なる黄檗宗東輪寺にては、昨十五日井上重兵衛、大口六兵衛、伊勢門水の諸氏が発起にて震災非命者の法要を行はれしが、当日は彼の大灯籠をも点せられしと云。

浄土宗支校の大施餓鬼〔明治24年11月16日 第八十号〕

来る廿、廿一の両日を以て当市東門前町なる同校には深見志運師を請して、震災被害者の大施餓鬼を行はる由。

曹洞宗第五号分局下会議〔明治24年11月16日 第八十号〕

全分局寺院には震災被害者救助及死亡者追吊法会を挙行計画にて、明十六日鳴海町にて会議を開かると云ふ。

熱田支部会の尽力〔明治24年11月16日 第八十号〕

愛知仏教会熱田支部に於ては吉田義道、山田大啓、平野貞道の諸

氏卒先奔走して古着古器具等を纏集して本部へ送付せらるゝ都合なりと云ふ。

追吊大法会〔明治24年11月16日 第八十号〕

当市松山町安斎院に於て、過る八日午後一時より住職野々部至遊氏の発起にて曹洞宗第一号分局下寺院廿余ヶ寺総出勤にて震災死亡者追善の大施餓鬼会を修し、続て説教あり。全席に於て義捐金をも募集せられ、全日の賽銭迄取纏め本社へ寄送せられしか、亦全日は災民に白米を施与せられ参詣者も多く最と殊勝なる法会なりきと。

大高支部会の追吊会〔明治24年11月16日 第八十号〕

愛知仏教会大高支部にては十六日大法会を修し、演説を催し罹災者救恤の義捐をも募集せらる筈にて社員も出席せると云ふ。

特別広告〔明治24年11月23日 第八十一号〕

全国の仏徒に哀告す。

不幸なる我が尾濃の災民は着るに衣なく居るに食なく、又来る廿六日を限り国庫救助の恩恵に離れ、將に冬天に向つて餓死せんとする者約五十万吁此の窮民を救助する者は、抑も誰に在るか吾人は之れを我帝国各団の慈善なる仏教徒諸士に問はんと欲す。既に外教の徒は饒多の資金を投し情を災民に与へ慰撫し賑恤するの様に、実に吾人仏教徒をして矐若たらしめんとす。嗚呼我帝国四千

万の同胞否仏教徒よ、誰か之れを見て切齒扼腕せざる者あらん。況んや煦々たる恩恵の中に、我が最愛なる同胞をして彼の徒の術中に陥らしめんとは是れ吾人の以て諸士に告るる所以にして、吾人等の既に災害に接するや余震未だ止まざるに、鵜飼祖箴氏を東上せしめ先づ在京の同土と計りて目下將に義捐を募集中なり。而して本会の慈善部は更に仮出張所を設け、既に第一回の施米を行ひたりと雖も、尚ほ二十六日即ち国庫救恤の期限満ちなば、其の窮民を如奈せんや、故を以て我会の理事は日々数名の使丁を引き具して古着古具の之れを災民に贈与せんとす。然れども我尾濃の地たる其の震害に多少の差ありと雖も等しく災害を蒙らざる者なきを以て募金意の如くならざれば、限りある資を以て無限の窮民を救済せん事到底吾人等の以て能くせざる所たれば、茲に被害なき全国各地の同胞に謀り以て救恤の義務を分たれん事を希望し、敢て一書を呈し、以て其の義捐の多少と金員物件の否を問はず、本会へ向け御送付あらん事を乞ふ。然れば本会は直接に災地に至り災民を慰撫し以て諸士の厚意を告げ、吾人仏徒の義拳を發揚すべし。然らざれば独り外教徒の爲す所に恥つるのみならず、此の際吾人等が勢の以て社会に力なきを知らしめ、増々彼の侮慢を受くべし。去れば独り吾人等の恥辱たるのみならず、仏教全体の興敗に關すれば茲に泣血再拜謹て各位の坐下に仗し敢て乞ふ事如斯。

名古屋市南伊勢町百五番戸

明治廿四年

十一月

愛知仏教会

慈善部

廣告〔明治24年11月23日 第八十一号〕

今回の震災は実に未聞の大害にして、為に其難に遭ひ衣食住に苦しめる者尠なからず。然るに逐々寒天に向へば、此れ等被害の災民尚一層の艱苦増すべければ、本会は普く世の慈善家に乞ひ、古着古具の義捐を乞ひ、被害の窮民を救助せんとす。仰ぎ願くは其の多少と金員物品とを問はず、本会の使丁をして纏募せしめ候間御恵捐あらん事を希ふ。

但御恵指諸君の便宜を謀り、左の箇所本会の臨時派出所を設け候間、同所へ御届け被下指共苦しからず候、又御恵捐品は本会より被害地へ出張、其の市町村者若くは管区巡査と協議の上被害者中最も愍然なる者へ恵与可仕、其他御恵捐品に就ては如何なる手続なりとも御意に従ひ取斗可申候間、併て伸告仕候

新道町	海福寺	大津町	光円寺
皆戸町	聖徳寺	菅原町	浄教寺
宝町	禅芳寺	松山町	安斉院
東門前町	西蓮寺	大須	宝生院
新出来町	徳源寺	古渡	伝昌寺

愛知仏教会本部

廣告〔明治24年11月23日 第八十一号〕

本月廿六日午前九時出来町徳源寺に於て

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教(二)

震災死亡者追吊会執行

同日午後二時全寺に於て

仏教演説会 傍聴随意

名古屋市古着商

十一月廿二日 真理協会

震災地実景第四矢場政秀寺本堂〔明治24年11月23日 第八十一号〕

当寺は臨濟宗京都妙心寺の末にして、天文二年織田信長其臣平手政秀の忠死を悼み、春日井郡小木村に建立されしを後に、今の地に移せし者にして寺領二百石を領せし名刹なりしが、惜むべし震災の為本堂及び庫裏とも全倒せり。

古谷日新師〔明治24年11月23日 第八十一号〕

全師は前項の要務を帯ひ、当市へ来錫を幸に、当市全宗信徒の懇請にて小川町妙本寺に於て震災死亡者追吊大施餓鬼会の大導師を勤められ、続て法話を演せられしか、最初に本回全師か巡回せられたる本県及岐阜地方の被害の惨況を述へ、仏教信者たるものは慈悲喜捨の心得なかるべからざる所以を説き来て因果の理法に及ぼし、総列の二業より理法の歴然として敵ふ可からざるを弁し、各自応分の慈悲喜捨を修すべしと言辞平易淳々とし懇話せられ、満場徐ろに感涙を催せりとぞ、同日の参詣者は災後人心渴々たる時に似ず最も盛会にて三百余名と見受たりと水野か帰社しての物語なり。

大高支部会追吊会概況〔明治24年11月23日 第八十一号〕

予て前号に記せし大高支部会には、全村春江院に於て催されたる当日は大本堂の前に仏旗を交叉し施餓鬼棚を架し山海の供物を備へ、僧侶には長寿寺、東昌寺、明忠院等凡そ二十余名出勤、導師水野道秀、大施餓鬼会を修し続て説教あり。夜間例月定期の演説なりしか会員の申出に依り説教を営まれしが、昼夜共参聴は四百余名にて、全日は村内農事の休日として法会に参会せし村民は共に義捐金を募集せりと、因に全村は今回の被害は隣村に比せは僅少なる方なりとて、村役場員僧侶、教員等頗る募集に尽力せられしとの事なりき。

日雇者共同の追吊会〔明治24年11月23日 第八十一号〕

当市日雇業の頭株清五郎、吉五郎、金蔵、兼治郎、清九郎、忠八の諸人は、此頃雇ひ給料の件に係し相談会を開きし後ち、斯く世の中の人士が震災に罹り財産を失ひ命を損せしもの尠なからざるに、我々は幸にして斯く業務の繁忙に赴きしは好けれども、震災に罹り死亡せし人々こそ気の毒くとて、去十七日前諸氏が發起人となり、震災死亡者追吊法会を徳源寺に於て最と鄭重に執行したりとは時節折豈に感心ならずや。

真言宗管長代理慰問〔明治24年11月23日 第八十一号〕

真言宗管長代理慰問として法務所役員宮寺普学氏を派遣せられしが、同師は昨日大須宝生院へ安着せられし由。

東京上野吉祥院住職大照円朗師来名〔明治24年11月23日 第八十一号〕

同師は今回愛知仏教会特派員鶴飼氏と共に来る、廿七日午前の二番発にて新橋を出発し、当市来名の上仏教会と聯合して救助の方法を義定せらるゝ事に決定せし由、右は東京なる各宗大徳の決議を以て来名せらるゝ者たれば、同師着の上は一大演説会を開かせらるゝ筈に付、尚詳細なる事は逐て報導する所あらん。

宮出町有志の特志〔明治24年11月23日 第八十一号〕

当市なる同町の各戸は、昨日旧氏神なりし運照寺内の秋葉堂及び金毘羅堂が今回の震災に傾きしを遺憾に思ひしのみならず、全町の無事なりしは全く同神の守護に由りし者なりとて、一同打揃ひて報酬の爲め同堂の傾きを直し、其の上尚多少の祭費を出して祭礼を行ひしに付、東門前町にも其の挙を賛助し賑々しく施行されし由。

教海雑記

真宗部

○高派法王は、去る十四日出発愛岐両県下へ下向追悼会を修せらる。

○興派法王殿は、一時御病気の処目下逐々快気に向はせられしと。

○大谷派本山にては昨日より報恩講修行。

○東上中なりし同派執事は去る十七日帰山。

眞言部

○故日西樞大僧正逝去に付去月大僧正の贈階ありしと云。

○去三十日智積院にて松平故大僧正の三週年忌を営まれ、吉堀僧

正の一週年忌をも兼修せられぬ。

○随心院門跡は去月廿七日遷化。

○高志僧正は音羽に講筵す、大学生及び高等中学生の来る者二百人。

日蓮部

○小林僧正は胃加多留症にて悩み居られしか、昨今は余程衰弱の体なりと。

○曾て来名中なりし古谷日新師は帰京。

浄土部

○智恩院にては去る十日震災被害の法要を営まれしか、日野門主は尚ほ九州巡化中なり。

広告〔明治24年11月23日 第八十一号〕

本月廿四日午後一時於大曾根町関貞寺

震災死亡者追吊大法会

導師生駒田之殿 曹洞宗第六号分局院聯合

震災死亡者追吊会及負傷者患者平癒祈祷報告尾濃両国震災死亡者

追吊ノ為メ、本月廿八日本山大法堂ニ於テ、貫首法雲普蓋禪師大

導師衆僧一百余員出勤懺摩法会及大施餓鬼ヲ修行ス。依テ死亡者

ノ法名若クハ俗名等郵便端書ニ認メ当本山へ差越サルヘシ。

本月一日ヨリ一百日間被災負傷者平愈ノ祈祷龍宮出現荒神尊殿ニ就テ毎朝転大般若ヲ修行ス。該負傷者ノ姓名同ク当本山へ報導アルヘシ

能登国鳳至郡櫛比村大宗門前

廿四年 十一月 曹洞宗大本山

総持寺執事

広告〔明治24年11月23日 第八十一号〕

本月廿八日午後一時ヨリ

震災死亡者追吊大法会

同 負傷者祈祷大般若 執行

并ニ義捐勸募大演説開筵

大導師白鳥老禪師

右ニ付、死者法名又ハ俗名速ニ御送付アル可シ

熱田白鳥山

広告〔明治24年11月23日 第八十一号〕

於当市裏門前町総見寺、本月廿四日午後一時ヨリ震災死亡者法会

修行

大導師妙心寺派管長殿

震災追吊会彙報〔明治24年11月30日 第八十二号〕

臨濟宗大本山妙心寺管長芦禪師には、過る廿三日当市へ着し、直ちに本県庁を訪ひ、夫より公立病院、好生館等の負傷患者を慰問し、一々病床に就き最と懇切に慰められ、翌廿四日は総見寺に於て本県各郡の全宗諸寺院を集め、死亡者追吊の大法会を修せられたり。全日は門前に仏旗を交叉し、中庭に大施餓鬼棚を架し、大塔婆を建て午後一時より僧侶一百二十余名本堂に班列し管長大導師大導師にて施餓鬼法会を修せられ、了て一等教師前田誠節師代理として説教を勤められ、且つ末寺住職へ最と懇切に災後の策を諭せられ中にも、災後の今日に殿堂修営に奔走せんよりは只管檀家の災民を救恤せよ。衣を売り袈裟を売ても之を救済せよ道心の内殿堂もあり、衣服もあり等の教示には孰れも感激せし由、尚全日参詣の道俗内外立錫の地なく凡そ七百余名と見受たり、全日は本社より水野が参席せしが、壯嚴の美法要の殊勝は筆紙の尽すべき所に非らざりし由、物語りの俣を。

義人と義人〔明治24年11月30日 第八十二号〕

当市松山町就梅院住職前田鉄柱氏は平素布教伝導に最も尽力せられつゝあるが、今回の震災に全院は痛く破壊に属し、殊に其旧里親戚には全倒の家屋四名の死亡者もありて悲愁憂苦の間なるにも似ず、破壊の殿堂を修繕中なるを此頃全氏か三十余年前の旧識にして、目下福島県岩代国栗野村昌福寺住職岡本祖雄氏は遙に本県の震災を聞き、旧懐の情より震災の見舞として金員を送られたり

しが、前田氏は之を亦本社に寄せて被害者の救助に充てられしが、これぞ旧識を訪はれし岡本氏の信義と又其の金員を以て直ちに窮民を救済さるゝ前田氏の義とは共に相并ひたる義拳と謂べし。

日蓮宗の施餓鬼〔明治24年11月30日 第八十二号〕

去る十七日、当市東橋町首題寺に於て同宗寺院一同集合して震災死亡者の大施餓鬼を行ひ、当日池上耀信師導師にて、説教は浅井朝鮮氏なりしが、最も静粛にして盛なる法要なりし由。

白鳥山法会概況〔明治24年11月30日 第八十二号〕

一昨廿八日、熱田町白鳥山に於ては全町の紳商野口吉十郎の発起にて震災被害者の法会を修せられたり。全日は全法持寺門前に国旗を交叉し中庭に球灯数百個を山形に懸列し、亦大塔婆を樹立して香華を備へ、亦中庭の東側に棧敷を架して供物施与所に宛て、午後二時より鼎三老師の大導師にて大般若経を転し負傷者の平愈を祈念し、続て大施餓鬼会を修して死亡者を追吊せられしが、全日は各宗僧侶六十余名の出勤にて参詣者は広袤なる境内と大本堂に充滿し、殆んと一千八百余と見受たり。此の多数の参詣者には発起人野口氏より茶津盛の施斎及供物饅頭等を配付され、亦各宗僧侶には鄭重なる折詰を饗せられたりしか、全日は本社へも招状を送られしより水野は参席し、災民救恤に関する一場の演説を為し閉会せしは午後五時なりしと云ふ。

追吊会と演説〔明治24年11月30日 第八十二号〕

十二月一日午後一時より当市矢場町白林寺内地蔵講合同会に於て、妙心寺派旧管長無学禪師大導師にて震災死亡者の為め追吊会を執行され、並に震災救恤仏教演説を開会さるゝ由にて、其弁士は林南嶺師外数名なりと云ふ。

曹洞宗の臨時会〔明治24年11月30日 第八十二号〕

予め前号に記載せし本県第一号曹洞宗務支局の臨時会議は廿五六七の三日間の開会なりしか、出席番号は撰挙区の番号に依る事とし第一水野道秀、第二友松湖岸、第三伊藤隆成、第四鈴村泰量、第五阪井祖仙、第六水野暁山、第七菅器王、第八茶原良栄、第九村田大音、第十西尾合準、第十一寺本賢瑞、第十三辻本忍能、第十四近藤覚禪、第十五梶川賢明、第十六安井貫道、第十六佐藤祖関、第十七長谷川悦翁、第十八佐藤靈源、第十九寺西確門、第廿小寺黙音外に被害の最甚しき地方より四名の増加議員を出して議席に列せしめん事を建議せしか全会之れを可決し、夫より教導取締生駒円之臨時会を開会する旨趣を述べ、次に議長の答辭ありて後ち副議長に欠員ありとて之を撰挙せしに九票小寺黙音、八票水野道秀、二票以下二名にて小寺氏に当撰の旨を伝へ、夫より本按に就き議事を開かれしが、其の重なる条件は左に各分局下に三名の震災取調委員を設くる事、被害寺院は宗務局より二万円の貸下金を懇請して仮堂の建設費に充てる事、被害地寺院は明治廿四年度より向ふ五ヶ年間都ての課出金を免除する事、学林費

途節減の件、支局費途節減の事等なりしが、本回は被害地寺院は

何れも熱心に被害地の利益を収めんものとして、全地より寺院住職六十余人傍聴席に列し議席に応援を為せしが、三河及知多等の議員は何れも被害地を救助するの精神にて格別に反対もなく被害地寺院は十分に希望を達したり。然し議員及配下の寺院が斯く議會に熱心せしは議會創始以來始めてなりと云。左れとも中には議會の尊嚴議員の権利義務等を等閑に付するの虞ありしが、今少しく發達したらんには整肅なる議會を見るべしと或る人は語りき。

熱田支部の運動〔明治24年11月30日 第八十二号〕

全会も弥古着類の纏集に会員一同奔走せられ、近日中には四五行履を仏教会慈善部へ送付せらるゝなりと云ふ。

慈無量講の救恤〔明治24年11月30日 第八十二号〕

今回の震災に付名古屋慈無量講と三河慈無量講と共同一致して愛岐死亡者追吊会を来る十二月一日より三日間、当市白川町光明寺に於て執行する由なるが、慈無量講の發起者なる深見志蓮律師は過般来より罹害無き地方に於て災害窮民救恤を唱導尽力中なりしが、其功不空三河地方篤志の信者より金員若干白米六十俵並に雑品数十個を義捐し、且名古屋慈無量講にても金員数百円及雑品等義捐有之に付、最早備荒儲蓄の救恤も去る廿六日を以て停止期限なれば、第一着の手始として三日間当市罹災窮民一般并に熱田地方へも同様白米五合づゝ施与し、且被害患者には別段金員等を又

岐阜県は本誓寺へ全師と慈無量講員が出張し施与する由。猶追々寒気に向ふの時節なれば窮民の困難見るべからざる者あれば、各郡も逐次救恤する手筈にて、又廿三日より全師は随行者と共に巡視の為岐阜大垣へ出張されたりと。

石川素童師〔明治24年12月7日 第八十三号〕

曹洞宗能本山執事なる全師は、過般来其の住職地なる彦根清涼寺へ帰錫中なりしか、過る廿九日当市へ来名せられ親戚故旧の許を訪問し、去る一日全本山へ帰錫せられたり。

四恩講の追悼会〔明治24年12月7日 第八十三号〕

同講は当市長者町なる仏教篤信者が組織により成り立ちし者にて、講員は毎月数回誦經の温習教義の研究を専らとせらるゝが、今回の震災に付き愛知仏教会の慈善部が被害者の救助に尽力するを開き、講員は悉く其の拳を賛成し古着類の纏集に尽力されしが、去る四日は講員某氏の宅へ野々辺至遊師其他各寺院数名を招聘して震災死亡者の法会を修せられしが、同日は最と丁寧なる齋を供し結構なる法会を営まれしやに聞く。

追吊会并法話〔明治24年12月7日 第八十三号〕

当市松山町含笑寺にて、来る十四日去十月廿八日の震災に死亡せし尽七日に相当するを以て、午後一時より大施餓鬼を修行され法話を野々辺至遊、水野道秀、伊藤覚典の三氏に托されたりと云。

小松万宗師〔明治24年12月7日 第八十三号〕

全師は本県出身にて、目下北海道札幌曹洞宗中央寺住職成が本県の震災を聞き其の親戚故旧へ見舞として金員を寄贈し、亦全地の毎日新聞へ托し本県下災民へ義捐せられし由なるか、亦愛知仏教会の救恤運動を聞き同方及寺内の僧侶を勧めて更に義捐金を送られしと云ふ。百年家郷を忘れざるとは果して師が事なるかな。

追吊法会〔明治24年12月7日 第八十三号〕

当市古渡町伝昌寺にては、全町吉祥講中の發起にて追吊法会を修し、大導師には永平寺森田悟由師を請せらるゝと云ふ。

金城館追悼会〔明治24年12月7日 第八十三号〕

去る一日、当市洲崎橋の金城館に於て催されし震災死亡者の追悼法会は、愛知仏教会の紹介により各宗の僧一百五十名出場され、第一座は観音經にて禅宗の各派之れを唱和し、次は阿弥陀經にて浄土の各宗之れを唱和し、次は法華經にて同宗之れを勤められたり、終て一同に精養を饗せられ退散せしは午後一時過ぎなりしが、当日は同館の広間（凡そ百三四十畳）の正面に靈牌を安置し、莊嚴最も尊重にて供物香華四辺を照輝せり。当日供養の大塔は大光院内に埋められしが、当日の参詣者へは一々供物を配与されたりしが館主の希望に由り、当日は来衆の姓名録を保存せん為め仏教会へ以来されしを以て、同会は右の人名録を調製せられしを以て編者は一編の緒言を付たり。

追悼文〔明治24年12月7日 第八十三号〕

前号の紙上に記載せし当市大津町光円寺に於て催されたる当郵便電信局員の死亡者追悼会の際、同局員の朗読されし追悼文を得たれば、其の一章を掲ぐ。

茲に同僚相計り清浄無量なる仏法の供力に籍り、名古屋市光円寺に於て法会を執行し最も親愛なる故近藤敏次郎、岡谷錦次郎、伊藤雄次、福岡辰次郎四氏の靈を吊ふ、悲哉。明治廿四年十月廿八日午前六時廿分、古今未曾有なる震動天地を揺かして至り、分秒間数万の生命を傷害し財産を滅亡せしむ。諸氏不幸にして其内に数へられ黄泉の客となり、再び相見る能はず。嗚呼傷い哉、人間の不幸は短命より甚たしきはなし。然れども生者必滅、会者定離の免かれざる普通の定理如何ともなし難きも、非常の災にあるを以て諸氏の不幸は一層哀悼に堪へざるなり。諸氏よ。諸氏は終世の時まで最も責任ある職務に従事し職を守りて公堂崩壊の下に圧せられ諸氏の精神死を以て尽す、能く任務を全したりと云ふへし故に、通信大臣閣下法に依り遺族を愛撫扶助し、在省有志の諸氏哀情を全国同業諸氏に訴へられ、又局員相計り賁を募り弊を辞せずして靈魂を吊ひ遺族を慰問す。諸氏の没後実に余栄あり、諸氏よ吾か通信事務に従事し、職務の爲め斃れたるもの曾て若干名ありと雖も、這回の如き非常に吊慰の挙あるは実に本邦郵便電信制度開施以来曾てなき処なるを信す。諸氏の名誉寔に偉大なりと云ふへし。本日名古屋郵便電信局長以下局員一統相会して諸氏の遺族を招き、相

共に吊ふ清浄深遠無量なる經文の奥義を悟り、地下に瞑目あれ。頓首再拝

明治廿四年十一月廿八日

名古屋郵便電信局在勤

郵便電信局書記 藤田知新

広告〔明治24年12月14日 第八十四号〕

本会慈善部は、来る十七日当市新道町海福寺に於て巾下地方罹災窮民へ施米を配与す。

広告〔明治24年12月14日 第八十四号〕

本会慈善部は、来る十八日当市大曾根町関貞寺に於て全地方罹災窮民へ施米を配与す。

広告〔明治24年12月14日 第八十四号〕

本会慈善部は、来る十九日橋詰町慶栄寺に於て全地方罹災窮民へ施米配与す。

学校の震災追吊会〔明治24年12月14日 第八十四号〕

当市尋常小学小林学校にては、同学生の内震災の為に死亡せしものありとて、昨十三日矢場町法光寺に於て追吊会を催されしが、同日は聯区町内の各宗寺院は何れも出席誦經せられ、亦学生及職員一同参詣し頗る殊勝なる法会なりき。

鎮火祭〔明治24年12月14日 第八十四号〕

来る十六、十七の両日を以て、当市桶屋町良学院に於て同祭を施行せられ、終て震災死亡者の追吊会及び被害者安全の祈祷を修せらるゝ由なり。

加治野日解氏の義捐〔明治24年12月14日 第八十四号〕

小川町の妙本寺住職加治野は、嚮に同寺に於て震災圧死者の追吊会を営まれ、多少の義捐金を愛知仏教会の慈善部に寄贈せられたりしが、去十一月廿八日大津町の光円寺に於て郵便電信局横死者追吊会の節同氏か受ケ得られたるの布施金一円を再ひ仏教会慈善部へ寄贈せられたると云ふ。

黄檗宗の追吊法会〔明治24年12月14日 第八十四号〕

来る十五日、当市新出来町五百羅漢に於て、同宗の僧侶十二ヶ寺出頭して震災死亡者の追福大施餓鬼及仏教演説を開会さるゝ由。

広告〔明治24年12月14日 第八十四号〕

本月十六日午後一時、桶町妙善寺に於て日蓮宗々務院より権僧正小林日童殿出張せられ、這回震災圧死者の爲め追吊施餓鬼会を執行し、且つ同日早朝より貧民へ施米、翌十七日小川町本住寺に於て同様、午後一時追吊会、早朝より救恤施米、夫れより追日被害地七郡へ出張同様執行せらるゝ由。

広告〔明治24年12月14日 第八十四号〕

十二月十六日鎮火祭

同 十七日 震災死亡者追吊会
並被害者息災祈願

桶屋町 良 学 院

唱道義会青年部の追吊法会〔明治24年12月21日 第八十五号〕

同部有志の發起にて、去る十五日当市古渡町伝昌寺にて大導師永平寺貫主森田悟由師を初め曹洞宗僧侶数十名出席にて震災死亡者追吊法会を執行せられしが、いと厳肅なる法要にてありし由。因に記す同部にては、今般の震災に付き、貧民救助の爲大谷派尾張国第一組長の依囑により実地救助の事に尽力せられたる由、感心の至りと云ふべし。

小学生の追悼会〔明治24年12月21日 第八十五号〕

名古屋市尋常小学小林学校第四年生則竹武一郎氏は震災圧死に付、其追悼大法会を矢場町法光寺に於て去十三日執行せられたり。式場装飾は寺院の門前に六金の旗を交叉し、小林学校生徒則竹武一郎氏震災圧死追悼大法会と書せる大標を掲げ堂に登れば正面に氏の靈位あり。米餅其他の供物あり、左右には篤志者杉本喜三郎氏家内よりの大生花二瓶尤目立ちて死者を慰むるものゝ如し、参拝者は則竹氏遺族旧聯区町の有志者發起者及小林学校職員生徒一同無慮二百五十名にて十時を報するや、旧小林学校聯合町内九ヶ寺の僧侶二十名程宗派によりて二度に読経し終はるや焼香

にて最静肅なる法要なりしと。

真宗大谷派震災救恤実地施与一班（明治24年12月21日 第八十五号）

過般、当市大谷派別院内震災救恤事務所へ京坂地方より廻送せられたる古着類数百梱を一市八郡に分配し、其市内の外十五個を去る十日より同派僧侶及有志者にて市内の仮小屋廿一ヶ所に滞在する貧民凡そ五百七十人に実地施与をされたりと、今其景況を聞くに、先初めに一々仮小屋に就て其姓名及人員を尋ね、次て丁寧に之を慰問し、僧侶其物品の出処由来を説明し、簡單なる法話を為して一日之を渡されければ一同大に悦び拝戴して之を受けたりと、右に付き斡旋の勞を取られし人は大田元遵、黒田智泉、佐々木賢停、伊藤法忍、龍山実言、佐々木祐繼、一柳智泉、桜木利三郎、長屋政秀、高田達吉、鈴木源之助、加藤常太郎、角田平馬、小塚由兵衛、坂理七、高木太七、浅井才治外数名の諸氏なる由。因に記す、同派にては尚遠からず、仮小屋外の各処に散在する貧民にも夫々施与せらるゝ計画なる由。

名古屋市東西部に於る施米（明治24年12月21日 第八十五号）

名古屋市東西部部の災民六百余名は、十六日は東部即ち午前九時より大曾根町顕正会本部にて施与せられし慈善会より大照円朗師、仏教会より鶴飼祖箴師、出張交々一席の法話を為し施与せられしが、全所には顕正会役員加藤栄宗、岡島栄吉、光聞会役員中

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（二）

野進太郎氏、関貞寺住職等斡旋せられ、亦施米に出張せし一行午餐を供せられたり。亦午後二時よりは西部即ち中下新道町四恩会本部（海福寺）にて災民三百廿五名へ施与せられしが、同処にては水野道秀氏施米の旨趣に係る法話を成し、次に大照師態々東京より特派し救恤せるの法話を成し了て順次施与せられしが、全所へは四恩会幹事高橋、山田、小泉、大島、海福寺住職等丁寧斡旋せられたり。全日は兩名共災民は仏教慈善家の懇意と法話を聴聞せしに感動の様を見受たり。殊に世の不幸なる窮民は、最も慇然なるは申迄も無きことなるが相当に生活せし人々が一朝斯く悲嘆の境に陥りしと思へば災民の顔を眺むる毎に悲哀の情に堪へざりしとて施米出張一行の物語たりき。

笠間龍跳師の危篤（明治24年12月21日 第八十五号）

同師は当大光院に住職し、本年は曹洞宗々制編纂委員長とし在京せられし以来、兎角病症に悩み居られしが目下頗る危篤に陥られ、同宗の人は勿論在俗の居士にも多く同師の戒弟あるを以て孰れも法の為師の為惜まざるものなけれども如何せん病症の事なれば、日々重体に赴かれ、今は数日の余命も六ヶ敷かるべしと云。

飯田町養念寺の追吊会（明治24年12月21日 第八十五号）

同寺にては、去る十四日午後一時より同会を修せられぬ。

大高支部会〔明治24年12月21日 第八十五号〕

全会は定期演説として、本日午後二時より昼夜大高長寿寺にて開会せらるゝ筈にて、本社より水野氏か出席せり。

追吊会〔明治24年12月21日 第八十五号〕

当市松山町含笑寺にて、過る十四日午後二時より催されたる全会は地方寺院二十余ヶ寺参集、最と殊勝なる施餓鬼会を修せられ續て社員水野か法話を来し、次に野々部至遊師の説教ありたり。

末広座大法会概況〔明治24年12月28日 第八十六号〕

去る廿三日、全座の前面に大標札を掲げ仏旗及び死亡者追吊と染抜たる大旗を翻し、全座の前茶屋を各宗僧侶の休憩所に充て、入口には紫の幕を引き中には正面に仏壇を設け震災死亡者群霊と書したる大軸物を掛け霊供花燭等最と丁重に荘厳し舞台一面に赤毛布を敷き、左右に磬子木魚を排し、午後一時法鼓の声と共に各宗寺院住職六十余名は列を成し肅々として入場せらる。一同着席第一阿弥陀経、第二普門品を誦し回向了て退場、次に仏教会講師広間隆円師の法話及東京慈善会大照円朗師は一時間余の法話ありて因果応報の理を懇篤に教話せられ、在場四百余の参詣者も徐ろに感涙を催せり。右法話了て一同へ供物の菓子蜜柑餅等を座主より施与せられたり。因に凡吾国広しと雖も演戯場に於て斯の静肅たる大法会を修せしは之れを濫觴とも云ふへし。又吾か地方の震災に関し、或は学校には追吊の法会を営み、或は演戯場に転法

論を成す等は彼の法花経に若於林中若白衣舎の金言を今吾か地に行ひつゝありと思へは又悦はしき事ならずや。

曹洞宗慰問使〔明治24年12月28日 第八十六号〕

全宗管長代理として本県各被害地寺院へ慰問に巡回せらるゝ事は別項に記せしが、今回全慰問使は全倒寺院へ金一円、半倒寺院へは金半円と外に檀方総代へ何にか一品つゝ見舞として給与せらるゝ由にて、全被害地にても或る部分の寺院は頗る之に激昂し管長代理か巡回せらるゝなれば、過般より請願せし貸下金を配与ありたし。僅かに全倒半倒の寺院へ一円金や半円金は何の為ぞとて其の巡回を御断り申すと一書を同宗の支局へ提出したりと云ふ。亦昨日は被害地寺院の或る分は当市宮出町永安寺にて協議会を催したりと云ふ。

西春通信〔明治24年12月28日 第八十六号〕

本月廿五日西春日井郡六郷村成福寺、廿六日金城村西来寺に於て震災死亡者追吊の爲め万松寺生駒円之師を請し、法筵を開き参詣の信者一般へ種々の供物を施与し、且つ説教等執行せらる。

名古屋の寺院に関する

木版資料について(十)

川口 高風

鑑合せである。

四、本遠寺法華堂奉摸積尊立像

本遠寺(熱田区白鳥)に安置されている積尊立像を木版刷の軸装にしたものである。「愛知県尾張国熱田……」とあるところから、明治期以後に木版刷されたものであろう。縁由によれば、延暦十二年(七九三)に伝教大師が熱田社へ来た折、境内に法華堂を創建して自ら積尊立像を彫刻し国家安全五穀豊饒除厄のために安置した。その後、弘長元年(一二六一)春、日蓮上人が来て百日間、『法華経』を読誦された日蓮宗無比の古堂で、鎮護国家の尊像でもあった。さらに、尾張国の日蓮宗の発祥の霊場でもあるという。

五、大須観音真福寺の宝船図

大須観音真福寺宝生院(中区大須)より出された宝船図で、めでたい時に使用されたものと思われる。木版刷したものに彩色を施したものである。

六、名古屋仏教忠魂祠堂建設図

忠魂祠堂は、名古屋を中心とする東海地方の有志が明治二十七年、八年の日清戦争で亡くなった英霊を合祀するために建造したものである。祠堂は明治三十一年に車道町一丁目一番地の敷地の一千坪を徳川家より購入し、一千坪は浄土宗愛知支校敷地

一、名古屋素人連中曲力持

欄外に「七ツ寺ニテ西七月吉日より」とあるところから、乙酉の文政八年(一八二五)七月より七寺(中区大須)で行われた素人連中の曲芸の力持大会の案内である。木版の一枚刷である。

二、富籤の引札を発売する案内

稲園山七寺(中区大須)が御用所となって出した花錐百本添突の案内である。江戸期のいつ頃のものか不詳であるが、瓦版で出されたものであろう。

三、合印鑑

熱田社の権宮司で、事務を総管する総検校であった馬場氏の印

として徳川家より借受けた。本図は明治三十一年に発行された忠魂祠堂建設募金のポスターで、小田切春陵が書き、名古屋豊原堂石版部より印行された。

七、小児虫封陽泉寺縁起

本縁起は昭和三年一月発行の「仏教新聞」第一四二七号附録に所収するもので、陽泉寺（中川区尾頭橋）の縁起を記したものである。陽泉寺は元、明長寺と号し、玉龍大同の創建である。福重寺四世天魯道瓊を請して開山となし、慶長元年（一五九六）に安井將監秀勝が再興した。享保十四年（一七二九）に今の寺号に改められ、文政二年（一八一九）に大中玉英が堂宇を再建して府貞雄道を請し法地開山とした。縁起の内容は安置している三宝大荒神の靈験が著しいこと、本尊の木造正観世音菩薩が腹籠りの観音と称し、腹内の像は源頼朝の胃中に奉安していたもので、それが織田信長に伝わり、次いで家臣安井將監秀勝が受けて陽泉寺に安置したものであるという。

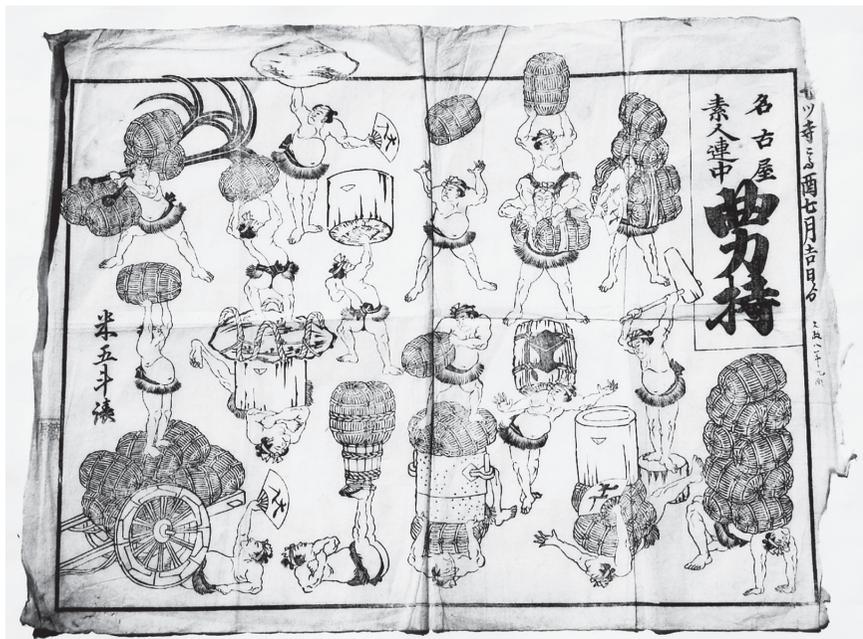
八、大須観音略縁起

本縁起は昭和六年五月に、大須観音真福寺宝生院（中区大須）十一世大槻快尊が記した同寺の略縁起で、同寺より発行された。略縁起の後には当時の国宝の目録があげられており、賢瑜筆の『古事記』二帖をはじめ『尾張国解文』『日本靈異記』などがある。

九、戦前の絵ハガキよりみた名古屋寺院

戦前に発行された絵ハガキより、当時の伽藍をながめてみる。残念ながら絵ハガキの発行年月日は不詳である。戦災で焼失した寺院が多く、往時の面影をみることができよう。戦災にあつていない寺院は現在と風景が異なっており、歳月による推移が明らかになる。ここにとりあげた寺院は東充寺（東区東桜）、七寺（中区大須）、真宗大谷派別院（中区橋）、大須観音真福寺宝生院（中区大須）、宝珠院（中川区中郷）、辯天寺（港区多加良浦町）、善光寺（港区港陽）、西本願寺別院（中区門前町）、八事山興正寺（昭和区八事本町）、笠寺観音笠覆寺（南区笠寺町）、長母寺（東区矢田町）、五百羅漢大龍寺（千種区城山新町）、妙行寺（中川区中村町）方等院（千種区堀割町）である。

名古屋の寺院に関する木版資料について(十)



一、名古屋素人連中曲力持

二、富籤の引札を発売する案内

貳百番外

一 花錐百本添突左之通

突初 壺 本 金三十拾兩

貳番 壺 本 金貳拾兩

三番 壺 本 金拾五兩

平錐 八拾七本 金壺兩ツ々

拾々 八 本 金三兩ツ々

五拾 壺 本 金貳拾兩

突終 壺 本 金百兩

兩袖 貳百枚え 金貳朱ツ々

番合 六百枚え 金貳朱ツ々

惣中り数九百枚

右花錐百本突上ヶ候駒又突箱え納メ

貳百番突第壺番より突初候事

惣錐数都合三百本突

月 日 稲園山御用所

七役印

執筆者紹介

都築正喜 (本学教授……………英語)
TSUDZUKI Masaki

清水義和 (本学教授……………英語)
SHIMIZU Yoshikazu

辻内智樹 (本学非常勤講師……………スポーツ科学)
TSUJIUCHI Tomoki

高山伸也 (名城大学非常勤講師…体育科学)
TAKAYAMA Shinya

北田豊治 (本学准教授……………健康総合科学)
KITADA Toyoharu

糸井川修 (本学准教授……………ドイツ語)
ITOIGAWA Osamu

中村実生 (本学非常勤講師……………ドイツ語)
NAKAMURA Mitsuo

川口高風 (本学教授……………宗教学)
KAWAGUCHI Kohū

教 養 教 育 研 究 会 委 員

(会長) 岡 島 秀 隆 (副会長) 岡 田 千 昭

(会計) 近 藤 浩

伊 豆 原 英 子 糸 井 川 修 ※河 野 敏 宏

北 村 伊 都 子 小 林 秀 一 ※堀 田 敏 幸

八 谷 芳 樹 山 口 均 山 下 秀 康

※山 名 賢 治

※本号編集委員

編 集 後 記

本号には、論文2本、症例報告1本、翻訳2本、資料2本の、合計7本の研究を掲載することが出来ました。原稿の締切りが11月でしたので、これらの研究を原稿にまとめられた時期は、夏休みの暑いさ中ではなかったかと推測する次第です。この夏は特に猛暑でしたので、執筆者の方々には感謝申し上げます。

日本は昨今、原子力発電、消費税、TPP、領土問題などで、政治、社会の重大な岐路に立っています。これを象徴するかのように、衆議院が解散となり、意見を違えた政党の乱立状態で12月の選挙に入ろうとしています。また大学に関しても、学生数の割に学校が多すぎるという文部科学大臣の発言が、物議をかもしました。

こうした激動の時代に、研究者、教育者も確かな視点を持ちたいものと、強く願うところであります。(堀田記)

平成25年2月18日 印刷
平成25年2月28日 発行

(非売品)

愛知学院大学論叢
教養部紀要第60巻
第3号 (通巻第176号)

編集責任者
岡島秀隆

発行者 愛知学院大学
教養教育研究会
〒470-0195

愛知県日進市岩崎町阿良池12
電話 〈0561〉 (73) 1111 (代表)

印刷所 株式会社あるむ
電話 〈052〉 (332) 0861

THE JOURNAL OF AICHI GAKUIN UNIVERSITY

Humanities & Sciences

Vol.60 No.3
(Whole Number 176)

CONTENTS

Articles

- Masaki TSUDZUKI : W. S. Allen's English Intonational Notation and Theory of Prosodic Systems (Part 1) (1)
Yoshikazu SHIMIZU : Juro Kara and Shuji Terayama—Shakespeare's Maze— (15)

Case Report

- Tomoki TSUJIUCHI, Shinya TAKAYAMA and Toyoharu KITADA : Sports Injuries to the Foot and Ankle
in Young Athlete—A Case Report of Freiberg's Disease in a Junior Youth Football Player— (41)

Translations

- Yoshikazu SHIMIZU : *Yuu-ki-za Theatre of Puppet since Edo Era "Miss Tanaka" (2012.9.26–30) PART 1*
Original John Romeril. Dramatized and directed by Tengai Amano. (47)
Osamu ITOIGAWA and Mitsuo NAKAMURA : Bertha von Suttner: "Die Barbarisierung der Luft"
Foreword by Peter van den Dungen (93)

Materials

- Kōhū KAWAGUCHI : A Study of Wood Engraving Materials in Respect of Temples in Nagoya (10) (228)
Kōhū KAWAGUCHI : Buddhism in Nagoya as Seen in the *Nounin Simpou* (2) (202)

Published
by

Aichi Gakuin University
Nagoya, Japan
2013